

ジュラ高原の農民たち

東部フランスの農村社会における行為の主体性および社会と歴史の構築

三 浦 教

①
学位請求論文（論文博士）

ジュラ高原の農民たち

東部フランスの農村社会における行為の主体性および社会と歴史の構築

1999年 提出

指導教官

東京大学大学院総合文化研究科・伊藤亜人教授

三 浦 敦

■謝辞

本論の元になった社会調査データは、フランス共和国ジエラ県において、1990年4月に行った予備調査、および1990年12月から1992年6月にかけて行った本調査によって得られたものである。予備調査においてはフランス国立社会科学高等研究院から資金の一部の補助を受け、本調査においてはその資金の一部をフランス政府留学生給費によって補った。それぞれの調査においてこれらの資金を受けるに当たってお世話になった多くの方々に感謝いたします。

フィールドワークを含めた現地の生活においてもまた多くの方々にお世話になった。なかでも、ジエラ県での滞在先を紹介して下さい上、さまざまな相談にのって下さった Pansu 夫妻、私の下宿を快く引き受けて下さり、調査のみならず生活のさまざまな面で私を支えて下さった Perrard 夫妻、そして行政的な手続きを始めとする事務処理を助けて下さった Bard 氏に感謝いたします。そして、そのほかの F 村の村人たち、そして多くのジエラの友人たちに感謝します。

論文執筆に当たっては、多くの友人たちとの議論が役に立った。特に、フランス滞在中に知り合うことのできた、哲学や歴史学などのさまざまな分野の友人たちとの議論は、本論の議論を発展させる上で重要なものであった。

最後に、指導教官としてフランス研究のきっかけを与えて下さった伊藤重人先生にお礼を申し上げます。

■ 目次

■ 謝辞	ii
■ 目次	iii
■ 本文詳細目次	iv
■ 会誌例・表・図・写真目次	vii
■ 凡例	ix
■ 略号一覧	xi
I. 序論 — 社会的行為の主体性と社会的結合関係の構築	2
第1章 ヨーロッパ社会の民族誌	3
(1) ヨーロッパ社会研究の問題 (2) ジュラ社会の特性 (3) 本論の目的と構成	
(1) 資料の特性	
第2章 地理的歴史的背景	15
(1) 自然誌 (2) 歴史的背景 (3) 人文地理的変遷	
II. 人格 — 社会的行為主体の在り方と社会的結合関係の構築	43
第3章 主体性と人格指示	44
(1) 個人と社会的結合関係 (2) 社会的行為の秩序と人格 (3) 代名詞による人格指示	
(4) 名指し語による人格指示 (5) 人格指示詞による社会関係の分類体系と人格	
第4章 人格の構成	77
(1) 家族的領域 (2) 非家族的領域 (3) 出来事と人格の形成 (4) 人格概念と行為	
III. 社会 — 現代資本主義経済における酪農経営の戦略と社会過程	117
第5章 農業生産システム	118
(1) ジュラの農業と社会 (2) 酪農経営 (3) 生産資源の管理	
(4) 生産組織の運営と農業生産システム	
第6章 農業適応戦略と社会の構築	164
(1) 農業経営と外部環境 (2) 紛争過程と農業生産	
(3) 価値の生産と農業生産システムの再生産 (4) 外部環境への適応	
(5) 農業生産と社会の構築	
IV. 歴史 — 近現代ジュラの農村変化とその政治経済的外部環境への影響	207
第7章 農村社会の歴史的な形成過程	208
(1) 農村社会における社会的結合関係の問題 (2) 近代初頭におけるジュラの農村社会	
(3) 近代中期における農村の変化と協同組織 (4) 近代後半における農村の市場経済への統合	
(5) 社会変化と社会的結合関係	
第8章 歴史の構築	245
(1) 農村と外部環境 (2) 経済的変遷への影響	
(3) 社会運動の形成と政治的環境への影響 (4) 近代の構築 (5) そして21世紀を前に	
V. 結論 — ヨーロッパ統合に直面する農民たち	279
第9章 ジュラ社会の形成とヨーロッパ	279
(1) 現代ジュラ社会の形成と人格概念 (2) 近代という実験とその歴史的経緯	
■ 参考文献	290

■本文詳細目次

I. 序論 — 社会的行為の主体性と社会的結合関係の構築	
第1章 ヨーロッパ社会の民族誌	3
(1) ヨーロッパ社会研究の問題	3
1) ヨーロッパの民族誌的研究の問題	3
2) 社会の研究と全体的社会的事実	5
(2) ジュラ社会の特性	7
(3) 本論の目的と構成	11
(4) 資料の特性	12
第2章 地理的歴史的背景	15
(1) 自然誌	15
1) 地形と地質	15
2) 気候と生態系	20
3) 二次遷移	23
(2) 歴史的背景	24
1) 「フランシュ＝コンテ」社会史の概要と前史	24
2) 「フランシュ＝コンテ（自由伯領）」の成立	25
3) ハプスブルグ朝支配とフランス併合	28
4) 近代の形成	30
5) 高度成長とヨーロッパ統合	34
(3) 人文地理的概観	35
1) 政治制度	35
2) 文化地理的特徴	38
II. 人格 — 社会的行為主体の在り方と社会的結合関係の構築	
第3章 主体性と人格指示	44
(1) 個人と社会的結合関係	44
1) 生活空間と外部環境	44
2) 生活空間における社会的結合関係と「人格」	47
3) 「人格」をめぐる諸概念	49
(2) 社会的行為の秩序と人格	51
1) 社会的秩序と行為の価値	51
2) 会話に見る社会的相互行為の秩序	52
3) 社会的行為と人格指示	56
4) 挨拶と人格指示の秩序	58
(3) 代名詞による人格指示	59
(4) 名指し語による人格指示	61
1) 敬称	61
2) 普通名詞	62
3) 姓	62
4) 名	64
5) あだ名	68
6) 親族呼称	69
(5) 人格指示詞による社会関係の分類体系と人格	73

第4章 人格の構成 77

(1) 家族的領域	77
1) 家族の空間的範囲	77
2) 居住集団内部の構成	82
3) 親族ネットワークの社会関係	86
4) 家族儀礼による親族関係の再生産	87
5) 婚姻による親族関係の再生産	93
(2) 非家族的領域	96
1) 「他所者」と友人	96
2) 世代の非対称性	98
3) 性の非対称性	100
(3) 出来事と人格の形成	102
1) 出来事の提示	102
2) 時間と出来事	105
3) 秘密	110
(4) 人格概念と行為	111
1) ジュラにおける「人格」の特徴	111
2) 人格と行為の価値	112

III. 社会 — 現代資本主義経済における酪農経営の戦略と社会過程

第5章 農業生産システム 118

(1) ジュラの農業と社会	118
1) 農業と社会	118
2) 農業生産システム	119
3) 政治経済的外部環境	124
(2) 酪農経営	128
1) 農業経営体	128
2) 牛の飼育と畜種	132
3) 土地と飼料生産	135
4) 生産者協同組織	139
5) チーズ組合	142
(2) 生産資源の管理	147
1) 乳牛の管理	147
2) 土地の所有と相続	149
3) 土地の売買・貸借・交換	153
4) 生産資源再生産の論理	159
(4) 生産組織の運営と農業生産システム	160
1) 生産要素の組織化	160
2) 経営の方向性	161

第6章 農業適応戦略と社会の構築 164

(1) 農業経営と外部環境	164
1) 適応戦略と社会の構築	164
2) 戦後の二つの適応戦略	165
(2) 紛争過程と農業生産	167
1) チーズ組合を巡る紛争	167
2) 換地事業を巡る紛争	169
3) 紛争の展開過程	171
4) 政治的正当性の論理	175

5) 紛争における家族の役割	177
(3) 価値の生産と農業生産システムの再生産	181
1) 乳牛の価値	181
2) 土地の価値	183
3) 価値の生産	187
(4) 外部環境への適応	192
1) 農業生産システムと外部環境	192
2) 農業経営体の市場への適応	195
3) チーズ組合と市場	198
(5) 農業生産と社会の構築	201

IV. 歴史 — 近現代ジュラの農村変化とその政治経済的外部環境への影響

第7章 農村社会の歴史的形成過程	208
(1) 農村社会における社会的結合関係の問題	208
(2) 近代初頭におけるジュラの農村社会	209
1) 農村と外部環境の変化	209
2) 農村生活と農業生産システム	211
3) 生産活動における協同組織	216
(3) 近代中期における農村の変化と協同組織	221
1) 農業革命と農業生産システムの変化	221
2) 近代中期の農村生活	225
3) 協同組織の経済的意義	227
4) 協同組織と価値の生産	230
5) 農村内部の対立と農村構造の変化	233
(4) 近代後半における農村の市場経済への統合	236
1) 農業危機と第二次大戦までの農業の発達	236
2) 第二次大戦後のジュラ農業	240
(5) 社会変化と社会的結合関係	242
第8章 歴史の構築	245
(1) 農村と外部環境	245
(2) 経済的環境への影響	247
(3) 社会運動の形成と政治的環境への影響	248
1) 社会科学と社会調査	248
2) 共同放牧と社会科学	251
3) C. Fourier と P.-J. Proudhon	255
(4) 近代社会の構築	259
1) フランシュ=コンテ社会の保守主義と社会主義	259
2) 協同組合主義の発展	264
(5) そして21世紀を前に	268
1) 現代社会の構築	268
2) ジュラの理想の矛盾	272
V. 結論 — ヨーロッパ統合に直面する農民たち	
第9章 ジュラ社会の形成とヨーロッパ	280
(1) 現代ジュラ社会の形成と人格概念	280
(2) 近代という実験とその歴史的経験	284

■ 会話例・図・表・写真目次

会話例

会話 1	家族のなかでの会話 (53)
会話 2	コミュニケーション会議において (55)
会話 3	夕食会の打ち合わせ (57)
会話 4	インタビュー (103)
会話 5	インタビュー (104)
会話 6	数人の間での会話 (106)

表

表 1	ジュラ山脈の月別平均気温と降水量 (20)
表 2	ジュラの植生 (21)
表 3	フランシュ＝コンテの主要樹種 (22)
表 4	フランシュ＝コンテ年表 (26)
表 5	近代ジュラの人口変化 (32)
表 6	代親の選択 (66)
表 7	あだ名とその由来 (68)
表 8	親族呼称および親族呼称と名や姓の組み合わせ (72)
表 9	人格指示詞の体系 (75)
表 10	名指し語の特性 (75)
表 11	近代の F 村の世帯構成の変化 (82)
表 12	墓に見られる人間関係 (83)
表 13	ジュラの人々の一生の通過儀礼 (90)
表 14	第三共和政期の F 村における通婚 (94)
表 15	フランスの主要チーズ (120)
表 16	ジュラ県の農業の現状 (121-122)
表 17	最近の乳製品価格の変動 (122)
表 18	フランスの主要乳牛種 (132)
表 19	F 村の二つの農業経営体の土地利用形態 (138)
表 20	1992 年の牛乳集荷高別チーズ製造組織と牛乳価格 (144)
表 21	F 村における土地所有構造の変化 (150)
表 22	19 世紀末以降の F 村の村長 (174)
表 23	1953 年以降の F 村のコミュニケーション議員 (174)
表 24	1853 年のジュラ県の主な小郡における酪農のとチーズ組合 (224)
表 25	1891 年に共同放牧存続を申請したジュラ県のコミュニケーション (228)
表 26	近代におけるジュラ県の農業の変化 (236)
表 27	19 世紀末のジュラ県のチーズ組合の状況 (237)

図

図 1	フランシュ＝コンテ地方の位置 (16)
図 2	フランシュ＝コンテ全図 (17)
図 3	フランシュ＝コンテ地形模式図 (19)
図 4	血族と姻族の親族名称 (71)
図 5	F 村の親族、墓、居住集団 (78)
図 6	家のなかの部屋の配置 (80)
図 7	万聖節の昼食会 (89)

- 図 8 初聖体拝領の昼食会 (91)
- 図 9 1920 年以降の F 村の結婚 (92)
- 図 10 戦後の消費者物価とジュラ県の牛乳価格の変化 (123)
- 図 11 現代ジュラの酪農における農業生産システム (125)
- 図 12 1998 年におけるフランシュ＝コンテ地方のチーズ組合の分布 (143)
- 図 13 F 村のある GAEC における土地取り引きの例 (158)
- 図 14 農業の現代化路線、派閥と親族関係 (179)
- 図 15 1800 年以降のフランスの小麦の実勢価格 (212)
- 図 16 近代初頭におけるジュラの農業生産システム (214)
- 図 17 19 世紀半ばのチーズ組合の分布と設立時期 (ジュラ県とドゥー県) (219)
- 図 18 1850 年ごろのチーズ製造風景 (223)
- 図 19 1800 年以降のフランスにおける実質賃金の変化 (240)

写真

-
- 写真 1 第一プラトーの森 ～ 5 月 (41)
 - 写真 2 ルキュレの奥の村 ～ ボーム＝レ＝メッシュー村とボームの修道院 (41)
 - 写真 3 ロンス＝ル＝ソニエ中心街 ～ コメルス街と時計塔 (42)
 - 写真 4 村はずれのマリア像 (42)
 - 写真 5 第一プラトーの古い農家 (116)
 - 写真 6 古い民家の台所 (116)
 - 写真 7 現代の牛舎 (203)
 - 写真 8 牛舎の内部 (203)
 - 写真 9 第一プラトーの放牧地 ～ モンベリアルド種 (204)
 - 写真 10 チーズ組合のチーズ製造小屋 ～ ビカロ村 (205)
 - 写真 11 チーズ製造作業 ～ カードの掬い取り (205)
 - 写真 12 チーズ製造作業 ～ 型入れとホエー排除 (206)
 - 写真 13 チーズ製造作業 ～ 熟成中の加塩 (206)

■凡例

1. 「ジュラ」という名称について

本論が研究の対象とする地域を示す語「ジュラ」は、フランス共和国とスイス連邦共和国の国境を形成している「ジュラ山脈」という山脈の名であると同時に、「ジュラ県」というフランス共和国の地方行政単位の名前でもある。後者の県名は前者の地理上の名称から取られたものではあるが、地理的に見て両者は必ずしも一致してはいない。そこで、本論においては混乱を避けるため、便宜上、以下のように呼称を区別する。

- ・フランシュ＝コンテ ドゥー県、ジュラ県、オート・ソーヌ県、ベルフォール地区からなる地方で、首都はブザンソン。現在はフランス共和国の行政単位である。地方 *region* のひとつとなっている。ただし、フランス革命前に関してはブルゴーニュ伯領を指す。
- ・ジュラ山脈 フランスとスイスの国境に南北に伸びる山脈。高地ジュラとジュラ高原（第一プラトーと第二プラトー）からなっている。
- ・ジュラ ジュラ山脈のうちフランス共和国側に属する地域（行政的には、フランシュ＝コンテ地方のジュラ県とドゥー県、およびローヌ・アルプ地方のアン県にまたがる）。上記の「ジュラ」と同義。
- ・フランス・ジュラ フランス共和国の行政単位としての県の一つ。
- ・ジュラ県 フランス共和国の行政単位としての県の一つ。
- ・スイス・ジュラ ジュラ山脈のうちスイス連邦共和国側に属する地域（行政的には、ヴォー州、ヌシャテル州、ジュラ州、農村バーゼル半州にまたがる）。
- ・ジュラ州 スイス連邦共和国の行政単位である州の一つ。

2. 原語表記について

●本論において原語の表記が必要と思われる語には、対応する日本語の訳語または音訳語のあとにフランス語の原語を付した。その際、民族誌の通例に従って民俗概念はイタリック体で、非民俗概念は標準体で示した。しかし、フランスは社会科学の発祥地の一つであるため、民俗概念と非民俗概念（分析概念や法的概念など）とを明確に区別することは難しい。そのため、本文の表記における民俗概念と非民俗概念の区別は必ずしも絶対のものではない。

●本論におけるフランス語の原語表記は、基本的には標準フランス語の正字法に従う。ただし、一部の口語表現における子音ないしは母音の省略については、しばしば出版物においてなされている口語表現と同様の表記を行っている。

例) ・本論での口語表現表記

Il m'a dit, y a des communes qui sont endettées à vie sans aut' sorte de moyens.

・標準表記

Il m'a dit, "Il y a des communes qui sont endettées à vie sans autre sorte de moyens."

●男性形と女性形で異なる形をとる単語については、「(男性形)/(女性形)」という形で表記する。

例) père/mère (「父/母」)

また、女性形が男性形に語尾 *-e* を付した形になるものについては、慣例に従って次のように記した（ただし、繁雑になる場合には男性形のみを記し、女性形語尾は省略した）

例) cousin (e) (男性形 *cousin*, 女性形 *cousine*)

●会話例における行頭の記号は、発言番号（通し番号）と発言者を示す。本文中において会話文

を指示するときはこの記号による。

例) 1A (発言者 A による、発言番号 1 の発言)

- 会話例の提示においては、次の記号を用いる。

/	休止のない発話の区切り
—	短い発話の休止
—	やや短い発話の休止
—	やや長い発話の休止
—	判別不能の発話
X	判別不能の 1 音節の言葉
XX	判別不能の 2 音節の言葉
—	発音の短い引き伸ばし
—	発音の長い引き伸ばし
(général)	(括弧による表記) 明確には発音されなかった言葉や音節
conseil	(下線による表記) 軽い強勢が置かれた言葉や音節
DIRE	(大文字による表記) 強い強勢が置かれた言葉や音節
je ne te suffis plus	(斜字による表記) 歌

3. 時代区分について

- 本論では以下のようなフランス史における時代区分を用いる。

中世	ローマ帝国崩壊 [5 世紀]	～ ルネサンス前夜 [15 世紀]
近世 (アンシャン・レジーム期)	ルネサンス [16 世紀]	～ フランス革命 [1789 年]
近代	フランス革命 [1789 年]	～ 第二次大戦終了 [1945 年]
現代	第二次大戦終了 [1945 年]	～

- 近代以降については、以下のようなより細かい時代区分も用いる。

フランス革命期	1789 ～ 1804 (全国三部会召集から第一共和政まで)
第一帝政期	1804 ～ 1815 (第一王政復古 [1814 - 1815] と百日天下 [1815] を含む)
王政復古期	1815 ～ 1830
七月王政期	1830 ～ 1848
第二共和政期	1848 ～ 1852
第二帝政期	1852 ～ 1870
第三共和政期	1870 ～ 1940 (国防仮政府期 [1870 - 1871] を含む)
戦間期	1919 ～ 1939
ヴィシー政権期	1940 ～ 1944
第四共和政期	1944 ～ 1959 (臨時政府期 [1944 - 1947] を含む)
第五共和政期	1959 ～

- 第五共和政における歴代大統領は次のとおり (ただし、本論ではシラク大統領時代は考察の対象とはなっていない)。

1959 ～ 1969	シャルル・ド＝ゴール (Charles de Gaulle)
1969 ～ 1972	ジョルジュ・ポンピドゥー (Georges Pompidou)
1972 ～ 1981	ヴァレリー・ジスカール＝デスタン (Valéry Giscard-d'Estaing)
1981 ～ 1995	フランソワ・ミッテラン (François Mitterrand)
1995 ～	ジャック・シラク (Jacques Chirac)

■略号一覧

AOC	原産地管理名称 (Appellation d'Origine Contrôlée)
BTA	農業技術者免状 (Brevet de Technicien Agricole)
BTS	専門技術者免状 (Brevet de Technicien Spécialisé)
CAP	ヨーロッパ共通農業政策 (Common Agricultural Policy, 「カッブ」と発音)
CFDT	フランス民主労働同盟 (Confédération Française Démocratique du Travail)
CFTC	フランス・キリスト教労働同盟 (Confédération Française des Travailleurs Chrétiens)
CIGC	ダリュイエール・ド・コンテ職業間委員会 (Comité Interprofessionnel de Gruyère de Comté)
CGT	労働総同盟 (Confédération Générale du Travail)
CNJA	全国青年農民センター (Centre National des Jeunes Agriculteurs)
CUMA	農業機械使用集団 (Coopérative d'Usage des Matériels Agricoles, 「キューマ」と発音)
DDAF	県農林監督局 (Direction Départementale de l'Agriculture et de la Forêt)
DRAF	地方農林監督局 (Direction Régionale de l'Agriculture et de la Forêt)
EC	ヨーロッパ共同体 (European Community)
EEC	ヨーロッパ経済共同体 (European Economic Community)
EMS	ヨーロッパ通貨制度 (European Monetary System)
EU	ヨーロッパ連合 (European Union)
FDSEA	県農業者組合連合 (Fédération Départementale des Syndicats des Exploitants Agricoles)
FFA	フランス農業連合 (Fédération Française de l'Agriculture)
FNSEA	全国農業者組合連合 (Fédération Nationale des Syndicats des Exploitants Agricoles)
GAEC	農業共同経営集団 (Groupement Agricole d'Exploitation en Commun, 「ガエック」と発音)
INSEE	国立統計経済研究所 (Institut National de la Statistique et des Etudes Economiques, 「インサー」と発音)
JAC	青年カトリック農民同盟 (Jeunesse Agricole Catholique)
ONF	営林署 (Office National de la Forêt)
PS	社会党 (Parti Socialiste)
PSU	統一社会党 (Parti Socialiste Unifié)
RPR	共和国連合 (Rassemblement pour la République)
SEJ	ジュラ学会 (Société d'Emulation du Jura)
SFIO	労働者インターナショナル・フランス支部 (Section Française de l'Internationale Ouvrière)
SMIC	全職業スライド制最低賃金 (Salaire Minimum Interprofessionnel de Croissance, 「スミック」と発音)
SMIG	全職業最低保証賃金 (Salaire Minimum Interprofessionnel Garanti, 「スミッグ」と発音)
UDF	フランス民主連合 (Union Démocratique Française)

ジュラ高原の農民たち

東部フランスの農村社会における人格の在り方および社会と歴史の構築

I. 序論

ヨーロッパ社会の民族誌とフランス・ジュラ

それでも、ジュラの遺産はたぶん彼女の性格に現われていただろう。ジュラの人々は特別な人々である。彼等は恐ろしいほど独立を求める心を持ち、闘争の歴史と非妥協的な態度をもっている。[...] マドレーヌ・ヴォワネの優れたセンスはそこにある。そしてたぶん、ちょっとしたアナーキズムの傾向も。

— ブルース・チャットウィン『私はここで何をしているのだろうか』

ヨーロッパ社会の民族誌

(1) ヨーロッパ社会研究の問題

1) ヨーロッパの民族誌的研究の問題

フランス革命から200年を経た20世紀から21世紀への変わり目の今日、ヨーロッパ諸国はヨーロッパ統合に向けての大きな変化のなかにある。ヨーロッパ統合の理念自体は18世紀に既に提唱されていたものであるが、第二次大戦後になってようやく現実のものとなり始め、まず関税の廃止や通過統合を通じた経済統合が推進され、ついで政治統合も日程に上っている。しかしそうした統合の進展は、社会の完全な合意の上で展開されているという訳ではない。ブリュッセルの高級国際官僚というエリート集団の施策は、必ずしも一般の市民が望むものとは一致していない。本論は、フランス東部のスイス国境沿いに広がるジュラ高原の農民社会において、このようなヨーロッパ統合を前にした20世紀末という時代に、農民を始めとするジュラの人々がどのように生活しているのかを、明らかにしようとするものである。

ジュラの農民たちの社会生活を明らかにするに当たって、本論では従来民族誌と呼ばれてきた研究手法によって明らかにしていくことを試みる。ここで言う民族誌的研究とは、一定の人々の社会生活の諸側面についての記述的研究、すなわちさまざまな社会的事実の提示と総合を指す。しかし、こうした民族誌的研究はいままで主として非ヨーロッパ社会を対象になされ、ヨーロッパはむしろ他の学問分野の研究対象となってきた。したがって本論にはいる前に、ヨーロッパ社会を民族誌的に研究することの意義はどこにあるのか、ヨーロッパ社会の民族誌的研究とは何を指すものなのか、そして民族誌的ヨーロッパ研究にはどのような問題があるのかを、検討しておく必要がある。そこでまず、人類学的ヨーロッパ研究の歴史を概観の通して簡単に検討しておくことにする。

いままで、人類学がその主要な関心の中心に置いていたのは、旧植民地を中心とする非ヨーロッパ社会であり、民族誌的研究も主として非ヨーロッパ社会を巡ってなされてきた。しかし、原理的には民族誌的研究の対象は非ヨーロッパ社会に限定されるものではない。ここで、民族誌、民族学、人類学、という伝統的な区別を便宜的に採用するならば、民族誌の特徴をもつヨーロッパ社会についての研究や記録は、『統計 (国勢学 *statistique*)』や『地理学』という名で18世紀以来数多く発表されてきている。また、ロマン主義運動から生まれた民俗学的研究の伝統も19世紀以来続いている。より民族学的ないしは人類学的と呼ぶことのできる研究も1950年代にはすでになされている。とはいえ、本格的な人類学

的ヨーロッパ研究が始まるのは、人類学者が地中海研究やアルプス研究で多くの成果を挙げた、1960年代からである。もちろん、人類学的ヨーロッパ研究はまだ社会科学ではなく文学研究（したがって民間信仰や口頭伝承の研究の延長）としか見なされていない。と1977年に John Cole が嘆いてみせた状況は (J. Cole, 1977)、確かに20世紀の終わりになってからもまだ残っている。しかし同時に、すでに多くの優れた研究も蓄積されてきている。

フランス研究についても同様である。フランス社会の記述的研究は、20世紀初頭に行われた Robert Hertz らのフランス社会学派による民族誌的研究を除けば、長い間民俗学や地理学によって占められてきた¹⁾。しかし第二次大戦後になると、構造主義の台頭と共に人類学が進出しはじめ、1950年代にはいくつかの先駆的研究が発表されるようになる。そして、1960年代にはフランス西部のブルターニュ地方とフランス南部のオーベルニュ地方でそれぞれ、社会学者や歴史学者、言語学者などを含めた総合的な民族誌的共同調査が試みられた。しかし、この頃のフランス社会の人類学的研究はまだ模索の段階にあり、これらの協同研究は優れた研究成果と共に多くの失敗や試行錯誤に満ちていた。このような模索の末にその後の研究に安定した方向を示したのが、1960年代末から1970年代にかけてフランス東部のブルゴーニュ地方ミノ村で行われた民族誌的共同調査であった。そこでは構造主義の影響のもと、親族や婚姻関係、民間信仰、農業システムなどの村落社会の諸側面が、総合的に明らかにされたのである。1970年代には様々な地方で同様の手法あるいは別の新たな手法を用いた研究が行われ、人類学的フランス研究は軌道に乗り始めた。そして1980年代になると、社会党政権の指導の下で文化省によって、フランス各地の民族学的研究を促進するために「民族学的遺産調査プロジェクト Mission du Patrimoine Ethnologique」が始まり、各地の人類学の研究者や学生に対して民族誌的調査のための便宜が図られるようになったほか、このプロジェクトを支援するための雑誌 *Terrain* も文化省によって刊行されるようになった。こうして人類学におけるフランス社会研究は本格的な発展を始める。

しかし、このような研究の進展と共に、ヨーロッパ研究が持つ方法論上の問題点も意識されるようになってきた。それは、ヨーロッパ社会の研究者の大半がヨーロッパ人であり、彼等は自分の社会において作られた概念枠組みを用いて自分の育った社会を研究しているということから来る問題である。ヨーロッパにとっての「他者」を研究してきた学問にとって、「他者 l'Autre」ではなく「自己 même」であるヨーロッパを研究する事は可能なのだろうか。もし可能だとするならばその認識論的基礎はどこにあるのだろうか。この問い

¹⁾ フランスの民俗学的研究が第二次大戦後に後退することになったのは、構造主義の影響によって民俗学研究が人類学研究にとって代られるようになったという事情もあるが、それ以上に民俗学が、第二次大戦中に親ナチス政権としてフランスを支配したヴィシー政権に利用されたという事実がある。実際、労働、家族、国家を標語としたヴィシー政権にとって民俗学は高い利用価値を持っていた。これとは対照的に、19世紀以来フランスの人類学的民族学的研究の中心であったパリの人間博物館 *Musée de l'Homme* には、第二次大戦の早い時期にフランスで最初のレジスタンス組織が生まれている。そして、第二次大戦後においてフランス社会の人類学的研究の拠点のひとつとなるのは、この人間博物館から分かれて、G.-H. Rivière に指導された国立民俗博物館 *Musée des Arts et Traditions Populaires* であった（こうして、人間博物館は国外を対象とし民俗博物館は国内を対象とする、という役割分担が生まれた）。なお、人類学的フランス研究の発展には、この民俗博物館を中心として各地に作られた地方の民俗博物館の活動（のちに「エコ・ミュージウム」として理論化される）が大きな貢献をしている。フランスの社会研究と民俗博物館の歴史的関係の詳細については J. Chivas の緒論考 (J. Chivas, 1987, 1996) を参照のこと。

に対してはすでに、すでに多くの人類学的ヨーロッパ研究が行われているという事実をもって答えることはできる。しかし、その様な答えだけでは不十分である。Jean Jamin が危惧するように、今までのヨーロッパ研究は非ヨーロッパ社会研究のパロディ、あるいはバスターシシュだったのではないかと疑うことができるからである (J. Jamin, 1985: 18)²⁾。実際、たとえば、アフリカにおける親族研究の成果を受けてヨーロッパでも親族の重要性を見出す、というような研究は少なくない。こうした研究は、今までのヨーロッパ研究では軽視されたり忘れられられていた多くの事実の掘り起こしを通じて、ヨーロッパ社会の相対化に貢献した。しかしまた同時に、非ヨーロッパ社会の研究とは逆の問題が生み出された。

そうした問題を持つ議論の例が、フランス社会にも循環婚の存在を認めるという議論である。もちろん、循環婚の存在を確認したこと自体は一つの成果である。しかしそのような発見も、ある婚姻形態を循環婚と見なすことの妥当性をその社会の諸事実に即して検討するのであれば、そのような議論の前提となっていた、ヨーロッパと非ヨーロッパの対による世界把握という枠組み自体を変更するには至らない。このような状況では、例えば「親族の半複雑構造」や「フランス農村における妖術」など、近代化というプロセスの中で忘れられていた個々の文化的要素への理論的な関心が、過度に重視されるようになってしまった。ここには、自らの抱くヨーロッパ社会のネガとなる社会のイメージを、一度非ヨーロッパ社会のなかに見出した後、次いでそれらをヨーロッパ社会のなかにも見出すという、転倒されたオリエンタリズムを見出すことが可能である。こうした状況の中で、ヨーロッパ社会の人類学的研究の可能性について検討した Alain Le Pichon は、ある人々を観察の対象とすることはその人々を殺すことである、と指摘した後、こう問いかける。「われわれヨーロッパ人は、われわれが何者であるのかを知っているのだろうか。そもそもわれわれを見ることはできるのだろうか。」(A. Le Pichon, 1991: 31-32)

こうした問題は、単にヨーロッパ人の人類学者のみならず非ヨーロッパ人の人類学者にとっても、大きな問題である。というのも、ヨーロッパ社会研究において用いる社会科学の諸概念は、まさにそのヨーロッパ社会において一定の歴史を担って生まれたものだからである。

2) 社会の研究と全体的社会的事実

以上のようなヨーロッパ研究の難点を超えるための唯一の方法は、人類学的研究や民族誌的研究と言われるものの原点に戻ってみることである。個々の社会の記述的把握を目指す民族誌は、人間一般の問題という視野を持つ人類学的な視点の存在によってはじめて可能になり、かつ人類学の基礎データとなる。この時に人類学者にとって第一に問題となるのは、フランス研究を行っているアメリカの人類学者 Susan Carol Rogers が述べているよ

²⁾ 川田順道も同様に、フランスの村落を調査する視点と手法に、アフリカ社会を見るのと同じ発想がありすぎる、と指摘する (川田, 1992: 281)。しかし川田がさらに進んで、歴史的に一方が他方を搾取して「近代」を生み出すに至る、アフリカとヨーロッパの間にある歴史的差異を問題とするのに対し、J. Jamin の議論にはそのようなより大きな歴史への問いは欠けている。しかし、ヨーロッパが問題とならしたら、それは当然他の地域との関わり方の歴史性においてであるはずである。

うに、「フランス」という個別の社会ではなくより広い人類一般の問題である (S. C. Rogers, 1991: 6)。人類学者がフランスを研究するのは、人類が生み出した社会の一つであるフランスという社会を通して、より一般的な問題を考えるためである。その人類学研究の原点である一般的問題とは、「社会的動物としての人間はどのように、自らの環境としての社会を作りだし、その中で生きているのか」というものである。

生きている人間は抽象的な思考の産物ではなく、目の前で起こりつつある現実の経験である。人類学者がまず観察したり話に聞いたりするのはこのような固有名を持った人々の「今、ここ」における様々な行為であり、「社会」や「文化」といったものはそのように観察されたり話されたりするものから知的なプロセスを経て再構築されたものである。一般的には民族誌とはそのような一次データによるある地域なりある社会集団の詳細な記述的紹介を指す。それらの対象がある時間と場所に限定されたものである以上、そうした民族誌的研究はまず第一にその調査がなされた時代を映す歴史資料である。したがって、民族誌はまず後世の歴史家が利用しうようなデータの提示でなくてはならない。

しかし、民族誌は単なる事実の百科事典的な列挙なのではない。人間の社会生活を構成する経済や宗教や政治という抽象概念によって示される諸要素は、各々別個のものとして観察される訳ではなく、日常生活の中で互いに複雑に連鎖し合っているものとして観察される。したがって、このような連鎖のメカニズムを明らかにしなければ社会の記述ということではできないし、ましてや S. C. Rogers が指摘するような、単なる地域研究を超えた一般的な問題についての考察は不可能である。そのような記述の提示の方法として Marcel Mauss が提案したものが、「全体的社会的事実」の記述というものであった。それは、制度や慣習といった社会の各々の要素がどのように実際に互いに連鎖し合っているのかを明らかにしようというものである (M. Mauss, 1989: 274-275)。こうした諸事実の全体的連鎖の検討を通じてはじめて諸社会の比較は可能になり¹⁾。「人が社会において生きるとはどういうことなのか」という問題に接近することができる。

ところで、さまざまな社会的要素の連鎖は、直接観察されるものではなく観察やインタビューなどのデータを元に、知的に再構成されるものである。しかし、このような知的な再構成は単なる人類学者による勝手な社会の解釈でもなければ、異文化の翻訳というようなものでもない。実際、人類学者のような研究者だけではなく人類学者が観察の対象としている人々もまた、このような知的構築を通して自らの行為の環境条件を把握し、その連鎖の中で新たな行為を行い、そしてその行為によって新たな諸要素の連鎖を生み出している。したがって、人々の社会認識は様々な社会関係の網の目という一定の社会的物質的な基礎の上に作られるのであり、その意味ではきわめて状況依存的ではあるが、しかし個人の個別の主体性に還元することはできない²⁾。そして人類学者は、自らの専門的な知的資

¹⁾ M. Mauss は「実際、比較民族誌が価値を持つのは事実の比較に基づいた場合のみであり、文化の比較による場合ではない」と指摘している (M. Mauss, 1967: 9)。

²⁾ したがって、インタビューのデータは、会話という調査者とインフォーマントの一定の社会的相互作用に基づく共同作業を通して作る。このことこそ、M. Bakhtin が対話における多声性として指摘したことであった (M. Bakhtin, 1984: 278-279)。この多声性は、複数の明確に区別しうる発話主体の存在を前提とする、民族誌論で主張されるような多声性とは根本的に異なっている (実際、発話主体とは多声的な対話の効果として現われるものである)。

源を用いながら、そのような社会関係のなかで人々との様々な会話などの行為とさまざまなデータを得、それらのデータを状況から切り離して記録として整理して固定化し、その記録されたデータの突き合わせを通じて、社会の全体論的把握という自らの論理的構築を行う。そのため、人類学者が提示する一定の社会認識は一次的な経験に対してメタレベルのものとなるが、それは決して人類学者が勝手に起こす解釈的なではなく、複数のインフォーマントとの議論や確認、および記録の突き合わせといった論理的対話的過程によって生まれたものである。その意味で民族誌的記述は、無謬ではないがまた恣意的なものでもなく、一定の社会的基盤の上に公共的に形成されるものである。

このような形で社会の全体的な把握を試みる時、研究における「他者」が「自己」という問題はそれほど重要ではなくなる。むしろ重要なのは、各々の人々間での社会認識の形成と彼等の生活を支える社会的物質的条件の間の動態的關係を総体として記述し分析をすることを通じて、諸要素が互いに連鎖し合いながら作り出されるその「全体」の生成の在り方を明らかにすることである。このような社会の生成の問題は社会過程の問題であり、したがってこのように捉えられる現在の社会は歴史の積み重ねの結果として把握されることになる。そのため「現在」の社会の人類学的把握のためには、人々の行為の条件であり結果でもある「歴史」の中にその「現在」を置かなくてはならない。そのような意味でも「民族誌」は歴史の記録である。

このように、本論が試みるのは、ジュラの高原地域に生きている農民たちが、日々の行為を通じてどのように社会を構築し、そして歴史を構築しているのかを明らかにすることである。そしてこれは、民族誌的研究と呼ばれるものが伝統的に目指してきたものである。

(2) ジュラ社会の特性

民族誌的研究である本論は、全体的記述によって社会の動的な再生産過程を明らかにしようとするものである。しかしそれは、社会的諸事実の全ての連関の網羅に客観的な記述なのではない。全ての事実の記述は不可能であるし、全体論的であることは必ずしも社会生活の全ての面にわたるということを意味しない。実際、言うまでもなく諸事実は常に一定の視点から提示されるものであり、視点を欠いた事実の提示はありえない。その意味で民族誌において提示される事実は決して中立的なものではない。このような視点は問題意識 *problématique* と呼ばれるものである。このような問題意識は、常に一定の具体的な社会の検討を通してなされる民族誌的研究では、対象となる社会の在り方と密接に関わっている。それでは、「社会と歴史の構築」という主題に対して、本論で対象とする社会はどのような問題を提起するのだろうか。

本論で取り上げる、フランス東部ジュラ地方は、農村地帯である⁶⁾。このジュラに住む

⁶⁾ 比較的歴史の浅い人類学的フランス研究の中でも、ジュラ地方の民族誌的研究はさらに歴史が浅く数もまだ少ない。ジュラの近代史研究者の J.-L. Mayaud が指摘するように、ジュラの民族学的研究の多くは事実の列挙にとどまり、社会の機能の仕方にまで踏み込んだ研究は、いくつかの先駆的研究を除けばまだようやく出発のばかりである (J.-L. Mayaud, 1986: 20)。とはいえもちろん、他のフランスの地方と同様に多くの歴史研究の蓄積があり、専門研究者や郷土史家により多くの歴史的事実および民俗的事実がすでに報告されている。また、地理学の研究は19世紀以来の伝統を持っており、自然地理学においても人文地理学においても優れた研究が少なくない。

人々はフランス語では「ジュラ人 Jurassiens」と呼ばれる。この「ジュラ人」という言葉は、単に「ジュラに住む人々」あるいは「ジュラ出身者」という意味であって、エスニシティや民族的起源、あるいは文化的要素の共有を示すような意味は持たず、人種や出身地にかかわらず、ジュラという地域に住む人はみな「ジュラ人」と呼ばれる。

このジュラ人たちが作り出しているジュラの農村社会には、多くの研究者によって指摘されてきたある際立った特徴がある。それは、13世紀にまでさかのぼる歴史を持つチーズ組合が農村生活の核となっているという、協同組合主義の伝統が生きていることと、協同組合主義の傾向を持ち多くの社会主義思想家に大きな影響を与えた二人の思想家、Charles Fourier (1772-1837) と Pierre-Joseph Proudhon (1809-1865) が19世紀にこの地に生まれたということである。現在でもこの協同組合主義は生きており、ジュラ農業において中心的な役割を果たしている。しかし他方で、ジュラの人々は自主独立の精神というものをしばしば強調し、この地方がある程度の自立性を持っていた近世初期の歴史を好んで参照する。また、農民の行動は極めて個人主義的であり、他の地方からジュラにやって来た人々はジュラの人々のエゴイスティックな姿勢に驚いてみせる。このように、ジュラには自主独立・個人主義への志向と協同組合・社会主義への志向という、社会を構成する諸個人の社会的結合関係 sociabilité をめぐる一見すると矛盾して見える二つの志向が共存しているのである。

この二つの志向の共存は、文化地理的にも興味深い問題である。Emmanuel Todd はフランスの文化地理的特徴の分析をするなかで、フランス農村社会には大きく分けて、核家族（一組の夫婦とその未婚の子供からなる）、複合家族（二世または三世以上が同居し、同世代に複数の夫婦が見られる）、直系家族（三世以上が同居するが、一つの世代には一組の夫婦しか見られない）の3つの家族形態が見られるとし、それぞれにはまた独特の社会的結合関係や政治的姿勢が見られると指摘する。すなわち、核家族社会では自立と孤立への意思が強く見られ政治的には右であり、複合家族では共同体への思考が強く政治的には左であり、そして直系家族では権威への志向が強く政治的には右であるという。しかも、核家族地域における保守主義は利害関係に基づくもので、時としてその政治的姿勢は揺れ動く、と指摘している (E. Todd, 1981, 30-54)。ジュラが属しているフランシュ＝コンテ地方は核家族地域でありかつ自立への志向が強く認められるという点では、E. Todd の議論は頷けるものである。しかし、この地域の協同組合主義的伝統と社会主義思想についてはむしろ、彼の分類では複合家族地域に見られる特徴でなければならない、その点で彼の議論はジュラには当てはまらないように見える。

もちろん、実際にはジュラに見られる個人主義と協同への志向という一見矛盾する二つの志向を同時に持つジュラの社会的結合関係は、個人主義や社会主義などの特別のドクトリンに基づいて構築されているわけではない。たしかに、これらの個人主義や社会主義について書かれた文書を数多くあるが、日常の人々の生活はそうした文書とはまったく関係無く営まれている。同様に、これらの特徴を、ジュラの人々すべてが共通して持っている民俗的文化資本のようなものとみなすこともできない。確かに、「ジュラ人ってというのは一般にこういう気質を持っているんだ」という言い方がなされることはよくあり、また研究においてもこの協同組合主義と個人主義の絡み合う歴史を、「ジュラには共同体的慣習が歴史的な伝統であった」としてそのような慣習を実体化してしまう議論がある (ex. C

Neuschwander & G. Boret, 1993: 42-44)。しかし、ジュラは孤立的な閉じた社会なのではなく、常に外部との関係のなかに置かれている社会である。そのため、実際の現在のジュラの人々の生活・行動領域はジュラという地域にとどまるわけではなく、また、さまざまなマス・メディアから絶えずさまざまな情報や考え方に接する機会の多いので、「ジュラ人」なるものを超歴史的な文化の担い手と見なすと現実離れした結論が導き出されてしまう。つまり、今日、「ジュラ固有の民俗文化としての個人主義と協同組合主義」という言い方は、本質主義的な誤解を招きかねないのである。実際のジュラの人々の社会関係は必ずしも一定の類型に常に収まるようなものなのではない。しかしこのことは、ジュラの社会を論じるに当たってその社会を担う人々を「ジュラ人」という形で一括できるのかどうか、という問題と提起する。

実際には、ジュラにおける諸個人の社会的結合関係は、代々受け継がれてきた文化的遺産というよりも、日々の生活の場のさまざまな社会関係の展開の中で、さまざまな現われ方をしながら常に再生産され再構築されてきているものである。実際、どんなに個人主義的であろうとも、一人一人の個人は周囲の人と一定の社会関係を結ぶことなくして生活をしていくことはできない。むしろ彼等は、生活の基盤を置くこの地において、相互に一定の秩序の要求や押し付けを通じて社会関係を作り上げている。その意味で「ジュラ人」とは、ジュラという地方においてある程度の日々の生活と社会関係の場を共有している人々なのである。個人主義や協同組合主義というものはこうした社会過程のなかから生まれてくるものなのである。そのため、社会的結合関係に見られる一見矛盾する特質はその現象面だけを取り上げるのではなく、生活と社会関係の場における社会的相互行為を通しての、社会的結合関係の生成という視点から見ていく必要があるのである。

社会的結合関係が形成される日常的な社会過程は、さまざまな個人の相互行為より成り立っている。しかし、そこでいう「個人」なるもの、すなわち日常的な社会過程において行為の主体となるものがどのようなものであるのかは決して自明ではない。そこで、社会的結合関係の検討を行うにはまず、行為主体がどのようなものであるのか、すなわちジュラの社会において「人格」とはどのようなものであるのかをまず検討する必要がある。

しかし、「人格」の分析は出発点にすぎない。なぜなら、人の日常生活は「人格」という概念の単なる表出ではないからである。実際の社会では、その「人格」を媒介とした社会的相互行為を通じてさまざまな社会的結合が生み出され、それを通じて社会は構造化され変化する。そしてさらにこの「人格」を再生産していくのである。このような社会的結合関係を作り出す社会過程を検討するに当たって、生活の場の物質的基盤の再生産活動である農業経営は、極めて有効な議論の場を提供してくれる。実際、農業経営において農民たちはさまざまな社会関係や技術を駆使して生産活動を行っており、日常的な社会過程が不可欠のものとしてそこに現われるのである。そして、農業経営は生産活動としてさらに大きな社会経済的な構造とも密接に関わっているため、農業経営の分析はさらに社会の構造化の問題にも説明の鍵を与えてくれる。

このように農業経営はジュラ社会の全体的な社会的事実の一つである。そのため、その農業経営を検討することは、個人主義や協同組合主義という言葉で表わされる社会的結合関係の特質のみならず、協同組合をはじめとしてそこで維持されているさまざまな組織や制度の歴史的起源や機能までを総合的に把握することを可能にする。こうして、社会的結合

関係の特質を明らかにすることはさらに、なぜ中世に生まれた組織が、今のように市場経済が高度に発達したフランス社会においても重要な組織として持続しうるのか、協同組合や社会主義思想がこの地に生み出された社会的基盤は何なのか、さらには家族的農業や協同組合組織の現代資本主義社会における可能性と限界をどのようなものかという問題への糸口を提供する。これらの問題は、言うまでもなく現代という時代を特徴づける諸制度の形成と密接に関わる問題である。

こうして、農業経営という全体的社会的事実を通じたジュラにおける社会的結合関係の特質の検討は、社会の構築を論じることを可能にする。そして社会の構築というものが歴史のプロセスである以上、このような議論はさらにジュラの人々が歩んできた歴史のプロセスにも光を当てる。今まで多くの歴史学者がさまざまな文書史料の渉猟を通じて、ジュラの社会的結合関係の問題に関して議論してきている。しかし、それらの議論は社会科学の視点から見た場合、社会的結合関係を固定化したり経済的利害関係の側面ばかりを強調したりするなど、必ずしも常に十分であったとは思われない。このような場合、現実の社会的行為についての民族誌的資料の社会科学的分析は、既存の歴史研究を補完していくことが可能となるだろう^{*)}。こうして、現在の社会を論じることはさらにジュラの人々の歴史を論じることにもつながっていく。

以上のような歴史的な社会的結合関係の問題はさらに、近代化における個人と社会の関係を問直すという社会科学の根本的問題を提起する。というのも、ジュラの農民社会の構築を明らかにすることは、同時にヨーロッパにおける近代性 *modernité* の形成の問題を、一社会の具体的事例を通じて明らかにすることでもあるからである。実のところ人類学を含めた社会科学も、このようなヨーロッパ社会の社会的歴史的背景の中で形成されたものであり、その社会的歴史的背景は社会科学という知識体系の特性に反映されている。言い換えれば、ジュラの人々のさまざまな歴史は、他の地域の人々の歴史とともにヨーロッパ近代のある部分の構築に大きく寄与し、そして現在生きているジュラの人々はその様にして構築された「現代」の中で、その正負両面の遺産を受け継ぎながら自らの歴史を作りつつあるのである。

このようにヨーロッパ社会の民族誌的研究は、単にヨーロッパのなかの一社会を記述しその社会構造を分析するに留まるものではない。現代社会を基礎づける諸制度を生みだし、その技術力や軍事力によって世界の歴史に正負両面にわたる大きな影響を残すことで、歪曲され無意識化されて諸文化の比較の基準とされてきたヨーロッパ社会の歴史を改めて問い直すことを可能にし、それを通じてわれわれと同時代を生きているヨーロッパの人々の歴史性の再考を迫るものである。このことは、ヨーロッパとは別の歴史を持ちつつも近代ヨーロッパにおいて形成されたさまざまな制度を受け入れて（あるいは受け入れさせられて）、現在の社会の諸問題に対処せざるを得ない非ヨーロッパ社会の人間にとって、決し

*) J.-L. Mayaud は、民族学（社会学）的視点からの歴史研究の必要性を強調している（J.-L. Mayaud, 1986: 18-19）。とはいえ実務問題としては、フランスの歴史研究のように高度に専門化した領域では、本格的な歴史資料の分析（それは文書館にある膨大な未整理の史料の分類から始まる作業である）は歴史学者という専門家が行うべき仕事であり、人類学者が社会調査の片手間にできるようなものではない。むしろ、様々な分野の研究者がそれぞれの専門性を生かしつつ、互いに協力していくほうがより生産的であろう。

て遠い異国の物語りなのではない。ヨーロッパの経験とは結局どのようなものなのかを明らかにすることは、非ヨーロッパ社会の歴史を考えることでもあるからである。

(3) 本論の目的と構成

以上のように本論は、20世紀末のジュラの農村社会を対象として、どのように人々が社会の行為を通じて社会を形成し歴史を構築しているのかを、現在の状況を巡る民族誌的資料によって歴史資料を補完しつつ、現在を歴史のなかに置くことで明らかにしようを試みるものである。この時、ジュラの人々の生活はさまざまな彼等を取り巻く社会状況との関わりの中で見ていく必要がある。そこで、人々が自分の意思決定を行いつつ生活を行う場を構成する、日常生活における社会関係と資源の総体を生活空間、それぞれの人の意思決定が直接反映されない領域を外部環境と呼んで、分析上で区別することになろう。このとき、外部環境として指示されるのは、生態学的環境と政治経済的環境である。そして、生活空間は常にこれらの外部環境からの影響にさらされている。本論ではこの生活空間と外部環境の関係を軸に、次の3つの段階を経てジュラの社会と歴史の形成を検討する。

まず「Ⅱ. 人格」においては、諸個人の社会的結合関係を考えるに当たり、まず生活空間内部においてジュラの人々の行為の在り方を規定する、行為主体としての「人格」とは何を検討する。今までの人類学における「人格」研究が明らかにしてきたとおり、「人格」とは何かという問題は、社会関係がどのように組織されているのか、という問題と表裏一体のものであった。本論の関心も基本的には同じところにあるが、ここで問題となるのはそうした社会関係がどのように日常的な社会的相互行為の中から生まれてくるのかを明らかにすることである。その意味で、日々の生活を営むジュラの人々にとって個人とは何を意味するのかを明らかにすることは、ジュラにおいて実際の社会過程と歴史を生み出す社会的結合関係の特質を明らかにすることである。この様な観点から、「第3章」ではまずジュラの人々の「人格」の在り方を、生活空間内部での社会的相互行為の最も基本的なパターンの一つである言語的相互行為に焦点を当てて整理を行い、「第4章」ではこの人格の在り方に基づき、言語的相互行為を含めた社会的相互行為の秩序形成の在り方を検討する。

「Ⅲ. 社会」においてはそれらの人格概念に基づく個々の人々の相互行為が、現在の一定の物質的経済的条件のもとで、どのようにジュラに特徴的といわれる社会関係の諸形態を作り出しているのかを考察する。またあわせてそのような社会関係がどのように経済的にも社会的にも再生産されているのかを明らかにする。その際、鍵となるのは生産活動としての農業経営である。というのも、様々な社会的行為の諸形態がこの農業という事象に集約して現われ、かつそこを通して社会的行為が経済的に再生産されているからである。その意味で、農業経営は M. Mauss の言う「全体的社会的事実」の一つである。本論ではこの農業経営を支える生活空間の内部での諸要素の連結を、農業生産システムと呼ぶことにする。この農業生産システムは、個々の農業経営者の意思決定が直接及ぶ範囲で構築され、個々の経営体からさまざまな協同組織までが含まれる。「第5章」においてはその農業生産システムがどのような要素から構成されどのような運営がなされているのかを検討し、「第6章」では、外部環境からの一定の圧力があるときその農業生産システムを通し

て人々はどのように対応して生活空間を構築するのかを検討する。

「Ⅳ. 歴史」では、現在において観察された、農業生産システムと外部環境の動態的関係に見られる諸個人の社会的結合関係構築のメカニズムを過去 200 年の歴史の流れのなかにおいて見ることで、現在の人々の生活がどのように形成されてきたのか、そして今人々はその様に形成された社会のなかでどのような問題に直面し乗り越えようとしているのかを、その歴史の動態性の中に置くことで検討する。ジュラの人々の過去 200 年の歴史はまさに「近代」という時代を作ってきた歴史でもあり、その意味で近代という時代が形成される過程でヨーロッパの片隅で農民たちが何を望み、何を求め、何を失ってきたのかを見ることは、そのヨーロッパ近代の遺産である「現代」という時代に生きるわれわれにとっては決して別の世界の話ではない。それはまさに、われわれも巻き込まれている現代社会の形成の問題なのである。そして、ジュラの農民たちが直面する現在のヨーロッパ統合も、そのようにして形成されてきた歴史の中において始めて理解できるものである。「第 7 章」においては、18 世紀末以来の外部環境の圧力に対して農民たちはどのように対応し、自らの農業システムと生活空間とを作り変えてきたのかを検討し、「第 8 章」においては、そのような農民たちの生活空間の構造変化がどのように外部環境に影響を与え、「近代」が形成されてきたのか、そしてその果てにある「現代」は今の農民たちにどのような問題を突き付けるのかを検討する。こうした検討を通してわれわれは、ジュラの近代の歴史を彩る協同組合的志向をもった運動のダイナミズムとともに、そうした運動の一つの帰結として生まれた現代ヨーロッパが、結果的にそのようなダイナミズムを妨げる働きをしているというある種の歴史の皮肉をみることになるだろう⁷⁾。

(4) 資料の特性

以上の問題を論じるに当たって用いる資料は、フィールドワークにおいて集められたものを中心としている。フィールドワークはフランス共和国ジュラ県中部の小さな農村である F 村を中心に、1990 年 12 月から 1992 年 6 月にかけて継続的に行われた。集められたデータは主として 6 つの種類に分けることができる。それは、フィールドノート、会話データ、インタビューの記録、歴史資料、統計資料、そして歴史学者や地理学者などによる二次資料である。

フィールドノートは通常の人文学者が用いるデータであり、インタビューを含めて折りに触れてとったノートであるが、インタビューの記録は後に述べることにし、ここでは含めないことにする。このようにして集められるデータとしては、親族名称・呼称や様々な

⁷⁾ 本論では宗教の問題はほとんど議論されない。しかしそれは、宗教がジュラ社会において大きな役割を果たしていないからではない。むしろ逆に、ジュラは様々な面でカトリックが大きな意味を持っている社会である。しかし、ジュラ社会におけるカトリックの意義を検討するためには、従来の儀礼研究やコスモロジー研究にとどまるだけでは不十分である。2000 年の歴史をもつこの宗教は、現在の人々の信仰の在り方の中にその長い歴史の間の様々な紆余曲折がその発進や行進のなかに折り込まれているので、現在の人々にとってのカトリックの意味を考えようとするとき、われわれはキリスト教史、神学的知識、聖書学的知識など、多くのキリスト教研究の成果を動員しなくてはならない。そのような研究はそれ自体重要ではあるが、本論の枠を大きく超えてしまう。

観察記録（家の部屋の配置や、農家の作業手帳など）が挙げられる。通常、フィールドノートに記録されたデータは、他の人の証言や他の資料、別の観察などつきあわせることでその信頼性を確かめながら分析に使用される。しかし、言葉では明確には表現されないために言葉による確認が困難なものについての情報（例えば会話の雰囲気などの側面的情報）も重要な要素としてフィールドノートには記されることがある。このような場合は、特に不可欠と思うものを除いて、なるべくフィールドノートだけに頼ることは避けた。このような質のデータにおいてフィールドノートだけに頼った数少ない例は、会話中の人々のしぐさについてのものである。

会話データは、折りに触れてカセットテープに録音したコーパスによる。直接用いた資料は、小型録音機で録音された会話を友人のフランス人に頼んで書き起こしてもらったものである。カセットテープへの録音は、会話当事者の許可を得た上で小型マイクを当事者の目に見えるところにおいて行った。コーパスは、通常の日常会話、コミュニケーション研究会での議論、インタビュー、および教会でのミサの機会に集められ、その量は膨大になる。これらの録音の目的は、その話の内容よりもその形式的語用論的な側面（使用語彙、推論形式、言い回しなど）を明らかにすることにあった。しかし、このような調査の必要を感じたのはフィールドワークも終わりに近くなってからのことであり、その意味で体系的に会話を録音した訳ではない。そのため、記録はかなり偶然に左右されることが多く、見聞きしたものがすべて録音されていた訳ではなく、たまたま録音はしてはいなかったが語用論的にも社会的にも重要と見られる発言を耳にすることはしばしばあった。語用論的分析で用いるコーパスは実際に録音されたものを用いているが、その他の議論においては録音はされなかったがフィールドノートには記されたデータも参照している。

インタビューは、インタビューをする側とされる側の間の関係が一方的であるという点で、極めて特殊な会話形態である。したがって、インタビューが用いられるのはある特定の事象についての事実の確認の場合に限られる。本論で用いたインタビュー記録は、主として農業経営と政治過程をめぐるいきさつに関するものである。インタビューは、特定のテーマについて一つ一つ聞いて行くという形式をとったが、特に農業経営については、土地台帳図の写しを用いてインタビューを行った。

歴史資料については、歴史学研究で通常なされるような網羅的で体系的な検討は行っていない。それは、本論の関心の中心はあくまでも現在の人々の生活にあることと、手書き資料の読解等に関して技術的な困難があったからである。実際に用いたのは、行政資料として県文書館に保存されているものとしては、F村の過去の家族調査記録、選挙記録、および土地台帳である。土地台帳は集計上の困難があったので、1911年以降のもののみを扱っている。また、19世紀以来出版物という形で発表された様々な統計資料、諸論考、当時の思想的な研究書も参照した。歴史的な統計資料の場合は信頼性に問題がある場合もあるが（特に19世紀前半の統計資料は、まだ数値統計のデータの採り方が確立されてはいなかったもので、数量面では信頼性が低い）、あくまでも傾向を検討するために用い、それ以上の信頼性が必要なときは、既に膨大な歴史資料を相手になされた歴史研究による二次資料に頼った。また同様の技術的理由で、日刊や週刊の新聞・定期刊行物もここではほとんど参照はしなかった。しかしジュラ社会の場合、こうした不十分な資料からも19世紀の人々の生活やイデオロギーの在り方を垣間見ることは可能である。その理由は二つある。ひと

つは、フランシュ＝コンテ地方では18世紀に男性の識字率が急速に伸び、19世紀にはフランスで最も識字化が進んだ地方の一つとなり、農民の教育水準が高い地方の一つだったことである(F. Furet & J. Ozouf, 1977)。このことは、農民たちを対象とした印刷物や新聞、雑誌はかなり広く出回っていたことと、その農民たちを含めた議論の場である「公共空間 espace public (*Öffentlichkeit*)」(J. Habermas, 1986)が、19世紀初頭には地方学会 *société savante* などの設立を通して現実に形成されつつあり、そこでの議論の形成に農民たちも関わっていたことを示しており、そのため、当時の農業と社会をめぐる議論については体系的な史料の探索を行わなくとも、19世紀には実際の印刷物の中に農民たちの意見がある程度見出しうるのである。十分な史料の検討を行わなかったもう一つの理由は、すでに多くの優れた歴史研究が専門の歴史学者たちによって発表されており、一次資料の検討を通じた歴史研究を目的としない本論においては、今までのそれらの歴史学者による研究を信頼して参照することで、史料分析の不十分さを十分補うことができ、ある程度の目的は達成することができるからである。

現在の統計資料については、INSEE(国立統計経済研究所)の諸資料を参照した。もちろん、本論は経済学的側面の研究を目的とするものではないが、現代資本主義における農業経営の可能性を考えようとするとき、こうした統計資料は避けて通れないものである。

最後に歴史学者や地理学者による二次資料であるが、もちろん厳密にはこれらの二次資料の信頼性は一次資料に当たって確認されるべきであるが、本論は歴史研究でも地理研究でもないの、そのような膨大な時間を必要とする資料の再検討は、特に疑わしい議論でない限り本論では必要はないと判断した。そして実際、既に述べたように、特に最近では優れた歴史研究が様々なテーマで数多く発表されているので、それらに頼ることで十分であると判断した。しかしそのかわり本論は歴史研究としては不十分であり、通常の社会史研究で行われるような歴史資料の分析における体系性と精密さは持ち合わせていない。こうしたことは、たとえばフランスのような他分野での研究の蓄積がきわめて大きな領域での人類学研究では、既存の研究の利用が重要であるということを示している。このような領域では研究は必然的に学際的とならざるをえないのである。人類学が人々の生活の全体的な把握というものを試みる学問である以上、こうした他分野の研究の利用は不可欠である。重要なことは、実際のフィールド・データなどを既存の研究のデータと突き合わせて検討することで、現在の人々の生活を明らかにすることであり、そのためにはこのような多様なデータや議論の採用は不可欠なのである。

第2章

地理的歴史的背景

(1) 自然誌

1) 地形と地質

「ジュラ」はスイス北西部とフランス東部の国境に走る山脈の名前である(図1および図2参照)。また、ジュラ山脈南西部にある県はその名前をとって「ジュラ県」と呼ばれている。この「ジュラ Jura」という名は、語源的にはラテン語で森を意味する語「ユリア jura」に由来するが、実際、古代においては森林に広く覆われた山脈であり、現在でもジュラ地方の森林被覆率はフランスの平均よりもかなり高い値を示している。「ジュラ」という語はまた、「ジュラ紀」という地質年代上の中生代中期の名にも用いられているが、それはこの時期にジュラ山脈の地層を主として構成する石灰岩の地層が形成された時期だからである。このように、「ジュラ」という言葉は、「山地」、「石灰岩」、「森林」という、この地方の生態学的自然地理的特徴の本質を表わしている。これに対して、後で見るように、この地方のもう一つの名前である「フランシュ=コンテ」はその歴史社会的条件をよく示している。

「ジュラ」という言葉で示されるこの地域の生態学的自然地理的特徴は、長い年月を経て形成され、先史時代から今日に至るまでこの地方の人々の生活を深く規定してきている。すなわち中生代以来1億年以上の年月をかけて、石灰岩という地質を持つ特異な地形の山地がこの地域の形成され、その地形が作り出したこの地方特有の気候は石灰岩質の地層とともに、森林に代表される生態系を作りだし、そしてその二次遷移という形で生態系の変化が自然の恵みとして人間の生活を支えているのである。こうして、新石器時代にこの地方に最初に人類が住み始めて以来、高度に政治的に洗練されたヨーロッパ統合の進む今日に至るまで、これらの環境的要因は常に人間の生活を枠づける条件となってきた。特に、ジュラのように農業という自然に依存する活動が重要な意味をもつ社会においては、自然環境はその重要な生活条件の一つである。以下では「ジュラ」という言葉に表わされるこの地方の環境条件をまず見ておくことにする^{*)}。

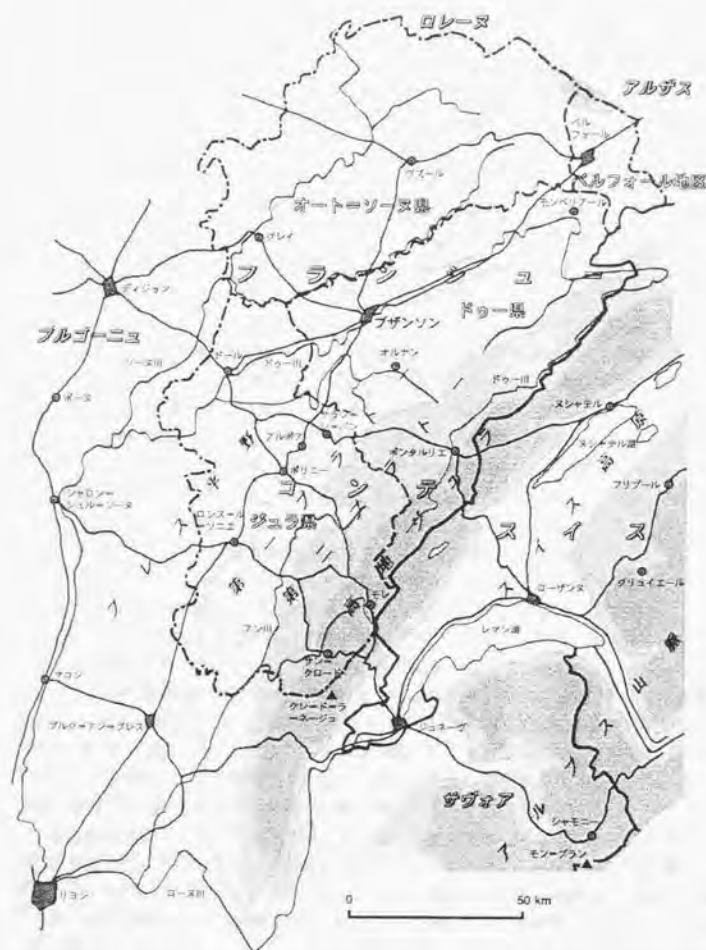
45億年前に地球が生まれ、初期の火山活動が徐々に静まり地表の温度は下がっていくと、

*) 以下の記述における詳細な自然誌のデータは、主として次の資料によっている。C. Chambard (1914), F. Douaire (1924), J. Boichard (1977), M. Bourgeois (1979), DDA (1980), J.-C. Rambeau et al. (1980), S. Bruckert & M. Gaié (1985), J.-C. Wieber (1988), R. Moreau & R.-A. Schaeffer (1990), A. Robert (1990)。

図 1：フランシュ=コンテ地方の位置



図 2：フランシュ＝コンテ地方全図

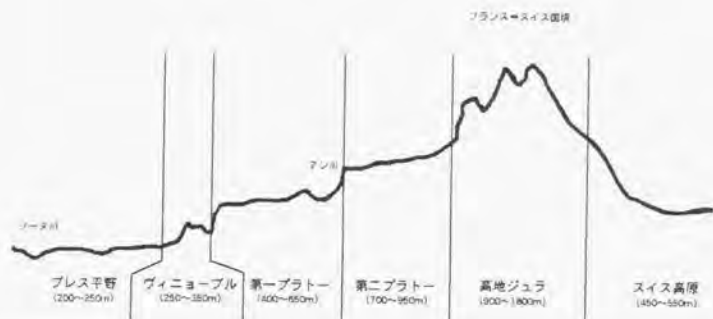


広大な海が生まれ、海は生命を生み出した。そしてその海の間を大陸は、ウィルソン・サイクルと呼ばれる数億年のサイクルでゆっくりと、超大陸の形成と分裂を繰り返しながら、徐々に面積を拡大していった。やがて陸地は、古生代の末期に最後の超大陸であるパンゲア大陸を形成し、ついで北のローラシア大陸と南のゴンドワナ大陸に分裂を始めた。恐竜時代である中生代の始まりである。その頃、現在のジュラとなる地域はローラシア大陸にあるブレス湖と呼ばれる巨大な湖の湖底にあり、古ライン川がこのブレス湖から流れだしていた。1億3千万年前のこの頃、その湖底ではペルム紀に形成された岩盤の上に生物の死骸が積もっていき、やがてジュラ山脈を構成する石灰岩や泥灰岩を主とする地層が形成された。ジュラ紀である。白亜紀に入ってもジュラの地層の形成は続いたが、やがて恐竜が滅び、哺乳類の時代である新生代が始まると、アルプス造山運動が始まった。その影響で、それまでブレス湖の湖底にあったジュラの土地は隆起し褶曲して現在のような山脈となった。その後、氷河期には浸食を受けるが、特に最後の二つであるリスマ期とヴュルム氷期の氷河はこの地方の各地にモレーンなどの氷河堆積物を残している。

こうして生まれたジュラ山脈は、スイスのジュネーブ近郊からバーゼル、さらにはドイツのシュワーベンへと伸びている。この山脈を東西に切ってみると、西のソーヌ川から東へと階段上に高度を上げているのがわかる。まず、ソーヌ川とその東部に形成された標高約200メートルの沖積平野であるブレス平野があり、そこから東に順に、標高約500メートルの第一プラトー、次に標高約800メートルの第二プラトー、そして、いくつもの標高1,100メートルを超える稜線が走りスイス＝フランス国境の走る高地ジュラがある。ジュラ山脈の最高峰は南部のクレ・ド・ラ・ネージュだが、標高は1,723メートルであり、同時期に生まれたアルプス山脈に比べるとそれほど高くはない上、比較的なだらかである。山脈は高地ジュラの東で、レマン湖やヌシャテル湖のある標高約500メートルのスイス高原まで、急激に高度を落としている。ブレス平野と第一プラトー、そして第一プラトーと第二プラトーは、100～200mの高度差を持つ急斜面や絶壁によって隔てられている。一般にはこの第一プラトーから高地ジュラまでの地域をジュラ山脈と呼んでいる。なお、「プラトー plateau」とは高原という意味であり、したがって「ジュラ高原」とは第一プラトーと第二プラトーを指す言葉である。また、第一プラトーとブレス平野の間には小さな丘の点状する地域があり、ヴィニョブルと呼ばれている(図3参照)。

ジュラ山脈の地層の大半は、ジュラ紀を中心に三畳紀や白亜紀に形成された石灰岩層である。この石灰岩層は100m以上の厚さを持ち、古生代末期の二畳紀に形成された岩盤の上に乗っている。地層は、不透水性の泥灰岩層が細くいくつも貫入した、透水性の石灰岩層を基本にしており、それが隆起にともなって複雑に褶曲しているので、山脈の表面は、石灰岩を基本とした大地に何本も泥灰岩の細い帯が南北に平行に走っているという形となっている。雨水はこうした石灰岩の大地によく吸収されるため、地表には小さな川はほとんど見られないが、そのかわり降水は地下水脈となり、大小併せて数千といわれる鍾乳洞を形成する。そのため、ジュラ山脈はカルスト地形を形成しており、明瞭なすり鉢状の形態をとることはそれほど多くはないとはいえ、あちこちにドリーネが形成されている。土壌は非成帯性の石灰岩質土壌で、B層を持たないレンジナ、または明確なB層を持つ森林褐色土壌を主とし、後者は雨水が流れ込むドリーネの周辺に特に発達している。表土は全体において石灰岩質腐食土で、弱酸性で礫や岩塊を多く含み、生化学的にはやや不安定だ

図 3：フランシュ＝コンテ地形模式図



が、有機物含量が多く、また、無機物や窒素に富んでいる。とはいえ、母岩であるC層は石灰岩質であるためカルシウムの供給はほぼ継続的で、この地方特有の高い降水量によってもカルシウムが溶脱され尽くすことはない。第一プラトーでは第三紀に氷河の影響を受けなかったために長期間にわたって溶脱の作用を受け酸性化した。氷河による浸食を免れた泥や粘土を構成するコロイドの作用で鉱物イオンの流出が抑えられ、結果として弱酸性を示している（だいたい pH 5 を示す）。こうして保持されたカルシウムと鉱物は土壌を物理的にも安定させるので、その意味でこれらの土壌の肥沃性は維持されることになる。一方、石灰岩質土壌では多くの場合、表土の層は薄かったり固い岩盤が露出していたりするので、物理的に農耕には不向きなところも多い。この場合、薄い表土は水の働きによって溶脱も進んでいるので、農地として利用するためには泥灰岩やリンを添加する必要がある。これに対しドリーネ周辺の森林褐色土壌の地域は、表土層が厚くなり比較的耕作に向いている。そして、冷涼な気候と豊富な降水量のため、場所によっては泥炭岩層の発達が見られる。

一方、地下水脈となった降水は、第一プラトーや第二プラトーの直下の崖下から川となって地上に現われる。その際、土地を深くえぐったルキュレ *reculé* と呼ばれる特徴的な谷を形成する。この谷は、比較的平らなプラトーに垂直に大きな穴を掘ったような、数百メートルの幅の壺下のような形をして数キロにわたって続いている。谷の底には川が流れているが、その川は谷の一番奥にある崖の下から地下水脈が流れ出しているものである。一方、水が豊富となる谷の出口には都市が形成されやすい。特に、第一プラトーの直下には多くの都市が形成され、そこにリヨンとストラスブールを結ぶ国道 83 号線と国鉄線が走っていることもあり、ローヌ＝ライン運河の通るドゥー川流域とともに、この地方の政治経済の中心となっている。また、高地ジュラにもいくつかの重要な都市が形成されている。これに対し、第一プラトーには大きな都市は少ない。

表 1: ジュラ山脈の月別平均気温と降水量

出典: J. Boichard (1977)

観測地	ドール	シュット	ラムラ
標高	238 m	735 m	1156 m
地理的位置	プレス平野	第二プラトー	高地ジュラ
	°C mm	°C mm	°C mm
1 月	2.3 67	1.5 132	3.3 168
2 月	4.8 51	2.1 133	1.4 163
3 月	7.1 63	3.5 133	2.9 153
4 月	12.0 58	6.0 129	4.6 154
5 月	15.1 62	11.1 129	4.6 154
6 月	17.8 64	14.3 160	12.6 178
7 月	19.5 59	17.5 156	14.0 233
8 月	19.6 84	17.7 189	14.0 233
9 月	17.2 42	15.8 164	11.9 177
10 月	12.0 64	9.8 114	7.5 120
11 月	6.1 72	6.0 153	2.6 191
12 月	3.0 59	2.1 160	1.0 177

このようなジュラ山脈の地質的・地形的な特徴は、ローヌ川の河岸平野であるプレス平野と明確な対照をなしている。プレス平野は砂状の褐色沖積土からなり、土が豊富で岩盤の露出はなく、また水はけが悪いため沼が多く点在する。こうした土地の違いはそのまま家屋の建築形態の相違となって現われる。土の多いプレスでは平屋の赤い煉瓦造りの家が多いが、ジュラでは灰色の石灰岩で建てられた多層の家が普通である。村落形態は、中世末期という戦乱の多い時期に作られた村の多いプラトーでは、村を外敵から守る必要から集村として形成されたのに対し、高地ジュラやプレスではそれよりも後の比較的平和な時代に村が作られたので、散村となっている。

2) 気候と生態系

以上の様な地質上の特徴は、フランスにおいては特異なものではない。ジュラの自然の特異性はむしろその気候にある。すなわち、その山岳地形が独特の気候条件を生み出し、その気候条件と石灰岩質の地質が広大な森林を生み出す基本的条件となっているのである。

気候の特異性は、大陸性であると同時に海洋性でもあるという点に見られる(表 1 参照)。すなわち、内陸の山岳地帯なので気温は日較差や年較差(その差は通常で 17°C から 18°C)の大きい大陸性であり、また、暖流のメキシコ湾海流から湿気を得た偏西風がジュラ山脈にぶつかるために、降水量はかなり多く、海洋性の特徴を示す。また、この地方は山地なので標高に応じて気候は異なり、標高とともに平均気温は下がり、降水量は多くなる。平均気温は全般的に低く、特に第二プラトーや高地ジュラはフランス国内で最も低い気温を記録する地方として知られ、冬は最低気温は零下 20°C に及ぶことも珍しくない一方(零下 36°C という記録が残っている)、夏は 6 月でも雪が降ることもあり、「フランスのシベリア」と呼ばれることもある。比較的暖かい第一プラトーでも、夏は日中こそ T シャツ一枚で十分なほど暑くとも、夜になるとセーターなどの重ねるものが欲しい

表 2: ジュラの植生

	高木	低木	草本
ブレス平野	☆ヨーロッパナラ ☆ダーマストオークス ブナ クマシデ トネリコ カエデ セイヨウミザクラ	(酸性土壌) クロウメモドキ スイカズラ (中性・アルカリ土壌) ハシバミ	(酸性土壌) ワラビなど (中性・アルカリ土壌) スズラン ハコベ ツルボ
第一プラトー	☆ヨーロッパナラ ブナ ダーマストオーク カエデ トネリコ イギリスニレ セイヨウミザクラ シナノキ オウシュウナナカマド ヤマホラシ クマシデ	セイヨウガマズミ セイヨウミズキ ニシキギ セイヨウボタノキ オウシュウナナカマド など	セイヨウスズリ ジンチョウゲ スイセン ツルニチニチソウ ゼラニウム など
第二プラトー	☆ドイツトウヒ ☆セイヨウモミ カバノキ ブナ トネリコ カエデ	スイカズラ ノバラ ヨーロッパキイチゴ セイヨウスズリ ブルーベリー ハシバミ	ヤグルマギク カタバミ リンドウ バイケイソウ キンポウゲ など
高地ジュラ	☆ドイツトウヒ ブナ オウシュウシラカバ マツ セイヨウハルニレ など	セイヨウナナカマド ハシバミ ブルーベリー など	

N.B. ☆印は主要樹種を示す。

なるほど気温が下がり、また、冬は気温が零度以上にはならない日が多く、木々は樹氷に覆われる。降水量は、第一プラトーより高い地域では年間 1,500 mm から 2,000 mm と高くなり、比較的乾燥した他のヨーロッパの地方とは大きく異なっている。特に高地ジュラでは年間 2,000 mm 以上の降水を記録することも少なくない。降雨は 6 月と 9 月に特に多く、この時期は毎日雨の日が続く、石灰岩質土壌の牧草地が湖のようになることも珍しくない。雪は 11 月から 12 月に始まり、3 月から 4 月まで続く。高地ジュラでは降雪期間はもう少し長くなり、農業生産の大きな規定要素となっている。

豊富な降水量と石灰岩質土壌は植物生産性を向上させる。ジュラ県の森林被覆率は 44.9 %、ジュラ県の属するフランシュ＝コンテ地方〔後述〕全体では 42.1 % (フランス全体では 36 %) と極めて高いが、それには人間による影響のほかにもこうした環境条件がある。Andre Robert によれば、フランシュ＝コンテ地方を構成する 1,780 のコミュニティ

表 3: フランシュ=コンテの主要樹種

出典: A. Robert (1990)

広葉樹		針葉樹	
ナラ	38 %	ドイツトウヒ	49 %
ブナ	28 %	モミ	47 %
クマシデ	12 %		
セイヨウトネリコ	6 %		
その他	16 %	その他	4 %

commune (日本の市町村に当たる地方自治単位〔後述〕) のうち、500 以上のコミューンにおいて森林被覆率は 50 % を超え、90 % 以上が森林に覆われているコミューンもあるのに対し、森林被覆率が 20 % 以下のコミューンはわずかに 280 しかないという (A. Robert, 1990: 13)。これらの森林は、温帯林によく見られるようによく構造化されており、地衣類、林床・低木層、中木層、高木層という階層が明確に識別できる。フランシュ=コンテ地方全体では広葉樹が森林全体の 62 % を占めるが、植生は標高に応じて変化する。ブレス平野はカシワやブナといった広葉樹を主体として低灌木や多年性の雑草の豊富な森林が多いが、第一プラトーに来ると下草は減り、ブナやモミを主体とした林床の明るい森林が見られる。さらに高度を上げると広葉樹は姿を消し、モミやドイツトウヒなどを主体とした針葉樹林となる。ただし、泥炭地や岩盤が露出したところなど、気象条件や土壌条件などから森林が発達しない土地もあり、そのような土地は農業にも林業にも利用価値は低い。この広葉樹と針葉樹の境界は標高 800 m 前後である。フランシュ=コンテ地方の主な植生と、広葉樹と針葉樹それぞれの主要樹種の構成比は、表 2 と表 3 に示したとおりである。

森林の内部ではさまざまな生き物を通して物質が循環している。植物はその葉や実などを地面に落とし、それらはリター層を作りやがて腐植と呼ばれる芳香族化合物となり、栄養となって再び植物の体内に吸収される。また、それらの植物を食べる一次消費者、さらには二次・三次の消費者も、腐植となって再び植物に吸収される。こうして生命を構成する物質の食物連鎖や腐植連鎖などを通じた循環は、生物地球化学的循環と呼ばれる。ジュラの場合はこの循環は、低い気温、多い降水量、および石灰岩質の土壌によって条件づけられ、かつこれらの条件をある程度規定する。こうした森林では、広葉樹林においても針葉樹林においても落葉は年間 3 t/ha から 4 t/ha になる。この時、ハシバミやシラカバなどの葉は数カ月で分解するが、ブナやドイツトウヒはさらに分解に時間がかかり、下草の発芽を妨げる一方、肥沃で厚いモルを形成する。豊富な降雨はこうして形成された豊かなリター層の溶脱を進め、特に針葉樹林においてはホドソル化を進行させるが、母岩からの豊富なカリシウムの供給により、このような溶脱の進行は妨げられることが多い。

ジュラの森林のほとんどは二次林であり、間伐や植林といった形で人の手が入っている。森林の多くはそれぞれの地域のコミューンによって管理され、その木材の一部は住民の暖房用に切り出され、あるいはコミューンの財政の支えとして市場に売り出されるため、その時その時の市場価値の高い木が植えられる傾向が強い。近年ジュラの森にモミが多いのは、そうした理由による。これらの森には野生動物も生息している。そのうち、哺乳類の代表的なものはシカ、イノシシ、ノウサギなどであり、車を運転しているとこれらの動物

が突然飛び出してくることもある。これらの動物は狩猟の対象ともなっているが、近年は個体数が減っているという（ただし、厳密な個体数調査が行われているわけではない）。その理由について、ハンターたちは自動車が増えたことを上げているが、狩猟管理官は過剰な狩猟圧が原因であるとして、意見は真向から対立している。

土地利用という点から見ると、森林以外のジュラの土地の大半は農地である。ブレス平野ではコムギやトウモロコシなどの穀物やヒマワリの栽培と酪農が行われており、ヴィニョールでは酪農とブドウ栽培が半分ずつである。第一プラトーより上の農業地域はほとんどが酪農地帯で、主としてチーズ生産のための乳牛の飼育が行われている。ジュラで生産されるチーズは、主としてコンテやエメンタルといったグリュイエール・タイプのチーズであり、これらのチーズはジュラを代表する産物となっている。穀物や野菜も多少栽培しているが、それは主として自家消費用ないしは飼料用であり、生産活動の中心は酪農にある。

比較的自己完結的な森林生態系に対して、農業生態系は栄養塩類の農作物という形での恒常的流出によって特徴づけられる。ジュラの場合は、ブナ林では120年かけて50 kgの栄養塩類が失われるのに、農地の場合は通常の小麦の収穫で少なくとも170 kg/ha、草地では400 kg/haの栄養塩類が毎年その土地から失われていく（R. Moreau & R.-A. Schaeffer, 1990: 195）。したがって、適切な輪作や施肥によって継続的に栄養塩類を添加することが不可欠である。このように、生産のためには継続的な人間の介入を必要とするというジュラの自然の基本的特徴は、他の地域と同様に、この地域における生産活動やそこから生まれてくるさまざまなイデオロギーの基本的な条件となっている。

ジュラ社会においてはこの農業が重要な生産となっており、もちろん、他の先進国やフランスの他の地域と同様に、この地方でも農業が県民の家計所得に占める比率は、1983年にはわずか3.3%であり、給与所得が占める42.3%に比べると非常に小さい（INSEE, 1984）。また農業人口も、1983年には労働可能人口のわずか8.9%と、農業県とはいえ非常に少ない（INSEE, 1992a）。しかし、土地利用面積からすれば農業に利用されている土地は県全体の面積の40%近くにもおよび、決してとるに足らない産業なのではない。中でも酪農生産は特に重要な位置を占めている。

3) 二次遷移

植生は時間的に不変のものではない。ジュラでは原生林はほとんど残ってはおらず、農耕地を含めた植物生態系は常に二次遷移の過程にある。第一プラトーの生態系の極相はブナを主体とした広葉樹林であるが、通常は極相に至る前に人の手が入る。畑の場合、植物群落の二次遷移は次のような経過をたどる。まず、間によって耕されたあとには飼料用作物の栽培が行われるが、これは麦類や根菜類といった一年生草本から始められる。しかし手入れをしないで放っておくと、イネ科を始めとする一年生草本の雑草が侵入し始め、ついでタンポポやキンポウゲのような多年生草本が侵入し始める。やがてバラ科の低木などが生え始め、クマシデやトネリコへと移行していく。そして、やがてブナなどの背の高い広葉樹が生え始める。高地になるとアカマツ、モミ、トウヒなどの針葉樹林がその極相となる。また、しばしば畑の真ん中に一本の木や小さなしげみを見かけることがあるが、それらは、複数の地片にまたがる開放耕地において、法的には存在している地片と地片の

境界を示す目印である。

ジュラの森林では、極相に至る前に遷移過程のどこかの段階で人の手が入る。農業生態系における栄養塩類の持ち出しはこのような二次遷移の進行を妨げ、あるいは逆行させる効果を持つ。それゆえ、農業は生態系の二次遷移の制御を通じて利益を得る産業であるといえる。しかし、その利用が度を越え、生態系の破壊を招く。このような生態系の破壊の例として、中世以来の森林利用を挙げることができる。中世以降、森林は薪炭林や家畜の放牧地、さらには産業用の燃料として利用されてきたが、その結果森林の伐採が著しく進行し、豊かだったフランシュ＝コンテ地方の森林は19世紀の初頭には全面積の26%にまで落ち込んだ。これに危機感を抱いた政府はその後植林に力を入れ、その結果今日見られるまでに森林は回復した。しかしその際、経済性の高い針葉樹（特にモミ）を中心に植林が進められたため、ジュラでは針葉樹林の面積が拡大することになった。現在の共有林における森林施業の方法は、天然更新と植林を組み合わせた輪伐方式であり（これはフランス林学と呼ばれる理論に基づいている）、営林署 Office National de la Forêt (ONF) とコミューンの管理の下にある。

このように、自然環境は必ずしも人間社会にとって与件を構成するのみならず、人間自身がその活動によって作り変えてきたものである。このことは、人間の社会活動の在り方もまた、社会生活の物質的基盤である自然環境の形成に影響を与えていることを意味している。

（2）歴史的背景

1) 「フランシュ＝コンテ」社会史の概要と前史

ジュラの人々の社会生活はその自然環境に大きく規定されているが、しかし自然条件のみによって人々の生活が条件づけられているという訳ではない。このような環境条件と共に現在の人々の社会生活の基本的条件を構成しているのが、この地方のもう一つの名である「フランシュ＝コンテ」という語に示される。その歴史的背景である。今日見られる個人主義と協同組合志向という二つの志向も、この歴史のなかで形成されてきたものである。

『フランシュ＝コンテ Franche-Comté』という名は「自由伯領」という意味であり、現在は行政上の一単位として、行政的にはドゥー県、ジュラ県、オート・ソーヌ県、ベルフォール地区の4つの県 *département* からなっている。地形的には、東半分はジュラ山脈、西半分はソーヌ川とドゥー川の沖積平野、そして北部にはオート・ソーヌ高原とヴォージュ山脈が占めている。このフランシュ＝コンテ地方の領域は、中世にこの地方にあったブルゴーニュ伯領の領域とほぼ重なっているが、この地方が「フランシュ＝コンテ」と呼ばれるのは、中世から近世にかけてのブルゴーニュ伯領（コンテ・ド・ブルゴーニュ *Comté de Bourgogne*）時代に、領民に税金が免除されてある程度の自律性が保証された（フランシュ *franche*）ことに由来する。そしてその後のさまざまな歴史的事件に際しても、このような自主独立への志向がそれらの事件に彩りを添えて今日に至っている。もちろん、今日のジュラの人々に見られる自主独立への志向が、中世末期のジュラの人々の自律性への志向と同じであると考えすることはできないし、どのような意味にしろ自主独立への志向のみがこの地方の歴史を作り出してきた訳でもない。むしろ重要なことは、自主独立への志向をふく

めた今日のジュラ社会の特徴が、中世以来の「フランシュ＝コンテ」の複雑だが興味深い歴史の中で形成されてきたということであり、そのような歴史的社会形成の特徴の一端をこの「自由伯領」という意味の名は象徴的に示しているということなのである。

この「フランシュ＝コンテ」という名で示されるこの地方の社会的特徴が歴史的に形成されるに当たっては、次の4つの時期が特に重要な意味を持っていた（以下、表4参照）。

〔ジュラ社会の歴史上の転機〕

中世初期	（ブルグンド人の侵入）
中世末期	（ブルゴーニュ伯領の成立とチーズ組合の誕生）
近世	（ハプスブルク家の支配とフランス王国への併合）
近代	（急激な社会経済的変化と協同組合主義の発展）

フランシュ＝コンテ社会の歴史が始まるのは、新石器時代である。この時代にジュラ山脈に最初に人間がやってきて、まず第一プラトーに定住した。その後、何回かに分けて移民の波が起き、紀元前にはセクアニア Séquanie と呼ばれるガリア人の社会が形成された。後にブザンソンと呼ばれることになる町ウェンソンティオはその中心地となった。しかし、今日の社会に痕跡を残す最も古い時代はローマ帝政時代で、当時の軍事的単位プロヴィンキア provincia とその下位単位キウィタス civitas が、後のフランク王国時代のパグス pagus（軍事的単位）、中世後期から近世にかけてのバイヤージュ bailliage（徴税単位）を経て今日の行政区分の原形となっている。そして、この頃既にジュラはチーズ、豚肉、ワインの産地としてローマに知られていた。

ローマ帝国にゲルマン人が侵入して中世になると、この地方の人々の社会生活に大きな変化が訪れる。このゲルマン民族の大移動に際してこの地域にはスカンジナビアからブルグンド人が侵入し、5世紀に第一ブルグンド王国をうちたてた。しかしこの国も6世紀にはメロヴィング朝フランク王国に併合されてしまい、一時的には独立を取り戻すものの（第二ブルグンド王国）、最終的にはメロヴィング朝に代って生まれたカロリング朝フランク王国に771年に併合されることになる。ブルグンド人がこの地にもたらしたものは、親族関係の中でも兄弟間の平等と連帯の重要性を強調するというブルグンド人の慣習である（M. Salicet, 1988, 32-35）。6世紀初頭にゴンベット法として文書化されるこの慣習は、その後も今日に至るまで、財産の均等相続などの形をとって維持されることになる。

2) 「フランシュ＝コンテ（自由伯領）」の成立

カロリング朝のカルル大帝は、ヨーロッパのほとんどの地域をその領土とし、800年には西ローマ皇帝として戴冠し、その権力は絶頂となった。しかし、カロリング朝は実際には豪族たちの緩やかな連合体に過ぎず、国王は各地の有力な豪族を支配したのみであり、その支配力が一般の農民にまで及んでいたわけではない。そのためフランク帝国に併合されたとは言っても、農村は実質的にはある程度の自律性を保っており、また、豪族たちのつながりもそれほど強いものではなかった。そのため、カルル大帝の死後、カロリング朝フランク帝国は急速に分解し、社会に混乱を引き起こしたが、その中から徐々に新しい秩序が形成され始めたが、ブルゴーニュ伯領もまた、その混乱の中から生まれてきたのであ

表 4: フランシュ＝コンテ年表

紀元前	1519
ガリア人によるセクシア支配	カール、神聖ローマ皇帝カール 5 世となる；フランシュ＝コンテの黄金時代
58 ガリア人、ゲルマン人と対立し、ローマのカエサルに援助を求める；カエサルのウェンディオ入寇	1556 カール 5 世の死；フランシュ＝コンテは息子のスペイン王フェリペ 2 世にわたる
32 ガリア人、カエサルに抵抗しウェルキンゲトックスに助けを求める；アレジアの戦い	1595 フランス王ルイ 13 世のフランシュ＝コンテ侵入
51 ローマによるセクシア支配；軍事単位のセクシア・プロヴィンシアとなる	1635 リシュリューに率いられたフランス王国軍の侵入（十年戦争 [-1645]）
紀元後	1668 フランス王ルイ 14 世の第一回の侵入
180 プザンソンのキリスト教化	1674 フランス王ルイ 14 世の第二回の侵入、フランシュ＝コンテの降伏
457 スカンジナヴィアにいたブルグンド人の侵入による、セクシアのブルグンド王国への編入	1678 ナイメーヘン条約（フランシュ＝コンテのフランス王国への帰属の確定）
534 ブルグンド人、フランク人（メロヴィング朝）の支配下に入る	1789 フランス革命
561 フランク王国の分割にともない、第二ブルグンド王国成立	1790 フランシュ＝コンテに 3 つの県を設置
771 第二ブルグンド王国、カロリング朝フランク王国へ併合	1793 ジュラの連邦主義的蜂起
843 ヴェルダン条約により、中フランク王国へ編入	1808 C. Fourier 「四運動の理論」出版
879 南ブルゴーニュを含むプロヴァンス王国の成立	1826 社会的カトリックのラムネー主義がフランシュ＝コンテで影響力をもつ
888 二つのブルゴーニュの分裂とオート・ブルゴーニュ王国の成立	1829 最初の地方新聞「ランバルシエル L'impartiel」が、C. Fourier の影響の下に発刊
934 南ブルゴーニュの統一；ブルゴーニュ＝プロヴァンス王国（アルル王国）の成立	1830 七月革命
982 オットーギヨーム（最初のブルゴーニュ伯）の支配の開始（ブルゴーニュ伯領の形成）	1834 アルボアでの農民蜂起（一時的な共和政の宣言）
1032 ブルゴーニュ伯領、神聖ローマ帝国の支配下に入る	1835 フランシュ＝コンテを通るローヌ＝ライン運河の開通
1249 ジャン・ド・シャロン、サランの町の税を免除（最初の免税措置）	1840 ロンス＝ル＝ソニエのジャコイモ革命（P.-J. Proudhon 「所有とは何か」出版）
1272 公文書に「フリユイティエール」の語が最初に現われる	1848 二月革命；P.-J. Proudhon、国民議会議員に
1295 フランス王フィリップ（フィリップ美蘭王）ブルゴーニュ伯領を賣却	1881 高地ジュラのサン＝クロードで消費組合「ラ・プラデルネル」設立
1349 ブルゴーニュ伯領でペストが流行	1884 結社の自由が認められ、農民組合が結成される
1366 「フランシュ＝コンテ」の名が最初に公文書にあらわれる	1889 モンベリアルド種の系譜記録（Herd-Book Montbéliarde）の開始
1384 ブルゴーニュ公フィリップ、フランシュ＝コンテを相続する	1940 ドイツ軍によるフランシュ＝コンテ占領
1477 シャルル勇胆公の戦死；フランシュ＝コンテはフランス王の手にわたる	1944 フランシュ＝コンテ地方のドイツ軍からの解放
1491 フランス王シャルル 8 世、ブルゴーニュ伯領を神聖ローマ皇帝マクシミリアンに譲る	1960 行政単位としてのフランシュ＝コンテ地方の設置
1506 マクシミリアンの孫カールがネーデルランドとブルゴーニュ伯領の領主となる	1973 E. Faure、フランシュ＝コンテ地方議会の議長となる
	1974 リップ争議（1982）
	1981 TGV（フランス新幹線）によるパリ＝プザンソンの接続
	1986 EC によるフランシュ＝コンテへの牛乳生産制限の適用
	1993 マクシャール＝改革

N.B. ゴシックで示したのは、フランシュ＝コンテにおいて特に重要な事件

る。

カール大帝が亡くなると、843年のヴェルダン条約によってこの地域はまず中フランク王国（ロタリンギア）の一部となり、さらにその後の混乱のなかで西に隣接するブルゴーニュ公領との合併や分割を繰り返したが、943年にブルゴーニュ＝プロヴァンス王国（アルル王国）に支配されることになる。しかしこの王国がホーエンシュタウフェン朝神聖ローマ帝国に併合される11世紀ごろには、それまでの王や貴族の勢力はすっかり弱まり、代わって台頭してきた豪族によりジュラ山脈西部にブルゴーニュ伯領が成立した⁴⁾。しかし、神聖ローマ帝国に併合された後、ブルゴーニュ伯の権威は弱体化して多くの豪族が乱立するようになった。その中で勢力を伸ばしていったのが、伯家の傍系に当たるシャロン家である。そして、このシャロン家が勢力を延ばしていく中で、農民社会の自律性の獲得と、最初のチーズ組合の形成という形で、今日のフランシュ＝コンテ社会をも特徴づけている二つの要素である。個人主義と協同組合主義という二つの要素の萌芽が生まれるのである。

フランク王国分裂後のジュラ山脈の農民社会は政治的な不安定と無秩序に支配され、農民たちは自衛を余儀なくされていた。そうした状況のなか、12世紀ごろ、ジュラ山脈ではシト一派をはじめとするさまざまな修道院によって、その広大な森林の開墾が進められ、それとともに多くの農民が入植し、森林の奥には多くの村が生まれていった。こうして生まれた村と修道院の間には権利と義務を明記した契約が結ばれ、開墾の必要からその契約は双方から尊重された。こうして森の奥から村落自治の芽が芽生えていった。また、修道院や豪族は広大な森林を所有してはいたが、実際には森林は農民たちの共同体によって自由に利用されており、その農民たちの日常的森林利用には政治権力の監視は及ばなかった。こうした中、勢力を拡大しようとしていた13世紀半ばのシャロン家の当主ジャン・ド・シャロンは、これらの村々に次々に免税特権を与えることで自らの勢力下においていった。こうして、ブルゴーニュ伯領の領民は税金を免除されて自由を獲得していき、やがてこの地方は「フランシュ＝コンテ」と呼ばれるようになった。そして、シャロン家はブルゴーニュ伯家を差し置いてこの地方の実質的な支配者となった。また同じ頃、バザンソンは帝国自由都市として自治を獲得する。

一方、こうした村落の自律性の獲得と平行して、フランス最古の農業組合で、今日に至るまでのジュラ農業独自の際立った特徴となっているチーズ組合が、高地ジュラと第二プラトーの森林の中で生まれる。これは、農民達が牛乳を持ち寄って協同でチーズを生産するための組織で、牛乳の「果実を実らせる（*fructifier*）」ための協同組合（*コーペラティヴ cooperative*）という意味でコーペラティヴ・フリユイティエール

⁴⁾ 「ブルゴーニュ Bourgogne」という名は、ゲルマン語の「ブルグンド Burgund」がフランス語化したものである。中世には、この「ブルゴーニュ」と呼ばれる地方にはブルゴーニュ公領とブルゴーニュ伯領とが別々に存在していた。地理的には、今日のブルゴーニュ地方が前者に、フランシュ＝コンテ地方が後者に、ほぼそれぞれ対応する。ブルゴーニュ公領はJ. Huizinga の名著『中世の秋』で知られる封建国家で、一時期はフランス王国をしのぐ勢力を持っていた。ブルゴーニュ＝プロヴァンス王国時代と15世紀以降のヴァロア朝ブルゴーニュ公領時代（いわゆる四大公時代）には両ブルゴーニュは統一されていたが、四大公の最後であるシャルル勇胆公の戦死後は、ブルゴーニュ伯領（フランシュ＝コンテ）はフランス国王の手を経て皇帝マクシミリアンの手にわたる一方、ブルゴーニュ公領（ブルゴーニュ）はフランス王国にそのまま残り、二つのブルゴーニュはその後まったく別々の歴史をたどることになる。

coopérative fruitière と呼ばれていた。

ジュラにおけるチーズはもともと、牛乳生産量の落ちる長い冬に備えて、腐敗しやすい牛乳を長期にわたって保存するために作り出されたものだったが、その輸送にも適した保存性の良さゆえ、早い時期から域外にも輸出され、貧しい農民たちにとっては数少ない現金獲得の手段ともなっていた。こうして、ローマ帝政時代にはすでにジュラは良質のチーズの産地として知られていた。このチーズは長期保存を目的とするため大型で、そのため、その製造には多くの牛乳を必要とする。たとえば、現在、重さ約 45 kg のコンテをつくるためには、牛乳約 400 kg から 500 kg を必要とするが（牛乳の比重は、1 L 当り 1.03 kg）、牛一頭の一日の泌乳量は 20 kg から 30 kg なので、一つのコンテを作るためには 20 頭前後の牛が必要ということになる。コンテの原形となったジュラのチーズは中世にはヴァシュランと呼ばれ、重さ約 20 kg と今よりもはるかに小型で、脂肪分も多かったが、そのころの牛一頭の泌乳量は一日に多くて 3 kg 程度だったので、ひとつのヴァシュランを作るためには、やはり多くの牛を必要としたことは明らかである。しかも、農民一人当りの乳牛の保有頭数は数頭がせいぜいのところだったので、ヴァシュランを作るためには複数の農家が協力しなければならない。チーズ組合はこうした物質的条件が、12 世紀ごろ生まれつつあった村落自治という社会的条件と重なることで生まれた、村落共同体とほぼ重なる組織だった。しかし、チーズ組合がその起源地である高地ジュラと第二プラトールの外でも作られるようになるのは、ようやく 18 世紀になってからである⁽⁹⁾。

3) ハブスブルク朝支配とフランス併合

近世のフランシュ＝コンテの歴史は、「ハブスブルク支配下で自由を謳歌した黄金時代」と「フランス王国への併合による自由と独立の喪失」という二つのテーマで今日よく語られる。このようなイメージは、実際の歴史とは必ずしも一致はしないが、今日のフランシュ＝コンテの人々の一つの理想の表現とはなっている。

中世末期以降、その地理的位置ゆえにフランシュ＝コンテは政治的には常に不安定な状態におかれ、神聖ローマ皇帝からフランス王、次いでブルゴーニュ公の手にわたるが、領民の免税特権は常に維持され、その意味でこの地域の自主独立は維持されていた。他方、言語的理由（オイル語系のフランス語ブルゴーニュ方言）とシャロン家のフランス文化への傾倒を反映して、文化的には常にフランス王国の影響下に置かれていた（B. Grosperin, 1967: 10）。15 世紀末には、神聖ローマ皇帝マクシミリアンによってフランシュ＝コンテはハブスブルク帝国に組み込まれ、この地方は政治的な安定と経済的繁栄を手に入れたことになった。そしてカール 5 世の時代に「自由伯領」フランシュ＝コンテは黄金時代をむかえた⁽¹⁰⁾。カール 5 世の死後はフェリペ 2 世のスペイン・ハブスブルク家に継承されるこ

⁽⁹⁾ 中世以来良質のグリユイェール・タイプのチーズの生産地として知られるスイス西部（ヌシャテル州、ヴォー州、フリブール州、ベルン州）にチーズ組合が生まれるのは、地理学者 S. Daveau によれば、フランス・ジュラに比べるとずっと後の 19 世紀になってからのことだった（S. Daveau, 1959: 250）。しかし、18 世紀末には既にジュネーヴなどのスイス西部にすでにチーズ組合があったという報告もある（C. Lullin d'Orchamp, 1811）。実際のところ、スイスにおけるチーズ組合の起源地がどうだったのかについては不明の点が多い。

⁽¹⁰⁾ カール 5 世の宰相であるグランヴェルはフランシュ＝コンテの出身者として知られ、フランシュ＝コンテの黄金時代の一端を示している。彼はオルナンと言う小さな町に生まれたが、その祖先

とになった。マドリードの宮廷は産業的にも特に見るべきもののないフランシュ＝コンテにはそれほど関心を払わず、そのためこの地方は政治的に不安定になってしまう⁽¹³⁾。しかし、それでもフランシュ＝コンテはスペイン王に忠誠を誓っていた。

ちょうどそのころ、国境を接するスイス・ジュラやジュネーヴではギヨーム・ファレルやジャン・カルヴァンによる宗教改革が華々しく展開する。しかしフランシュ＝コンテではその影響はほとんどなく、常にカトリックが優勢だった。そのため、宗教改革を逃れて多くのスイス人がこの時期にフランシュ＝コンテにやってきており、チーズ職人も多くやってきてスイスの高いチーズ製造技術をこの地に伝えた。

しかし、17世紀になると暗黒時代が訪れる。フランス王国の宰相リシュリューが、国王ルイ13世の弟で謀反を起こしてアザンソンに逃げ込んだガストン・ドルレアンを討伐を名目として、フランス王国軍を率いてフランシュ＝コンテに侵入したからである。十年戦争(1636-1646)と呼ばれるこの戦争は苛烈を究め、ペストの流行と相まって人口の半減を招いたが、高地ジュラにキャプテン・ラキュゾンと名乗る人物が現われてゲリラ戦を展開し、最終的にはフランス軍を追い返すことに成功した。しかし、その後フランス王国はルイ14世の下で再び侵入を企て、フランシュ＝コンテは激しい抵抗をしたにもかかわらず、二度の侵攻の結果今度はとうとう屈服させられてしまう。こうして、1678年のナイメーヘン条約によってフランシュ＝コンテは正式にフランスに併合された。そして、その伝統的な免税特権は廃止されて「自由伯領」はその名前だけを残して消滅し、フランス王国内の一地方として重税が課せられるようになった⁽¹⁴⁾。

このようなハプスブルク支配下の自主独立の謳歌とブルボン支配による自主独立の喪失という対比ゆえに、今でも「フランシュ＝コンテがフランスになってからまだ300年しか経っていない」とか、「ハプスブルク時代にはフランシュ＝コンテはウィーンに代表を送っていて幸せだった」という人は少なくない⁽¹⁵⁾。もっとも、この言明が示す「ハプスブル

は、作男だったという。

⁽¹³⁾ ブルゴーニュ伯領はハプスブルク家に受け継がれて行った一方、シャロン家はオランダのオラニエ総督家と縁戚関係となり、シャロン家の領地はオラニエ家に継承されていく。そして、このオラニエ公はオランダ独立革命のときにプロテスタントの市民側についてスペイン・ハプスブルク家に抵抗することになる。ここにもフランシュ＝コンテとスペインの間の不和の原因があった。

⁽¹⁴⁾ この時期の人々にとっての国家の意味は、今日のものとは異なっている。そのことをよく示しているのが、Due de Saint-Simon の有名な『回想録』に記されている。ジャン・ド・ヴァットヴィルのエピソードである。アザンソンに生まれた貴族のヴァットヴィルは、ブルゴーニュ軍の一員として参加したミラノ戦役で友軍のスペイン貴族を殺してしまい、パリに逃げ込んだ。そこで彼は改心して修道院に入ったが、その退屈さに耐え切れず脱走を試み、その途中でまた人を殺してしまった。そして何とか逃げ延びてコンスタンチノーブルに来ると、イスラム教徒となりトルコ皇帝の下でバシャとなった。しかし、彼が司令官として臨んだトルコのヴェネチア戦役で、かつての罪を教皇から許してもらったことを条件にヴェネチア側に寝返り、トルコ軍の敗退に寄与した。そしてローマ教会から報酬として、彼はジュラにあるボーム（現ボーム＝レ＝メッシュュー）の修道院の院長に任じられた。その後、ルイ14世によるフランシュ＝コンテ侵攻が始まると、速早くフランス軍側に寝返って、フランシュ＝コンテの民衆の抵抗を鎮めた。その功績を買われて彼は高等法院に入るが、ナイメーヘン条約の後にはボームに戻り、1702年に84歳で修道院長として生涯を閉じた (Saint-Simon, 1948: 9-12)。彼の人生は極端であったとしても、ここには国家への帰属が人生において二次的なものでしかなかった近世ヨーロッパ社会の一側面が伺える。

⁽¹⁵⁾ ソン＝エリユミエール（「音と光」）と呼ばれる。夏の間にジュラ各地の観光地の野外で行われる観光客向け芝居では、17世紀のこの地方の悲劇は好んで取り上げられる題材である (cf. 三浦、

ク時代にはフランシュ＝コンテは自由を謳歌した」という意識がどれだけ実際の歴史に基づいているかは疑問である。実際、フランス軍の侵入以前が常に平和だったわけではない。フェリペ 2 世はフランシュ＝コンテがあまり好きではなく、この地方にあまり注意を払わなかったのみならず、オランダ独立戦争に際してはスペイン軍にフランシュ＝コンテ地方を通過させ、その際のさまざまな重い軍事徴用によって農民たちを苦しめた (L. Febvre, 1970)。そうした政治史の他にも、この時期のフランシュ＝コンテには魔女狩りの嵐が吹き荒れていた。また、税金が免除されていたとは言っても「自主的な献金」の強制という形である種の税金が支払われていた。それでも 17 世紀の悲惨さが強調される背景には、その後のフランス王国の侵略によるこの地方の自律性の喪失を強調することで、現在の人々の持つ自律性と独立性といった価値観を歴史に投影して表現しようとする意図があるからである。

とはいえ、フランス王国への併合派フランシュ＝コンテから「自由」を奪ったが、そのかわりフランシュ＝コンテには政治的安定がもたらされ、長い戦乱によって荒廃した農地も回復が図られるようになった¹³⁾。こうしてフランス革命までの約 1 世紀の間フランシュ＝コンテでは、他のフランスの地方と同様に政治的安定と気候の温暖化を背景に農業生産力が上昇し、人口も増加した。特に人口は、ほぼ現在のジュラ県に当たる地域では 1715 年には 128,000 人強が住んでいたのが、革命期の 1793 年には 280,000 人を超え、たった 1 世紀の間に人口が 2 倍以上にもなっている。そして、意識の上でもフランスへの統合が進行する (B. Grosperin, 1967: 101-103)。しかし他方で小麦の価格も徐々に上がり、貧しい人々のみならず比較的階層の高い人々の生活をも圧迫するようになっていった。

このような人口圧の上昇と経済状況を背景に、アルファルファの導入による農業革命が 18 世紀後半には始まり (トウモロコシとジャガイモはすでに 17 世紀に導入されていた)、農業生産力の向上に貢献することになる。しかし同時に、工業の発達と日常的材木利用の増加でジュラの森林破壊も頂点となる。このような森林破壊を王国政府は規制しようとするが、この規制に対する抵抗はフランス革命の一つの原因となった (P. Gresser & F. Vion-Delphin, 1990: 99)。

4) 近代の形成

フランスの他の地域と同様、フランシュ＝コンテもフランス革命以降、産業の進展、貧富の差の拡大、民主主義の浸透といった急激な社会変化を経験する。そうした社会変化の中でフランシュ＝コンテでは、チーズ組合の大きな発展と協同組合主義の普及という独特の変化を経験する。そしてこれらの変化もまた、自主独立への志向という彩りをともなったものであった。

1789 年のフランス革命ではフランシュ＝コンテでは早くから革命派が力を持ち、封建領主の追放に乗り出した。しかしカトリックの強いこの地方では、ジャコバン流の反キリス

¹³⁾ (1995)。

¹⁴⁾ ただし、フランス王国のもとでもフランシュ＝コンテは「外国扱い」となり、他の地方に較べれば特別の行政上の地位を保持していたし (しかしこのことは、フランス領内に物を運ぶときには関税が課せられたことを意味している)、王国政府も地域の反乱を恐れてそれまでの制度を急激に変更することはなかった。

ト教の姿勢と理性崇拝はあまり同調者を得なかった。他方で、連邦主義が強い方を持ち、パリに対する地方の権利を強く主張していた¹⁶⁾。そして、連邦主義的反乱が鎮圧されて中央集権的行政が確立すると(ただし、実際には中央のコントロールはしばしば名目的なもので、地方政界は常に不安定だった)、フランシュ=コンテ社会は近代へと踏み出すことになる。フランス革命後の混乱の中で徐々に産業が芽生えはじめ、それは他方で貧富の差をさらに拡大していくものでもあった。人々の自立への意識が明確になり社会主義思想が芽生えていったのも、この混乱した19世紀初頭という時代だった。たとえば、七月王政下の1834年に、リヨンで労働者による労働運動的な志向を持った反政府暴動が起きるが、その時ジュラのワイン生産の町であるアルボアでも、リヨンに呼応して農民たちが役場に集まり王政の廃止と共和政の樹立を宣言した。「リヨン、パリ、そしてアルボアは静かか?」という言葉まで生んだこの農民の暴動はすぐに鎮圧されてしまうのだが、鎮圧に来た憲兵隊長に、リーダーは誰だ、と問われたある農民は即座に「俺たちみんなリーダーだ(Nous sommes tous chefs!)」と答えたという。このエピソードは、ジュラの人々の誇り高い自主独立精神を表わすものとして、今も好んで語られるものである。このような王政復古(1815-1830)から七月王政(1830-1848)にかけての時期は、C. Fourier がその思想を発展させ、そして P.-J. Proudhon が青年時代を送った時期であり、またラムネー主義と呼ばれる自由カトリック運動 catholicisme libéral がこの地方において活発化する時期でもある¹⁷⁾。一方でこの時期は、17世紀以来上昇傾向にあった人口がピークに達した時であり、これ以降は都市への人口流出が増えて、20世紀後半に至るまで過疎化が続いている(表5参照)。

農業生産の点でも独特の大きな変化が起きている。この地方では18世紀末に、人工採草地の導入による農業革命が始まったが、19世紀に入って人工採草地は地域全体に広がっていき、飼料作物の導入による農業集約化が始まる。フランスでは一般に農業革命の進行と共に農業個人主義が発展するが、ジュラでは逆に協同組織が維持されて近代化(すなわち、農業生産の向上と市場経済への適応)の鍵となっていた点にジュラの独自性がある。これはジュラの農業の近代化の大きな特徴である(P. Perrier-Comet, 1986: 69)。共同放牧や共有林と共にそのような共同組織の一つとして重要な役割を担ったのがチーズ組合である。税金支払いおよび生活向上のための現金収入の必要から、チーズ生産が盛んとなり、チーズ組合もそれまでの伝統的な地域を超えて第一プラトーや平野部にまで広がり始め、組合組織やその生産方法も、成文規約の確立や技術革新などの形で徐々に近代化していった。しかし鉄道などの交通機関もまだ発達していなかったこの時期の農業は、まだ生計維持的

¹⁶⁾ フランス革命期においては連邦主義は地方への権力分散(すなわち、地方の有力者に有利なもの)を目指してジロンド派が主張していたもので、絶対的理性に基づく中央への権力集中(すなわち、既存の有力者を排除しようとするもの)を主張していたジャコバン派によって弾圧されていった。フランシュ=コンテの連邦主義は、まず革命の無秩序状態を収束するための14都市の連合 confédération として現われ、次いで連邦主義的蜂起となって現われた。ただし後者の連邦主義的勢力の中心を担ったのは、革命によって権力を失うことを恐れた地方貴族層だったのであり、必ずしも民衆一般から広い支持を受けたものだったわけではなく、その意味で必ずしも「自主独立」を目指すものとは言えなかった(C.-I. Brelot, 1987; 1994)。

¹⁷⁾ 自由カトリックは、社会カトリック catholicisme social とも呼ばれ、19世紀前半のフランスで F. R. de Lamennais によって唱えられたものである(そのためラムネー主義とも呼ばれる)。それは、国家と教会の分離(政教分離)を主張するとともに、神に導かれた信仰に基づく民主的な社会改革を主張するものであり、当時活発化する社会主義運動とも呼応したものであった。

表 5：近代ジュラの人口変化

資料：INSEE (1980, 1992b)

	県人口	農村人口	都市人口	F村	A村	B村	C村	D村
1715	(128,456)	-	-	-	-	-	-	-
1793	281,439	-	-	-	-	-	-	-
1790	280,188	220,090	60,098	202	487	420	222	455
1800	288,746	230,653	58,093	200	468	250	231	450
1802	291,850	233,046	58,804	250	461	286	254	472
1806	300,230	239,522	60,708	257	492	266	259	475
1820	301,580	238,966	62,614	266	469	297	263	439
1826	310,212	247,330	62,882	259	498	310	215	450
1831	312,343	246,525	65,818	247	512	309	207	466
1836	315,187	247,177	68,010	271	505	317	222	480
1841	316,568	246,436	70,132	253	519	280	205	485
1846	315,990	245,417	70,573	270	501	294	229	506
1851	313,165	241,924	71,241	259	501	269	247	507
1856	296,583	227,897	68,686	258	502	278	259	528
1861	297,946	226,157	71,789	265	453	272	217	516
1866	298,375	226,066	72,309	277	458	250	233	509
1872	287,520	215,663	71,857	255	348	239	216	493
1876	288,721	214,026	74,695	226	376	233	221	504
1881	285,175	207,649	77,526	212	415	220	236	490
1886	281,279	204,737	76,442	222	372	234	219	486
1891	272,933	195,599	77,334	209	361	214	204	446
1896	266,046	188,915	77,131	193	375	203	206	434
1901	261,179	182,943	78,236	185	326	186	196	439
1906	257,626	178,817	78,809	162	336	189	193	409
1911	252,609	170,464	82,145	164	297	177	193	400
1921	228,976	151,509	77,469	145	260	164	200	347
1926	230,598	148,008	82,590	135	267	146	190	346
1931	229,018	142,262	86,756	133	252	148	152	346
1936	220,704	136,453	84,251	127	236	160	135	344
1946	216,396	130,611	85,785	131	215	159	153	340
1954	220,109	128,040	92,069	108	197	128	169	299
1962a	224,397	119,563	104,834	108	150	123	125	272
1962b	225,584	125,189	100,395	119	169	132	141	293
1968	233,441	122,993	110,448	114	165	105	107	270
1975	238,856	121,707	117,049	90	152	93	86	253
1982	242,925	130,009	112,919	85	158	84	97	234
1990	248,759	137,222	111,537	76	147	81	98	249

N.B. 人口調査の方法や人口の定義は年とともに少しずつ変化している。特に大きな変更は 1962 年に行われ、人口の定義はより厳密になった。1962 年に関しては、1962a は変更前の調査方法で、1962b は変更後の調査方法で測定された人口である。また、都市人口と農村人口の区別は I.N.S.E.E. の定義による。なお、A 村、B 村、C 村、D 村は、F 村の周囲の第一プラトーの村。なお、1715 年の調査の対象地域は、厳密に言えば現在のジュラ県に相当する地域と若干異なっているため、括弧を付した（その相違は、革命前と革命後の行政区画が互いに若干ずれているためだが、そのずれはたいして大きくはない）。

かつ自給自足的なもので生産量も低く、農産物の供給は気候変動の影響を直接受けやすく、それに対応して農産物価格の変動も激しく農民の生活は決して安定はしていなかった。この農業生産性の低さと不安定さは、人口圧の上昇とともに人口流出を招いた主要な原因だった(J. Brelot, 1953: 80-82)。C. Fourier と P.-J. Proudhon の思想が生まれる背景には、こうした農村の現実と、その一方で多くの富の集中の上にあぐらをかいていたブルジョアジーの存在に見られる、あまりにも明白な社会的不公正があった。

一方、19 世紀後半からは農業も機械化が少しずつ始まり、また、各地で農業技術の改良のための研究会が、研究者と農民を交えて作られていった。この農業技術の改良は、人口の都市集中による農村の過疎化と工業の発展という条件のもとで実現されていったものである。こうして農村は徐々に市場経済のなかに統合され始める。森林も同様で、19 世紀初頭には森林面積が全体のわずか 26 % にまで減少し、危機感を持った政府が植林事業を強力に押し進めるが、それはまた市場を前提とした「林業」という産業の成立でもあった。19 世紀の半ばには P.L.M. 鉄道会社を中心にした鉄道建設が始まり⁽¹⁶⁾、農村の市場経済への統合は急速に進行する。とはいえ、このような交通の発達には 1870 年代にフランス全土で深刻な農業危機を引き起こす一つの原因となる。この農業危機は 1900 年近くまで続いた。ジュラでもこの危機によって大地主がいなくなるなど、大きな社会変化が引き起こされた。

しかし、こうした近代化の中でも、フランシュ＝コンテの人々の自主独立の精神は失われなかったようである。確かに資本主義や交通の発達は、それまで自律的だった村落を国家機構や市場システムに統合する役割を果たしたが⁽¹⁷⁾、その中においても自主独立の志向は協同組合主義などの形で維持された。19 世紀以来チーズ組合はフランシュ＝コンテ全域に広がってジュラの農業は酪農に専門化していったが、こうした協同組合主義はチーズ生産にのみとどまったわけではない。19 世紀末から 20 世紀にかけて、高地ジュラ南部の工業都市サン＝クロードではきわめて急進的なサンディカリズムが展開しているし、戦後でも、この地方の中心であるブザンソンで時計工場の自主管理運動であるリップ争議が 1974 年に始まっている。このように、この地方には自主独立、自主管理、そして協同組合という志向をもつ社会運動が度々起きているが、こうした運動を支える思想は、19 世紀の有名な二人の社会主義思想家の思想に近いものであり⁽¹⁸⁾、フランシュ＝コンテにさまざまに見

⁽¹⁶⁾ P.L.M. とは、パリ＝リヨン＝地中海(あるいはマルセイユ)の意味で、この鉄道会社はパリのリヨン駅を起点にして、スイスやイタリアに至るフランス東南部全体に標準軌の鉄道網を作り上げた。後に他の鉄道会社と合併してフランス国鉄(S.N.C.F.)となる。なお、フランシュ＝コンテで最初の鉄道建設は、すでに 1830 年代にロンス＝ル＝ソニエとその西部の市場町ルーアンとの間で地元の企業によって試みられたが、資金不足のために完成を見なかった。

⁽¹⁷⁾ このような農村の国家への統合に対する、農村の側の抵抗が現実化したものが 1848 年の二月革命であった(J.-L. Mayaud, 1986: 324)。しかし、これを最後に農村は国家へと政治的にも統合されていく。

⁽¹⁸⁾ 社会主義とこの地域との関係を考える上で、興味深い歴史的事実がもう一つある。それは、フランシュ＝コンテと国境をはさんで隣接するスイス・ジュラ(主として現在のジュラ州、ヌシャテル州、およびヴォー州の一部)で、19 世紀なかばにヨーロッパで最もラディカルな無政府主義運動が生まれ、第一インターナショナルの最初の支部であるジュラ連合 Fédération Jurassienne が生まれたということである(M. Enkel, 1971; M. Vuilleumier, 1988)。高級スイス時計で知られるこの地方で、この無政府主義運動を担ったのは時計職人たちだった(ただし、同時のスイス・ジュラの時計産業は、農閑期の副業として農民によって営まれていたものだった)。これらの時計職人には、フランス・ジュラの農村から流れていったものも少なくなかった。言うまでもなく、無政

られる共同体的慣習とあわせて、社会主義思想のもつ地域性を意識させる (C. Neuschwander & G. Boret, 1993: 42-58)。とはいえ、農民たちの大部分はこれらの知識人やエリートたちによる社会主義思想には懐疑的で、政治的には保守派や共和派 (急進主義者) を支持し続けた。

第二次大戦ではジュラは北部の一部を除いてヴィシー政権の支配されたが、スイス国境やリヨンに近いこの地域ではレジスタンス運動が活発に展開された。そしてドイツ軍は、ノルマンディー上陸作戦以降の撤退の過程でジュラの多くの住民を強制収容所に送り込み、そうして送り込まれた人の大半は二度と戻ってくることはなかった。

5) 高度成長とヨーロッパ統合

第二次大戦後のジュラの農村史の特徴は、ヨーロッパ全体に見られた高度経済成長の恩恵に浴したという点と、農業生産がヨーロッパ共通農業政策 (Common Agricultural Policy (CAP) の下におかれたという点にある。

第二次大戦後、ヨーロッパ諸国は経済復興のためにアメリカからマーシャル・プランによる資金を導入し、その資金はジュラの農民社会の復興にも大きく貢献した。そしてこの復興をバネに、1960年代には経済の高度成長に突入することになる。一方、政治的にもヨーロッパ統合への気運が急速に高まり、1956年にはローマ条約によってヨーロッパ経済共同体 European Economic Community (EEC) が発足した。そしてそのローマ条約において CAP の基本精神が示されたのである。

経済の高度成長と CAP に基づく農業政策は、フランスの農民の生活を豊かにする一方で農村に大きな変化を引き起こすことになった。ジュラでも同様であり、農業では機械化と規模拡大が進む一方、農業人口は減り続け、1979年にはジュラ県で7,735、フランシュ＝コンテ地方で24,709あった農業事業者数が、1990年にはジュラ県で5,360、フランシュ＝コンテ地方で17,750となっている。そして農業はもはや生計維持的なものではなく、市場経済に統合されて国際市場の存在を前提とした商品経済的なものとなり、さらに急速に

府主義思想は P.-J. Proudhon に端を発するが、その影響を受けた M. Bakounin はこの地方を訪れ、熱烈な歓迎を受けたという。この出来事は確かに直接フランシュ＝コンテと関わるものではないが、このジュラ・スイスの無政府主義運動の基盤となった時計産業 (その製品は高級スイス時計として知られる) と酪農経営は、フランス側の高地ジュラにも共通する産業であり (特に時計産業に関して、フランス・ジュラとスイス・ジュラは密接な関係にあった)、また歴史的にもスイス・ジュラ北部の現在のジュラ州では13世紀のバーゼル大司教領時代以来、領民に税金が免除されフランシュ＝モンターニュ Franche-Montagne と呼ばれてきたなど、歴史的にも社会的にもフランシュ＝コンテと共通するものを持っている。その意味で、国境をはさんだ二つの地域の社会・生産には共通した社会的背景があったのではないと思われる。しかしこの点についてはここでは議論しない。この地方の時計工業の分業体制について K. Marx が『資本論』の中で簡単に示した分析 (K. Marx, 1973: 33-34) は、スイス・ジュラ社会の無政府主義的傾向を考えるとき、大変興味深い。また、ユートピア的志向が強いと言われる建築家の Le Corbusier は、このスイス・ジュラで時計職人の子として生まれている。なお、スイス・ジュラはフランス語話人を中心とする地域であるが、長い間ドイツ語話人を中心とするベルン州に属していた。このことが「少数民族」であったスイス・ジュラの人々の不満を呼び、彼等はさまざまな独立運動を展開し、「ジュラ問題」と呼ばれてきた。そしてその運動はとうとう1972年に実り、ベルン州内のフランス語地域のうち北部の村々はジュラ州として独立することになった。これは、第二次大戦後において最初に平和的な解決を見た分離運動である。

上昇した農業生産力は生産過剰を引き起こすまでになった。そして、それとともに1970年代以降、農村には大きな社会変化が現われた。人口の減少に伴って、村の商店やカフェは次々と店をたたみ、また村の小学校も隣の村の小学校に統合されてしまった。かつては村人が近隣同士で集まって行っていた夕食後の集まりであるヴェイユ *veille* ももう行われなくなった。もう、村人たちが集まる機会もほとんどなくなってしまった。そして、19世紀末には一つの村に少なくとも一つはあったチーズ組合も、農業人口の減少とともにその数はかなり減り、廃止によってチーズ組合を持たなくなった村も多い。

こうして共同放牧のような共同体的慣習は消滅した。しかし、現代ジュラ農業の大きな特徴は、チーズ組合を始めとするさまざまな協同組織が、数こそ減ったものの経済的にはより一層重要性を増しているところにある。とはいえ、農業をめぐる状況は決して展望の開けるものではない。1970年代後半から農業の成長は頭打ちとなり始めた。農業人口も実質農業所得も減り続ける一方、都市で働く人々が農村に住みはじめたので、農村人口は回復をはじめているが、しかしそれは農業人口の回復ではない。農産品の輸出入における補助金政策をその基本とする CAP も、その予算が EC の予算を押しつづすまでに増大した。その一方でそのため1984年には生産制限が導入されることになり、さらに1993年にはマクシャリー改革により大きな方向転換が試みられた。この CAP は農民たちに大きな犠牲を強いるものとなり、多くの農民たちの反発の種となっている。私が調査を終えたときはまだマクシャリー改革は実施される前だったため、その効果は本論の考察の対象外であるが、いずれにしろ、調査が行われたのはこのような農民の経済的地位が不安定な緊張した時期であった。

(3) 人文地理的概観

1) 行政制度

ジュラの人々の現在の社会生活は複雑な歴史の産物である。そしてこの様な歴史の産物さまざまな形で、ジュラの人々の社会生活を大きく枠づけている。このような社会生活の特徴付ける枠組みは、人文地理的に概観することその特徴をつかむことができる。このこの人文地理的特徴のうち主要なものは、政治制度と文化地理的要素である。そこで、以下では政治制度と文化地理について概観しておくことにする。

行政的には、フランシュ＝コンテ地方は現在のフランス共和国を構成する22の地方の一つとして、一つの地方議会 *conseil régional* と地方庁 *préfecture de région* を持つ。その中心はドゥー県のプロザンソンである。フランシュ＝コンテ地方を構成する4つの県には、それぞれ県議会 *conseil général* と県庁 *préfecture* が置かれている。それぞれの県の県庁所在地は、ジュラ県がロンヌール＝ソニエ、ドゥー県がプロザンソン、オート＝ソーヌ県がヴズール、ベルフォール地区がベルフォールである。

地方庁と県庁は自治行政組織ではなく内務省の地方出先機関であり、中央で任命される地方知事や県知事が統括し、主として法の執行状況の監視を行っている。これに対し、予算の決定とその執行は県議会や地方議会によって行われている（地方議会、県議会、および後述のコミューン議会は立法機関ではなく行政機関であり、立法権は常にパリの国会に帰属している）。地方議会が設置されたのは1972年で、最初の地方議会議長（すなわち地

方という自治体の首長)には、この地方で極めて高い評判を持ち閣僚も豊富な Edgar Faure がなった。そしてその地方議会が実質的な行政権力を得るのは、1982年のミッテラン大統領による地方分権化政策による。フランシュ＝コンテ地方議会では、45議席のうち10議席がジュラ県に割当てられており、県全体を選挙区とした比例代表制による選挙によって議員は選出される。また、地方や県には農林監督局(地方ではDRAF、県ではDDAF)をはじめとする中央官庁のさまざまな出先機関があり、県庁・地方庁や県議会・地方議会との緊密な連携の元で中央政府の施策を地域レベルで担当している。

一つの県は郡に分けられ、さらに小郡に分けられる。ジュラ県内には3つの郡 *arrondissement* と34の小郡 *canton* が置かれている。郡と小郡の機能はもっぱら行政的なものであり、自治組織ではない。県議会選挙では各々の小郡を一選挙区とする小選挙区選挙で行われる。国民議会(下院)選挙は郡が選挙区となる小選挙区選挙である。

コミューン *commune* は日本の市町村に当たる最小に自治的行政組織で、現在ジュラ県には545のコミューンがある。各コミューンはコミューン議会 *conseil municipal* を持ち、人口に応じた数の議員を選出する。コミューンの首長 *maire* (村長や市長)はその議員の間の互選によって選ばれ、コミューンの予算の決定からその執行、様々な行政事務まで、その首長の責任のもとで運営される。議員の選出は、通常は比例代表制だが、本論の調査地となったF村のような極めて小さい村では、人気投票のような個人への投票という形となる。コミューンの主要な機能は、コミューンの土地や財産などの管理、およびコミューン内のさまざまな公的社会事業を運営することにある。特に、コミューン所有地とコミューンの共有林の管理は重要である。共有林の管理は通常はONFに依託され、そこで得られる材木は住民の間に暖房用として分配されるほか、売りに出されてコミューンの予算の補助となる。

フランスの自治制度における実際の自治権は、地方、県、コミューンのいずれにおいても限定されている。たしかに地方分権化以降、各自治体の権限は強化されたとはいえ、自治体は常に国などの上位組織の監督を受けており、法律上は国と対等とされる日本の地方自治体とは大きく異なっている。この中央集権的な地方行政組織の大枠はフランス革命のときに作られたものであり、その後いくつかの制度的な変更はあっても、ほぼ同じ形態が維持されてきている。

以上のような地方行政制度は、フランス革命期に作られたものが何度かの修正を経て今日に至っているものである。県はフランス革命直後の1790年に設置された行政単位である。ジュラ県の場合、当初は759のコミューンが置かれていた(コミューンはそれまでの村や聖堂区を元に新設された)。1800年には4つの郡が置かれ、各々の郡に郡議会 *conseil d'arrondissement* が置かれた。しかし、その後徐々にコミューンの合併が進み、1830年代までに約200のコミューンが廃止された。その後コミューンの数はほぼ横ばいとなって今日に至っている。また、1926年にはボリニー郡がロンス＝ル＝ソニエ郡に統合され、さらに第二次大戦後には郡議会も廃止されている。

フランスの地方政治の特徴の一つは、ナポレオン時代以来フランスでは公職の兼任が認められているため、コミューン議員や県議会議員、さらには国会議員などを同時に務める政治家が少なくないということである。それは、フランシュ＝コンテでも同様であり、国会議員は通常は県議会議員か地方議会議員、あるいはコミューン議会議員なども務めている。

るのが普通であり、またしばしば村長や市長、あるいは助役といった職も兼任している。このことはある種の利益誘導型政治を生む原因ともなりうる（実際、真偽はともかくそうした噂は調査中にいくつか耳にした）。しかし他方で、エリートを警戒するという社会的土壌と、実際にジュラの様な農業県が中央の政治に振り回されてきたという歴史のいきさつゆえに、ジュラの人々の政治家に対する不信感は根強いので、必ずしも国会議員に権力を効果的に集中させるものとはなっていない。

フランシュ＝コンテ地方の自治組織の特徴は、その人口規模の小ささにある。フランシュ＝コンテ地方で最も人口の多いコミューン（都市）であるブザンソンですら人口約 11 万人であり、ジュラ県となると最も人口の多いコミューン（都市）のドール（ドール郡の中心）でもわずか約 3 万人、ジュラ県の県庁所在地のロンヌール＝ソニエが約 2 万人、高地ジュラにある工業都市サン＝クロード（サン＝クロード郡の中心であると同時に、ジュラ県を統括するサン＝クロード司教区の司教座がある）が約 1 万人となっている。全体としては人口と工業はドゥー川流域に集まる傾向があり、高地ジュラの一部を除いてジュラ山脈は過疎地域となっている。統計上で「都市」に分類されているコミューン（すなわち、人口 2000 以上、ないしは都市の人口密集地に隣接するコミューン）はジュラ県全体ではわずか 25 である。また、ジュラ県全体の人口も、西隣りのブルゴーニュ地方の首都であるディジョンとほぼ同じ程度の約 25 万人しかなく、その 25 万人が 500 以上のコミューンに分かれているのである。このことは各コミューンの予算規模が極めて小さい事を意味している。しかし、こうした行政上の不都合にもかかわらず、コミューンの合併という話を農村で聞くことはほとんどなく、むしろコミューンの合併という話には反発する人の方が多い。そのため、予算規模などに由来する行政上の困難は、県庁の指導に従うか、コミューン同士で組合 *syndicat intercommunal* を作ることで解決を図っている。コミューンの組合は水道管理、通学バス運営、ごみ処理、観光振興などに関して、各々別個に形成されている。

本論のもととなった調査の中心となった F 村は、ジュラ県の第一プラトリーのほぼ中央にある、人口 76 人、22 世帯からなる村である。19 世紀半ばには 250 人ほどの人口を数えたが、それ以降は減少の一途をたどっている。そのため、第二次大戦後まであったホテル兼営のカフェもすでになく、小学校も廃止され、1988 年にはチーズ組合も廃止された。周囲の村も、人口に若干の違いがあったり、チーズ組合がまだ機能していたりはあるが、村の状況はほぼ同様である。その意味で、F 村の事例は決して特異なものではなく、第一プラトリーのどこにでも見られるものである。

プラトリーの上の村は集村であるため、村の内部と外部は外観上ははっきりと区別することができる。通常は村の入り口には十字架やマリア像などがあり（こうした十字架やマリア像などは、道の分岐点や村の中心の広場などにもある）、かつては農作業から帰ってくる村の入り口でサボ（木靴）に履きかえ、村の中を泥で汚したりしないようにしたというが、今では泥だらけのトラクターが村のなかを通り抜けている。村の中心には広場があり、必ず第一次大戦や第二次大戦の犠牲者の名を刻んだ記念碑がある。一つのコミューンの内部では「地区 *quartier*」が設定されることがある。しかし、地区は行政上の権限や機能を持

つことはない²⁴⁾。とはいえ、生活上の一つのまとまりをもつことがあり、都市などでは特定の地区が独自の祭を運営することもある。コミュニオンは、終戦ごろまでは人々の生活の全体を多少とも包み込み構造化するコーポレイト・グループとしての性格を保持し、酪農生産においても個人の経営に大きな枠をはめる共同体として機能していた。しかし、コミュニケーションの発達によって個々の村人の社会的ネットワークが拡散するようになった今日、その構造的な性格は希薄になっている。確かにいまでも、他所者は隣村から始まると言う人がおり、ある種の「おらが村」意識は残っているとはいえ、社会的機能という点ではコミュニオンは今ではきわめて形式的な組織になっており、村の共有財産の管理や予算の決定、行政的問題の処理といった事務的な役割を果たすにとどまっている。

2) 文化地理的特徴

中世以降、フランシュ＝コンテ地方は歴史的にはほぼ一つの政治的な単位となってきた。しかし、そこに生きる人々は必ずしも均一な生活スタイルを構成してきたわけではない。このような非等質性は、まず何よりもそのさまざまな文化的要素の分布に見られる。

言語的にみれば、一般にフランスは北フランスのオイル語地域と南フランスのオック語地域に分けることができ、それぞれは同時に文化的社会的にも異なっているとされる。中世初期のフランシュ＝コンテ地方では、北部の一部の地域ではオイル語の方言が話されていたほかは、フランコ＝プロヴァンサル語と呼ばれるオック語系統の言葉が話されていたが、中世の早い時期にオイル語（ブルゴーニュ方言）にとって代られ、フランコ＝プロヴァンサル語は文書としても方言としてもほとんど残っていない。また、オイル語系の方言もかつては地域的な差はかなり大きかったが、ジュラ山脈では今世紀の早い時期に標準フランス語にとって代わられてしまい、現在の70歳以上の老人も、自分の若いときにすでに方言は失われていたと証言している。これに対しプレス平野では方言がまだ残っている。

一般的には、オイル語地域はゲルマンの慣習法の影響を受けて、均等相続、核家族優位、三圃制、長形開放耕地といった特徴を持つのにに対し、オック語地域はローマの成文法の影響を強く受けて、一子相続、直系家族優位、二圃制、不規則開放耕地といった特徴を持つとされる。どの指標を基準とするかでこの南部と北部の境界線は微妙に異なってくるが、大まかには大西洋岸のラ・ロッシュェルと東部のジュネーヴ北部にあるジェックスを結んだ線によって分けられる²⁵⁾。この境界線はジュラ県の中央部を東西に横切っているのだが（ただし、どの文化要素をその指標とするかによってその境界線は微妙に異なるうえ、場合によってはさまざまな個別の事例に応じてそれらの要素が混在しているため、明確な境界線を引くことは難しい）、ジュラ山脈は基本的には北部の均等相続地域の特徴を強く持ち、

²⁴⁾ 北フランスのロレーヌ地方の村を調査した C. Karnoouh は、村や地区が村戸の使用権その他をめぐって法的権利の単位となっていると報告している (C. Karnoouh, 1980)。ジュラ高原の場合は、今世紀始めごろには、チーズ組合が地区別になっていたりするなど地区が法的に意味を持つ場合もあったが、現在ではそのようなことはない。

²⁵⁾ もちろん、このような分け方は大まかなものでしかない。E. Le Roy Ladurie はこのような北フランス/南フランスの文化的相違の強調がフランスという近代国家形成過程において主張されるようになってきたことを指摘したうえで、この二分法の有効性を認めつつもこの二分法によってフランスの地域的多様性の他の側面が隠蔽されてしまうことを指摘している (E. Le Roy Ladurie, 1986)。

三圃制を基本とした農業が行われている。

ジュラの地域内の多様性はまた、産業の分布にも見られる。すなわち、プレスでは穀物の比重の大きい農業、ヴィニョーブルでは葡萄栽培、プラトーでは酪農、そして高地ジュラでは酪農に合わせて観光業と精密機械工業や木工業の発達が見られる。また、ローヌ＝ライン運河が通るドーウ川沿いにも工業や商業の発達が見られる。

ジュラの各地域にはまた別の文化的要素による相違も見られる。その一つが住居形態である。住居の建築形態はその地域によって異なる。そこには生業および気候への適応といった要素も見られる。全体として住居形態は高度に応じて、プレス平野の家屋、ヴィニョーブルの家屋、そしてプラトーや高地ジュラの山地型家屋と3つに大別できる。そしてそのそれぞれが、さらに局地的状況に応じてさまざまなヴァリエーションを作り出している。このような標高の相違はその気候や植生の相違ゆえに、住居形態のほかにも耕作形態や生業など、他の様々な生活の場面における文化的要素の相違も生み出している。

標高によるこのような生活形態の相違ゆえに、ジュラの人々の中には、ジュラの地域の人々の性格がその住んでいる地域の高度に応じて異なっている、と指摘する人をしばしば見かける。その際、標高の高い地域は「上の方 *en-haut*」、標高の低い地域は「下の方 *en-bas*」と呼ばれ、その人々の性格の相違は気候の相違から来ると説明する。一時期、ある地理学者はこのことを実証しようとまでしている (C. Royer, 1969)。しかし、この説明は明らかに大きな難点を持っている。というのも、ある人は高地ジュラの人が閉鎖的であると指摘し、また別の人は高地ジュラの人々は人と話すことが好きな開放的な人々であると指摘するが、どちらの場合も高地ジュラでは人々は半年は雪に閉ざされてしまうから、と説明するからである。このように、気候や環境によって人々の性格を説明しようとする一種の環境決定論が民俗心理学として存在するが、その説明原理は論理的な一貫性を持たないものである。しかしいずれにしろ、このような説明原理が現実の社会生活の中で意味を持っているかどうかは疑問である。第3章と第4章で見るように、実際の社会的相互行為はこのような原理に基づいては組織されてはいないのである。

一方、プレス地方とジュラの山地地方では明らかな文化的相違が見られ、ジュラの人達もそう指摘する。その相違は、先に挙げた建築様式や村落形態の他に、プレス地方には方言が残っており、養鶏²³⁾や穀種栽培が盛んである、という点にも見られる。この相違は環境的要因以上に歴史的要因によるところが大きい。すなわち、プレス地方に人々が住み始めるのは中世から近世にかけてという比較的遅い時期であり、その時期は政治的には比較的安定していた、という事情である。しかし、標高による気質の違いと同様に、このような相違が現実の社会的行為において重要な意味を持つということは余りない。その意味で、頭の中に描かれた文化地図は必ずしも行為の論理には反映されない。同様のことは、村とその住人の気質の関係についても言うことができる。たとえば、しばしば「ロンス＝ル＝ソニエの住民は冷たくて貴族的・官僚的だ」という言い方がなされるが、しかしこのような捉え方が現実のロンス＝ル＝ソニエの住民との社会的行為に反映されることはない。

このような多様性を持つジュラ地方であるが、その中でも気温が低く酪農が生業の中心

²³⁾ プレス地方の鶏は、鶏の中で唯一 AOC (原産地管理名称 第4章参照) に指定されているもので、その育て方や飼料が指定されている。そのため、プレスの鶏は高級食材として知られている一方、この地方の象徴ともなっている。

で生活が多少とも自律的な高地ジュラの生活は、しばしばジュラの農民生活の典型とみなされる。たとえば、19世紀半ばのフランシュ＝コンテ出身の政治家 Charles de Montalambert は高地ジュラを「フランスのチロル」と呼んで、ジュラの文化的な起源地として宣伝した。ここで重要なことはしかし、高地ジュラが本当にジュラの文化的起源地かどうかではなく、自律性や酪農生活がジュラの農民の特性として捉えられているという点である。とはいえ、同時に注意しなくてはならないことは、このような主張にもかかわらず、ジュラには地域主義や地域アイデンティティーの強い主張がほとんど見られないということである (C.-J. Brelot & J.-L. Mayaud, 1987: 2-5)²⁴。そしてこの点は、これから明らかにして行くことになる、ジュラの人々の日々の社会的行為の在り方、そしてそうした行為を通じた社会形成の在り方と密接につながっていると考えられるのである。

²⁴ J.-P. Leresche によれば、1985年のフランシュ＝コンテ地方での自分の地域的帰属を問う世論調査の結果として、39%が自分のコミューンを、36%がフランスを、13%が地方を、6%が県を、その帰属の対象としてあげたという。また、翌年に「フランス」という選択肢を除いて同じ質問をしたところ、67%がコミューンと答えたという。この結果について J.-P. Leresche は、この地方が全体的に人口が少なく、かつその多くが農村に住んでいるせいだと説明している (J.-P. Leresche, 1991: 235)。



写真 1：第一プラトーの森 ～ 5月



写真 2：ルキュレの奥の村
～ ボーム＝レ＝メッシュュー村とボームの修道院



写真 3 : ロンス＝ル＝ソニエ中心街
～ コメルス街と時計塔



写真 4 : 村はずれのマリア像

II. 人格

社会的行為の主体性と社会的結合関係の構築

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの望みである。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

—『ヨハネによる福音書』

肉と霊とが対立し合っているのです。あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。肉の翼は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、ねえみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのものです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。これに対して、霊に結ぶ実とは愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。

—『ガラテアの信徒への手紙』

だから、私たちが私たちの精神の霊において新たにされ、創造主の似像にしたがって神の知識において新しくされる新しき人であるなら、疑いなく、人間は身体によってではなく、心のある部分によってでもなく、そこに神の知識が存在し得る理性的な精神によって、創造主の似像にしたがって造られたのである。

—アウグスティヌス『三位一体論』

主体性と人格指示

(1) 個人と社会的結合関係

1) 生活空間と外部環境

ジュラの歴史の大きな特徴は、その「自由伯領」という名に象徴されるような人々の自主独立への志向と個人主義の志向が見られる一方で、協同組合や社会主義思想に見られる協同組合への志向も見られるという、一見矛盾する二つの方向性が共存しているということである。このような二つの異なる方向性は、日常の社会的行為のなかにどのように現実化しているのだろうか。

このような問題を考えるためにまず念頭に浮かぶ方法は、それぞれの行為パターンを類型化して日常の行為を分析するという方法である。しかしこの方法は、それらの行為パターンの存在をア・プリオリな前提とし、そのパターンを固定的なものと見なしがちになる。そのような危険を避けるためには、なぜそれらの行為パターンがジュラという社会において存在するのかを議論する必要が出てくる。そのためには、こうした行為パターンの形態自体を問うのではなく、むしろなぜさまざまなありうる行為においてこれらのパターンが強調されていくのかという、行為パターンの日常の社会過程における生成の問題を議論しなくてはならない。

このような社会的行為の生成を検討する場合、それらの行為を行う主体自体の形成、すなわち人格の形成過程に注目すると、問題は把握しやすくなる。この場合、個人主義の気質と協同組合への志向という矛盾して見える二つの行為パターンは一定の人格概念の二つの現われであり、そしてこれらの行為パターンはその人格概念を現実の社会過程において再生産していると考えることができる。そこで本章と次章においては、ジュラ社会における人格の概念を明らかにすることを通じて、このような社会的相互行為の在り方を明らかにしていくを試みる。本章ではまず、このような社会的相互行為がどのように秩序付けられているのかを、言語的相互行為における「人格」の指示の仕方に注目して検討する。次章では、そのように言葉によって指標付けられた人格が、実際にどのように社会的相互行為のなかに現われ、社会関係を構築していくのかを検討する。

しかし、分析にはいる前にまず、なぜ「人格」概念がどのように社会的行為と結び付いているのか、そこでいう「人格」とは何を指すのかについて明らかにしておく必要がある。この点についてまず簡単に、ジュラにおける自主独立の志向と社会的協同への志向の共存

が最もよく判る、農業の例を通して検討してみよう。

ジュラの農業は基本的にはそれぞれの家族を経営単位としている。一般に社会科学においても農業政策においても、農業経営はしばしば一定のパターン化されルーチン化されたものとされたり、あるいは市場や環境などの外的条件によって自動的に決定する従属変数であると思なれること多い。しかしこのような判断は必ずしも正しくない。実際にはそれぞれの農家は一定の制約条件の中で、独自に判断を行いつつ生産活動を行っている。そしてジュラでは、多くの農業経営者が、「自分が自分の仕事のボスである」ということを農業という仕事の良いところとして認識している。このような「自律性 *autonomie*」や「独立性 *indépendance*」はジュラの農民たちが強調する重要な価値であり、彼等はこのような自主独立を実現しようところに農業という仕事の価値のひとつがあると指摘する。

もちろん、通常の農業はさまざまな生態学のおよび社会的制約条件のなかで営まれるものなので、それぞれの農家にとってジュラで完全に自由で独立した農業を実現することは不可能である。ここで、農業経営者を含めたそれぞれの個人が自ら意思決定を行い、その意思決定の影響を直接及ぼしうる社会関係と社会的資源の総体を生活空間と呼ぶことにしよう¹⁾。そして、その意思決定が直接及ばないにもかかわらず、その生活空間に何らかの影響を与える諸条件の総体を、外的環境と呼ぶことにする。生活空間の独立性を制限するような外的環境としては、農業政策や市場による圧力のようなマクロな社会現象に由来するものもあるが、地理的環境的要因のように、その地域に固有の要因もある。

生活空間はそれぞれの個人の日常生活が行われる範囲である。厳密に論理的に言うならば、この生活空間はそれぞれの行為者に応じて Ego 中心的に形成されるものであり、したがってそれぞれの人によって異なるものとなる。しかし実際には、人々は全く自由かつランダムに社会関係や社会的資源を用いているわけではない。通常人々は地理的社会的ないは経済的に比較的接近した人々と頻りに日常的社会的相互行為を行い、互いに共通した生活空間を作り上げる。そのため、生活空間は完全に Ego 中心的でそれぞれの人に固有のものであるというよりも、ある程度の客観性を持って構築される社会的相互行為の場と見なすことができる。同様のことは外部環境についても言うことができる。すなわち、外部環境もまた、論理的にはそれぞれの人によって異なりうるものであるが、実際には社会的にはそれぞれの行為者に共通したものとなるのである。こうした点は、ジュラの人々、さらにはジュラの農業経営者の社会的行為の在り方を、生活空間と外部環境という語によってある程度まとめて議論することを可能にする。ただし、ここで注意しなくてはならないことは、生活空間と外部環境という分け方はあくまでも農家の意思決定の関与する度合いからなされるものでしかなく、その意味で絶対的なものでも、二項対立的ないしは相互対立的なものでもないということである。したがって、この両者の相互作用に常に注意を払う必要がある。

このように生活空間と外部環境を設定するならば、それぞれの農業経営者にとって外的

¹⁾ ここで言う「生活空間」は、E. Husserl や A. Schutz の言う「生活世界 *Lebenswelt*」とは全く関係はない。現象学（および現象学的社会学）でいう「生活世界」とは、無反省的な生活の場であるが、ここでの「生活空間」は各行為主体の意思決定を及ぼしうる社会的範囲であり、それが無反省的であるかどうかには関わらない。その意味でむしろこの「生活空間」は政治人類学でいう「フィールド」に近いものであり、「外部環境」は同じく「アリーナ」に近いものである（M. Swartz, 1968: 9）。

環境を変えることは必ずしも容易なことではないが、逆に外的環境は常に社会生活と農業経営の在り方を深く規制していると言うことができる。そのため、生活空間は常に外的環境との関連において成立しているということができる。それでは、その外的環境はどのような形で生活空間に影響を与えているのだろうか。詳細については本論を通じて議論がしていくが、さしあたり外的環境の生活空間への影響を土地の例から簡単に見てみよう。

農業は一定の土地を生産手段として用いる生産活動である。そしてその活動が行われる土地は通常は他の農家が経営する土地と接していることと、生態学的環境や民法や農業政策による政治経済的環境という外部環境の存在によって、その利用は深く制限されている。そのため、たとえば外的環境の影響は時として土地利用の在り方の変更を迫る。一つ例を上げると、ジュラのように長年にわたって均等相続が実施されてきた地方では、それぞれの所有地や経営地は細分化されて分散しているが、他方で戦後のヨーロッパ経済の成長は、経営地の拡大を含めた農業経営の拡大を各農家に要求するようになる。この状況の変化に対して各農家はそれぞれ自分の経営の改善を試みるが、この時、農家の経営地は他のさまざまな農家の経営地と隣接するため、ある農家の経営行動（たとえば経営地の拡大）は必然的に隣接する他の農家の経営行動にも影響を与えるため、当然、利害の対立も生じうる。最も簡単な例は、細分化され分散化した土地の集合化をめぐるものである。今世紀に入ってから経営規模の拡大により、それぞれの農家は広い土地を効率的に経営する必要に迫られるようになった。そのような経営の効率化の最も有効な手段の一つは、一つの場所に経営地を集めることである。そのためには借地や土地交換などの手段が用いられるが、しかしそうした手段がうまく行くためには、隣接する土地の所有者や経営者と合意することが必要である。しかし多くの場合、周囲に土地をもつ農家も同じことを考えるので、しばしば隣接する土地の所有者や経営者は利害が対立することになる。このような場合、それぞれの農家は通常自らの利害に従って行動し、利害を調整するということはあっても、共同の利益のために自らの利益を犠牲にするというような行動は決してとらない。そのため、このような土地争いでは、折れた側にかかなりの感情的わだかまりを残すことがある。

このような土地取引を、コミュニティの介入によって一度に行おうとするのが、換地事業である。F村の場合、この換地事業は1990年から1991年にかけて行われた。この場合、形式的にはコミュニティは村の共同的利益の代表という位置にあったが、この換地事業を巡って農家の対立が引き起こされ、コミュニティが代表する社会的共同体的組織が個々の農家の利害に優先することは決してなかった。このような事態は、外部から来たものから見ればある種のエゴイズムのようにも見て取れる。実際、外部からジュラに移り住んだ人のなかには、「ジュラの人は冷たい人が多く、エゴイストだ」と指摘する人もいる。このように、「自律性」や「独立性」と呼ばれる人々の姿勢は利己主義に容易に転化するものである。

しかし他方で、ジュラでは協同組織の伝統も根強い。中世以来のチーズ組合は今でもジュラ農業においては中心的な重要性を持っており、ジュラ県の場合は1990年代においても牛乳の集荷は90%以上がチーズ組合によってなされている。言い替えれば、ジュラ県ではチーズ生産のほとんどはチーズ組合によって行われているのである。同様に、ジュラでは

CUMA（農業機械使用集団 Cooperative d'Utilisation des Matériels Agricoles）²⁾や飼育組合 Syndicat d'Élevage といった様々な協同組織の発達が見られる。一般に中世以来の三圃制地域の共同体的慣習と言われる共同放牧も、1891 年になされた共同放牧禁止の国会決議にもかかわらず、1950 年代まで続けて行われていた。また、社会主義や協同組合主義の運動は様々な面に見られ、19 世紀半ばにはフランスで最初の農業信用組合がチーズ組合を母体に生まれた（ただし短命に終わった）ほか、19 世紀後半には高地ジュラの工業都市サン＝クロードではチーズ組合に触発された協同組合的労働運動が大きな盛り上がりを見せ、また 19 世紀末にはフランシュ＝コンテ地方の各地で農民組合が相次いで設立された。このような点はしばしば、ジュラにおける「共同体的慣行」として指摘されるものである。

このように、外的環境が生活空間に影響を与えると、その影響の在り方は生活空間において社会関係や資源がどのように組織されているかに左右される。そのような生活空間における重要なファクターの一つとなっているのが、ジュラの場合は協同組織である。しかし協同組織における利害は必ずしも個人個人の利害と一致しているという訳ではない。実際、組合員の間の利害の不一致や対立からチーズ組合が解散に追い込まれる例は少なくなく、F 村でもそうしてチーズ組合は解散されてしまった。とはいえ、このような利害の対立にもかかわらず、ジュラでは協同組織への志向は高い。ここには、自主独立の志向と協同組織への志向という一見矛盾した社会的結合関係に関する姿勢の同居が見られる。

この同居は、ジュラの農業の近代化において、このような協同組織が極めて効果的な形で機能した、という点を考えると極めて興味深い。しかも、この問題はジュラ農業の生産基盤の本質に関わり、それゆえにジュラ社会のイデオロギーおよび物質的再生産構造という、歴史の動態の根幹に関わる重要な問題なのである。それでは、このような自主独立と社会的協同という二つの志向を共存させる社会的結合関係の特質はどのようなものなのだろうか。

2) 生活空間における社会的結合関係と「人格」

外部環境がジュラの人々の生活空間に影響を与えると、その生活空間への影響にはジュラの人々自身の、自主独立と社会的協同という一見相反する社会的結合関係が関与する。ジュラにおけるこの諸個人の社会的結合関係について、1960 年代から 1970 年代にかけて第二プラトーの農村で調査を行った Michèle Dion-Salitor & Michel Dion は、今日のジュラで見られる社会的姿勢は、個人主義 individualisme、共同体主義 esprit communautaire、および協同主義 esprit coopératif の三つに類型化することができる指摘している。ここで言う個人主義とは、「個人の利益を追及する利己的姿勢」、共同体主義とは「村の共有地を維持しようとする姿勢、協同主義とは「人との出会いの重要性を強調したり CUMA のような形で仕事を協同で行おうとする姿勢」と、それぞれ定義される。そして彼等は、共同体主義の場合は共有地の利用によって低いコストで自分の利益を上げることを目指すもので、自己の利益を上げようとする個人主義と相通するものがあり、場合によってはほとんど同じになるのに対し、協同主義は個人の利益のみを追及する個人主義とは対立するも

²⁾ CUMA は、特定の用途の高価な農業機械（たとえば、テンサイ収穫機 ramasseuse）を共同所有するための農民たちによる協同組織で、その形態は法的に規制されている。CUMA をはじめとする農業における協同組織については第 5 章で検討する。

ので、ジュラでは成功していない、と指摘している (M. Dion-Salot & M. Dion, 1972: 335-336)。

しかし、この指摘は必ずしも妥当なものとは思われない。確かに「今の人はみんな家にもっていて、人と交わろうとはしなくなった。それはテレビのせいだ。」という指摘はよく聞けるのだが、しかし人と人との出会いが本当に減少したと言うことは必ずしもできない。かつてと同様に現在でも、刈り入れなどに際しての近所同士での共同労働はよくなされるでいし、またさまざまな機会によく集まり雑談をしている。そして人々は、人をその社会的地位や出身などで区別することなく積極的に話しや議論をすることを、「良く話しをすること *discuter bien*」と呼んで極めて肯定的に評価しており、逆に、話しをしようとしなかったり一緒に議論して何かをしようとすることを拒否したり、あるいは話しをする相手を何らかの基準で区別するなど、「よく話しをする」ようには振る舞わない人については、「コンプレックスがある *complexé*」あるいは「人に嫉妬している *jaloux*」と負の評価を与えている。この点において「よく話しをする」という志向は個人主義に反し協同主義に近いように見える。同様に、CUMA のような協同組織も決して低調という訳ではなく、1980 年代にフランシュ＝コンテ各地の農村で調査を行った Dominique Jacques-Jouvenot は、フランシュ＝コンテ地方はフランスで最も CUMA の数が多い地方であると指摘している (D. Jacques-Jouvenot, 1997: 37)。F 村にもテンサイ収穫機を共同所有する CUMA が一つあるが、まったく問題なく機能している。

このような M. Dion-Salot & M. Dion の議論の問題点は、ジュラにおける諸個人の社会的結合関係を、理想型的な個人主義、共同体主義、協同主義というラベルに単純化してしまっていることにあるのではないだろうか。実際、ジュラにおける個人主義というものがどのようなものなのか、それは利己主義と同じものなのか、共同体主義や協同主義はどのような特徴を持つものなのか、といった点は決して自明なものではない。

以上の簡単な検討から明らかなように、人々の生活空間がその外部環境から隔絶されているわけではないにしろ、外部環境が生活空間に一定の影響を与えるとき、生活空間の側に対しては生活空間内部での社会的結合関係の特質に左右されるが、社会的結合関係の特質は、何かの主義や主張として現われる訳ではなく、現実の社会的行為の過程として現われ構築されるものである。個人主義や協同主義ないしは共同体主義という志向は、こうした現実の社会的行為過程のなかで形成されるものである。したがって、ジュラにおける諸個人の社会的結合関係を検討するためには、まず、ジュラにおいて個人と個人の間の社会的相互行為というものが、どのように行われているのかが問われなくてはならない。

ジュラの社会は個人志向と協同志向の間で常にダイナミックな展開をしてきた社会である。そしてそのようなダイナミズムの一端を支えてきたのは、生活空間におけるジュラの人々の社会的行為自体である。このような、社会的行為における個々人の社会的結合関係の質の問題は、必然的にそこで言う「個人」とはどのようなものかと言う問題を引き起こす。ここで言う「個人」とは、全く外部環境から独立し自律的な存在ではなく、一定の社会関係の中に埋め込まれた存在であり、したがって一定の社会的相互行為において主体性を担う行為主体としての「人格 *personne*」のことである。この「人格」は社会的行為の核に位置するものであり、したがって社会的結合関係の検討をするに当たってはこの

「人格」の在り方をまず検討する必要がある。そこで、具体的な分析にはいる前に、もう少しこの「人格」について検討してみよう。

3) 「人格」をめぐる諸概念

ここで「人格」と呼ぶのは、社会的に規定された個人の在り方、すなわち社会的主体性の在り方である¹⁾。すでに M. Mauss がその先駆的研究において指摘していたように、そこで問題となっているのは法であり (M. Mauss, 1989: 335)。したがって「人格」の問題は社会秩序全体の問題である。しかし、この社会的主体性は生物としての人間の個性から直接導かれるものではないので、ある「人格」の概念は一定の社会的な意味を参照することにより成り立つ。したがって、何を参照するかによって「人格」はさまざまに表現される。そこで、データの検討にはいる前にまず、この「人格」概念について予備的な理論的整理を行っておこう。

一般的に、社会的存在としての人格の表現においてはしばしば、社会を巡る一般的な知識体系が参照される。この様にして表現された「人格」はその知識体系に基づく表象なので、表象的人格と呼ぶことにしよう。表象的人格を支える知識体系の代表的なものは、神話などの宗教的な知識体系である。ジュラを含めた西ヨーロッパの場合、このような神話的知識体系に基づく人格概念としては、言うまでもなくキリスト教的（あるいはカトリック的）人格概念がある²⁾。この人格概念は、教会という制度を基礎にしたカテキズム（教理問答）やミサでの説教を通して、再生産される。しかし、今日のヨーロッパ社会ではこうした人格概念を規定するような知識体系はキリスト教という宗教に限られる訳ではない。ほかに、一定の法思想に基づき日常の法手続きの背後にある法哲学的人格概念、一定の経済思想に基づき資本主義的取り引きを基礎づけている近代経済的人格概念、あるいは医学や生物学の知識に基づき医学的行為を支えている医学の生物学的人格概念などをあげることができる。これらの人格概念も、一般的に「人格」とは何かを規定しており、学会や学校、行政組織など、さまざまな社会制度に支えられている。以上の人格概念はいずれも「人格」一般についての表象である。これらはすべて、ジュラ特有のものというよりは、西ヨーロッパ（さらには多くの現代社会）に共有されているものである。

一方、このような一般的な「人格」概念とは別に、社会についての一定の知識体系に基

¹⁾ M. Mauss (1989) 以来、人格概念は人類学研究において主要なテーマの一つとなってきたが、それは「人格」の在り方がその社会の在り方と密接な関わりがあったからである。ヨーロッパにおいてこの「人格 persona」という概念は、ギリシャ語で仮面を意味する語であるプロソポ・ポシ・プロソポスに由来するが、その後、初期のキリスト教の複雑な歴史的過程の中で、この三位一体的な神の3つの神格（父なる神、子であるイエス・キリスト、聖霊）を示す語として用いられるようになり、ヨーロッパにおける社会思想と政治制度における人格概念の一つの源泉となった。このように、ヨーロッパの人格概念の背景には歴史的に形成されたキリスト教的世界認識があるが、しかしその点を巡る議論は本論の枠を超えてしまうので、ここではこれ以上は触れない。なお、従来よく行われてきた人類学における人格概念の研究は、「人」の象徴的表現を巡るものであり (cf G. Dieterlen, 1941; CNRS éd., 1973; M. Augé, 1975; J. Kirkpatrick, 1983)、必ずしも社会的行為における主体性の問題は問われてはこなかった。

²⁾ こうした観点からの研究はヨーロッパに関しては L. Dumont が行っている。彼は、西洋における個人は、至上の社会的価値を与えられたものであるとし、それが一方ではキリスト教的人格概念に、他方で近代の経済主義に由来するものであると指摘している (L. Dumont, 1983)。しかし彼の研究は思想史的なものであり、実際の社会過程の分析を目的としたものではない。

づいて、さまざまな社会的属性に応じた下位単位にカテゴリー分けによって「人格」が表象されることがある。これも、社会についての一定の知識体系に基づく人格概念という点で、表象的人格の一種である。このような分類としてはまず、住んでいる場所による分類が挙げられる。その住んでいる場所として指示されるのは、国であったり、地方や県であったり、あるいはすでに前章で示したように、居住地の標高による地域区分であったりする。ジュラの場合、「フランシュ＝コンテ人 *Franco-Comtois*（またはコンテ人 *Comtois*）」、「ジュラ人 *Jurassien*」という言葉の他に、また、「高地ジュラの人 *gens du Haut-Jura*」あるいは「プラトーの人 *gens du plateau*」という言い方がなされる。また、それぞれの村や町の住人であることを示す言葉（たとえばロンス＝ル＝ソニエ人 *Ledonien*）があり、住んでいる村や町によってもカテゴリー化される。そして、それぞれの村や町の内部では地区に分けられ、最も小さい単位では住んでいる家によって分類される。このような地理的区分は、村や家のように、法的制度的基盤を持っている場合もあれば、標高による地域区分や村内部の地区のように公的なないし私的な制度的基盤を持たない場合もある。こうした地理的な分類のほかに、ジュラではそれぞれの人の職業によるカテゴリー化もなされる。その場合は、単に職業・生業の種類（例えば「農家 *paysan*」）のみならず、その人がその職業において占めている地位（例えば「小作 *tenancier*」）が参照されることもある。また、家庭内においてその人が占めている地位による分類もある（たとえば「父親 *père*」）。このような分類法はさらにいくつが挙げていくことができるだろう。そして、その様に分類された一つ一つのカテゴリーに一定のステレオタイプのイメージが付与されることもある。また、これらの人を分類するさまざまなカテゴリーは互いに重なり合うため、一人の人は同時に複数のカテゴリーに属することになる（たとえば、ある一人の人は同時に農民であり、父親であり、第一プラトーの住人であり、さらにその他の属性をもつ）。

このように、ある一人の人の社会的行為を規定しうる表象的人格は、同時に複数存在する。しかも、このような様々な人格概念のどれもが、それぞれの個人の日常的社会行為の全体を規定しているとは言いがたい。実際、一連の社会的行為において一人の個人が参照する知識体系は、その時その時の話題や状況によって変わり、またほとんど使われない知識体系もある。また、様々なメディアに開かれた現在のヨーロッパの人々の日常生活を考えると、さらに別の（時として明確ではない）知識体系に基づく人格概念があることや、知識体系自体の変形も予想される。また、ある状況において人々の行為を支えている知識体系を明確には同定できない場合も少なくない。そのため、たとえば「公務員というのはこれこれの状況のなかで仕事をしているから、こういう性格を持っているんだ」という様なステレオタイプの指摘があったとしても、それは話の流れのなかの一過的な言明に過ぎず、そのためカテゴリーと主体性の関連をつめていくと、結局は「人それぞれだからね（*Ça dépend des gens!*）」という結論に行き着いてしまうのである。このように、表象的人格は状況に応じて使い分けられたり無視されたりする。このことは、社会的行為の秩序が必ずしも、ここで簡単に見てきた知識体系に依存したものではなく、したがって表象的人格に完全に対応したものではないということを示している。

このように複数の意味世界が行為の背後にある場合、これらの意味世界を一定の形で階層化する制度が存在しなければ、社会的行為は実現しない。しかし、キリスト教や近代経

済思想に由来する諸価値も、ジュラの人々を取り巻く地理的社会的カテゴリーも、さまざまな意味世界を階層的に秩序づける機能は果たしていない。したがってこのような表象的人格概念は、ジュラの人々の一見矛盾して見える二つの志向を同居させた行為全般を説明できないのである³⁾。

実際のところ、表象的人格はある一定の知識体系による構築物であり、現実の個人の行為と必ずしも対応する訳ではない。しかしまた、「人格」概念自体は、物理的存在に社会的属性を与えるという点で、なんらかの意味世界の存在を前提とする。この時、「人格」は常に行為とともにある。そこで、何らかの表象的人格とそれを支える知識体系を探るのではなく、まず社会的相互行為自体のなかで個人がどのように振る舞い、それがどのように周囲の人から把握されているのかから検討する必要がある。本章の以下の部分では、ジュラにおいてこのような社会的相互行為を通して「人格」がどのように認知されているのかを検討していく。

(2) 社会的行為の秩序と人格

1) 社会的秩序と行為の価値

協同組織をはじめとするジュラの農村社会のさまざまな社会的結合関係の特徴は、必ずしも何らかの表象的人格に表現される明確な知識体系を前提としているということではない。とはいえ、社会的結合関係が何らかの「人格」の在り方と全く結び付いていない、というわけではない。たとえば、日常の社会的相互行為に際しては、さまざまな規範が関与する。そのような規範は、相互行為の順調な展開が侵襲された時に批判やたしなめの言葉として提示され、その規範を各行為主体は内在化することで社会的相互行為という社会的結合関係構築へ自らを促し、その行為の秩序を基礎づける。

³⁾ 一般的に「西洋近代的個人」と呼ばれているものも、こうした表象的人格の一つである。それは、L. Dumont がインドにおける「個人」との比較において論じたヨーロッパの「個人」であり、基本的には「不可侵の重要性を与えられた個人」(L. Dumont, 1966: 22-25) である。この人格概念はヨーロッパの市民社会の成立とともに繰り上げられてきたものであり、それを哲学的に最も洗練された形で提出した者の一人が、ドイツの哲学者 G. W. F. Hegel である。個人にとって私的所有権は本質的であると考えた彼は、その『法の哲学』の中で次のように指摘している。「人格は、すべての物に自己の意思をおき、それによってその物を自己のものとする権利を、自らの実体的目的として持っている。というのも、物はこのような実体的目的を自分自身のうちには持たず、その性質と魂には私の意思が加わることが必要だからである。—これが一切の物に対する人間の絶対的取得権である (§ 44)。けれども自由な意思としての私が、占有によって自分を対象化し、この対象化によってこそはじめて現実の意思をなすという面が、占有の真実にして合法的な要素、すなわち所有という規定をなすのである。所有によって私の意思は人格的な意思として、同時に個別者の意思として、私に客観化されるので、所有は私有の性格をえるものであり、また共有といっても、その政体上個別化して占有できるものは、潜在「即自」的に解体可能な共同性という性質を有し、そこに私の分け前をとらずにおくかどうかは、それだけとしては恣意の問題に属する (§ 46)。(G. W. F. Hegel, 1986)。このような「西洋近代的個人」はさらに繰り上げられて、法や行政など様々な形で社会制度を基礎づけるものとなっていった。もちろん、このような人格概念はあくまでも理論的な仮説でしかない。確かにこの人格は、実際のヨーロッパ社会における個人の在り方と取り違えられることがしばしばある。しかし、歴史学者の喜安昭も指摘しているように(喜安, 1994: 18-20)、実際に生きている「個人」がこのようなものであると捉えることでヨーロッパ社会を捉え損なうことになる。

これらの規範は、「人格」を象徴的に表現しているというよりは日常の社会的相互行為を規定するものなので、「価値」あるいは「行為の価値」と呼ぶことができる。これらの価値は、人々の社会的行動を規定し秩序づけ方向づけるという特徴を持つ点で、たとえば地中海諸社会における「名誉 *honneur*」概念と同様の働きを持っている。同様の社会関係を秩序づける価値の存在はヨーロッパではすでに様々に報告されており、フランスでも、たとえば西フランスのヴァンデ地方で「勇ましき *vaillance*」(B. Bucher, 1995) という価値が指摘されている。

ところで、これらの行為の価値が日常の社会関係の秩序を生み出しうるのは、外的な強制権力が働くからではなく、各行為主体が等しくこれらの価値を内在化しているからである。そして、多くの行為主体がこれらの価値を内在化しているのは、それぞれの行為主体が行為において依拠する主体の在り方が、行為の価値が志向するものと同じであるからである。したがって、行為の価値の存在は一定の「人格」概念の存在を意味していると考えることができる。そこでまず、これらの行為の価値について見てみよう。

日常的な社会的相互行為において、行為の価値はよく批判やたしなめの言葉として表現される。たとえば、ジュラでは通常は「*C'est pas gentil* (それはひどい態度だ)」あるいは「*C'est pas poli* (それはやさしい態度ではない)」というような表現がよく使われる。この場合、*gentillesse* (「親切さ、やさしさ」、形容詞 *gentil* の名詞形) *politesse* (「礼儀正しさ」、形容詞 *poli* の名詞形) という言葉によって人の社会的行為が評価されるのである。あるいは、そのような態度をとる人を非難して、「あいつは嫉妬している (*jaloux*) からあんな態度をとるんだ」と説明されることもある。そのほかジュラの第一ブラトーでは、「自律性 *autonomie*」や「独立性 *indépendance*」などの価値も確認された。一方、ドゥー県の高原で 1970 年代初頭に調査を行った Robert Layton は、「親切さ *gentillesse*」「誇り *fiereté*」「馬鹿 *fou*」「嫉妬 *jalousie*」などの価値の存在を報告している (R. Layton, 1971: 105)。このような価値のリストはさらに拡大して行くことができるだろう。

これらの諸価値は、全体として行為主体の在り方を規定している。とはいえ、このような価値はきわめて多いためひとつひとつ列挙していくことは困難であろうし(上に挙げた価値以外にもいろいろと社会的行為の状況に応じていろいろと挙げることは可能である)。しかもそれぞれの価値の間の関係もそれ程明確ではないことも予想され、これらの価値を総体として分析することは極めて難しい。社会的行為主体としての「人格」の検討には、むしろそのような価値を受け入れるような主体が日常的な社会的行為の中でどのような形で規定されているのかを見ていくべきであろう。そこで次に、実際に生活空間において社会的相互行為がどのように行われているのかを検討してみよう。

2) 会話に見る社会的相互行為の秩序

生活空間における実際の社会的相互行為において個人はどのように現われているのだろうか。ここではまず、社会的相互行為の一つである会話を例に、ジュラにおける社会関係の特質がどのように社会的相互行為に現われているのかを概観してみよう。会話 1

⁸⁾ ただし、R. Layton が上げた価値のうち、「馬鹿 *fou*」については私の調査では確認できなかった。

会話 1: 家族のなかでの会話

- 1 A c'est pour ça que c'est marqué conseil (général) /
 2 A c'est eux qui achètent ++ là-bas pour Chalain +++ hn +-
 3 A peut-être plutôt plus près de: des Jeux Olympiques /
 4 A il va y en avoir là-bas qui vont tout passer passer au bulldozer.
 5 B ah oui c'est ce qu'ils disaient /
 6 B ils vont peut-être tout balancer du bazar là-bas après ++
 7 A oui
 8 B ça vaudrait le coup d'y racheter /
 9 C comme l'autre il m'a dit /
 10 C y a des des communes qui sont endettées à vie sans aut' sorte de moyens +
 11 B mais ça c'est toutes des petites hein / je lisais hier sur 'La Vie' +
 12 D qui < >
 13 C Le bonhomme qui était au bourg
 14 A 600 habitants et: XX
 15 B sur 'La Vie', je voyais
 16 A et des communes
 17 B XX elles ont 600, 650 habitants c'est pas drôle de payer là-bas
 1 A だからそこに(県) 議会と書かれているのさ。
 2 A 彼等「県議会」がそれ「バンガロー」をシャラン湖に置くために買ったんだ。
 3 A というよりたぶん、オリンピックも近くなって。
 4 A そこに全部ブルドーザーで片付けて「整地して」置くつもりなのさ。
 5 B そうそう、彼等はそう言ってたわ。
 6 B 多分、そこで彼等はあとで「それで」全部採算をとろうとしているのよ。
 7 A そうそう。
 8 B また買い足すくらい金にはなるでしょ。
 9 C 他の人から聞いたけど。
 10 C どうしようもないくらい多額の借金を抱えたコミューンが多いって。
 11 B そう、だってみんな小さなコミューンだから。昨日『ラ・ヴィー』で読んだけど。
 12 D 誰が < >
 13 C 町にいた男よ。
 14 A 人口が 600 人
 15 B 『ラ・ヴィー』で見たけど。
 16 A とコミューン
 17 B みんな人口が 600 人や 650 人だから、そんな大金を払うのは簡単ではないわね。

NB. 会話がなされた時期は、1992 年冬のアルベールビル冬季オリンピックの近い時期。アルベールビルのあるサヴォア地方は、スイスのジュネーヴをばさんでフランシェ・コンテ地方と隣り合っている。シャラン湖はジュラにある湖で、湖畔にキャンプ場があり夏には多くのキャンプ客が集まる。『ラ・ヴィー La Vie』はカトリック教会で発行している一般家庭向けの月刊雑誌。

はある家族の内部での夕食後の会話で、バンガローを経営することの採算性について話題が展開しているなかで現れたものである。会話参加者は夫 (A) と妻 (B)、そして夫の姉 (C) と兄 (D) である。

ここでは個人は会話の参加者 (発語者) として現われて、他の個人と会話を展開しているが、その会話の流れは次のように整理することができる。

・会話中の発言は情報提供、推論、相違、質問、返答からなっている。ある情報に基づいて推論がなされる場合、その推論においては会話中には明示されていない一定の情報が喚起される。たとえば、1Aの発言から2Aの発言が導かれるためには、仮定として「そこに書いてある人（又は集団）がバンガローを買った」という命題が必要である（より正確に言えば、2Aの発言にはこの仮定が含意されている）。同様のことは、3Aから4Aへの推論（「オリンピックの時期に多くの観光客がキャンピング・カーでジュラを通過することが見込まれる」という仮定と「県議会が新たな収入源を探している」という仮定がある）、6Bから8Bへの推論（「多くの観光客が来る」という仮定がある）においても見られる。そしてこうした推論が妥当と見なされるためには、これらの仮定が会話における背景知識となっている必要がある。ただし、10Cに対する11Bのように、その仮定が修正を受けることもある。

・この会話例では、話者交代（turn-taking）は、前の発言が終わらないうちに始まることが多い。しかし、そこで導入される新しい発言は、前の発言と深い関係にある内容となっている（すなわち、隣接ペアを構成している）。たとえば、5Bは4Aの発言を他の情報によって裏付けようとするものであり、9Cは6Bと8Bの発言に対して別の情報に基づいてその信憑性を確認している。一方、11Bは10Cの発言の修正である（そして15B以降の発言の導入ともなっている）。7Aは6Bへの肯定的な相違、12Dは9Cへの質問、13Cは12Dへの返答である。このように、これらの話者交代において前の発言に新たな情報を付け加えられる場合、それはしばしば前の発言を肯定した上で発展させようとするものとなっており、それらの新たな情報の核となる単語には強い強勢が置かれている。

・この会話例での発言の発展は、シャラン湖のバンガローの話題という、時間的・空間的に限定された出来事に関する話題に始まっている。そして、9Cと10Cによって伝聞によるより抽象度の高い情報の導入により、話題は社会状況を巡るより一般的なものへと展開し、一つの社会のイメージが生み出されている。そして、そのような一般的な社会のイメージにより、前の発言で提示された推論は蓋然性を高めることになる。

このように、ここでの会話の例には一定の会話の構造（すなわち隣接ペアの存在や一定の論理的推論過程の存在）のものと、具体的な事例から抽象的な知識へという転換が見られる。もちろん具体から抽象という図式は必ずしも会話一般に見られるものではない。しかし、会話における論理の流れが、話者交代において前の発言を肯定的に受け取ること（すなわち、前の発言を少なくとも部分的には正しい、あるいは妥当であると判断すること）によって生み出されるという点は、すでに多くの会話分析による研究が明らかにしてきたように、会話一般に見られるものである。この際、会話1のように抽象度の高い一つの社会のイメージが会話のなかで作り上げられる時、話者交代において新たな発言者が前の発言を肯定するような形で付加情報を提示・参照し、各々の情報を比較・評価し、そこから一つの「社会」についてのイメージを構築し直して自分の知識に繰り込んでいくのである。ここで Aaron Cicourel による、相互行為以前にすでに確立されている「図式的知識 schematic knowledge」と、相互行為のなかで状況に応じて形成されていく「その場の知識 local knowledge」の区別（A. Cicourel, 1985）を参照するならば、種々の社会制度に関する知識は確かにある程度は「図式的知識」に属するということが明らかである。しかし個々の行為者は複雑な現代社会についての詳細で性格な知識を完全に持っているということはありません。したがって実際の社会制度の詳細や実際の社会の機能の仕方についての知識は、この会話例に見られるように、会話を通して各々の行為者が一定の論理的手続きを経て形成していくのである。その意味で、社会についての知識に関して「その場の知識」が占めている位置は、社会的行為の前提として共有されている「図式的知識」よりも大きいもの

会話 2 : コミュニケーション議会において

- 18 E je vais te DIRE encore quelque chose / tu vois /
 19 E quand tu parles de sécurité des gamins et ben la sécurité
 20 E il faut l'avoir pour tout le monde +++ hein +++
 21 F c'est-à-dire? continue je t'écoute NON, mais je t'écoute!
 22 E bein c'est-à-dire: c'est tout à fait <...?>
 23 F tu m'écoutais / tu m'écoutais / je t'écoute
 24 E je vais te dire tout simplement ++ (-)
 18 E もう一言あんたに言わせてもらおう。わかるか。
 19 E あんたが子供たちの安全のことを言うんだったら、安全は、
 20 E ほう。他のみんなにだってそれは必要だろ。な。
 21 F だから? つづけて。聞いているわよ。いや、ちゃんと聞いているわよ。
 22 E そう。だから、それは全く <...?>
 23 F あなたは私の話を聞いていた、私もあなたの話を聞くわよ。
 24 E 俺はあなたに單にこれだけのことを言わせてもらいたい。、、、
- NB. この会話は、コミュニケーション議会での言い争いの一部で、B の義理の父の馴い犬が先だって近所の
 子供にかみついたことを巡るもの（この会話は、別の問題を巡る感情的対立のあとで続けて展開し
 てきたもの）。

である。そして、このように、会話の参加者が一定の社会についてのイメージを形成しようとする時、そこでは単なる論理過程だけではなく、隣接ペアの存在に見られるような、相手の発言にきちんと対応するという社会的相互行為の秩序による支えが存在し、またその秩序に沿うように新たな情報提供や理由づけがなされている。

以上の簡単な会話の分析から明らかになることは、従来の談話研究がすでに明らかにしてきたように、ジュラにおいても会話という相互行為では、論理的にも態度の上でもまず相手の発言に対応することが要求され、それが会話を通した知識形成の基盤となっているということである。これを社会的結合関係という観点から言い替えるならば、それぞれの個人は全く利己的な態度（M. Dion-Salot & M. Dion の言う「個人主義」）で相互行為に参加するのではなく、むしろ一定の会話の秩序を維持することにより互いに積極的に交流する姿勢（M. Dion-Salot & M. Dion の言う「協同主義」）を要求されているということである。こうしたことは言い争いのような会話場面でも同様にあてはまる。会話 2 をみてみよう。これはコミュニケーション議会での議論が口論に発展してしまったときの二人のコミュニケーション議員の間の会話である。ここでの会話の特徴は以下のとおりである。

- ・話者交代はそれぞれ隣接ペアの構造に基づいている。すなわち、21F と 23F の発言は 20E と 24E の発言をそれぞれさらに促そうというものである。ただし、会話 1 とは異なり発言の重なりは見られない。
- ・会話 1 と同様に、論理的に重要な言葉には強勢が置かれている。

発語 21F と 23F が端的に示しているように、ここでは明らかに、争いの場面ではあっても相手の発言に耳を傾けることが最低限の行動として要求されている。また、会話 1 と同様にこの会話例でも（ここに記した前後も含めて）発言が重なることが多いが、それ

は口論という場を反映してそれらはみな相手の言葉を遮って自分の主張を提示しようとするところから生じている。しかしそれは、21F から 24E にかけて見られるように、相手の発言を無視しようとするものではなく、むしろ相手の発言を受けた上で自己の正当性を強引に主張するためである。

このように対話を連続させることは会話という社会的相互行為の最低限の規範となっている。もしこのような会話における規範が守られない場合は、自己の正当性を主張できなくなり、さらには会話という相互行為そのものが成り立たなくなるので、そのような規範を無視した態度は社会関係を拒否する態度（さらには喧嘩腰の態度）として一定の批判を受ける（もちろん、意図的にこのような態度をとって社会的相互行為を強引に打ち切ることも起こる）。すなわち、社会的行為の秩序は一定の規範に支えられているということが出来る。そして、「社会」についての一連の知識がこのような社会的相互行為のなかで構築される以上、社会的相互行為を秩序づける規範は「社会」についての知識をも基礎づける方向づけられていることになる。

相互行為を維持させようとする規制は、発語のなかでその規範が適用されるべき対象が指示されることで実現する。そしてそのような指示がなされることで、指示された個人はその価値を担う一定の責任と権利を持つ主体として、即ち一人の人格として認識され、社会的相互行為の対象となる。したがって、行為の価値を担うべき「人格」とは、社会的相互行為によって指示されることによって社会的に明確にされ、それによって一人の個人は一定の社会関係の網の目のなかに捉えられていくのである。そのため、社会的行為主体の定義としての「人格」概念を明らかにするためには、相互行為における一人一人の主体の認知の在り方の秩序を検討することが必要である。

3) 社会的行為と人格指示

社会的行為は通常、複数の個人の間で行われ、その際各々の個人は社会的行為主体として互いに認知される。そこでまず、各々の個人が一定の秩序を持つ社会的相互行為の中でどのように主体として認知されるかを見てみよう。

複数の個人の間の社会的行為は、互いに相手を社会的行為主体として認めることから始まる。この様な認知自体はもちろん、必ずしも発語を介することなくなされる。しかし、日常の相互行為を行おうとすると、ある動作が誰に対して向けられているのかを明示するために、主体の認知を発語によって確認する必要がある。その際、ジュラ社会ではこのような主体を人格として指示する言葉が用いられる。ここではこのような言葉を人格指示詞と呼ぶことにする。人格指示詞は、ある対象に一定の名辞を与えて言語表現と行為とを直接結び付けてある人格を示す、指標記号の一つである。

それぞれの発語の状況に応じて人格指示詞には様々な語が使われるが、その際、人格指示詞の使い分けは行為主体を含めたさまざまな人格の一つの認識の仕方を示している。それでは、実際の会話の中ではどのような人格指示詞が用いられているのだろうか。例を挙げてみよう。会話 3 は、夕食会（会話の中のブリジットとアンドレはそのときの料理係）を開こうと近所の者たちが集まって、打ち合わせをしている時の会話からとったものである。この例では人格指示詞は太字（日本語訳ではゴチック）で示してある。この例において現れた人格指示詞は、順番に次のとおりである。

会話 3: 夕食会の打ち合わせ

- 25G: Jean-Louis + Jean-Louis + on va faire râler Brigitte puis Andrée
 26G: tu vas voir quand elles vont revenir
 27G: on va faire râler Brigitte puis Andrée
 28G: je vais leur dire qu'on va leur faire une tourte rien que pour nous
 29H: on va voir ce qu'elles vont dire
 25G: ジャン＝ルイ、私たちはブリジットとそれからアンドレを忙しくさせようよ。
 26G: あなたは彼女たちが戻ってきたらわかるわよ。
 27G: 私たちはブリジットとそれからアンドレを忙しくさせよう。
 28G: 私は彼女たちに、俺たちは彼女たちに俺たちだけのためにパイを作ってもら、と言うね。
 29H: 彼女たちはなんて言うかね。

N.B. 太字およびゴシックで示した語は人格指示詞。日本語訳では人格指示詞を正確に訳すために直訳を行ったため、日本語としてはぎこちないものとなっている。

[会話 3 に現われた人格指示詞]

Jean-Louis	(ジャン＝ルイ	固有名詞)
on	(私たち	主格代名詞)
Brigitte	(ブリジット	固有名詞)
Andrée	(アンドレ	固有名詞)
tu	(おまえ	主格代名詞)
elles	(彼女たち	主格代名詞)
je	(俺	主格代名詞)
leur	(彼女たち	間接目的代名詞)
nous	(俺たち	強勢形代名詞)

この会話の場合、それぞれの語に特別の強勢や休止が置かれたりはしていないので、人格指示詞の用法の相違について、話し方に依存する要素については一応除外して考えることができる。この時、人格指示詞は、それらが一連の発語の中で占めている位置、すなわち会話の内部において果たしている役割によって、固有名詞と代名詞の二つの種類に分けることができる。

人格指示に使われる代名詞はすべて、フランス語における通常の人称代名詞である。会話 3 では代名詞は、話し手や聞き手の指示（人称のダイクシスで、「俺 *je*」、「おまえ *tu*」、「俺たち *on*、*nous*」が該当）に使われているか、既に固有名詞によって指示された人格の再指示（つまりアナフォラで、「彼女たちは *elles*」「彼女たちに *leur*」が該当）に使われている。アナフォラの場合は固有名詞によって必ず先立たれているが、ダイクシスの機能を持つ場合は発語の状況からそれが誰を指しているかが会話参加者に明示される。

これに対して固有名詞が果たしている機能は、レファレンスとしてある人格を指示すること（「ブリジット *Brigitte*」と「アンドレ *Andrée*」）、および、話しかける相手としての人格を最初に指示（アドレス）すること（「ジャン＝ルイ *Jean-Louis*」）である。アドレスとして使われるときは、会話 3 の 25G に見られるように、そのあと必ず二人称代名

詞ないしは二人称を包括する一人称複数代名詞というダイクシスの機能を持つ代名詞によって言い換えがなされる。レファレンスに固有名詞が使われるときは、その後の発語のなかではアナフォーラの用法の代名詞によって言い換えられる。

このように、個人はまず固有名詞によって指示された後に代名詞によって置き換えられていくので、一度固有名詞によって登場人物となる人格とその会話内での役割がすべて指示されてしまうと、会話に現れる人格指示詞は代名詞のみとなる。ところで、レファレンスとしての固有名詞の用法では指示される人格は三人称代名詞で言い換えられるので、その人格はその場の社会的行為とは直接は関わらない話の中の登場人物にとどまるが、アドレスとしての固有名詞は二人称代名詞で言い換えられ、話し手の直接の社会的相互行為の相手として指示される。つまり、固有名詞によるアドレスは、社会的相互行為の相手を自分の行為の対象となる一人の主体＝人格として、発語を通して認識することである。そのため、最初のアドレスの仕方は行為の対象をどのように人格として特徴づけているのかを示す。そしてこの最初のアドレスが行われるのが挨拶の場面である。

4) 挨拶と人格指示の秩序

ジュラでは、社会的相互行為は通常は挨拶によって始まり挨拶によって終わる。そのため、人格指示が社会的相互行為において最初になされる機会は、社会的相互行為の最初を特徴づける「挨拶」の場面である。最初に会ったときに挨拶をしないと「それはやさしい態度ではない (C'est pas poli)」といった批判を受けるが、それは挨拶をしないことが相手を社会的主体（すなわち社会的相互行為の相手）として認知せず無視することと見なされるからである。

挨拶は、基本的には挨拶言葉に相手を名指す言葉を添え、かつ挨拶の身振りをすることで成立する。たとえば、昼間に会った二人の男は互いに「こんにちは、ミシェル (Bonjour, Michel)」 「こんにちは、ポール (Bonjour, Paul)」などと挨拶の言葉を互いに交換しながら、握手をする。互いに挨拶をする個人がお互い親しい者同士であり、かつその行為者の少なくとも一方が女性あるいは子供の場合は、握手ではなくビズ *bize* (または *bizou*) という互いに左右の頬を一回ずつつける仕草をする (家族内では男性同士がビズをすることもあるが、家族内であっても男性同士のビズは変だ、と言う人もいる)。挨拶語はその場の時間にあつたものなどが選ばれる。別れるときも、挨拶言葉に別れの表現が用いられる以外は全く以上と同じことが行われる。挨拶語に添えられる人格指示詞としては、敬称、姓、名、あだ名のほか、特定の親族に関しては親族呼称が、それぞれの状況に応じて使われ、代名詞は用いられない。これらの人格指示詞が用いられない時の挨拶は、ぶっきらぼうなものとなり、時には「礼儀正しさ *politesse*」に反する行為と見なされる。

Paul Strawson は、ある個体を参照する際の表現として、代名詞、固有名詞、定冠詞付きの普通名詞、そしてこれらを組み合わせた表現の 4 種を上げているが (P. Strawson, 1959: 16)、普通名詞と確定記述についてはどうだろうか。普通名詞は敬称と定冠詞を伴ってレファレンスやアドレスに使われることがあるが、その名詞が高い地位を表すものである場合 (たとえば「市長 *maire*」) を除いて「失礼」な表現とされる (「失礼」の意味については後に議論する)。これに対し確定記述は、レファレンスには使われるがアドレスには使われない (確定記述によるアドレスは「失礼」なこととされる)。ただし、その確定記述

があだ名となる場合があり、この場合は親しい者同士の間でのみアドレスとして認められる。

このような日常会話で用いられる人格指示詞のうち、挨拶の際の名指しにも使われるもの（したがって、社会的行為を始めるに当たって最初に相手を社会的に認知するために使われる名辞）を、代名詞の人格指示詞と区別して「名指し語」と呼ぶことにする。会話 3 の例からもわかるとおり、挨拶の際に使われる名指し語は、会話の中で的人格指示にも使われる（会話 3 では名のみが使われていたが、会話 4 の 39）には敬称＋姓の例が現われている）。この時、名指し語は何らかの名詞である。

挨拶は、人が出会うところではどこでも行われ、多くの人がいるところではその一人一人と挨拶の交換がなされる。こうして必ず相手を名指し語によって指示することにより、発語者は相手をその社会的行為の対象として二人称代名詞で呼びうる一つの主体として認知する。個人の社会的主体としての認知という点から見ると、このような挨拶の仕方は二つの特徴を持っている。一つは、名指すことで、相手を一人の個人として認知したことを表明すること、もう一つは、このような相手の認知が基本的には一体一で行われるということである（たとえば、握手やビズが一对多で同時に行うことはできないのはもちろんだが、名指しもまた相手の一人一人に対して行うのが望ましい）。そして、一人の個人が、姓、名、あだ名など、各々の発語の状況に応じて人格指示詞で呼ばれるということは、一人の個人の人格には複数の側面がある、ということを示している。

このように、会話における機能の上から人格指示詞は、大きく代名詞と名指し語に分けることができ、それぞれにおいて複数の人格指示詞が状況に応じて使い分けられる。こうした人格指示詞は、一方でフランス語の文法秩序に従ったものである。しかし、文法構造が社会関係を決定する訳ではない（もしそうであるならばすべてのフランス語圏社会は皆同じ社会構造を持つことになるが、それは明らかに事実と反する）。実際に社会関係を規制しそれによって人格概念を規制しているのは、現実の言語行為における言葉の使い方からである。このような言葉は各々の状況に応じて使われるので、その言葉の使われ方にはその言葉が使われるコンテキストが反映される。ところで、Françoise Zonabend は、名前には指示機能、分類機能、象徴機能の 3 つの機能があると指摘しているが（F. Zonabend, 1980b: 9）、名指し語全体も同様に、これらの 3 つの機能を持っている。人格指示において重要となるのはこのうち指示機能であるが、しかしそれは他の 2 つの機能と別々になされるわけではない。そのため、人格指示詞が使われるコンテキストは、この 3 つの機能のからまり合いのなかで捉えることができる。それでは、それぞれの会話のコンテキストにおいて、それぞれの人格指示詞は指示する主体をどのように特徴づけているのだろうか。そして一人の個人のそれぞれの人格の側面は互いにどのように構造化され、一つの人格を構成しているのだろうか。これらの点を人格指示詞の機能との関わりで明らかにするために、次に人格指示詞の体系を検討する。

（3）代名詞による人格指示

人格指示詞として使われる代名詞は、標準フランス語の人称代名詞である。一般にフランス語の代名詞は人称による使い分けを行うが、この人称の概念は会話における社会関係

も特徴づけている。すなわち、一人称で指示された人格が三人称で指示された人格に話しかける一方、三人称で指示された人格は会話において参照はされるが、対話からは一時的に排除されているのである。このような対人認識が「対一」という形をとることは挨拶における身振りでみられたが、会話 3 の例でもアンドレとブリジットは会話の相手としては指示されていないという形で現れている⁷⁾。このように、三人称代名詞はアナフォラとしてのみ使われるが、これに対し一人称と二人称がダイクシスとして使われるとき⁸⁾、これらの代名詞の指示対象はその語が発語されたその場の状況との関連においてのみ特定できる。このように代名詞の指示機能は、会話の場における行為者の役割を指定し分類するという機能をともなっている。しかし、象徴的な意味機能は持っていない。

発語がなされるその場はまさに社会的相互行為が展開する場であるので、ダイクシスの用法は社会的相互行為の在り方と密接に関連している。ここで興味深いのは、話し手（つまり自分自身）以外の人格への指示を含むダイクシスでは、表現に一定の社会関係が反映されるという点である。それは、二人称単数代名詞における親称代名詞 *tu* と敬称代名詞 *vous* の区別（T/V システム）、および一人称複数代名詞における二つの代名詞 *on* と *nous* の区別である。

二人称単数代名詞における敬称は二人称複数代名詞の転用であり、一般には敬称はあまり親しくない相手を指示するときや改まった場で聞き手を指示するときに用いられ、それ以外には親称が用いられる。通常、はじめは敬称で呼び合っている二人がある時、互いに親称で呼び合い始めるという経過をたどるが（このとき、一方が他方に親称で呼び合うことを提案することで、親称での呼び合いが始まる）、一度親称で呼び合い始めると敬称に戻ることはない。その意味で、この二人称代名詞の指示する話し手と聞き手の社会関係は、特定の会話状況には依存しない。また、一つの家族の内部ではもっぱら親称のみが使われる⁹⁾。

一方、一人称複数代名詞の場合、代名詞 *on* は「人」一般を指す代名詞であり、原理的には様々な人稱を指示しうるが、通常の日常会話では「われわれ *nous*」を示す場合がきわめて多い（ある若者は、物心ついた頃は *on* とは *nous* のことだと思っていた、と言っ

⁷⁾ この点は、たとえば日本語の代名詞と比較してみるとより鮮明となる。日本語の場合、それぞれの「人稱」に対応する代名詞は状況に応じて頻々であり、また、人稱の区別も曖昧である上、代名詞はしばしば省略されたり固有名詞に置き換えられたりするので、会話の場における人稱による役割分化は不明瞭となる（そもそも、ヨーロッパ諸言語の研究から生まれた「人稱 *personne*」という概念が、日本語にも適用できるかどうかは自明ではない）。この点、フランス語（そして他のインド＝ヨーロッパ語）では代名詞の各人稱の質的相違は明確である。E. Benveniste はフランス語の人称代名詞の体系において一人称代名詞と二人称代名詞のみがダイクシスである点を指して、人稱代名詞と呼ぶことができるのは一人称と二人称の代名詞だけで、三人称代名詞はむしろ無人称と呼ぶべきであると指摘している（E. Benveniste, 1966: 235. cf. 川田, 1988: 207-229）。

⁸⁾ E. Benveniste の人稱と時制を巡る考察（E. Benveniste, 1966: 237-250）を再検討して J. Simonin-Gumbach が指摘しているように、一人称代名詞と二人称代名詞は常にダイクシスとなる訳ではない（J. Simonin-Gumbach, 1975: 88-92）。しかし、一人称・二人称代名詞がダイクシスとは必ずしもならない文学作品や神話語りなど、特定の言語行為においての話であり、少なくともここでの議論で対象としている通常の日常会話では、一般に一人称代名詞と二人称代名詞はダイクシスとして機能していると考えてよい。会話におけるダイクシスの機能のより詳細な検討は、第4章において行う。

⁹⁾ 家族に由来する家族の場合、家族内部でも敬称が使われることがあるが、それ以外の者から見れば、家族内で敬称を使うのはきわめて奇妙なことに見えるという。

ている)。それに対して *nous* という代名詞が主語として使われることはほとんどなく、「*nous*」を主語にもってくる場合でも、「*nous*」と言った後は必ず「*on*」で受ける（たとえば「*Nous, on est comme ça.*（俺たちやこんなもんだ）」というように）。一般的には、代名詞 *nous* は境界のはっきりした「われわれ」を、代名詞 *on* は境界の漠然とした「われわれ」を示す、というニュアンスの違いがあるが、会話と関連させて見た場合は、前者は比較的形式ばった公的な状況において、後者は形式ばらない状況において使われる。その意味で、二人称単数代名詞とは異なり一人称複数代名詞の使い分けは状況依存的である。とはいえ、改まった関係とそうではない関係という二分法に基づいているという点で、二人称単数代名詞と一人称複数代名詞の使い分けの原則は類似しているといえることができるだろう。すなわち、これらの代名詞には話し手と他の誰かとの社会関係への指示が含まれており、その社会関係の質はくだけたものと改まったものの二つに区別されるのである⁽¹⁰⁾。

以上から明らかになるのは、代名詞による人格指示では話し手は聞き手を特定して話しかけるという形をとること、そしてある主体が何らかの関係を持とうとする人格（二人称単数の場合は話しかける相手、一人称複数の場合は主体と同一視される相手）を指示するとき、「近しい」か「遠い」か、あるいは「改まった場」か「くだけた場」かの違いによって代名詞の使い分けがなされる、という点である。

（４）名指し語による人格指示

１）敬称

初対面の者同士が出会ったときは敬称によって名指し合う。この時は性の区別が分類機能として適用され、男性には「*Monsieur*」、女性には「*Madame*」または「*Mademoiselle*」が使われる。辞書的には *Madame* は既婚女性に、*Mademoiselle* は未婚女性にそれぞれ適用されるが、実際には後者は「小娘」と言うニュアンスも持ちうるので、非常に若い世代（十代以下）か、親しみを込めて呼ぶ場合以外は *Madame* で呼ぶことが多い。しかし例外も多く、どの表現が適切であるかはその時の状況に応じて判断される。これらの語はもともと普通名詞に一人称所有代名詞が結び付いて生まれた語であるが、実際の使用においてはそれ程明確な象徴機能は持っていない。

一般に敬称だけで名指しがなされるのは初対面のときだけである。通常は敬称のみよりも名前で呼び合うほうが好まれる。そのため、初対面で互いに名前を知らないときでもすぐに相手の名前を聞き出して名前で呼び合おうとするので、それ以降は「敬称＋姓」または「名」によって呼びあうようになる。その意味で敬称のみを名指し語として使い続けることは、相手と一定の距離を置き続けたい、あるいは相手との社会関係の構築に関心がない、という意思表示ともなる。

¹⁰⁾ 状況への依存度における一人称複数代名詞と二人称単数代名詞のそれぞれの使い分けの相違は、その指示する対象の相違が関連していると考えられる。このような代名詞の使い分けの背景にどのような言語学的原理が働いているのかについては、あまりに込み入った語用論的議論となるのでここでは触れない。TV システムを巡っては P. Brown & S. Levinson (1987: 198-199) が説得的な議論をしている (cf. Agha, 1994)。しかし、同様の論理で *on* と *nous* の区別が説明できるのかどうかは明かではない。

2) 普通名詞

ある個人は普通名詞によって名指されることがある。この時その普通名詞はその人の属性（「スイス人 *le Suisse*」、「農民 *le paysan*」、「村長 *le maire*」など）を示す一般的概念であり、必ず敬称と定冠詞をとまう（敬称をとまわらない表現は「礼儀正しき *politesses*」を欠く表現となる）。したがって、普通名詞はまず、個人の名指しに際してその人の一つの属性を一次的に参照し（分類機能）、次いでその属性を通して一定の一般的カテゴリーを二次的に参照する（象徴機能）。そのため、普通名詞による個人の表現はそのカテゴリーの提喻（すなわち、外延による内包の指示）となる。

普通名詞は、通常は象徴機能が優位となるので、挨拶におけるアドレスに使われることはなく、会話の途中にのみ現れる。しかし会話のなかにおいても普通名詞によるアドレスは、名譽のともなう高い地位を示す言葉に限って大勢が集まる公的な場において用いられるが、それ以外ではほとんど使われない。このような高い地位を示す普通名詞は、村長 *le maire*、理事長 *le directeur*、組合長 *le président* など一定の特別の役職を示すものである。それ以外の場合に普通名詞をアドレスとして使うのは極めて「失礼」なこととされる。

3) 姓

初対面の者同士が少し顔見知りになると、敬称のあとに姓をつけて相手と呼び始める。姓は父系をたどって継承され、ある夫婦の子供は皆、父親の姓を持つので、ある父系親族は一つの姓を共有し、姓は一人の個人をその父系親族に分類する。そのため、姓による名指しはある個人の父系親族をまず参照し、その父系親族のなかにその個人を分類する。また、私生児の場合は母親の姓（したがって母方祖父の姓）を継承する。このように、個人の姓はその父系親族の指標となる。また、通常は女性は結婚すると自分の姓を夫の姓に変えるが、男性は一生姓を変えないので、姓の用法には性による相違が見られる¹¹⁾。そのためかつて小学校では先生は、男子生徒は姓で、女子生徒は名で呼んだという。

ジュラでは親族関係は基本的には双系的であり、さまざまな権利の継承やつきあい関係などには父系ないしは母系への偏りはみられない。しかし姓は父系的に継承されるがゆえに、父方の家族の歴史を二次的に想起させるものとなる。たとえば、インタヴューにおいて家族の歴史を尋ねると、まず始めに人々が答えるのは姓を同じくする父系を辿る先祖たちの歴史である。また、「うちの家族はもともと高地ジュラに住んでいた」という言い方で示される家族も、父系の家族である。とはいえ、それ以外の家族関係が忘れ去られてしまっているわけではない。改めて聞けば母方の系譜に連なる歴史を話してくれるのであり、記憶されている家族の歴史自体は双系的な広がりを持つ。ここから明らかになることは、姓が一定の記憶の指標となっているということである。そのため「わたしたちの家族 *notre famille*」と言った場合は、たいてい父系親族を指している（とはいえ、発語者が母方の社会関係を二次的に見なしている訳ではない）。このような姓による記憶の集合化がさらに進むと、一つの父系集団に特定の身体的心理的特徴が結び付けられる。たとえば、ある村人がコミュニケーションで横柄な態度をとった時、その人を非難して別の人が私に、「知

¹¹⁾ ただし、現在のフランスの法律ではこれは義務ではない。そのため、結婚後は自分の姓のあとに夫の姓をつける複合姓にする女性も都会では少なくない、とはいえ調査を行った範囲では、ジュラの農村ではそうした例はみられなかった。

ってるか、あいつの祖父は村長だったが、ひどい村長だったので県知事に罷免されたんだ。あいつの曾祖父は国会議員になろうとしてなれなかったんだ。ほら、家族なのさ。あの家族はいつも権力を求めているのさ。」と話したが、ここで言う家族は明らかに父系親族である（ちなみにこのように私に話してくれた人は、彼が批判している相手の母方の第二子 MMZSS に当たっていたが、彼は批判の相手と自分は血縁関係にはあっても同じ家族に属するとは考えていない）。このように「あの二つの家族はいつも互いに争っている」あるいは「あの家族はすこしブルジョア的だ」というときの家族はほとんどの場合、父系親族を示す。

しかし、このような父系親族の強調は、あくまでも姓の持つ記憶への指標という特徴から来るものであって、けっして父系のつながりが社会的に重視されるためではない。したがって、姓が父系親族以外を指す場合もある。たとえば、ある農家で子孫が娘一人しかいなかったで、その農家を他の村からきた夫が継ぎ、娘はその夫の姓を名乗ることになった。しかし、村のなかではその夫の姓によって示される親族はもっぱら妻方の親族（言うまでもなく、妻の両親は夫とは別の姓を持っている）となっており、他の村に住む夫自身の親族が指示されることはほとんどない。この場合、村の人から見た時に夫方の姓が妻方親族の記憶と結び付けられるのは、村の人には夫方親族の記憶がほとんどないためである。しかしこの場合も、当の本人の話を開けば、その姓は父方の記憶と結び付けられている。

このように、姓は家族の記憶の指標となっているが、それによって喚起される家族の記憶はたいがい、せいぜい 3 から 4 世代程度という浅い世代深度しか持たない。多くの人は 20 世紀始めごろの家族成員の記憶になると曖昧となり、自分の曾祖父母の名前も覚えていない。そして、近い親族の記憶は各々の名前と共に個別化され、家族や親しい者どうしの会話のなかで継承され、また実際の近親の間での頻繁な交流によってその記憶は再生産されていくが、古い親族の記憶はもはやそこに具体的に誰が関わっているのかは曖昧となっている。

ところで、他の地方と同様にジュラのそれぞれの村でもしばしば、特によく見られる姓が存在する。しかし、記憶された親族の世代深度の浅さを反映して、村で最も古い家族（姓を共有する集団）はどの家族か、そして同姓の家族が複数ある場合にこれらの家族がどのような系譜関係にあるのか（あるいはないのか）などといった村の歴史は、一部の物知りか特に調べた者でなければ知られていない。そのため、同じ姓の家族であっても、ここ一世紀程の間に系譜関係が確認できない場合は、それらの家族の間の親族関係の有無は判別されていないことが多い。また、仮に系譜関係が確認されたとしても、そのような古すぎる結び付きでは、その二つの家族は互いに「家族 *famille*」であるとは認識されない。このように世代深度が浅く、村や家族の歴史に関する知識が人によりまちまちであることは、家族などの会話ではこのような古い歴史が話題となることが少ないということを意味している。

姓の中には、その家族の成員の記憶を媒介とせず、その形態からその家族の歴史的起源が明らかになる姓がある。たとえば、ある種の姓はその家族が別の地域に由来することを示したり、一定の歴史的事件との関連性を示したりする。たとえば、17 世紀に戦乱や疫病によって人口が激減した後、フランシュ＝コンテ地方には隣接するブルゴーニュ地方や

サヴォア地方から多くの移民がやってきたが、ある種の姓はこれらの地方の起源であるとされている。また、17世紀にフランスの侵略に抵抗した家族に由来するとされる姓もある。また、貴族に起源をもつとされる姓もある（それは、たとえば *de Montrond* のように前置詞 *de* に先立たれるなど形態的特徴を持つこともある）。貴族出身とされる家族の家には、古くからの家具や食器類など趣味の良さやかつての地位の高さを示すものが残されていることが多く（時には城なども所有している）、その家族の成員たちも貴族的に洗練された振る舞いや言葉遣いをするため、その家系の貴族という由来は事実としても確認できる。

しかし、このように二次的に社会的歴史的由来を象徴するという機能は、姓とその由来についての一般知識に基づいた象徴機能によるものであり、したがってそうした一般知識さえあれば、ある特定の家族の実際の歴史を知らなくても、姓をある特定の社会的歴史的由来に結び付けることができる。しかし、この場合、姓の社会的歴史的由来がわかったとしても、現実の社会的相互行為の在り方がそのような由来によって左右される訳ではない。それは貴族由来の家系の場合も同様である。実際、貴族由来の姓を持つ人がいたとしても、その人と他の人々との間の社会的相互行為になんらかの上下関係が生まれることはない。

このように、個人の姓はまず一次的にその父系親族を参照し、さらに二次的にその父系親族の親族の実際の経験やその社会的歴史的カテゴリーを参照（すなわち、その父系親族をあるカテゴリーに分類）する。しかし、社会的歴史的カテゴリーへの参照は日常の社会的相互行為にはそれほど重要性は持たないのである。

日常会話の人格指示の場合、姓による名指しは通常ある種の敬意を表現したいとき行われる。しかし、同じ家族の内部では姓で呼び合うことはない。姓が個人の名指しに使われる場合はほとんどの場合、敬称を伴うが、稀に姓のみで呼ぶこともある。姓が家族的記憶を媒介とすることを考えるとき、姓によって人を名指すということは、その記憶によってたどられる様々な出来事を持った人々の総体を、一人の個人の背後に見ることでもある。それゆえ、姓で人を呼ぶことがその人に対するある種の敬意の表現であるならば、その敬意はその人の背後にいる人々全体への敬意と結び付きうる。

4) 名

名指し語としてもっともよく使われるのが名 *prénom* である。通常、人と知り合って少し親しくなると、敬意を表現し続けなくてはならないような相手でもない限り、まず相手の名を開き名で呼ぼうとする。

一人の個人は通常は複数の名を、最も一般的には3つの名を持つ。この3つの名はそれぞれ順番に、第一の名 *premier prénom*、第二の名 *deuxième prénom*、第三の名 *troisième prénom*、と呼ばれている。両親が子供に与える名前は第一の名で、第二の名と第三の名は、カトリック信者¹²⁾の場合は近親から選ばれた代父と代母からそれぞれもらう名である。それ以外にも近親や友人から名をもらうこともあり、そのために名が増えることもある。

¹²⁾ 「信者」とは何か、という問題は大きな問題であるが、ここでは内面的な問題とかわりなく、節目節目の教会の儀礼に参加するだけの人々までが含まれる。普段は教会には行かなくとも、洗礼式や初聖体拝領には教会に行くという人は多い。

逆にカトリック信者ではない場合には一つしか名を持たないこともある（たくさん持つことももちろんある）。こうして、名は名の与え手を参照する。

一般的には、日常的な社会的行為で用いられる名は第一の名であり、投票の住民票でも、日常的に使う名 *prénom d'usage* として第一の名には下線が引かれている。そしてその個人はその第一の名に自らを同化させ、その人の死後は、通常は第一の名と姓のみが墓石に刻まれる。カトリック信者の場合はこの第一の名がその人の守護聖人を示すため、信仰深い人は名をその守護聖人の象徴と見なし、それによって二次的にカトリックの表象的世界に自分を結び付ける⁹⁾。他方、第二の名以降の名は単に書類の上の名に過ぎず、その人のアイデンティティに関わりを持たない場合が多い。とはいえ、ある個人が第一の名以外の名で呼ばれることがないわけではない。それは、その人があえて第一の名以外の特定の名を好む場合や、家族や近隣に同名が多いために混乱を避ける必要があるため、などの理由による。また、友人たちからは第一の名で呼ばれているのに母親からは第二の名で呼ばれるという例もある。この場合は母親が、その第二の名の与え手である近親を思いで、あえて使っているということであった。しかしこれらはいずれも稀な例であり、第一の名以外の名が日常生活で使われることはほとんどない¹⁰⁾。

第一の名は、近親からもらう場合もあれば、両親の好みでつけられる場合もある。近親からもらうものとしては、たとえば家族では長男は父方祖父（FF）の名を受け継ぐとされてきた F 村のある家族の例が挙げられる。この家族の場合、ここ数世代は「シャルル Charles」と「アドルフ Adolphe」という二つの名が世代ごとに交代で現われている。しかしこの家系でも、最後のシャルルは自分の長男にアドルフではなく「ピエール Pierre」という名をつけたので、この伝統もそこで終わってしまった（ちなみに、ピエールには娘しかいないため、この名前の継承はここで終わっている）。この家は子供のなかでも特に長男が重視される一方、父親や祖父の権威が強く、その意味で「家父長的 patriarchal」と周りの人から尊敬されることもあった家族である。このシャルルとアドルフのように近親の間で名前のやり取りがなされる場合、一つの家族の間で流通する名は限られてくるので、村人からもある特定の名が特定の家系と結び付けて見られることになる。この場合は名は一定の親族に個人を分類する機能を担う。一方、第一の名を近親以外の者からもらう場合、その動機は、流行によるもの、守護聖人の特性を子供に託そうとするもの、あるいは単に呼びやすさによるものなど様々で、一般原則を示すことはできない。この場合は名は両親（名付け親）による何らかのカテゴリーへの子供の分類づけとなる。

これに対し第二の名と第三の名はカトリック信者の場合は代親の選択と関わり、そこにはある程度の規則性がみられる。代親は人の一生に関わる通過儀礼のうち主なもの（洗礼、

⁹⁾ 同じカトリック信者でも、守護聖人に対する意識は人によって様々である。ある人は、神に直接祈るのは少しはばかられるので守護聖人に祈ったほうが祈りやすいと述べ、別の人は守護聖人に祈るのだったらイエスや聖母マリアに直接祈ったほうがいい、と述べている。また、守護聖人をほとんど意識していない人も多い。子供のときは自分の守護聖人の祭日には家族に祝ってもらえるが、大人になるとそのようなこともなくなる。

¹⁰⁾ 古い墓には、墓石に刻まれている名と村人が記憶している名（すなわち通常の社会的行為で使われていた名）とが異なっている例が一つだけある。第二次大戦前の村に「ジュリー Julie」と呼ばれていた女性がいたが、ジュリーは彼女の第二の名で、墓石には第一の名である「テレーズ Thérèse」が記されている。しかし、なぜこのように異なっているのかについて知っているものはいなかった（彼女の近親はすでに村を離れて久しかった）。

表 6: 代親の選択

家族	子供	代父	代母	備考
A: 父は 1901 年生	第一子♀	FF	MM	FM は年をとりすぎているので FZ に
	第二子♀	MF	FZ	
	第三子♂	FB	MZ	
	第四子♀	FZH	MZ	
	第五子♂	MF	FBZ	
B: 父は 1903 年生	第一子♀	MB	FZ	父親には兄弟はいなかった
	第二子♂	MB	FFZ	
	第三子♂	FZH	MmZ	
C: 父は 1929 年生	第一子♀	FF	MM	FM はすでに亡くなっていた
	第二子♀	MF	FZ	
D: 父は 1949 年生	第一子♀	MB	FZ	母親に兄弟は一人しかいなかった
	第二子♂	FB	MM	
	第三子♂	FB	MMZ	
	第四子♂	MMZH	FZ	

初聖体拝領、結婚式など)に参加し、また、子供が小さいうちは誕生日やクリスマスには贈り物をするという役割を果たすが¹⁵⁾、一般的な人々の説明によればその代親の選択は、第一子には父方祖父(FF)と母方祖母(MM)が代親に選ばれ、第二子には父方祖母(FM)と母方祖父(MF)が選ばれる。それ以降は子供のおじやおばなどの傍系尊属の間から順番に選ばれる(重複して選ばれることはない)。そのため、子供の数が多くなると末のほうの子供には系譜的に遠い人が代親に選ばれることになる。代親の選択で重要なことは、必ず父方親族と母方親族から一人ずつ選び、父方と母方のバランスをとることである。しかし、このような原則はあくまでも原則にすぎず、状況によっては厳密には適用できない(たとえば、一方の祖父がすでに亡くなっていたり、あるいは一方の親に兄弟がいないなどの理由がある)のみならず、仮に状況が許しても厳密には適用されないことも多く、たとえば近親以外の親しい友人や、子供が生まれたときにたまたま下宿していた非親族の者を代親に選ぶこともある。最近では、祖父母はすでに新しい子供から年齢的に離れすぎているから、という理由で第一子や第二子にも傍系尊属(すなわちオジやおバ)を代親に選ぶことが増えてきている。かつては、家父長的慣習ゆえに家庭内での父親や祖父の権威が強く、第一子の代親に祖父母を選ぶのには彼等の権威の強さのゆえである、という説明をする者もあったが、その説明の可否はともかく現在では祖父母の権威も強権的なものではなく、代親は親と同世代の親族や非親族から選ばれるようになっている。現在、代親の選択に関して重要と見なされるのは、家族の権威よりもその子供と代親との関係なのである。表 6 は代親の選択のいくつかの例である。

名はその名の与え手に因んでつけられるため、名はその与え手にまつわる様々な記憶と結び付き、その記憶を象徴する。そのため、名は近親からもらうことが多いということは、

¹⁵⁾ 歴史的には、代親は生みの親に代わる法的義務を負っていた(実の親の死後、子供の養育の義務があった)が、もちろん現在ではこのような法的義務はない。

姓とは別の形で名がしばしば家族の記憶への指標となりうるということでもある。ただし実際にこのような家族の記憶が名を呼ぶことを通じて喚起されるのは、人生上の通過儀礼（初聖体拝領や結婚式など、親族が集まり、かつ代親も集まるような機会）などの特別の機会においてのみであり、通常の日常会話においてはその名にまつわる親族の記憶はほとんど喚起されたり参照されたりはしない。しかし、親は子供に自分が身近に感じる人の名を与えるので、その人と親の関係の親しさが命名法の上では子供の人格の基礎の一つとして与えられていることを示している。

このように名は、守護聖人と名の与え手を参照し、二次的にはその名の与え手の経験を参照する。しかし、特定の家系の指標となることがある以外は、名がその名を持つ人の社会的カテゴリーを指し示すということはない。

通常の日常会話では、少し親しくなるとすぐに名が名指しに使われるので、友人同士は互いに名で呼び合う。また、子供や学生は出会ったときから名で呼び合う。この時の代名詞は必ず親称である。このように、敬称や姓と比較したとき、名はより親しい関係において使われる。そして、「よく話をすること *discuter bien*」でより親しさを増し、名で呼び合う関係になることに高い肯定的な価値が与えられ、T/V システムと同様に、一度名で呼び合う関係になると姓で呼び合う関係に戻ることはない。その意味で、名を呼び合うことは親しい関係の表現でもある。しかし通常は、会話の当事者たちもある個人の名の与え手についての情報を持つてわけではないので、会話においては名の与え手やその経験への参照は意味をなさない。同様に守護聖人への参照も、聖人信仰がそれ程強くないという現状では、会話の当事者にとって大した意味はない。

名は家族内での名指しにも使われる。しかし家族内の場合、両親に対しては名が名指し語として使われることはなく、かわりに親族呼称が使われる。それ以外の尊属（祖父母などの直系尊属、および傍系尊属）に対しては、その人を示す親族呼称が必ず名の前につけられて名指し語となる。同じ世代の親族および卑属に対しては必ず名が使われる。ただし、オジとオイ同土のような世代が異なっている場合でも、年齢的にほぼ同じ場合は互いに名のみで呼び合うこともある。

ところで、命名システムの結果として、実際に命名に使われる名自体の数はそれ程多くはないため、日常会話においてはしばしば同じ名前を持った別人が何人も登場することがある。例えばある人が「フランソワ *François*」という名の人を、イトコや友人、幼馴染みなどの間に何人も持つことはよくあることであり、これらのうちの何人かが一つの会話の中に同時に登場するということも珍しくない。また、同じ村の中に同名の者が何人もいることは珍しくない。にもかかわらず現実の会話では、このような同名の人間が何人も登場することによって混乱するということは通常はない。このような状況において、名の与え手への参照もなしに個人の同定が混乱もなくなされるのは、二つの理由による。一つは、混乱を避けるために愛称が使われたり、第二の名などが知られている場合は第一の名の代わりにそれらの名が使われるからである。しかしこのような例はそれ程多くはない。二つ目のより重要な理由は、それぞれの名にはその名を担っている人にまつわる様々な出来事が結び付けられていて、会話の中では絶えずそれらの出来事が喚起されるからである。この場合、個人の同定は名とその人の経験や出来事が組み合わされてなされ、その個人はその経験における主体として提示される。

したがって、会話における名の同定の機能は、名の与え手や守護成人よりも、その名を担う人が経験してきた出来事に参照することにより満たされる。逆に言えば、一人の個人は名を通してこれらの経験と結び付けられることで、一人の行為者として認識されるのである。

5) あだ名

あだ名 *sobriquet* は家族やごく親しい友人間でのみ使われるため、名以上に親しい関係に対応する。1960年代ころまでは村の誰もがあだ名を持っていたということだが、現在ではほとんどあだ名が使われることはなく、親近感を表現する時にはその代わりに名に基づいた愛称を使うことが多い。老人たちが覚えているのあだ名のいくつかは表7のとおりである。

このように、あだ名は一種のその人物をめぐる記述であり、その指示機能には分類機能よりも象徴機能が強く結び付いている。この表から、あだ名には大きく分けて二つの参照枠組みがあることがわかる。一つはその人の身体的社会的特徴(例4から例10)であり、もう一つはその人の身の回りに起きた特徴的な出来事(例11と例12)である。それぞれについて見てみよう。身体的社会的特徴が参照されると、まずその人の実際の特徴の一つが選択されてその個人の指標となっている。例10ではその特徴が直接擬態語という形であだ名となっているが、例4から例9においてはさらに、それらの特徴が隠喩によって置換されている。この身体的社会的特徴に基づくあだ名の場合、その人の数ある特徴の一つをその人を象徴するものとして取り上げ、さらにそれを一定の隠喩に変換するという操作がなされるが、このような由来はそのあだ名を知っている人達にのみ意味があるものである。これに対し、例11と例12では、ある出来事が取り出されて個人の象徴となっているが、この場合はその出来事自体が一定の人々とのみ共有されているものである。したがってあだ名は、一つの特徴や出来事のある個人を象徴するものとして固定化する操作過程があり、その操作が一定の人々の間に共通に認識されていることが前提となる。

表7: あだ名とその由来

	あだ名	意味	由来
1	Grand-Kéké	大きなケケ	?
2	Bâti de la Lure	?	?
3	Du-Gour	小さな丘	?
4	Chandelle	シャンデリア	シャンデリアのように大きな男だった
5	Petit-Pas	小さい歩幅	いつも小さい歩幅で歩いていた
6	Guidon	ハンドル	髭が自転車のハンドルのようだった
7	Orateur	演説家	話をしたり議論したりするのが好きだった
8	Coincoin	がらがら(擬態語)	あひるのような歩き方をしていた
9	Baron	男爵	彼の馬と車が素晴らしいものだった
10	Blaëble	ブルブル(擬態語)	話し方が下手で「ブルブル」と言っているようだった
11	Sessan	700	結婚したときに700フランしか持っていなかった
12	Millionnaire	百万長者	宝くじで二度300フランをあてた

一般に名前はその名前をつける者とその名前を使う者が必要であり、姓や名の場合は名付けるものは常に親族である。しかしあだ名の場合は必ずしも親族である必要はない。かつては村に、人にあだ名をつけるのが好きな人もいたということであるが、しかしそのような人はあだ名を与えられる本人に対して社会的に近い位置にいる者に限られる。それ以外の者があだ名をつけることは、『礼儀正しき *politesse*』の規範に反する。そして、姓や名は個人を名指すに当たって家族関係を越えて一般的に使われるが、あだ名はそのあだ名を名付けた者とその周囲の者というごく限られた範囲でのみ使われる。つまり、これら周囲の者の間でのみ、本人の肉体的社会的特徴やその人の身の回りに起きた出来事が、その本人を表すものとして共通に理解されるのである。ただし、そのあだ名は名付けられた本人に知られる必要は必ずしもない。例 10 はその例であるが、このあだ名は、昔、どもり癖のある子供に対して周りの友人たちがひそかにつけたもので、当の本人は自分がそう呼ばれていることは知らなかったという。この場合、あだ名は否定的なニュアンスをもつと共に、その秘密性を強める。

このようにあだ名が使われるのは、個人の特徴にまつわるエピソードや出来事を互いに共有できる社会関係があるからであり、そこで共有されるエピソードはしばしば外部の人の接近が制限されるような秘密というニュアンスが付される。そのため、そのあだ名が流通する親密な社会関係ではエピソードや出来事と信頼が共有され、その社会関係の外部とは区別される一種の仲間意識が生み出される。こうしてあだ名により個人には、秘密を共有する友人たちにより姓や名が示すものとはまた別の独自のアイデンティティが付与され、あだ名は親密な社会関係を再生産する。

このようなあだ名が生まれるためには、まずその前提として親密で日常的な社会関係が存在しなくてはならない。しかし現在は、カフェなどの村人同士が集まりあだ名を作り出すような場所も、祭りなどの人が集まる機会も現在は少なくなり、人々はむしろ村の外に社会関係を拡大している。若い人々には出会いの機会が増えてきているということができるが、老人たちにして見れば村の社会関係が希薄になることは、人々が自閉して行くような寂しいことに映るようである。そのため、老人たちにあだ名の話を訊ねると、一様に昔の良い時代を思い出すように楽しそうな表情を浮かべる反面、そういう時代がもう失われてしまったというノスタルジックな表情も浮かべる。このように、現在あだ名が使われなくなったのは、互いにまとまって諸個人の経験を互いに共有しあう仲間集団のようなものだったかつての社会関係が、人々が一度に集まる機会が減少するにしたがって断片化してしまったからである。出来事やエピソードが広く共有されないとき、出来事を指示する機能はあだ名ではなく名で十分となる。あだ名の使われなくなった現在、かつてあだ名が使われていた場では、名を使うか、あるいは親近感を表現するために愛称を使うかのどちらかである。この愛称は名を縮めた表現 (*diminutif*) であり、たとえば「ミシェル Michel」という名の人は「ミミ Mimi」という愛称になる。したがって、愛称には親しみや親密な関係性は表現されるが、あだ名が表現していた出来事や本人の特徴は直接には反映されない。

6) 親族呼称

親族の内部においては、名やあだ名のほかに、親族呼称が名指し語として使われる。親

族呼称は、社会的ダイクシスであり (S. Levinson, 1983: 89)、そこには名指される者と名指す者の親族関係が表現される。この時、親族呼称はその背後にある一定の親族集団を前提とする。とはいえ、ジュラでは親族は双系的で一つの集団を構成せず、親族と非親族の境界は必ずしも明確ではなく、Ego からの距離と状況に応じて親族の範囲が変化する。そこでまず、親族呼称について見てみる前に親族名称を概観しておこう。

ジュラの親族名称は図 4 のとおりで、一般のフランス語の親族名称とほぼ同様のものである¹⁶⁾。これらの親族名称は Ego とその親族との関係性を指示し、その関係性を担う特定の人物を差し示すレファレンスには使われるが、名指し (アドレス) には使われることはない。ジュラの親族名称の特徴は次のとおりである。まず、親族と姻族とが区別される。ついで、親族においては、近い親族に関しては世代、および直系か傍系かによって親族名称が区別される一方、遠い親族は世代の相違や系譜上の距離にかかわらずすべて同じ *petit(e)-cousin(e)* という言葉で呼ばれる。この *petit-cousin* という言葉で呼ばれる遠い親族は、系譜関係の認識はあるが、通常の日常会話では親族として扱われることはほとんどなく、*petit-cousin* 同士の間には共通の祖父母や曾祖父母などの葬儀に参加する以外には、親族関係によって規定されるような義務関係を持つことはない。その意味で、Ego にとって *petit-cousin* は親族と非親族の境界に位置していると言うことができる。一方 *par l'alliance* と呼ばれる姻族については、通常、配偶者のごく近い血族 (両親、兄弟、子供)、および兄弟姉妹の配偶者は *beau-/belle-* という接頭辞をつけた名称が用いられるが、それ以外の姻族に関しては血族と同じ親族名称が用いられ、姻族が血族に同化される傾向があり、たとえば配偶者のイトコにも血族におけるイトコをさす *cousin* という語がしばしば適用される¹⁷⁾。

次に親族呼称であるが、表 8 に見られるように、特別の親族呼称が適用されるのは直系尊属および第一次の傍系尊属だけである。また、この親族呼称には血族と姻族の区別は全くなく、ここでも両者の同一視という現象が見られる。そして、オジ/オバや祖父母のように同一の親族呼称が適用される対象が複数いる場合には、*l'oncle Hubert* (ユベールおじさん) や *l'oncle Paule* (ポールおばさん) のように、親族呼称のあとにその人の名が加えられて互いに区別されるが、名のみで呼ばれることは決してない。したがって、親族内では世代を超えた関係においては、一方が親族呼称で、他方が名で呼び合うという非対照的な名指しの関係が生まれ、互いに名で呼び合っている同世代の親族成員間の関係とは対照をなしている。

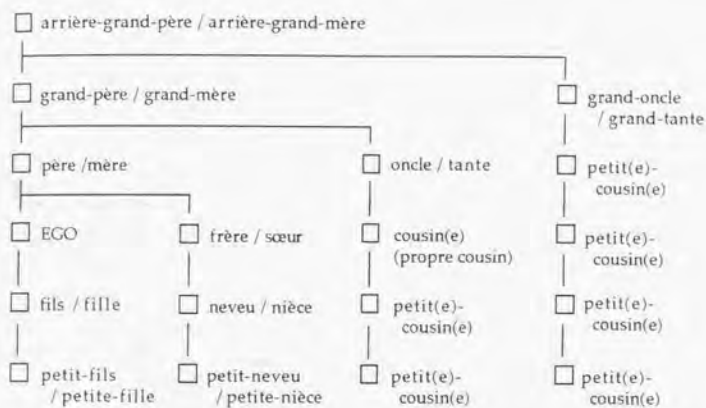
親族呼称が示す Ego とその親族の関係は、状況に応じて変化するようなものではない。そのため、通常の友人たちの場合には、敬称から姓を経て名へという名指し語の変化が確

¹⁶⁾ フランスの親族名称の優れた体系的な成文分析としては、フランスの親族名称一般についての研究である P. Maranda (1974) と、北フランスのロレーヌ地方の事例研究である C. Karnoouh (1971) とがある。ともにやや難点はあるものの、ジュラの親族名称に関してこれらの研究に特に付け加えるものは持たない。また T. Jolas et al. (1970) はブルゴーニュ地方の親族名称の優れた分析を行っているが、そこで見られた系譜関係に基づく親族の Ego 中心的な明確な階層的カテゴリー化は、ジュラでは見られない。

¹⁷⁾ 息子が結婚すると、息子の配偶者を「ピエス・ラポルテ *pièce rapportée*」(もとの意味は「交換商品」) と呼ぶことがある。しかしこの表現が使われるのは非常に稀で、ある女性には前掲的な表現であると述べている。

図 4：血族と姻族の親族名称

血族



姻族

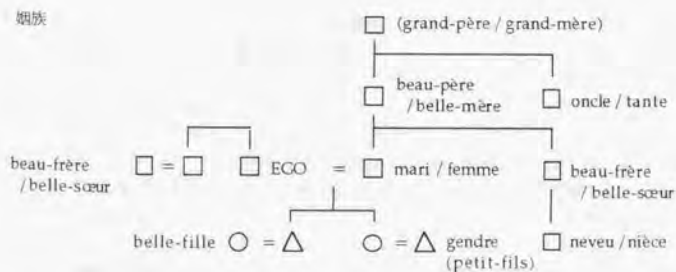


表 8: 親族呼称および親族呼称と名や姓の組み合わせ

■親族呼称

	0 傍系	1	2
+3	papy / mamy スは pépé / mémé		
+2	papy / mamy スは pépé / mémé	tonton / tata	
+1	papa / maman	tonton / tata	
0 世代	(Ego)	(名)	(名)
-1	(名)	(名)	(名)
-2	(名)	(名)	
-3	(名)		

■親族呼称と名や姓の組み合わせ

アドレスの対象	アドレスにおける親族呼称と名や姓との組み合わせ
père / mère	"papa / maman (+ 名)"
grand-père / -mère	"pépé / mamy + 姓または名"
oncle / tante	"tonton / tata + 名"
arrière-grand-père / -mère	"pépé / mémé (+ 名)"
grand-oncle / -tante	"tonton / tata (+ 姓または名)"

認できたが、上位の世代の親族に対しては常に特定の親族呼称が用いられ、時間により変化することはない。したがって、親族内においては名指しによって表現される人間関係は状況には依存せず、始めから世代に基づいて構造化されている。

親族名称と比較した場合、この親族呼称が実際の会話のなかで持つ特徴は次の二点である。一つはその拡張であり、もう一つはその客観化である。

親族呼称は、しばしばその指示対象が拡張される。たとえば、祖父母を名指す *papy* (*pépé*) / *mamy* (*mémé*) という呼称は、曾祖父母にも適用される。同様に、オジ / オバを名指す *tonton* / *tata* はオオジ / オオバ (すなわち、祖父母の兄弟で、親族名称では *grand-oncle* / *grand-tante*) にも適用される。しかし、両親を名指す語である *papa* / *maman* は拡張はされない。それゆえ、親族呼称が示す対象は、直接の両親、祖父母以上の直系尊属、そして第一次の傍系尊属の、3 つに大きく分けられることになる。親族呼称がダイクシスであることを考えるならば、ここでは Ego にとって両親が占める特別の位置が明らかになる。

また、親族呼称はダイクシスではなく、固定された家族内の地位を表す表現として客観化されることがある。たとえば、ある家の老人たちは単にその孫たちからのみ *papy* (*pépé*) / *mamy* (*mémé*) と呼ばれるだけでなく、その老人たちの子供たちを含めたそれ以外の家族内外の者もからしばしばこの呼称で呼ばれるからである。実際、結婚して新たに子供が生まれたとたん、特に子供たちの前では夫婦が自分たちの両親を *papy* (*pépé*) / *mamy* (*mémé*) と呼び始め、*papa* / *maman* という呼称と併用される。これは、*papy* (*pépé*) / *mamy* (*mémé*) という言葉は発語者にとって一定の系譜関係を示すというだけでなく、その家族

内で彼等が占めている客観的位置をも示すからである（この後者の場合、必ずしも三つの世代が同居しているとは限らない）。同様のことはある程度 *papa / maman* にも言うことができる。そしてこのように親族呼称が客観化される場合、これらの親族呼称にはしばしば定冠詞がつけられ、さらには「ジュリアン の *maman*」というようにテクノミーの表現がなされる。

姻族の場合も、以上のような親族呼称がそのまま適用される。しかし、代名詞の使用に関しては、本来は他人同士である姻族間には血族間とは若干の相違がある。同世代の間では、結婚によって関係が生まれた当初は姻族同士は二人称敬称代名詞で呼び合うが、夫婦に子供が生まれたり頻繁に行き来するようになると親称で呼び合う関係に移行する。しかし、上の世代の姻族に対しては、頻繁な行き来によってかなり親しくなる場合を除いて、通常は敬称を使い続けることで敬意を表現し続ける（通常は親称を使うのは心理的に抵抗があるし、親称を使うようになった場合でも敬意を示す表現は不可欠である）。

以上から、親族呼称上はまず異世代間関係と同世代間関係が区別されることがわかる。前者では呼称は対称的ではなく、上の世代の者には親族関係を示す親族呼称が不可欠なため、名指しにおいては常に世代の相違が反映される。特に直系尊属に対しては名指し語が親族呼称以外のものに変更されることはありえないが、傍系尊属の場合は名に変更されることが有り得る。これは、Ego にとって直系の関係が親密な関係のなかにおいて基本的な重要性を持つのにに対し、傍系の関係はそれからやや遠い関係となるからである。一方、同世代間では対等な名指し関係におかれる、むしろ友人関係に類似してくる。特にイトコ *cousin* ないしはそれ以上の遠い関係は、実際の日常的な社会関係の在り方も友人関係に近いものとなっていく点で、同じ傍系でも財産の分割などを巡って Ego と直接の法的権利関係に置かれる兄弟姉妹とは異なっている。

このように名指しから見た親族関係は、異世代間と同世代間の二つのカテゴリーに分けられる。この二つのカテゴリーに直系と傍系の区別を重ねると、Ego を中心とした同心円状の親族関係の拡がりが見えてくる。そして両親と子供が Ego に最も近い位置にいて特に重要となり、Ego からの距離に応じてその関係の親密さは減少し、反対の極には *petit-cousin* と呼ばれる周縁的なカテゴリーが置かれる。

（5）人格指示詞による社会関係の分類体系と人格

以上のように、生活空間における人格表現は人格指示詞によってなされる。そして、親族名称を含めた名指し語全体は、発語者と指示された者との関係を表現している。その関係は、名指し語においても代名詞における T/V システムにおいても、同じように秩序づけられている。すなわち、挨拶行為に最も典型的に見られるように、行為主体の社会的な認知の表現は対一の形をとり、かつ、一定の原則に基づいて人格指示詞が選択される。この時、人格指示詞の選択を支えているのは、「遠い *éloigné*」関係か「近い *proche*」又は「親しい *intime*」関係かという、親しさの度合である。そして代名詞の場合はその度合に応じて親称と敬称が使い分けられ、名指し語の場合は親しみが増していく順に敬称、敬称+姓、親族呼称、名、あだ名が使い分けられる。そしてこのような人格指示の秩序に反する場合は、「親切さ」や「礼儀正しさ」に反するとして批判を受けることになる。

このように、代名詞や親族呼称だけではなく人格指示詞の全ては、発語者とする個人の関係をも表現するダイクシスとしての特徴を持っている。このことは次の二つのことを意味している。第一に、S. Levinson が指摘するように (S. Levinson, 1983: 54)、ダイクシスは「いま、ここ」という発語のなされている実際の行為の場への参照により成り立っているという意味で、言葉の世界と現実の世界を結び付けるものなので、人格指示詞の体系は状況に応じて現実の世界を構造化する機能を持つ。第二に、人格指示詞は発語の場における発語者と指示された者との人間関係を表現することを通して、発語者自身をも一定の社会関係の中に分類しているということである¹¹⁾。言い換えれば、ある人格指示詞を用いてそれぞれの個人を指示することは、単にそれらの個人の人格を指示しているのみならず、自らを一人の人格として指示しているということなのである。それゆえ、人格指示詞の体系は生活空間における発語者自身の人格の在り方を表現している。

人格指示詞によって指示される社会関係には、関係が固定されたものと固定されていないものがある。前者は親族内の関係であり、後者は非親族間関係である。親族内関係では、世代の相違が上の世代に対する親族呼称の使用という形で常に表明され、その際に用いられる名指し語も変化することはない。これに対し非親族間関係では人格指示詞の使用は時間とともに変化していく。すなわち、初対面の者であっても、「よく話しをすること *discuter bien*」が評価され、頻繁に話しをすることによって「近い *proche*」あるいは「親しい *intime*」と表現される関係に移行していくことが期待されるのである。そして一度親しみを示す人格指示詞を使う関係に移行すると、その関係が逆戻りすることはない。その意味で、人格指示詞の示す社会関係の総体は階層的であり、その社会関係の秩序原則を表現する「近い *proche*」あるいは「親しい *intime*」という価値は、ジュラ社会における人格の定義と関わっていることになる。言い換えれば、ある個人にとってその生活空間は、さまざまな度合いの「親しい」人間たちから構成される空間なのであり、生活空間はこの「親密さ」の領域を中心としているのである。

このように、親族内関係では人格指示詞は固定され家族内部の社会的地位を示すが、非親族間関係では、人格指示詞は固定はされておらず、人格指示詞による人格認識にもその相手の社会的地位や社会構造への参照は伴っていない。したがって、人格指示詞の秩序から見た場合、親族と非親族は別の領域となり、前者では関係が固定化されているが、後者ではより親しくなることが求められている、と言うことができる。ここでこの二つの領域を、「家族的領域」と「非家族的領域」と呼ぶことにしよう。このような人格指示詞の体系をまとめると表 9 のようになる。

この人格指示詞の体系的階層秩序は、それぞれの名指し語が個人の名指しの際に参照する参照枠を通して検討してみると、興味深い事実が浮き上がる。この人格表象の参照枠と

¹¹⁾ このことは、O. Ducrot のポリフォニー論 (O. Ducrot, 1983) を使うとより明確に理解することができる。O. Ducrot は、発語行為を行う行為主体を「発語者 *je*」、発語において再帰的に指示される行為主体を発語行為を「発語者 *tu*」として区別するが（この時、発語者 *je* は言語行為を行う「私」であり、発語者 *tu* はその発語のなかで言葉によって指示される「私」であるが、両者は常に同じ主体を指示しているとは限らない）、ここでは、発語者 *je* は人称ダイクシスや社会的ダイクシスを発語行為のなかで用いることで、自分自身を一定の観点により発語者 *tu* として分類している（cf. 三浦, 1998）。人格指示行為においてこの分類の観点となるのが、人格指示詞の体系である。

表 9: 人格指示詞の体系

人間関係	代名詞	名指し語	
		非家族的領域	家族的領域
遠い/目上	vous	敬称	—
	vous	敬称+姓、姓	—
	tu	—	親族呼称
	tu	名	名
近い/目下	tu	あだ名、愛称	あだ名、愛称

名指し語の階層秩序の比較から、次の諸点が明らかになる(表 10 参照)。

[人格指示詞の特徴]

- ・人格指示詞は、ある個人を別のものを参照することで、人格として同定する。その時に参照されるものは、それぞれの人格指示詞に応じて一定ではない。それらの参照枠には次の二種類がある。
 - **カテゴリー的参照枠** 指示の対象となる個人を知らなくてもその名指し語自体から明らかになる参照枠で、個人は既存のカテゴリーに分類される。この時参照されるのは、普通名詞では一般的属性、姓では父系親族およびその社会的歴史的由来、そして名では守護聖人である。
 - **出来事的参照枠** その人を知らなければ意味をなさない参照枠で、個人はその個人の経験や個人的特徴といった一連の出来事に結び付けられる。
- ・普通名詞による人格指示は通常はなされないため、カテゴリー的参照枠のみによる人格指示がなされるのは親族呼称による場合のみであり、したがって家族的領域においてのみである。
- ・非家族的領域においては通常、出来事的参照枠がともなっている。このとき、出来事的参照枠を持つ人格指示詞はより親密な関係と結び付いており、カテゴリー的参照枠に基づく人格指示

表 10: 名指し語の特性

表現形態	一次参照	二次参照
(普通名詞)	属性	一般的カテゴリー
姓	父系親族	社会的歴史的由来
姓	父系親族	家族の歴史
親族呼称	親族関係	親族集団
名	守護聖人	カトリックの宗教世界
名	名の与え手	与え手の経験
名	個人の経験	
あだ名	個人の経験	
あだ名	個人の特徴	
あだ名	隠喩表現	個人の特徴

詞はより遠い社会関係に結び付いている。実際、出来事が参照枠に用いられるときは、その出来事が会話の参加者にある程度知られていることが必要なので、ある程度の緊密な社会関係が前提となる。

以上からわかるように、名指し語を用いてある個人を指示する時には親族関係またはその個人（およびその周囲の人の）経験が参照され、親しさが増すにつれ個人の経験への参照に重点がおかれる。このように、ある個人を人格として指示するとき、親族関係ないしはその個人の経験が重要な意味を持っている。そして、人格指示に当たって経験を参照することは、経験の共有を意味しているのである。こうした経験への参照による人格指示詞の用法が不適切で人格指示詞の階層秩序を乱す場合、それは「失礼 *pas poli*」なこととして批判される。普通名詞によるアドレスが通常失礼とされるのは、まさにこの経験への参照がなされていないためであろう。

このことから、ジュラにおける行為主体としての人格は次のようなものであることがわかる。すなわち、社会関係に家族的領域と非家族的領域があることに対応して、一人の人格にはある一定の家族の一員としての側面と家族関係に関わらない行為主体としての側面とがある。そして、家族関係の一員としての人格には家族関係に応じた位置が対応し、家族関係に関わらない人格はその個人的経験が基礎となっている。そしていずれの場合も、その経験を他の行為主体と共有することが「親密さ」の表現となっている。

このように、ジュラの人々の生活空間における社会的相互行為は、「親密さ」に基づいて組織化されており、その組織化の在り方から生活空間における人間関係は家族的領域と非家族的領域に区別することができる。このとき、「親密さ」はその生活空間内部における出来事の共有に対応している。それでは、ここで言う親密さは具体的にどのように生活空間の社会関係を組織化し秩序付けているのだろうか。そして親密さと結び付いている個人の経験とはどのようなものののだろうか。次章ではこれらの点を、家族的領域と非家族的領域の双方における人格指示詞の体系を特徴づける社会関係の特徴をそれぞれ検討した後、生活空間の核となる親密な領域はどのように形成されるのか、その親密な領域と社会的価値と人格概念とはどのように関連しているのかを通して、検討して行くことにする。

(1) 家族的領域

1) 家族の空間的範囲

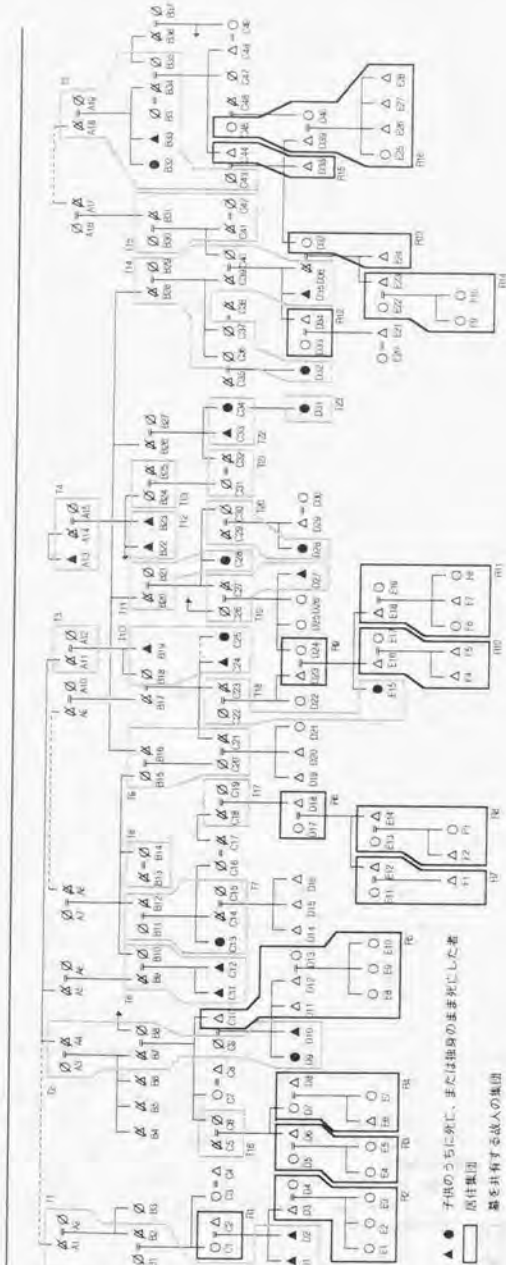
ジュラでは、日々の生活は家族を中心に行われる。その意味で家族はジュラの人々の生活空間の重要な構成要素である。北フランスの核家族優位の地域に属すジュラでは、親族は双系的の特徴を持つ。しかし個々の事例を検討してみると実際にはこのような単純な図式化は難しく、様々なヴァリエーションが見られる。従って、それらのヴァリエーションがどの様に生まれているのか、それが人格指示の体系とどの様に関わっているのかを検討することが必要である。親族名称および親族呼称が明らかにしたのは、家族的領域は Ego を中心に一定の広がりをもっていて境界が不明確なこと、そして世代や系譜によって構造化されているということである。この様な家族的領域内での関係は、家族内部の頻繁なつきあい関係によって常に確認され強化される一方、婚姻を通じて非家族的領域の人間を家族的領域内部に取り込むことで、再生産されている。以下では、家族的領域としての家内集団、家族的領域内の社会関係の構造的特徴、そして家族的領域を再生産するものとしての家族儀礼と婚姻について、それぞれ順に見ていくことにする。

ジュラ社会においてまず「家族 *famille*」と呼ばれるカテゴリーの範囲は¹⁾、親族名称が適用され親称代名詞で呼び合われる範囲である。しかし、先に見たようにその境界は曖昧である。イトコ同士の関係は家族関係と友人関係の中間のような、家族関係による規定と親しくなろうとする意思のまじり合った関係になるし、さらに遠い *petit-cousin* との関係は、血のつながりはあったとしても友人の関係に近くなり、必ずしも無条件に親しいというわけではない人間関係となる。また、姻戚同士の関係も、家族関係と友人関係の中間のような関係となる。

それでは、ジュラの人々が「家族 *famille*」という言葉を用いるとき、具体的にどのような人がそこに含まれているのだろうか。まず、系譜図を見てみよう。図 5 は、F 村の現在の約半分ほどの家族の系譜関係、世帯、墓を示す図である。この図は戸籍ではなく人々の記憶を頼りに再構成したものだが、この図の最初の世代の人々（20 世紀初頭に生きていた人々）は、わずかに老人たちや何人かの物知りを知っているのみである。F 村の家

¹⁾ 「親族 *parenté*」という言葉も「家族」という言葉とはほぼ同様の意味を持つが、やや固い表現であり使われることはない。

図 5. F 村の親戚、墓、居住集団



NB 図は、F 村の住人を全て網羅するわけではない。また、村を離れた人については必ずしも図に記してはいない。

- A1 と A2 血縁関係の認識はあるが、明確な系譜関係は不明
 A17 と A18 血縁関係の認識はあるが、明確な系譜関係は不明
 B3 の墓 (先祖の相子) だが、子を持たずに死に
 B22、B23、B24 の姉妹
 自殺の噂もある
 F 村の村長を勤めた小作人で、墓所には「F 村の元村長」と記されている
 C11 と C12 第一次大戦にて戦死
 C16 と C17 ボリニー進軍の村に居住
 C21 亡
 C25 亡
 C26 亡
 C35 と C36 村を離れた；C36 は故郷の村に暮らされるのを望んだ
 C37 と C38 村を離れた；新葬儀を執り、子を持たなかった
 C44 1992 年に死に、T5 の墓に葬られる
 C45 ボリニーに住んでいたが、大の死後、親大のいる F 村にやってきました
 C49 の姉妹
 D31 孤児
 E21 コミュニズムを移したが、結婚を期に、墓の住居別の村に移った
 T3 T10 の墓に付属している

第 4 章 人格の構成

族を幕や世帯という点から見ると、一族のほとんどをまとめている幕もあれば夫婦のみの幕もあり、大家族もあれば核家族もあり、ヴァリエーションが大きいことがわかる。また、フランス社会研究においてしばしば指摘されている婚姻関係の再構築 *renclenchement d'alliance*²⁾ も若干ながら見られる。婚姻後の居住規制も、夫方の場合が多いとはいえ、妻方居住も見られる。このように、確かに一定の父系重視の傾向は見られるが、親族における傾向について村の人にインタビューをすると、必ず「でもそれは規則ではない、そうしなくちゃいけないということではない」と付け加える。このような、柔軟性は代親の選択にも見られたものである。

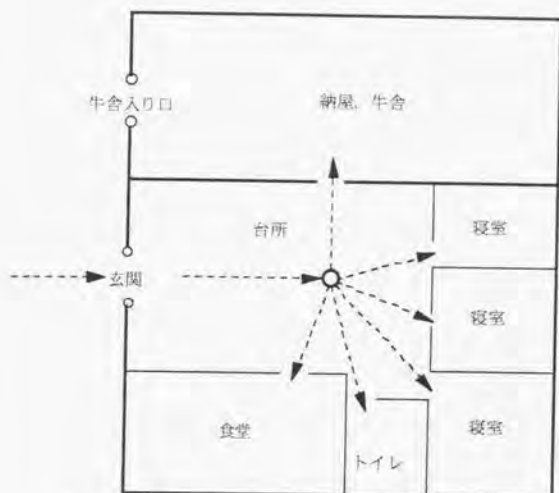
「家族」はコーポレート・グループではないので、社会集団としても家族の範囲を決めることは困難である。とはいえ、日常会話の中では家族はしばしば姓や家長（その家族で最も年長の男性）の名によって表現され、その結果、「家族」があたかも一つの社会集団であるかのように表現されることがある。たとえば、ある土地を巡るいざこざについての会話のなかで、「それはジャン・B. がやったのさ」（ジャン・B. は図5の系譜図中ではD23に当たる）という話題が出たときがあったが、そのときに問題となっていたのはジャン・B. という名の個人のみではなく、彼が代表する彼の家族・B. 家の成員全体、すなわちジャン・B. とその妻、その息子たちと息子の妻たちであった。この例が示すように、名と姓によってある個人が指示される場合でも、その家族全体が指示されることがある。ただしこの場合、この様にして名指されるのは通常男性のみであり、かつ、その際に指示される家族も、その男性の姓やその男性自身によって代表される父系のラインが強調される。このような家族の集団性をさらに強調するときは「クラン *clan*」という言葉が使われる。この言葉は常に「政治的権力を手に入れようとしてまとまって行動を起こしさいきいを起こす家族」という、非難を含む否定的なニュアンスで使われるが、この際には家族は一つのもまとまりとして示されている。しかしこの場合も、親族関係にある一連の人々のどこからどこまでをクランと指すのか、そのクランは常に統一された政治的意思を本当に持っているのか、という点は必ずしも明らかではなく、状況に依存するため一般的な構造的原則を示すことはできない。その意味で、実際の村の政治が「クラン」という集団を単位として展開しているとは言い難い。

最も目に見える形で「家族」を表現しているのは世帯、すなわち一つの家に住んでいる居住集団で、この居住集団は経済、教育、社会、宗教、道徳など、様々な機能を担っている³⁾。また、共有林などの権利の分配の際には、「家族成員の数 *nombre de têtes*」とともに「かまどの数 *nombre de feux*（＝世帯の数）」が配分の単位として考慮される。第一プラトーの伝統的な石造りの農家は近世のフランス軍の侵入前後に建てられたものも多く、

²⁾ 婚姻関係の再構築とは、二つあるいはそれ以上の血族集団の間で何度か通婚が繰り返される現象で、フランス農村社会研究ではよく報告されている。特に、T. Jolas et al. (1970) および M. Segalen (1985) が有名である。

³⁾ J. de Pina Cabral は、関係の集まりとしての親族、土地に関わるものとしての親族、および一定のものを共有するものとしての親族の3つの側面がほとんどすべてのインド＝ヨーロッパ諸国においては同一の言葉で示されることを指摘し、ヨーロッパ研究をする際には、これらの一つだけ取り上げて議論することは無意味であるとしている (J. de Pina Cabral, 1989: 337-338)。同様に、ジュラにおいてもこの3つの側面は分析的に分けることは難しい。ジュラの家族の在り方にさまざまなヴァリエーションが見られるのは、このような親族の複合性のためと考えられる。

図 6：家のなかの部屋の配置



各部屋の大きさの関係は実際とは異なる

2 階建てないしは 3 階建てのかなり大きなもので、物置を含む人間の居住部分と牛舎部分からなっている。新しい家では牛舎は別に建てていることが多く、人間の居住部分のみからなる。かつて、村の人口が多かったころは一つの建物に（必ずしも親族関係にはない）別々の家族が、それぞれ別々の玄関を持って住んでいたこともあったが、現在では一つの建物に一つ以上の家族が住んでいる場合は若い夫婦とその両親夫婦である場合に限られる（この場合も玄関は別である）。家とその周りの屋敷地の空間構成は社会関係の質と密接に関係している。家の周りには庭があり、庭は背の低い石の塀で囲っている場合とそうではない場合があるが、どちらの場合もその庭より内側がその家の領域として、前置詞 *che*（～の家で）の指し示す範囲となる。ただし、この境界は厳密なものではなく、ある程度の出入りの自由な領域である。

家族的領域が非家族的領域から区別される境界は家の玄関である。かつては外部の者は全て玄関で対応をし、決して玄関より内側に入れることはなかったという。家の内部（居住部分）は大きく分けて 3 つの領域からなっている（図 6 参照）。まず第一は、玄関の扉を開けたところにある台所である。ここは日常的に家族が時間を過ごし、食事をし、あ

るいはテレビをみたりする場所で、現在は外部の者も通常はここまで迎え入れられる。第二の領域は食堂（ダイニング・ルーム *salle à manger*）である。食堂は通常、クリスマスのような特別の機会の夕食会など、改まった機会に使われる部屋で、年代ものの食器棚や家族の写真、そして場合によっては絵やピアノなどが置かれている。この部屋に入れるのは通常は親族関係にある者が親しい友人である。第三の領域は寝室で、寝室は夫婦と一人一人の子供それぞれに与えられ、夫婦の一体性と各子供の個性が保証される。寝室は極めて私的な場所で、カトリック信者の場合は枕もとには十字架と聖母子像が置かれる折りの場でもある。通常はその寝室の主以外は、特別の場合を除いてごく近い親族や友人しか入ることはない。このように、家の空間構成は親しみの度合いによる階層的人間関係の表現となっている¹⁾。

ジュラは、南フランスのような *maison* 社会ではなく、南フランスの「ウスタル *oustal*」のような居住集団を指し示す特別の用語はない。しかし建物と居住集団とが全く別ものと考えられている訳ではない。それは前置詞 *chez* の使い方に現れている。この前置詞は単に一定の空間を指し示すだけでなく、居住集団をも指し示すことがしばしばあるからである。

かつて村の人口が多かった時代（おおむね第二次大戦前後まで）には一つの家屋の中に複数の世帯が存在し、玄関も別々にしていた。この時代の家族調査票を見る限り、これらの建物を共有する世帯の間には近い血縁関係がない場合も多かったようである。前置詞 *chez* は、空間としてはそれぞれの世帯が生活する個々の世帯空間を指している。そして集団が指し示される場合も、指示されているのは一つの家屋という建物に住む人間全員ではなく、共に食事をして生活を共有しているそれぞれの世帯であり、この様な集団は「かまど *feu*」を共有している、という言い方で特徴づけられている²⁾。この「かまど」を共有する居住集団には血縁関係のないもの（例えば下宿人）も含まれ、そしてたとえ血縁関係がなくとも同居人は「家族」の一員とみなされ、「俺たちや家族だよ（*Nous, on est famille*）」という言い方がなされる。

ところで、ロレーヌ地方の Grand Fraud 村で調査をした C. Karnouh は、「家 *maison*」は村落共同体の地理的な権利関係（たとえば井戸の使用権など）と結び付いており、親族関係にのみ関わる「家族 *famille*」とは別の意味を持っていると指摘している（C. Karnouh, 1980: 172-173）。ジュラの場合も確かに、「家」は常に親族関係（あるいは一定の家系）のみが関わっているというわけではない。一つの建物に様々な家族が時代とともに次々と移り住んで行くのが通常である。そのようなとき、しばしば「あの家族は昔、こ

¹⁾ フランシュ・コンテの家屋について C. Royer も類似した3つのカテゴリーの存在を確認しているが、私が確認したものとは若干異なっている。彼によれば、家屋の周囲の半公共的な場が「エザンス *aissance*」、台所や玄関など家族がいつも集まり来客を迎える場が「アウト *outro*」、そして最も私的な空間である寝室や食堂が「ポワール *poêle*」と呼ばれ（C. Royer, 1977: 56）、この順に入ることのできる人が制限される。なお、私の調査ではこのような特別の用語の存在は確認できなかった。

²⁾ 通常のフランス語では、建物としての家を共有する集団はグループ・ドメスティック *groupe domestique* (*domestique* という単語はラテン語で「家」を意味する語 *domus* に由来する)、「かまど」を共有する集団（すなわち世帯）および空間はフォーワイニ *foyer*（< *feu* 「火」）とそれぞれ呼ばれ、両者は区別される。ジュラの場合、前置詞 *chez* によって表現されるのは後者の方である。

表 ii: 近代の F 村の世帯構成の変化

	1926	1911	1876	1856
単独居住	10 (23.3%)	11 (22.4%)	7 (12.3%)	7 (12.3%)
核家族	25 (58.1%)	26 (53.1%)	33 (57.9%)	37 (64.9%)
直系家族	3 (7.0%)	5 (10.2%)	6 (10.5%)	5 (8.7%)

の家に住んでいたんだ」、あるいは「彼はこの家で生まれたんだ」という様な言い方がなされる。この場合、建物としての「家」はその家にまつわる様々な人を指し示す、記憶の指標の一つとなる。同様のことは農作業小屋を意味する「フェルム *ferme*」という言葉についても言うことができ、「あの家族はこのフェルムにいたんだ」という様な言い方がされる⁹⁾。しかしまた、そのような建物としての「家」の中に、家族の社会生活の基盤として一つの「居住集団」が存在する。こうして「家」と「家族」の二つの概念は混同される。そのため、一方では共有林を巡る権利の分配に見られる様な法的権利主体でもあるが、また同時に親密さの生まれる家族的領域を指し示すものともなる。

このように、「家族」自体は Ego を中心に境界がなく広がっていくものであり、制度的にその範囲を特定することは難しい。とはいえ、一つの住居を共有する居住集団は、その家族関係の広がりのおかげで Ego にとって法的にも社会関係の上でも中心的な役割を果たしている。したがって、居住集団内部の家族関係と居住集団の外に広がる親族ネットワークとは、たとえその境界が曖昧であったとしても別々に考える必要がある。そして、こうして構築される親族関係は、日常的社会行為の場と家族儀礼の場において再確認・再生産され、さらに婚姻に基づく子供の誕生によってその再生産は保証される。このうち、日常的社会行為の場での親族関係の再生産のメカニズムは、前章で見た名指しや会話の分析で既に検討したものである。そこで以下では、親族関係の特質を居住集団の内部の親族関係と居住集団に外部に広がる親族ネットワークの両者に分けてそれぞれ検討し、その上でこれらの親族関係の再生産がなされる、家族儀礼と婚姻について検討する。

2) 居住集団内部の構成

居住集団の内部において世帯を構成する人の親族関係は多様である。フランス革命期の報告では、アンシャン・レジーム期のジュラでは概ね、傍系の *cousin* や *petit-cousin* に至るまでの血族や姻族を含めた数世代が、一つの家に同居する大家族が普通だったようであ

⁹⁾ 辞書的には、*ferme* という言葉は「農場」を意味するが、ジュラでは農作業のための小屋（作業道具が置かれ、牛が飼われ、あるいは干草が保管されている）を意味し、伝統的な家では人間の居住部分とともに一つの建物を構成しているため、「家」とほぼ同一視される（ただし *ferme* という言葉は仕事と結び付く）。しかし、農業経営規模が大きくなった現在では、このような小屋は軒のいずれに別に建てることが多い。なお、ジュラと同じく核家族・均等相続が優位のブルゴーニュ地方では、姓がもたらすその「家」の居住集団を指示するのに使われている例が報告されている（F. Zonabend, 1977: 263）。ジュラの場合は姓はそれ以外でも用いられ、また、居住集団を示す場合も、通常はその居住集団を核とした一連の親族を総称しているものであり、必ずしも境界のはっきりした特定の居住集団を示しているわけではない。

るが (J-M. Lequinio, 1976: 247) (1), 現在ではむしろ規模は小さくなっている。表 11 は F 村での 19 世紀半ばから第一次大戦後までの世帯構成をまとめたものであるが、ここから明らかにするのは、1856 年の時点で全世帯数の三分の二近くが核家族であったということ、そしてその後も全世帯の半数以上が核家族であったということである。このことは、子供は結婚するとしばしば両親とは別に暮らす、あるいは両親が別の家に移る、ということを示している。一方、数少ない直系家族の場合は、妻方の両親または片親とともに夫婦が暮らすことも多く、その意味で父方居住が優位であるとは言えない。また、数少ない拡大家族のなかには夫婦の兄弟やその子供も同居している場合もあるが、しかし二組以上の同世代の夫婦が同居することはありえない。

人々の話によれば、1960 年代ごろまでは家族は「家父長的 (patriarcal)」で家長の権威が強く、その配偶者を始め他の家族の成員は皆その権威のもとに置かれたという (1)。「あそここの家のドニーズ はまるで夫の女中のようだった」と言うような話は実際少なくない。そして子供たちのうちでは長男が、建物としての家と農業経営を継承する者として最も重視され、彼は結婚後も父親の近くに住むことを期待された (彼にはまた、祖父の名を貰うという特権があった)。建物と農業経営を継承しない他の子供は、村の中や他の村に別の農地を見つけるか、あるいは街に出て別の職業につかなくてはならなかった。このような家父長的な家族の典型が、図 5 の A3 = A4 の夫婦の家系である。そこでは 3 世代にわたって長男のみが建物の家と農業経営を受け継ぎ、そして墓までもがそのような直系の系譜を構成し、婚出した傍系の家族は排除されている (図 5 の T2)。もちろん常に父親の思うとおりになるとは限らない。ある家族では父親は長男以外とは決して外出しないほどに長男に期待をかけていたが、長男はある時農業から離れなければならなくなってしまい、その時父親は深く傷ついたという。しかし、今日ではこのような家父長的権威も長男の重視も過去のものとなりつつある。妻は義理の父を丁重に扱うが、もはや彼の権威に従うわけではない。

現在の結婚後の居住規制は、夫方居住が選好されるとはいえ妻方居住や新居居住も頻繁に行われてる。居住地の決定には様々な要素が関与するが、農業を行う場合にまず重要なのはこの土地で農業を行うかである。例えば、図 5 の C2 の男性はもともと F 村から 10 km ほどはなれたブドウ栽培を主として行っている農家の出身であるが、F 村出身で男の兄弟を持たない女性と結婚し、ブドウ栽培は兄に譲って妻の父親の酪農経営を継承した。彼には未成年のうちに亡くなった子供が二人いるが、その子供たちは共に、妻方の親族の墓に葬られている (家族 R1 と墓 T1)。また E21 の男性も、妻方の農地のほうが大きいという理由で F 村を離れて妻の家で農業経営を継承している (ただし、妻方居住の

1) 報告を行った J-M. Lequinio はその理由を、封建的支配体制ゆえに人々は政治的に剝奪されて家族で固まることを余儀なくされたから、と述べているが (J-M. Lequinio, 1979: 247)、現代の歴史家 M. Vénus は、この地方で長い間続いた政治的混乱や経済的困難さと封建的なマンモルト権 (農民に直系系属がない時、その農民の死後その財産は領主に帰属するという、封建領主の権利) にその理由を求めている (M. Vénus, 1983: 173)。

2) 後に議論するように、このような昔の話には現在の人々の「昔」の生活についてのある種の既存のイメージも介入しているので、全くの客観的現実とすることはできない。とはいえ、もちろん人々は嘘や思い違いをしているというのではない。ここで大事なことは、これらの証言が示す事実の一つの側面である。

場合でも妻は夫の姓に変わる)。同じような農業経営上の理由で、C18の男性は独身だったオジから建物を受け継いでおり、この場合は家系の連続性よりも農業経営の連続性を維持することが重視されている。第二次世界大戦後は新居居住が増えてきている(R2, R4, R7, R8, R10, R11, R14, R16)。家族R16は、当初は新居居住であったが、妻の父が早世したため妻の母に同居を申し出たものである。妻が職業を持つ場合も妻は夫の農地のある村に住むが、やはり新居居住となる(D11, D13, E17, E19, E22)。このような新居居住は、夫の父の家父長的権威を嫌う妻の意思も働いている。また老夫婦のほうでも、息子夫婦とは別に静かに過ごしたいと願う者も多く、日常の食事は息子夫婦と共にしつつも、起居は別の家(別の棟であったり、同じ建物でも玄関を別にした家)ですするという場合もいくつか見られる。この場合、老夫婦のほうも日中は息子夫婦の家の台所で時間を過ごしていることが多い。

しかし、新居居住の場合でも世帯を超えた家族の関係は緊密である。世帯を別にしていても息子(娘)夫婦とその両親および若夫婦の子供たちは互いに頻繁に行き来し、日常生活上も助け合っている(ex R1とR2, R6とR7およびR8, R9とR10およびR11, R13とR14)。実際、農作業においては父と子と一緒に働くのは普通のことであり、また妻が外に仕事をもっている場合、昼に一度小学校から戻ってくる子供(子)と畑で仕事をしている男たちの昼食の世話のためには、別の家に住んでいる(義理の、あるいは実の)両親の助けは不可欠である。そのほか家の修理などの雑務や家族儀礼の準備などでも世代を超えた協力は頻繁である。また、他の村に住んでいる(未婚または既婚の)子供たちも日曜日などは両親の下に戻ってきて一緒に過ごすほか、パーティーも家族の中でよく行われるなど、世帯は別にしたとしても何かと家族同士でよく集まり、家族同士のつきあいは頻繁である。したがって、家族の機能は居住集団内部にとどまるものではない。そのため機能という点から見た場合、同じ村の内部で親族関係のある居住集団同士は相互依存しており、居住の単位のみで家族の社会的機能の境界をはっきりと区切ることは難しい。そして、親族関係にあるが別の村に住む居住集団とも、この相互依存関係はある程度は結ばれる(距離の問題があるので、日常的に行き来することは難しいが)。そして居住集団をめぐる親密な社会関係は地理的・系譜的距離に応じて徐々に疎遠になっていく。

生きている間の家族の住み家が家であるならば、死者の住み家は墓である。墓はかつては教会の周りに雑然と作られていたが⁹⁾、現在はどの村でも役場が墓地を作っている。F村の場合は1900年に教会の裏に墓地が作られたが、その時の村長がその墓地の最初の住人となった。それ以前の死者については、記憶している村人はほとんどいない。墓には死者の第一の名、姓、既婚女性の場合はその結婚前の姓、生没年が記される。また、「ここに「[名+姓]」が眠る。彼(彼女)のために祈りなさい。『Ici repose... [名+姓]... priez pour lui / elle』」あるいは「De Profundis」(「深き淵より」を意味するラテン語で、

⁹⁾ フランスの小学校 école primaire では、児童は昼食は自宅にいったん帰ってとるので、その母親が働きに出ている場合、子供たちは父親と一緒にその祖父母の家で昼食をとることになる。中学校 collège 以上になると学校の食堂で食事をするようになる。

¹⁰⁾ 墓が教会の外に置かれ、さらに墓地にまとめられるようになるのは19世紀であり、それには衛生上の理由のほか平等主義や共和主義の影響もあるという。そして19世紀以降、墓は単なる十字架から徐々に、彫刻などを伴う死者の記念碑のようなものに移行していった(SEL 1997: 134-138)。

表 12: 墓に見られる人間関係 (記号は図 5 参照)

父系	T1, T2, T5, T7, T14, T15.
母系	T9.
夫婦のみ	T3, T8, T13, T16, T17, T21.
夫婦と未婚の子供	T6, T11, T18, T19, T20
夫婦と未婚の兄弟	T4.
未婚の兄弟同士	T12, T22.
独り	T23.
その他	T10.

N.B. 夫婦のみの例 (T3, T8, T12, T13, T16, T21)
 早死した子と祖父母の墓に葬られている例 (T1, T12, T14, T18)
 父系の直系とその妻達のみからなる墓の例 (T1, T2, T5, T7, T15)
 先祖 (夫婦) の墓にそのほとんどの子孫が三世代にわたって葬られている例 (T14)
 結婚した後子供を持たずに死に実の両親と共に葬られた女性の例 (C36)
 子供を持たずに死に夫と共に葬られている女性の例 (B3)
 結婚契約を行い子供をもたずに死んだので、夫とは別に葬られた例 (C37)
 独身のまま死に、兄弟と共に葬られている例 (T4, T12, T22)
 私生児を生み、子供と母親が別々に葬られた例 (T22, T23)
 兄弟といさかいを起こし、義理の両親の墓に葬られた男性の例 (C21)

賛美歌の一節)と記されていることも多い。

墓は「家」や家系を物理的に延長するものだと考えられていないし、人々が墓を訪れるのは死者に対する個人的な思い出のためであって、家族的まとまりのためでも「祖先」という漠然とした超自然的存在のためでもない。その意味で、墓参りに見られる死者と生者の関係は、同じ家族であっても、生前にあった世代ごとの役割に基づく様々な家族の構造的関係は死後には失われてしまう。ある個人が死者を想い墓を訪れるのは、生前の様々な出来事によって喚起される個人的な「親密さ」という感情によるものであって、親族関係や宗教的規制からくる義務によるものではない(既に見たように親密さと出来事とは密接な関係がある)。

墓には、複数の人が葬られるのが普通である。通常は、夫婦は一つの墓に葬られ、独身で死んだ者はその両親の墓に葬られる。また、しばしば既婚男性はその両親の墓に、既婚女性はその義理の両親の墓に葬られる。しかしこれはあくまでも傾向であって、この傾向に合わない墓も多いし厳格な規則もない。そこには離婚、早世、自殺、相続を巡るトラブル、家族内のいざこざ、墓に葬ることのできる死者の数、住んで居る村や生まれた村への愛着など、様々な要素が関与する。表 12 は、図 5 に示された墓の埋葬のパターンを整理したものである。これらのパターンはそれぞれの個人的事情を反映しており、その事情はしばしば兄弟とのいさかや、夫婦の感情的絆など、心理的なものである。したがって、墓への訪問と同様に、ここでも個人の感情が大きな意味をもっている。そして、このことは家族の根底にある感情(すなわち親近感)の重要性を意味し、その感情においてはその人々にまつわる思い出(すなわち出来事の記憶)が重要な要素となっているのである。

このようなジュラの居住単位の特徴は、核家族優位という点で北フランス全体に見られるものと共通しているが、「家」の重視も見られるという点で南フランス的要素も含んで

いる。そして、この両者が複合されたところに「家」という言葉の持つ、記憶や出来事の指標という役割が生まれてくる。この記憶の媒介としての「家」は会話の中にしか現れないが、その背景にある家族的領域は、一定の社会的役割の分配をともなった実際の社会的行為の場なのである。

3) 親族ネットワークの社会関係

居住集団間での協力関係から明らかのように、親族の間の日常の社会的相互行為は居住集団の内部に限られる訳ではない。したがって、家族における「親密さ」の意味を問うためには居住単位を含めて居住集団の外部に広がっていく親族関係のネットワーク全体を見つめる必要がある。

親族呼称において明確に見られたように、居住集団の外部に広がっていく親族ネットワークは、異世代間の非対称性と同世代間の対称性、そして性による区別によって構造化されている。以下でそれぞれを見てみよう。

異世代間の非対称的関係は、特に直系において顕著なので、居住集団内部で最も良く見られる。居住集団の内部は、親族呼称の客観化に見られる様に世代の相違の尊重によって秩序づけられている。このとき、親族呼称の相違は単に世代の相違を示すのみならず、居住集団内の役割の相違をも意味している。すなわち、*papa / maman* は未成年の子供の教育に直接の責任をもつ夫婦を、そして *papy (pépe) / mamy (mémé)* はその夫婦の両親として尊敬を受けつつ子供夫婦の仕事に協力する者を、それぞれ意味するのである。そして、下の世代は上の世代にある程度従い、名ではなく親族呼称で名指さなければならぬという点で世代間関係は階層的である。世代の上下の関係はかつてほど権威主義的ではなくなり、今の若い夫婦は権威主義的であることを嫌うが、しかし子供を襲ったり守ったりするという親の役割が無くなった訳ではない（親がこのような振る舞わないときは、子供からある程度の批判を受けかねない）。居住集団の外部においては、このような階層的關係は直系親族の間では厳密に適用される。しかし、世代の異なる傍系親族との間では、このような階層的關係は状況によってはそれ程厳密ではなくなる。たとえばオジ／オバとオイ／メイの間でも年齢が近ければイトコ同士のような日常的相互関係が展開する。

一方、同じ世代に属する兄弟姉妹間の関係は常に平等性に基づいている。出生順によって家庭内の役割が変わることはなく、相続も均等相続という原則が維持されている（ただし、年齢的な理由で、年上の子供はしばしば年下の子供よりもしつけが厳しくなることはあるが、しかし子供がみな青年期に達すればそのような扱いの違いもなくなる）。両親が子供たちを対等に扱わないときは、子供たちの中で嫉妬の問題が起きうるため、子育てに際しては注意が必要となる。兄弟はまた、日頃の遊び相手でもあり、初聖体拝領などの家族内で行われる成長儀礼の場面では両親同様に重要な参加者となる。こうして兄弟の間では心理的にも社会的にも連帯が強化される。このような兄弟のつながりはそれぞれの結婚後も維持され、その結果その兄弟の子供たちの間（すなわちイトコ同士の間）でも頻繁な行き来が行われる。兄弟間で役割の相違があるとしたら、それは中学校にはいるころから少しずつ明確になる性による役割分担である。このころから少しずつ、男の子は父親の畑仕事を、女の子は母親の仕事を手伝い始める。このような兄弟間の関係は相続の権利を除いて *cousin* や *petit-cousin* にまで拡張できる。すなわち彼等の間では社会関係は対等な相

互的であり、彼等は直接の兄弟とは異なり家族儀礼にかならず参加する訳ではないが、大きな家族儀礼にはしばしば招かれる。また、系譜的に近ければ日常的に行き来をして一緒に遊ぶことも多い。このような頻繁なつきあいを通して、彼等は親族としての固定された義務関係に縛られる親族同士というよりも、非親族的領域に属する友達同士のようになっている。

こうした同世代間の対等な関係は一定の互酬性をともなっているが、その互酬原理はすぐに満たされなくてはならないというものではない。重要なことはそのような互酬性が厳密な計算を伴わないこと、言い換えれば常に何らかの形で自発的な相互扶助を行うことなのである。こうして、家族内では計算を超えたある程度の寛大さが要求される（これは一般的互酬性の一例である）。しかしながら、対等性を維持するためには常に何らかの寛大さをそれぞれ互酬的に表明し続けなくてはならない。このことは、系譜的に遠い親族の間につきあいを継続させる一つの要因となっている。

親族ネットワークを構造化している要因の最後のものである性には、二つの側面がある。社会的役割に関わるジェンダーの側面と婚姻と夫婦関係に関わるセクシュアリティの側面である。ジェンダーの側面は居住集団内の性的役割分業が、弱められた形でそのまま居住集団外にも延長され、両性間の関係は人格指示詞の体系で見られたような非対称性をもっている。すなわち、女性のほうがより居住集団の内部や親密さの領域に位置し、男性がそこから遠ざかるような形をとる。そのため、たとえば親族が集まつの食事や儀礼においては、食事の準備や後片付けに携わるのは主として女性であり、男性は男性同士の話しの輪のなかに入っていく。こうしたジェンダーの在り方はさらに、非家族的領域においても見られるものである。一方、セクシュアリティに関しては、居住集団内では夫婦の間以外では前面には表出されないが、非家族的領域でも前面に出されることもあり、これは後述の恋愛の問題とも関わるものである。

以上のようなジュラの家族の構造は、Georges Augustin の類型化に従うと明確に特徴づけられる。G. Augustin はヨーロッパ全体の農村の家族を、財産の相続（均等相続か、一子相続か、兄弟間の共有か）と家屋の継承（全ての子が新居居住となるか、一子のみ継承か、兄弟間の共有か）という二つの指標の組み合わせによって類型化しているが（G. Augustin, 1989:121-136）、ジュラの農村の家族の場合、「均等相続・新居居住」または「均等相続・一子のみ継承」またはという類型があてはまる。そしてこの類型に核家族という世帯形態が対応している。とはいえ、少数ながらも直系家族が特に裕福な家族にかつて見られたということは、一子のみ継承という家屋と生産単位の継承の在り方は、「家父長的」価値と「名譽」という価値を基礎としてその家族の経済状況に応じて変化するというを示している。

4) 家族儀礼による親族関係の再生産

親族関係は、日常的社会的行為のほかに、儀礼と婚姻によって再生産される。家族内で行われる儀礼は、家族が集まりその家族関係を確認する機会である。一般にジュラの人々の生活においても様々な儀礼が時間の流れにアクセントをつけており、それらの儀礼はもちろん、家族の内部でのみ行われるという訳ではないが、カトリックに関わる諸儀礼は通

常家族の内部で行われる⁽¹⁾。

このカトリック儀礼としては、毎週のミサやカレンダー上の行事 *rites calendriers* のような暦上の儀礼と、人生上の通過儀礼とに分けることができる。年中行事として重要なのは、毎週のミサのほか、復活祭 *Pâques*、守護聖人祭 *fête patronale*、万聖節 *la Toussaint*、およびクリスマス *Noël* である。フランス各地で民間信仰としばしば重要とされる聖日ハネ祭はもはやほとんど祝われず、守護聖人祭も行う村とそうでない村がある。また、2月には小学校の父母会が主催してカーニバル（児童たちの仮装行列が行われる）が行われるが、宗教行事というよりは学校運営資金を募るためのチャリティのダンスパーティーである。人生上の通過儀礼としては、洗礼式 *baptême*、初聖体拝領 *communion*（請願式 *profession de foi*）、堅信礼 *confirmation*、結婚 *mariage* と葬式 *enterrement* である（このうち前4者は秘蹟である）。ジュラでは初聖体拝領は、10歳ごろに第一回の初聖体拝領（小聖体拝領 *petite communion* とも言う）を、そして12歳ごろに第二回の初聖体拝領（大聖体拝領 *grande communion* とも言う）が行われるが、前者は身近な家族しか参加しないのに対し、後者はイトコまで含めて盛大に祝われるもので、通過儀礼としては第二初聖体拝領のほうが重要である。

暦上の儀礼からみてみよう。ここでは、日曜日のミサ、復活祭、万聖節、クリスマスが重要である。

[暦上の主要な宗教儀礼]

・毎週日曜日のミサ

毎週のミサは基本的には最後の晩餐に行われた聖体拝領の再現を中心として行われる重要な儀礼である。特に日曜日の朝のミサは多くの人が参加するが、成人男性のなかには仕事を口実に参加しない者が多く、また参加する者も毎回必ず出るというわけでもない（したがって、ミサ参加者の中心は子供、成人女性、および老人である）。現在、農村部では一人の司祭が複数の村を受け持っており、ミサもそれぞれの村の持ち回りで行われるため、自分の村でミサが行われるときのみに教会にいくという人もいる。しかし、ミサに参加するしないにかかわらず、日曜日は家族が集まる日でもある。大学やリセ、あるいは仕事のために家族から遠くはなれて住んで居る者も、可能な限り土曜日には両親のもとに戻ってきて日曜日を家族とともに過ごす。子供が結婚している場合は、その子供たちは毎週両親を訪れるわけには行かないが、それでも時間が許せば両親のもとに集まってくる。

・復活祭（春分の日後の最初の満月の日の後にくる日曜日）

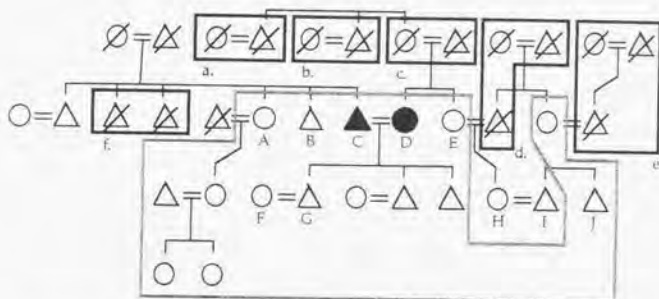
キリスト教の信仰の中心は復活したキリストへの信仰にあるため、その復活を祝う復活祭は最も重要な儀礼である。そしてその復活祭もまた家族が集まる大きな機会となっている。この一年に一度の機会には、日曜日には来られないような家族のメンバーも両親のもとにやってくる。これらの機会に集まるのはまずその家に住む夫婦の子供たちである。孫のいる夫婦の場合は、自分の子供たちのほか孫まで集まってくる。

・万聖節（11月1日）

教会がひらかれ近い親戚同士が集まる。この時に集まる範囲は特に固定している訳ではなく、その時その時で招かれる親族は異なりうる。そして、教会の後にはみんなで親族の墓を回って

¹⁾ この様にカトリックの儀礼が家族と結び付いているのは教会の教義によるところも大きい。人々は教会の教義のためだけに家族で集まるわけではない。世俗的儀礼である革命記念日と第一次大戦終戦記念日では、村が儀礼を主催し（特に、革命記念日はお祭りとなる）同じく世俗的儀礼である聖シルヴェストル祭（12月31日）は友人や隣人同士で祝われる。

図 7: 万聖節の昼食会 (1991 年 11 月 1 日)



- 昼食後に A, B, C, D, E が訪れた墓 (埋葬グループ毎)
 C と D の家での昼食会に招かれた人々

N.B.

- C と D は万聖節の昼食会の主催者
- F は G の恋人
- H と I は子供たちと旅行にでかけた
- 以上のほかに、親族関係のない日本人の人類学者が一人参加

歩く (万聖節は聖人たちの祭というよりも、実際にはむしろ死者の祭で人々は墓を訪れて掃除し花を供えてくる)。

・クリスマス (12月25日)

この祭はむしろ子供のためのもので (ただしこれは最近の傾向である)、子供が小さい時は両親や代親は子供にプレゼントを与える¹²⁾。また、クリスマス・イブには親戚同士で夕食会が開かれることも多い。この時招かれる親戚は、その時その時で違いますが、多くの場合、両親の兄弟のうちの何人かとその子供たちである。これらの年中行事の場合には、しばしば親族やごく近い友人の家族も昼食会や夕食会に招かれる。また青年たちはその恋人を連れて来ることもある。

図 7 は 1991 年の万聖節のときのある家族の昼食会に参加した人々と、昼食会の後に彼等が訪れた墓の主の親族関係である。昼食会にはメイ *mère* の夫の兄弟 (直接的には家族

¹²⁾ なお、誕生日にも両親と代親はプレゼントを与えるが、これは宗教行事ではない。誕生日には子供は自分と同年代の友人を招き、母親はケーキを焼く。子供の守護聖人の祝日にも母親はケーキを焼くが、この時は代親を含めて誰も招かれず、家族のなかでのみ祝われる。

表 13: ジュラの人々の一生の通過儀礼

年齢	世俗的通過儀礼	宗教的通過儀礼
0		洗礼式
5	(小学校入学)	
8-10		第一聖体拝領
11	(中学校入学)	
11-13		第二聖体拝領
15	(高等学校入学)	
15-17		堅信礼
18	(バカロレア) (国民役務)	
	結婚式	結婚式 葬式

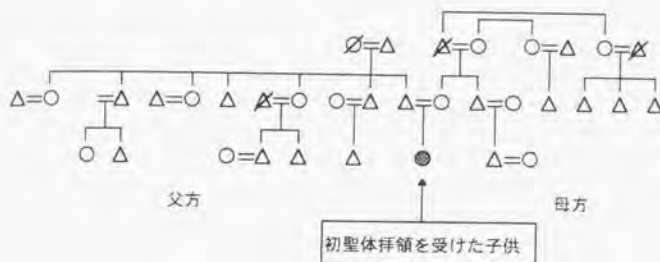
N.B. 「国民役務」とは、男子が負うべき義務で兵役、海外協力、福祉活動の中から選ぶことができる。J. Chirac 大統領になってからこの義務は撤廃された。

とは見なされない人物)や息子の恋人などが招かれ、訪れた墓も、血族はもちろん姻族や姻族の姻族までふくまれ、系譜的な規則性は見い出されない。それぞれの墓においては死者の生前のエピソードを巡って会話が展開するので、むしろ思い出深い親族の墓を回って歩いている、あるいは墓を訪ねることで死者の思い出をよみがえらせていると考えるほうが適切である。

人生上の通過儀礼の場合、洗礼式、第二初聖体拝領、結婚式、そして葬式の機会に広い範囲の親族が集まる(表 13 参照)。葬式以外の通過儀礼では、教会でミサが行われた後(この時、最も身近な親族は祭壇に一番近い席につき、友人たちはその後ろに着席する)、その後、祝われる本人の自宅あるいはレストランを借り切って、午後いっぱい続く昼食会となる。特に結婚式では真夜中まで宴会は続けられる。第一初聖体拝領と堅信礼では両親とその兄弟(祖父母などの近親が同居していたり同じ村に住んでいる場合のみその近親も)が参加するのみである。一方葬式では、死者の子孫からイトコ、*petit-cousin*に至るまで、最も広い範囲の親戚のほか、友人や知人まで集まるが(遺族は死亡広告を地元紙に出すので、その死亡広告を見て様々な人がやってくるが、その中には遺族も知らないような遠い親族がいることもある)、昼食会のようなものではなく、葬式参加者にはミサの後に死者の埋葬を行い、そして遺族が作ったガレットがふるまわれるだけである(ただし、後に改めて昼食会を開くことはある)。

洗礼式、第二初聖体拝領および結婚式では、通常は両親、代親、祖父母、オジノオバ、そして第一イトコまでが参加する。その際、誰を昼食会に招くかは両親によって注意深く選定されるが、その時の重要な基準の一つは、招待客の数に関して父方親族と母方親族の数をほぼ同数とすることでバランスをとるということである。したがって、一方の親に兄弟が多い時は祝われる本人のオジノオバ(すなわち、両親にとっての兄弟)までを呼びイトコまでは呼ばないということもあるし、逆に数が少ないときはより遠い親族まで招くことになる。そして、第二初聖体拝領の場合には全体で 30 人ほど、結婚式の場合はさらに友人たちも含めて 50 人ほどが招かれるのが、標準的だということである(もちろん、全

図 8：聖体拝領の昼食会（1991 年 5 月 26 日）



N.B. 父の姉妹の一人（とその家族）は、自分の子供の堅信礼のためにこの昼食会には参加せず

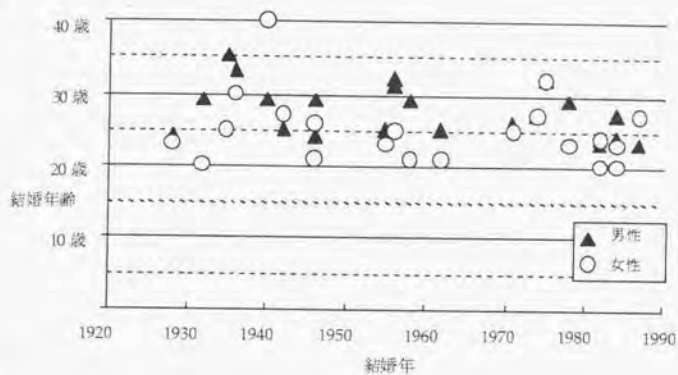
体の招待客の数はそれぞれの事情によって変えられる）。1991 年にある家族で行われた第二初聖体拝領の昼食会の招待客の親族関係を示したのが図 8 である。ここで父の兄弟と母の兄弟では数が大きく違っていたので、父方と母方の招待客のバランスをとるために、母方親族はかなり系譜的に離れた人まで呼ぶことになった。

これらの通過儀礼は、祝われる本人を一人の人格をもった個人として、個別化してその成長に際しをつけるものである。そしてそのような人格の確認が親族によってなされるということは、両親を始めとする親族は社会的にも宗教的にも、人生上の通過儀礼を通して個人の人格の成長に中心的な役割を果たすということを意味する。つまり、通過儀礼は家族関係によって構造化されているのである。そして、このような家族儀礼の大半が宗教儀礼であるということは、個人の成長に「神」と教会が積極的に介入すること、つまり個人は家族儀礼を通じて成長していくにつれて、同時に神によってその宗教的な性格づけを与えられ、神との一対一の関係も確立していくことを意味している¹³⁾。それゆえ、カトリックの信仰を持つ者の場合、家族儀礼は、親密な社会関係が展開する場において神との関係を確立していく場である。このような儀礼は、思い出されるときは出来事となる。そのため、「家族」は個人の成長という出来事を構造化する基盤となっているのである。その家族の中心には Ego を中心とした同心円状の親族関係があるが、親族内部における名指し語の変更が不可能なように、このような親族相互の社会関係の構造は状況に応じて変わることはない。むしろ、このような構造が前提となって、家族の内部の様々な出来事が形成されるのである。

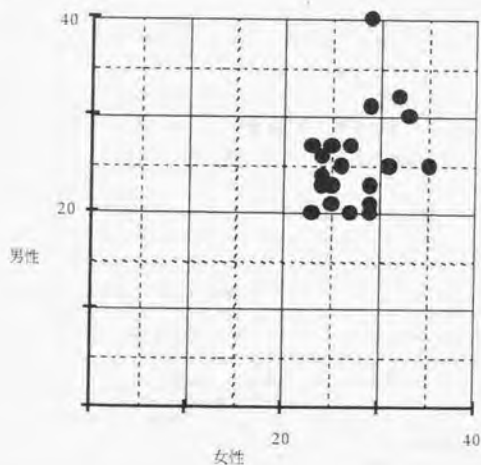
¹³⁾ カトリックでは、ミサにおいて声を出して行う祈りの他に、個人的に心のなかでの神との対話という形をとる瞑想的な祈りがある (cf M. Bertrand, 1993: 222)。前者は社会的集団的な祈りであるが、後者は一体一の神との対話という形をとり、私的な場でも行われる。

図 9 : 1920 年以降の F 村の結婚

■結婚年と結婚年齢の関係



■夫婦の結婚年齢の関係



5) 婚姻による親族関係の再生産

婚姻による家族関係の再生産は、二つの親族を結び付け新たな世代を作り出す。そのため儀礼による再生産とは異なり、新たな家族関係を創出して相続者を生み出すことによって家族関係の再生産を行う。このとき結び付く二つの家族は、夫婦の間に子供が生まれて始めて姻族 *allie* 同士として結び付いたと見なされる。

まず婚姻に関する統計的側面からみてみよう。F 村における 1920 年以降 1991 年までの結婚を住民票によって調べたのが図 9 である。それによれば、この 71 年の間に 26 人の男性と 30 人の女性が結婚し、そのうち夫婦共に記録に残っているのが 22 組である。平均の結婚年齢は男性は 27.23 才、女性は 24.47 才である。これだけの少ないサンプルから一般化することはできないが、とりあえず傾向だけみてみると、1940 年に 29 才の男性と結婚した 40 才の女性（女性としては遅い結婚）を例外としてみると、女性の結婚年齢はほとんど変化していないのに対して男性の結婚年齢は徐々に低下している、と言うことがわかる。このような男性の結婚年齢の低下には、経済環境の向上でより若いうちに家庭を立つ経済的条件を整えられるようになったことが、その理由の一つとして考えられる。

フランスの農村研究においてしばしば指摘される姻族ないしは血族間の結婚については、それ程多くの例がみられる訳ではないし、またあまり好ましいものとも考えられていない¹⁴⁾。オジノバとメイノイの結婚は奇妙であると考えられ、それ程ではないとはいえずトコ *cousin* 同士も普通ではないと考えられている。実際に集められた系譜図を見てみると、それでも血族ないしは姻族間の結婚が若干見い出される¹⁵⁾。しかし、表 14 に見られる様に、今世紀初めでも村の内部や周囲の村との間の結婚は頻繁に行われており、それだけでも錯綜した婚姻関係のネットワークが予想される。19 世紀後半にはこの傾向はよりはっきりとしており、1876 年に記録された夫婦の場合、半数以上が村のなかで生まれたものの同士の結婚である。したがって、今世紀中頃までは村の人は、村の内部でも周囲の村との間でも、緊密な親族関係のネットワークによって結ばれていたと考えられ、そのため多くの夫婦は結婚以前に既に何らかの親族関係に置かれていただろう。このような親族関係の記憶は、「はっきりとはわからないが血のつながりはある」という程度にかすかながら残っていることもある。

しかしここで重要な事は、こうした事実に対して人々は、結婚した相手がたまたま親族関係があった、または畑が隣同士であったため、という説明を与え、系譜上の理由で配偶

¹⁴⁾ J. Sutter & L. Tabah (1948) の研究によればジュラ県における 1926 年から 1945 年までの血縁結婚率は 1.64% (1926 年から 1930 年までは 2.09%) で、全国平均の 1.76% より若干低い。そのうち第一イトコ間の結婚は 26.5%、第二イトコ間の結婚は 61.2% となっており、サヴォアやオーヴェルニュなどの他のフランスの山間地方と比べても低くなっている。第二ブラターの Nussey 村について M. Salitot は、血縁結婚率は 19 世紀後半に高くなるが、その後は減少し、今世紀に行われた 25 例の血縁結婚のうち 9 例で村の外に移り住んだので、村の内部の社会関係には何の関係もない、と指摘している (M. Salitot, 1988: 113)。ただし M. Vernus の研究によれば、アンシャン・レジーム期にはフランシュ＝コンテの血縁結婚率はかなり高く、1744 年と 1770 年の 101 例のサン＝クロード司教区（現在のジュラ県に相当）での結婚許可証の申請のうち 95 例までが第 4 ～ 5 親等の親族の間の結婚である (M. Vernus, 1983: 176)。彼はその理由を、村の規模が小さく比較的孤立していたためとしている。

¹⁵⁾ 図 3 自体は現在の人の記憶をもとにしている。現在の人の行動に影響を与えないと考えられる記憶からはずれた部分については、詳細には調べていない。

表 14: 第三共和政期の F 村における通婚

	1926 年	1911 年	1876 年
夫婦の合計	25	28	39
村内部での結婚	4	6	22
周辺の村との結婚	11	12	9

者が選択されたという説明は決してしない、という点である。また、「たしかにかつて (*dans le temps*) は親族どうして結婚するような村もあったが、そんなに多くはない」と、否定的に評価される。配偶者との血縁関係が確認される場合でも「たしかに親戚だけど、すごく遠い関係だ」とか、「たしかに血のつながりはあるけど、そのために結婚した訳ではない」と必ず説明される。そしてどのような場合でも強調されるのが、配偶者の選択が「恋愛 *amour*」に基づくものであるという点である。

「かつて」の結婚に関してよく指摘されるのは、近親婚以上に土地のための結婚である。よく人々は「かつては父親が、あそこの家の土地はうちの畑の隣にあるからおまえはあの娘と結婚しろ、と言ったものだ」と話しをする。これも「かつて」に対する一つの定型化されたイメージだが、この時代に土地が重要であったことも間違いない¹⁶⁾。実際、相続が均等に行われる場合は土地の細分化や断片化は避けられないので、結婚が土地を集める手段の一つとなることは確かであり、隣接する土地がしばしば同じ親族のものであれば近親婚も当然起きてくる。とはいえ、土地という要因は近親婚を必然的に引き起こすというわけではない。この点は農業経営戦略全体の見通しのなかで議論しなくてはならないことなので、詳細については次章において検討するが、結論を先取りしてしまえば、土地の再集合化は必ずしも婚姻戦略によらなくても様々な手段によって可能なので、近親婚は可能な多くの手段のうちの一つに過ぎず、たいていは他の手段によって十分間に合うのである。そして、もともとの家族の土地を再びまとめるという感情的側面もまた、農業経営戦略全体の中ではそれほど重要な位置は占めていない。

人々は、現在の結婚が恋愛結婚であることを強調する。経済や系譜などを主要なモチーフとして配偶者を選ぶということは、他の人に関するうわさ話としては現われるが、その時は常に否定的なニュアンスを伴っている。土地のために結婚したと噂されている人も、自分たちの結婚は自由な恋愛による結婚であることを強調し、恋人時代の話を展開する。ここで重要なことは、本当にそれが恋愛結婚であったかどうかではなく¹⁷⁾、なぜ結婚

¹⁶⁾ クリュニー改革（ブルゴーニュ地方にあるクリュニー修道院で 10 世紀に始まった、キリスト教会の改革運動）からフランス併合まで、フランシュ＝コンテでは当人同士の自由意思が結婚の有効性の条件であった（なおクリュニー修道院を設立したのは、ジュラにあったボームとジニーの二つの修道院の修道僧で、10 世紀前半のことである）。フランス併合後は父兄の同意が不可欠となるが、M. Vernus によればそれは貧しさのゆえだった（M. Vernus, 1983: 176）。フランス革命後は G. Augustin が指摘するように均等相続がその貧しさに重なったので、財産の細分化を防ぐために 19 世紀には姻族同士やイトコ同士の結婚が頻繁に行われた（G. Augustin, 1989: 351）。

¹⁷⁾ スイスの山村を調査した R. Netting は、そこでの結婚相手の選択が年齢、両親の有無、兄弟の中の位置、富、政治関係、さらには恋愛など、様々な要素が互いに絡んでなされるため、少数の文化的規則には還元できない、としている（R. Netting, 1981: 224）。ジュラの婚姻の実態についても

の主要なモチーフとして恋愛が重視されるのである。

恋愛が結婚の望ましい動機とされる以上、恋愛は単なる個人的な感情ではなく社会的な価値である⁽¹⁾。しかし、恋愛においてはその個人的動機が重視されるため、周囲の人の介入はあまり好ましくないとされる。したがって、結婚の相手となる恋人は本人が自由に探してやることになる。そのような相手を見つける場としては、学校（小、中、高）や週末のダンスパーティー、友人の結婚式や様々な家族儀礼の場などがある。しかし、これらの機会自体がすでに一定の社会的条件をもった人々が集まる機会なので、恋人の選択はある程度の社会的なアレンジメントのもとに置かれている。しかし、このようなコントロールにもかかわらず、恋愛による配偶者の選択という論理が、一定の内的構造と政治経済的状況を前提とする家族の論理と対立することはある。実際、家族に認められなくて恋人と結婚できなかったり、家族と対立したという昔話は時々耳にする。とはいえ現在では家族の論理のほうが折れるのが普通である。

恋人は相互に名によって名指される人の範囲（現在では多くの場合、非家族的領域に属する人）から選択され、一度恋人関係となるとその関係は直接的には一対一のセクシャリティを伴う個人同士の関係となり、その他の社会関係は参照されない。このような親密さは、その性的関係にみられる。家屋の構造にみられる様に、性的関係の場である寝室は最も私的な空間であり、同様に性的関係は公的な場からは注意深く隠され、秘密にされる。この秘密の部分こそ個人のもっとも親密な領域であり、個人的な場である。それゆえに、最も私的な場面に関わる恋愛は個人の性格と運命に直接関わり、その性格と運命を整えるものとみなされる。このような恋愛による関係は男女間の対称性を基本としている。この対称性の原則に反する場合は、信頼を損なうこと（*infidélité*）と見なされ、離婚などの原因となる。しかし、家庭においては性的分業という経済的側面の非対称性があり、かつてはこの対称性と非対称性が組み合わされることにより、女性は家庭への献身を強制された。今ではそうした側面は薄らいでおり、経済的側面の非対称性の過度の強調は、恋愛によるつながりを脅かし、個人の尊厳を犯すものとして扱われる。

このように異性間の友人的親密さは、「恋愛」という価値とセクシャリティによって基礎づけられることにより家族的領域に取り込まれることが可能となり、恋愛に基礎づけられた夫婦は居住集団という家族的親密さの核を構成することになる。そしてこの関係が家族内の社会関係の一つの基礎となって、家庭という場での出来事と親族関係を作り出していくのである。このように「恋愛」は個人の性格の基礎を構成すると共に、家族的領域と非家族的領域を結ぶものなのである。

同様であることは明らかであり、どんな結婚でもそれが一生の生活に関わる以上必ず何らかの計算が入り込むので、F. Zonabend が指摘するように実際の結婚においてはやはり政治的経済的要素が重要になるのが普通である（F. Zonabend, 1986: 44）。にもかかわらず結婚相手の選択が「恋愛」によって説明される点に「恋愛」の社会形成における重要性（そしておそらく、ジュラにも近いスイスの谷あいの村との違い）がある。

⁽¹⁾ H. Varenne は、アメリカでは生活とあらゆる社会的結合の基本に「愛 love」がおかれていてと指摘しているが（H. Varenne, 1986: 415）、ジュラの場合はこの愛 *amour* は家族内部と恋人の間に限られて使われる。ただし、ジュラ出身の社会主義思想家である C. Fourier と P.-J. Proudhon が共に社会結合の根拠に「情念 *passion*」や「愛 *amour*」を持ってきたことは興味深い。なお、カトリックの伝統では、中世以来「愛」は肉欲 *concupiscence* と同義で否定される対象であったが、20 世紀になってから肯定的で精神的な意味を持つようになった（J.-L. Flandrin, 1984: 158）。

〔2〕非家族的領域

1) 「他所者」と友人

生活空間を構成するもう一つの親密さの領域である非家族的領域もまた、家族的領域と同様に構造化されている。非家族的領域の特徴の一つは、家族的領域に見られる様な社会関係の固定化は見られず、知り合った二人は時を経るにしたがって相互的な親密な関係へ移行していくことが期待され、実際にその様に移行していくという点である。そのため、家族的領域とは異なり、居住集団のような核となるような集団は存在せず、また、社会関係の再生産はもっぱら日常の社会的相互行為によっており、儀礼や婚姻のような特別の再生産の仕組みを持つわけではない。

とはいえ、全ての社会関係がこの親密化の方向に従うわけではない。人格指示詞の用法は、性および世代の相違によってもこの親密化の在り方が異なることを示している。この場合、男性と年長者は、より親密度の低い関係に類似した社会関係の形態をとるため、異性間および世代間関係は非対称的なものとなる。しかし、性と世代の問題をみる前に、まず非家族的領域における非固定的な親密さの特徴について検討しよう。

非家族的領域においては、始めは「敬称+姓」で呼び合う遠い関係の二人は徐々に親しい友人 *copain/copine* となっていく。教科書的な意味ではフランス語で通常「友人」を表わす言葉は *ami/amié* である。しかし、ジュラではこの言葉はほとんど用いられず、日常会話ではもっぱら *copain/copine* という言葉が「友人」を意味する語として使われる。この言葉は教科書的なフランス語の説明では砕けた表現 (*expression familière*) とされるものである。こうして、一般的には初対面の者同士は「よく話しをすること」を通じて、徐々に親称・二人称代名詞と名で呼び合う友人 *copain/copine* の関係に移行していくことが期待される。

しかしこの移行は全く無条件になされるのではない。「親密さ」という価値と密接に関わるが正反対の意味を持つ言葉として「他所者 *étranger*」という言い方が社会関係の制御に使われるからである¹⁹⁾。たしかに、誰でも親しくなることに社会的な価値が置かれている一方で、一定以上に親しくなることが拒否される場合があり、その様に拒否される人達のカテゴリーの一つがこの「他所者」なのである。

「他所者は隣村から始まる (*Les étrangers commencent par les villages voisins*)」という言い方がある。この言葉は他所者を拒否する自分を正当化したり、あるいは逆に外からきた人と親しくなろうとしない人の閉鎖的な精神を批判するときに使われる。この「他所者」は「村の人 *gens du pays*」の反対語で、自分の村に住んでいなかったり、自分の村に住んでいても他の村の者と親族関係や縁戚関係を持たない者を指し、親称と名で呼び合う関係の者も含まれる。たとえば、F 村に住む ルイは親族関係なしに村に新たに住み始めた

¹⁹⁾ どの村でもという訳ではないが、こうした他所者の中でも村人との結婚によって新たな住人となった女性を呼ぶ際に「ラトレ *ratraité*」という言葉が使われることがある。ジュラの第二プラトーで調査をした M. Salot は、このような区別は構造的なものであると指摘しているが (M. Salot, 1988: 114-116)、第一プラトーの F 村周辺ではそれは構造的であるとは言えず、この言葉と実際の社会的区別の関係は状況や人による。

「他所者」の一人である。彼は若いころ新しい土地を求めてF村にやってきたが、ある時「他の村でいい奴でもこの村では最低の奴だ」と嫌味を言われたといい、村に住んで30年以上にもなるのに今だに他所者扱いだと嘆く（しかし彼は、自分が相手の立場だったら同じようにするだろうとも言っている）。また別の村でも、農村を求めてパリから移り住んだというある男性は、「村ではいつも他所者あつかいさ。子供時代を一緒に過ごしていないといつまでも他所者なのさ」という。そしてこの時、後に検討する「秘密」が重要となる。すなわち、「村の人」の出来事は秘密として「他所者」に対しては閉ざされることになる。

とはいえ、もともと村に住んでいる者は「そんなことはない。確かに昔はそういうこともあったが、それはコンプレックスがあったからだ」と反論する。また実際にこのような「他所者」がコミューン議員や村長に選ばれることもある。私が滞在していた当時のF村の村長は「他所者」であつたし、ルイの妻がコミューン議員だったこともある（ただし、議員になっても実質的な発言権が認められないことはある）。この様に、実際には「他所者」だからといって常に排除の対象となる訳ではない。そこには自分たちと他所者を区別しようとする姿勢と、そのような排他的姿勢を失礼であるとして誰とでも親しくなることに価値を見出す姿勢とが、同時に見られる³⁰⁾。このことは「他所者／村の者」という対立は、社会関係の基本というよりもむしろ、人間関係を評価する際の一つのイデオロムとして、状況によって自分の行為を正当化するために戦略的に使われる、ということを示している。もちろん、この戦略が常に有効であるとは限らないが、重要なことはそれが正当性をもつ有効なものとなりうるということである。それではなぜこのような対立が状況に応じて正当性をもちうるのだろうか。

ある人の「他所者」性がことさら強調されるのは、彼が村の者と現実の政治的あるいは経済的な利害関係に置かれるときである。したがって、その利害関係がどのような質のものであるかによって、どのような形で彼が他所者とされるのかが決まってくる。このような利害の対立が大きくなるのは、村における政治的決定の場である（たとえば共有林の利用方法や村長の選出など）。このとき、村の出来事を共有しない「他所者」は「村の人」の権利に対する潜在的な侵害者とみなされる。しかし、関係が親密になり利害の共有度が高まって行くと、彼の他所者性も曖昧となっていく。それゆえ、「他所者／村の者」という対立は、問題となっている人間同士の社会関係の質や利害の質といった状況に依存する。これは、次章以降で検討する「社会的資源」の問題と密接に絡んでいる。

しかし、はじめて出会った者同士がやがて友人関係へと移行して行くことが期待されるように、実際には「他所者」も長い間つきあっているうちに親しく対等な「友人」へと移行していく。そして、この関係は特定の利害を超えた関係であり、しばしば *on* という代名詞を用いて「私達」として示される対象でもある。*nous* という代名詞と違って *on* が何らかの境界の設定を意味しないということは、このような「私達」の領域が常に新たな人々に向かって開かれているということを示している。このような親密さは、互いに共通する経験が増えて行くことによって強化されていき、そのつきあいの過程を通じて互いに

³⁰⁾ 一般的には、村が今よりも人口が多く、あだ名に見られる様な社会関係が密で、村が一つのコミュニティとして機能していた時代を生きてきた老人たちのほうが、この「他所者」という言葉をよく口にする傾向がある。とはいえ、政治的な文脈では若い人もこの言葉を使うことはある。

ある程度の考えを共有するようになる。そして最後にはそれぞれの個人の寝室に招かれるまでになる。すでに見たように個人の寝室は極めて私的な領域であるので、その寝室へ招かれるということはその寝室の最も私的な部分、すなわちその人の最も個人的な部分に触れる関係となる。しかし、他所者がこのように友人として扱われるようになるまでの期間は、数年から2世代までと、人や状況によって大きく異なっている。

このようにして、一定の時間をかけて築かれた友人関係は、基本的には対等かつ対称的で、直接的な利害を超えたものとなる。利害を超えた親密さを求めることは、結果として社会的行為において厳密な互酬性は要求しない、ということである。というのも、ある財やサービスの提供はその人の自発的な寛容性によるものとされ、すぐに返礼を求めるものとは見なされないからである。こうした姿勢の背景の一つは、見返りを期待しないことに高い価値を置くカトリックの倫理である。とはいえ、全く互酬性の意識がない訳ではない。実際、財やサービスの流れが固定されると人間関係の不均衡を招き、対等という原則に反してしまうからである。たとえば、村では子供を近くの村のカテキズムに連れて行くために、子供たちの親たちが輪番で車で送り迎えをしていたが、そのうちの一人が諸般の理由で自分で車を出すことがあまりなくなったことがあった。このとき他の親たちは、「うちはあの家の召使いではない」と怒りだした。実際、善意は親密さの領域において「優しさ *gentillesse*」という価値を満たすために積極的に提供することが求められるので（さらに加えれば、善意を積極的に提供するのはカトリックの倫理でもある）、人から善意を受けるだけで自分から善意を提供しようとしない人には非難が向けられる。家族的親密さの領域における互酬性と同様に、このような関係は極めてルーズな形で一般的な互酬性とは見なすことができる。そこで人々は、対等に親密さを表現することが求められているのである。

2) 世代の非対称性

友人関係は基本的には対等なものではある。しかし人格指示詞の用法は世代が関わるるとき、非対称になる。たとえば、子供同士は始めから親称代名詞と名で呼び合う関係から始まるが、若い者は年配の者に対しては、敬意を表わすために相当親しくなっても敬称代名詞と敬称+姓の名指し語を使うことが多い。こうした非対称性は、挨拶の仕方のような相互行為の中でも見られる。それでは、世代は親密さとはどのような関係にあるのだろうか。

まず世代からみてみよう。ここで問題となるのは、年齢差、および子供／大人の関係である。一般的には子供／大人の関係では、子供同士は常に名と親称代名詞で呼び合うが、大人に対しては敬称を用い、姓で名指しをする（ただし子供が幼い場合は、子供は大人に対して親称代名詞のみを使うことも多い）。名指しをする相手が同年代の友人の親族の場合、『Julien の *maman*』というようにテクノニミーの表現がなされる（この場合、すでに見たように親族呼称は家族の中の地位を示し、名による名指しよりも世代の相違に対する敬意を、そして姓による名指しよりも近しさを表現する）。家族の内部では子供は上の世代の者に対しては親族呼称と親称代名詞を使う。また、大人は男同士の挨拶ではビズはしないが、子供と大人では男同士でもビズをする。かつては（すなわち、今の大人たちが子供のころは）、子供の大人に対する服従は絶対的で、たとえば子供が食事中にしゃべることは許されなかったという（今では逆に、食事中に最もしゃべるのが子供たちである）。

子供と大人の間の区別は、その他の社会的な場面でも適用される。たとえば、ワインなどの酒類やコーヒーは大人の飲み物で、子供の飲み物は水やココアである。また、クリスマスや聖シルヴェストル祭（大晦日）などで親族や友人たちが集まるときは、大人たちは食卓で酒を含めた正餐をとるが、子供たちは台所で別に子供同士で簡略化した食事をとり時間を過ごす（そして先に就寝する）。現在でこそクリスマスなどは子供を中心とした家族の行事となってきたが、それはごく最近の傾向である。今の大人たちが小さいころはクリスマスにプレゼントを貰うということとはなかったという（さらに、一年で最も重要な宗教行事はクリスマスではなく復活祭だった）。現在では子供たちは、誕生日とクリスマスに贈り物を期待することができる（大人は贈り物をもらうことよりあげることのほうが多い）。

子供はいくつかの通過儀礼を経ることで大人の世界に入っていく。この通過儀礼は、宗教上のものと学校制度上のものとが並行している（表 13 参照）。宗教的通過儀礼はすべて、家族を単位にして行われるが、子供はまず第二初聖体拝領でキリスト教共同体の一員として公式に認められ、その数年後の堅信礼を経て、一人前の信者として大人の仲間入りをする。一方、学校制度としては、小学校 *école primaire* のあと、中学校 *collège*、高校 *lycée* を経て、大学入学資格試験 *baccalauréat* となる²¹。小学校は同じ村か周囲の村にあるため自宅から近いが、中学校や高校は通常、農村部にはないため、通学バスで街に出たり、高校の場合は寮に入る必要がある。高校生になると、家庭のなかでも、大人と同じ会話に参加するようになり、家族の行事でも大人と同じテーブルで正餐をとるようになる。そして、年齢を経るにしたがって少しずつ家庭の周辺から外の世界へと歩き出し、そして大学入学資格試験以降は専門の職業についたり高等教育を受けるために別の街に行くなど、一人前の大人となる。

こうして、家庭のなかで守られた存在であった子供は徐々に家庭の外へと歩みだし、家庭の外に人間関係を広げていく。そして、それにともなって世代の相違に縛られない友人関係も少しずつ増えていく。子供を巡る人格指示詞の用法は、このような子供を巡る社会関係の特徴と密接に関わっている。

このような年齢の相違に基づく秩序は、かつては子供が大人になった後でもある程度継続し、社会的相互行為を行う二人の間に年齢差が大きい（すなわち世代が違う）ときは、ある程度親しくなっても年下の者は年上の者を名ではなく姓と敬称代名詞で呼びつづけた。しかし、最近では年上の者に対しても名と敬称代名詞で呼ぶ人が多くなってきており、そのような人は年配の者からは「礼儀を知らない」と言われる。年齢差が非対称的な人格指示を伴わなくなってきた背景には、「よく話をする *discuter bien*」の価値の強

²¹ 大学入学資格試験（バック）はかつては難関であったが、1980年代の社会党の政策によって合格率が高くなり、それに対応してその価値も低下した。そのため、バックなんて大して意味がない、あるいは最低でもバックは通らないと、といった意見がよく聞かれる。なお、バックは一つの資格であり、合格しても必ずしも大学に行く必要はない。現在ではむしろ、バックは大学を含めた高等教育一般（例えば高校の専門課程）や高度な専門職業教育課程に進むための資格である。実際、調査当時は、バックをとった後、大学ではなく高校の専門課程に進学してさらに2年学び、専門技術者免状（*Brevet de technicien special, BTS*）を目指す学生が多かった（それは、就職難の折、大学卒業よりも BTS を持っていたほうが就職が有利だったからであるが、その後はそれほど有利でもなくなったようである）。

訓により親称と名による人格指示がより好ましいとされるようになってきたことがある。ここには、年配の者に対して敬称と姓により一定の距離を置こうとすることは、裏をかえせば自分たちの社会関係から年配の者たちを排除することなので好ましいことではない。という意識も働いている。この点は、もともと密な社会関係が展開している家族の内部とは異なった事情である。いずれにしろ、異世代間の敬意の表現は、近い関係と遠い関係に基づく階層性が前提となっている。

このような世代間の非対称性は、家族的領域における垂直的關係に類似している。このような階層性の家族的領域との類似は、人格指示の非対称性のもう一つの例である。性が介在した関係にも見られる。

3) 性の非対称性

性は、敬称や名、親族呼称において常に表現されるので、人格指示詞による人格認識には常に付きまとう。そして一般的には、女性に対しては男性に対してよりも、より親密な関係を示す人格指示詞が使われる傾向がある。この傾向は挨拶の仕方にも現われている。すなわち、男性同士の挨拶ではどんなに親しくてももっぱら握手を伴うのに、女性が相手となると（女性同士、あるいは女性と男性）は、はじめは握手で挨拶していても、少し親しくなるとすぐにビズをするようになる。また、現在では男性を姓で呼び女性を名で呼ぶという区別は体系的にはなされないが、それでも男性よりも女性に対してのほうが比較的古い時期に親称代名詞や名で呼び合う関係に移行する。その意味で、女性の方が男性よりもより社会関係が親密性によって表現されるということができる。

このような男性と女性の区別は、社会生活空間の相違にも見られる。すなわち、男性は主として家の外で働き、公的な会合に顔を出すのも（常にというわけではないが）男性たちである²⁾。男性たちは畑で仕事をし、チーズ組合に牛乳を運び、そしてそこで互いに議論をした。これに対して、女性は主として家の内部で働き、その主たる行動範囲は家とその周辺である。かつてはチーズ組合にも独身の女性が顔を出すこともあったが、結婚してしまうと、家で搾乳をした後は（機械導入以前は、搾乳は女性の仕事だった）、食事の準備をしながらチーズ組合に牛乳を持っていった夫の帰りを待っていた（時として夫は、チーズ組合で隣人たちと話を花を咲かせて時間がたつのを忘れてしまい、帰ってから妻に叱られた）。現在の若い世代では女性のほとんどは自分の仕事を持ち（それは大抵、結婚前から続けている仕事である）、家の内部に常に閉じ籠っているわけではないが、仕事以外の活動の場は主として家の内部である。かつては女性が畑仕事をすることもあったが、農業が機械化されてからは、トラクターに乗って仕事をするのはもっぱら男性になってしまった（女性たちは、女性には機械は分からない、と言い訳をする）。

たしかに、このような性による社会生活空間の相違は大まかなもので、それほど緻密なものではない。また、1960年代以降、女性の社会進出は目ざましく、同時に男性たちも家事に普通に参加する様になり、男女間の社会的活動の相違はかつてに比べれば実際上も意

²⁾ 調査当時、第一ブラトーのある村で村長を勤めていた女性がいた。彼女はもともとその村の出身で村の外の男性と結婚してその村に住んでいたが、彼女は「10年前だったら私のような女性が村長になることはありえなかった」と指摘している。

識の上でも少なくなりつつある²¹⁾。しかしだからといって全く無くなった訳ではない。食事を作るのはほとんどの場合女性であり、子供をカテキズムに連れていくのも女性である。それに対して畑仕事はもっぱら男たちが担当する。こうして、女性は家の中の領域、男性は家の外の領域に主として関わる。という原則はまだある程度認めることができる。また、毎週日曜日のミサに参加するのは主として女性たちであり、仕事から引退した老人と子供を除けば男性はほとんどミサには参加しない（とはいえ、老人男性には参加しない人も多い）。このように、女性の受け持つ社会領域は子供のそれに近いといえることができる。このような親密さの領域との関連で興味深いのは、家庭において外部の人を迎えるときの対応の仕方である。一般に、全くの外部の者（例えば郵便配達人や人類学者）を迎えるとき、その対応は夫婦で行うが、訪問者が男性である場合、そこで主として訪問者と話をするのは夫で、彼は家庭の代表として対応する。それに対して訪問者が女性である場合、それほど親しくない訪問者の場合は夫が対応することが多いが、他方、親しい相手の場合は妻が対応することが多く、この場合は夫はその場にはいないこともしばしばである。

したがって、女性と男性の人格指示の方式の相違は、それぞれが主として身を置く場の相違でもある。しかしながら、このことは決して女性が家庭に閉じ込められているということの意味するものでなければ、一方の性が高方の性を従属させているということの意味するものでもない。かつては家長がすべてを決めていたという家庭も少なくなかったが、現在ではそのような家はかなり少なく、特に若い夫婦では、たいいてい家庭に関わる様々な事項は夫婦が相談して決めることが多い。そして、世代間の関係の非対称的秩序が曖昧になってきているのと同様に、非家族的領域においては、名による名指しの増加という形で性による人格指示の秩序も曖昧になってきている。

しかしながら、ジェンダーの非対象性が全く無くなった訳ではない。女性と親密さの領域との結び付きは、女性の身体、すなわちセクシュアリティが、男性のそれよりも強調されるということになり、そのような身体性の相違が「恋愛」の一つの構成要素として、

²¹⁾ 一般に、西洋近代においては女性は家庭に閉じ込められた、という図式が立てられるが、そのような一般論は注意が必要である。たしかに都会のブルジョアジーの間ではこのような女性の（保護という名の）抑圧が存在したが（cf. M. Foucault, 1976）、農村では必ずしもそうではなかった（cf. M. Segalen, 1980）。S. C. Rogers はロレーヌ地方の Grand Fraud 村に関して、表面的には男性が権力を握っているように見えるが、実質的な権力は女性たちが握っていると指摘している（S. C. Rogers, 1980: 112-114）。ジュラの場合は権力の偏りそれほど強くはないようである。地理学者 R. Chapuis はアンケート調査に基づいて、ドゥー県では家庭のことは夫婦が相談して決めることが比較的多いと指摘している（R. Chapuis, 1982, 207-208）。とはいえ、やはり「男は外、女は内」的な考え方はかつては根強かったようであり、年配の人々（特に年配の女性）は現在のように女性が外に働きに行くことを必ずしも望ましい傾向とは思っていない。ある年配の女性は、女性が職業を持つから離婚が増えるのだといって女性が職業を持つことに賛成しなかったし（彼女の二人の義理の娘はともに自分の仕事を持っていた）、また別の女性は女性が外に働きにでるのは本来のことでない、不平を述べている。しかしこうした年配の者たちも、時代の変化はどうにもならない、というあきらめも持っている。一方若い人は、男性も女性も。こうした考えに囚われることはない。これは若い世代の意識の変化によるところが大きい。その理由の一つは、現在のように農業所得が低い時代では女性の収入は家計にとって不可欠である（時として妻の収入のほうが多く、それが夫婦間のいきかいかいものになることもたまにあるという）、という経済的理由である。しかしそれ以上に重要と思われるのは、特に 1968 年の五月革命以降普及したフェミニズム思想の影響であり、若い世代の女性たちはそもそも家庭内で夫に従属した位置に置かれるのを望んでいないのである。

親密さを基礎づける出来事を生み出していくことになるからである（男女同権という主張によって女性たちが求めているのは、政治的・経済的地位の男性との対等化であって、セクシュアリティを否定することではない）。そしてこのような相違は、結婚後の家庭内の役割分担にそのまま接続していく（その意味で、セクシュアリティの維持と性的平等の追求は確かに微妙な関係にある）。

このように、非家族的領域において性や年齢が介在したときに見られる人間関係の非対称性は、家族的領域の構造原理と連続したものである。このことは、生活空間において家族的領域と非家族的領域が互いに、連続した関係にあることを示している。

（3）出来事と人格の形成

1) 出来事の提示

生活空間内部の非家族的領域の人間関係は経験の共有度によって特徴づけられ、そのような経験の根底には家族的領域内部での構造的関係がある。そして、これらの人格の基礎となる要素は互いに交錯することで出来事と家族を再生産していく。それでは、このような人間関係の基礎となる「出来事」は具体的にどのような形で人格を基礎づけているのだろうか。

人は生活空間のなかで日常生活のさまざまな経験をする。それらの経験の大半は言葉で表現されることはない。しかしそうした経験の一部が一度取り出されて発語によって表現されることにより、その経験は社会的性格を帯びて別の人に伝達されていく。それでは、個人的経験の社会化である発語による出来事の提示は、人格指示詞や非家族的領域／家族的領域と具体的にどのような関係にあるのだろうか。まずその会話の実例をみてみよう。会話 4 は、インタビューの記録である。

この例における発語は、人格指示との関連から二種類に分けることができる。一つは対話の相手に話しかけている発語（31J、38J、41J など）で、もう一つは客観的事実の提示（33J、36J、40J など）である。両者の最も大きな違いは、一人称代名詞および二人称代名詞という主観性が示されるダイクシスが使われているかいないかによる。ここでダイクシスの有無にしたがって両者を次のように区別しよう²⁴⁾。

【発語の二類型】

- 「話し」 一人称代名詞および二人称代名詞の現われる発語
- 「語り」 三人称のみによる発語

この「話し」と「語り」では時間、場所、人物の表現の仕方についての言語学的特徴が大きく異なっている。時間は動詞の時制と時間指示によって示されるが、「語り」の動詞では現在形と共に複合過去形（過去の完了相）や半過去形（過去の継続相）が多く使われ、過去形に関しては過去を客観的に（すなわち、話している状況に依存しないで）に示す時間

²⁴⁾ ここでいう「話し」や「語り」は言語学的な分析概念であって、言語実践を現然と示すような言葉ではない。この相違は、E. Benveniste (1966) が最初に提案し、Simonin-Grunbach (1976) が再定式化した「話し histoire」と「語り discours」の相違に相当するもので、用いられる時制などがそれぞれ大きく異なってくる。

会話 4: インタビュー

- 30L les Polinois préfèrent plutôt la droite la droite?
- 31J oh plutôt / mais tu sais / ça a changé / comme depuis 68 ça a changé
- 32J y en a qu(i) ont tourné à gauche / pourquoi / j'en sais rien ++
- 33J mais avant 68 c'était plutôt de droite ah oui oui ++
- 34L y avait y avait aussi des listes d'opposants?
- 35J oh hein oui bien sûr, comme partout
- 36J il y a quand même toujours des gens de gauche hein
- 37J mais enfin c'était quand même la majorité était de droite/ était de droite
- 38J mais MAINTENANT hein + tu vois tous le les: il y a quelques années depuis 68 quoi ça appelle la gauche quoi +
- 39L ah oui +++
- 40J c'est-à-dire Mr. Tanguy il est plus directeur de l'école de laiterie / il est inspecteur sur le plan + sur le plan national / il habite toujours (à) Poligny / il est maire de Poligny bien sûr + MAIS c'est plus lui qui est directeur il a monté en grade /
- 41J il est INSPECTEUR national des écoles de laiterie + il a un grade supérieur tu comprends ++
- 42L oui oui / et: il a été élu maire parce qu'il avait + ou: il a gagné beaucoup de confiance?
- 43J oh, oui il est capable + ah oui oui oui
- 44J c'est un homme tu peux lui demander quelque chose il va à Paris à la Chambre.
- 30L ポリニーの人はむしろ右の人を好むのですか。
- 31J ええ、どちらかといえばね、でも、ほら、それも変わったわ。68 年以降、それも変わったわ。
- 32J 左に転向した人もいたわ。どうしてかわたしは知らないけど。
- 33J でも、68 年以前はむしろ右だったわ。ええ、ええ。
- 34L 反対政党も選挙に出たのでしょうか？
- 35J ええ、もちろん、他と一緒に。
- 36J いつも左の人はいるわ。
- 37J でも結局多数派は右だった、右だった。
- 38J でも今は、ほら、何年前から、68 年から、左になったわ。
- 39L ええ。
- 40J つまりタンギーさんよ、彼はもう乳業学校の校長じゃないわ。(今は) 彼は国の検査官よ。ずっとポリニーに住んでいて、彼はもちろんポリニーの市長だけど、でももう校長じゃないわ。彼は出世したのよ。
- 41J 彼は乳業学校の国の検査官よ。高い地位についたのよ、わかるでしょ。
- 42L 彼が町長になったのはみんなに信頼されたからですか。
- 43J ええ、そうよ。彼は有能な人よ。
- 44J 彼は何でも頼める人で、あなたも頼めばバリの議会に陳情に行ってくれるわ。
- NB. J=インタビュアー、I=インフォーマント。ポリニーは第一プラトーの直下にあるヴァニョーブルの町で、フランスでも知られた国立乳業学校がある。また、68 年とは 1968 年 5 月の 5 月革命を指すが、このときは全国的に左翼が大きく活躍した。

会話 5: インタビュー

- 45L et à Arbois aussi, il y a beaucoup de commerçants et des des ouvriers?
 46J oui peut-être / mais il y a peut-être moins d'ouvriers maintenant qu'à Poligny + a Arbois / oui
 47J il me semble qu'il y a moins d'usines + mmh ++ je crois mmh
 48L alors est-ce qu'il y a des choses qui vous ont surpris quand vous êtes venue à Poligny?
 49J - oh bein oui ça déjà je trouvais que c'était plus bourgeois que qu'à Arbois
 50J mais tu sais / j'étais jeune j'avais 20 ans / je faisais pas attention
 45L アルボアにも沢山の商人や労働者がいるのですか。
 46J ええ、たぶん。でも、いまはたぶんアルボアにはポリニーほどは労働者はいません。ええ。
 47J 私には、工場は「ポリニーよりアルボアのほうが」少ないように見えます。私はそう思います、ね。
 48L あなたがポリニーに来たとき何かあなたが驚いたものはありましたか。
 49J ええ、そうね、その時すでに、私はそれ「ポリニー」がアルボアよりもブルジョア的だと感じました。
 50J でも、あなたはわかるでしょう、私は若かった。私は二十才だった。[だから]私は気がつかなかった。

N.B. インタビューは会話 4 と同じ機会に同じ相手に対してなされたもの。以上の訳では、「話し」と「語り」の相違を明確に示すためにあえて直訳した。アルボアはポリニーから約 10km ほど北にある町で、インフォーマントの出身地。

指示（「68年」など）を伴う一方、「話し」の動詞では現在形が使われ、時間指示は伴わないが伴っても「今」などの現在を示すダイクシスである。同様に場所でも、「語り」では固有名詞による客観的な場所指定が伴うが、「話し」では「ここ」などのダイクシスによる。そして人物表現については、「語り」ではダイクシス表現が使われず、もっぱら名指し語による人格指示がなされるが、「話し」ではダイクシスによる人格表現が現われる。つまり、「話し」はダイクシス表現によって暗黙のうちに、その内容を発語のなされる場と発語を行う人物に結び付けることで発語者の主観性を表現するが、「語り」では発語のなされる場から切り離されることにより、発語の内容は客観的な装いを得るのである。人々はこのような「語り」を通して、ある人物を一定の時間と場所に結び付け、会話を通して経験を構成し表現する。既に見た A. Cicourel の「図式的知識」と「その場の知識」の相違は、言語的表現の上ではこの「語り」と「話し」の相違に大まかに対応する。図式的知識は「語り」によって提示されることにより、より客観的な（すなわち、発語の場に左右されない）外観を呈することになる。そのため、このような「語り」で示されるのは、その場の状況には関わらない（すなわち、生活空間の事情に左右されない）過去の出来事か外部環境をめぐる「事実」である。

しかし、「語り」において全く発語を行う者の主観性が介入しないという訳ではない。以上の会話の例ではそのような主観性は、43J にみられるような人物評価である。この人物評価は「語り」において提示されているので客観的な概観を持つが、明らかに発語者による主観的判断である。このような「語り」中への主観性の介入は、「語り」が「話し」と異なることによっても引き起こされる。会話 5 をみてみよう。

この例の49Jや50Jでは、本来はダイクシス表現である「私 je」は、「あなた tu」に対して話しかけている発語者としてではなく、三人称代名詞に置き換え可能で「語り」の時制の中（ここでは半過去形）に置かれた、物語のなかの登場人物のように示されている。そのため、この発語は「語り」と見なすことができるが、ここで注意したいことは、50Jに見られる様に「語り」（「私は若かった」）が「話し」（「あなたはわかるでしょう」）と組み合わせられることにより、この「わたし je」という語が両者を結び付ける役割を果たしているという点である。ここでは「私」は今ここで話している「私」と歴史的人物としての「私」が重なり、結び付けられているのである。このような結び付けにより、「話し」において「あなた」に対するものとして提示される「私」の主観性が「語り」の中へも導入される。このことは、「語り」もまた「話し」と同様に「あなた」と「私」の間の日常的な社会関係によって規定されている、ということを示している。したがって、日常的な社会関係が一定の価値によって規定されているのならば、その同じ価値は「語り」の中の出来事の提示にも反映される。43Jで示された人物評価はそのような例の一つであるが、社会的行為を巡る価値である「礼儀正しさ」や「親切さ」もそうした人物評価に使われる言葉である。

似たような事情は、会話1と会話2における発語を連続させようとする会話形態にも見て取ることができる。こうして、社会的行為を巡る価値が「語り」を通した出来事と経験の再構築において重要となる。いいかえれば、出来事や経験を「語る」ことはこのような社会的な価値を表現することでもあるのである。したがって、人の経験した出来事が会話のなかで表現される時、その出来事は客観的な記憶のなかからテープレコーダーのように引き出されるというよりは、会話のなかでの社会関係による規定を受けながら、発語を通じて構築されていくものであるということが出来る。

「語り」と社会関係の関係は、インタビューのような一方的で特殊な言語行為ではなく、相互的な日常会話においてより明白となる。会話6を見てみよう。

例えばこの会話の中の58Kをみてみると、この発語は明らかに「語り」であるが、57Mに対する受け答えとして発せられたものであり、その意味で58Kの発語を提示すること自体が、57Mとの連関を作り出し、それによって57Mの発語の主体と一つの社会的相互関係を作ろうとするものであり、それは明らかに「私」と「あなた」の関係に基づいている。そしてこのような関係を作ろうとする行為によって57Mから58Kに至る一つの出来事が言葉のやり取りの中で形成される。このような社会関係の話の中への介入は66Lにおいても見られる。この66Lもまた「語り」であるが、そこではMamyという社会的ダイクシス（親族呼称）により発語の主体とその指示対象との間の家族的親密さが指示されており、同時に66Lの内容もそのような親密さを表現するものとなっている。

このように、ある会話のなかでの一定の出来事の「語り」は、単に事実を提示するのみならず、それによって人間関係を構築するものでもある。人格指示詞の体系に見られた「人格」と出来事との関係は、まさにこの点に関わるものである。それでは、出来事はどの様に人間関係を構築するのだろうか。

2) 時間と出来事

「語り」と「話し」の重要な相違は、代名詞の用法のほかに話しの内容の提示の仕方

会話 6: 数人の中での会話

- 51K: alors, là, les chansons de Frédéric François!
 52L: toutes les fois qu'il chante je pense à toi toutes les fois!
 53K: oui il en a une belle, il en a une belle il en a une belle
 54M: toutes les fois
 55L: oui il avait plein qui m'ont déjà dit
 56K: il avait une belle +
 57M: hier il a joué / il chantait à la télé.
 58K: Ah, je suis allé me coucher avant, moi.
 59L: Je... comment... je ne te suffis plus... tu ne me suffis plus...
 60K: OUI - Tu ne me suffis plus
 61L: Ou, Je ne te suffis plus...
 62N: allez, très bien!
 63O: ça n'est pas < ? > / ça n'est pas < ? > plus tard
 64M: c'est notre chanson [rire]
 65O: parce que t'étais plus jeune
 66L: c'est vrai / à chaque fois qu'ils l'entendent ils pensent à la Mamy
 51K: あれ、ほら、フレデリック・フランソワの歌だ。
 52L: 彼が歌うときはいつもあなたを思い出す、いつも。
 53K: ああ いい歌がある、いい歌がある いい歌がある
 54M: いつも
 55L: ええ、いろんな人が私に言ったわ
 56K: いい +
 57M: きう彼は歌っていたよ テレビで歌っていたよ
 58K: ああ、私はその前に寝ちゃったよ、私は。
 59L: 「わたしは...」ええと、「私はもうあなたには足りない、あなたは私には足りない」
 60K: ええ「あなたは私には足りない」
 61L: それで「私はもうあなたには足りない」
 62N: そんな感じだ
 63O: それは<...?>じゃない、あとでそれは<...?>じゃない
 64M: これは俺たちの歌だよ [笑い]
 65M: だってあなたはもっと若かった
 66O: そうよ、彼等はずっとこの歌を聞く度、Mamy (おばあさん) を思い出す。

も見られる。「話し」はその発語が現在行われているその場に直接関わるが、「語り」において示される内容はしばしば過去に起きた出来事として扱われるからである。その意味で「過去」という時間は出来事の本質に関わっている。それでは、「語り」において提示される出来事のもつ「過去」という時間性は人間関係の構築とどのように関わっているのだろうか。

今、ジュラにおいて昔話の語り (recitation) がなされる場合は、日常的には設けられてはいない。学校の歴史の時間や演劇、演説会など特別な場合を除いて「語り」のみが展開する場は特になく、通常は「語り」は日常会話のなかで「話し」に折り込まれながら提示さ

れる。このような時に示される過去には、遠い過去と近い過去の 2 種類がある。遠い過去とはフランス王国の歴史やフランシュ＝コンテの中世の歴史で、本や学校、あるいは演劇などを通して学ばれるものである。これに対して近い過去とは自分の村や親族の歴史であり、それは家庭や村での日常会話を通して再生産される身近な人々の経験である。前者は現在に生きている人々との間に認識できる人間関係の連鎖は存在しないが、後者の場合はそのような連鎖によって、自分の生活空間の核となる親密な社会関係のなかで起きた出来事として認識される³⁴⁾。前者には日常の社会関係は反映され得ない一方、後者は発言内容に社会関係が関わっている。そのため、社会関係と「出来事」の関係という点では近い過去の出来事が重要である。

近い過去は現在の日常生活と連続しているため、近い過去が言及される場合には常に現在も主題となっている。このような現在との関係から見た場合、近い過去の出来事が「語り」のなかで提示される場合には次の 3 つの状況がある。

【過去への言及がなされる状況】

- 現在と近い過去を対比させるとき
- 現在と近い過去の連続性や類似性を強調しようとするとき
- 現在の状態の起源を探るとき

以下でそれぞれを見てみよう。

第一に、近い過去の出来事が現在と対比されるときを見てみよう。このとき、過去の時間はしばしば「かつて *dans le temps*」という言葉で指示される。この言葉は「今 *maintenant*」に対する言葉である。「かつて」として示される過去は通常、村の人達が一つにまとまり、貧しいながらも安定した（そして停滞した）幸せな時代として、ノスタルジーとともに示される。これに対して「今」という時代は、確かに豊かにはなったが変化が激しく人と人とのつながりが失われ、決して幸せであるとは言えない時代である。この際、過去が必ず半過去形で示され、様々な出来事が「かつて」という時代の状態（すなわち、ある程度の時間の幅において継続した出来事）として提示される。ここには、ある種のステレオタイプ化された過去のイメージがある。そして、このような対比がなされるときは必ず現在の様々な問題が批判され、失われた過去が懐かしまれるが、この「かつて」と「今」の境は、多くの場合、1960 年代から 1970 年代にかけてであり、それは農村が急速に現代化した時期である³⁵⁾。しかし、いろいろな機会にこの「かつて」と「今」の対比を耳にしていると、この境界が 1950 年代（フランスの戦後の復興が軌道に乗り始めたこ

³⁴⁾ ブルゴーニュ地方では、遠い過去があたかも自分の経験した出来事であるかのように語られる、と報告がされているが (F. Zonabend, 1980a: 14)。ジュラではこのようなことはない。そもそもジュラの場合は地域の遠い過去の話はそれほど知られていないことが多い。たとえば、F 村は 19 世紀には巡礼の地として知られていたが、その事実を知るものは村にはいない。また、1905 年の政教分離に際して隣の村では憲兵隊が投入されるような激しい抵抗事件があったが、その事を知る人もいない。

³⁵⁾ このような対比はしばしば、フランス研究で指摘されてきたことである。1950 年代のノルマンディー地方の民族誌 (L. Bernot & R. Blancart, 1953: 323) ではこの「かつて」と「今」の境界は 1870 年の普仏戦争のころであり、1960 年代後半から 1970 年代にかけて行われたブルゴーニュ地方の調査 (F. Zonabend, 1980a: 13) では第二次大戦後となっている。

ろ)になったり1980年代(今の若い夫婦たちが結婚したころ)になったりと、一つの時期には固定できないことがわかる。また人々はもちろん、「かつて」の時代が様々な困難があった時代でもあり、ユートピアでは決してなかったことも知っている。以上の点から、「かつて」と「今」という言葉はむしろ、それぞれの時代を客観的に指示することを目的とするのではなく、今と昔を対比するためのものであるとすることができる。このときに過去が理想化されるのは、このような過去の「語り」が「かつて」という時代への回顧願望を示しているというよりは、「かつて」との対比によって今の状態を批判するためである。その意味で「かつて」という言葉は理想の状態を自らの経験の歴史性に変換する役割を果たしている。この点は、「かつて」という時代が人々の親密な関係によって特徴づけられるという点にも見て取れる。

第二に、今と昔の継続性や類似性を主張するために過去が冒及される場合を見てみよう。このとき、継続性として指定されるのは必ずしも半過去形(過去の継続相)によって示される状態だけではなく、複合過去形(過去の完了相)によって示されるさまざまな継続的な出来事(この場合は、時間軸上のある一点にその出来事を位置付けうる)にも言及される。「あなたのお父さんも、小さい時に同じようないたずらをしてたわよ。ほら、家族なのよ。(Ton papa m'a dit, il a été la même bêtise quand lui était petit. Tu vois, c'est la famille)」という様に、姓などによって家族の出来事をまとめ、それにより家族に一つの継続的な心理的社会的特徴を示そうとするときは、このような「語り」が提示される。この場合は「かつて」という言葉は使われずに、それぞれの時間軸上の一点を特定するための時間指示がなされる。このような時間指示に使われる指標には二種類ある。一つは年代などの数字に基づく時間指示で、カレンダー上の指標(日にち、月、年、世紀など)が使われる。しかし、このような数字による指標よりもっと多く使われるのは人物という指標である。そしてその際に選ばれるのは、「あの人がまだそこに住んでいたとき」あるいは「ちょうどセシールが小学校に入った頃」という形で身近な人の人生が指標として選ばれる。このようにして時間の指標として選ばれる人は、会話の参加者の親族である場合もあるし、友人である場合もある。しかしここで重要なことは、それらの人物が話者にとって名による人格指示がなされるような身近な人であり、かつその人が話者のみならずその聞き手にも知られている人であり、指標となる出来事も聞き手によって知られているということが前提となる、ということである。このように、人物が時間指示として使われる場合、話者は通常、その人物の名を出すときに聞き手に目くばせをし、それがお互いが知っている人物であることを身振りで確認する(時には言葉でも確認する)。ここに見られるのは、「語り」における出来事の提示には身近な人が重要となること、そしてその人を媒介として「私」の経験と「あなた」の経験を連続させようとする意思が働くことである。したがってこの場合、会話を通して過去の出来事のなかに現在との連続性や類似性を見るという行為は、過去の出来事と現在の出来事の間に連続性を作りだし、その連続性によって出来事を参加者の間で共通の経験として共有しようとする作業であり、出来事はその様にして生まれる「わたし」と「あなた」の社会関係の表現となる。かくして、人々は会話のなかに出来事にその登場人物を通して結び付けられ、出来事はその会話参加者の人格を再構成する。

第三に、過去への言及が現在の事象の起源を説明するためになされる場合を見てみよう。

この時、たとえば「協同組合は3年前に解散した。B家が協同組合を辞めたから、採算が合わなくなったんだ。でもそれは組合解散の本当の理由じゃない。解散するだいぶ前からもううまく行かなくなっていたんだ。(La coopérative a été supprimée y a trois ans. Comme la famille B. a quitté la coopérative, elle était plus rentable. Mais, c'est pas la vraie cause de la suppression. Bien avant la suppression ça marchait pas déjà.)」というように、「語り」は出来事の連鎖として示される。この際、この例のように時間指示が数字でなされたり、あるいは人物による時間指示がなされたりする。しかしここで重要なことは、現在の状態をそれが引き起こされるようになった出来事の連鎖を示すことによって説明することであり、時間指示はこの場合はそれほど重要ではない。そして、過去に現在との連続性を見ようとするときと同様に、その出来事が人格指示詞によって示される身近な人物を媒介として提示されるとき、その出来事は人々の間に共有され、会話参加者はその出来事によって示される個人に関連づけられる。

このように、「語り」を通して過去の出来事に言及されるのは、過去と現在の断絶を強調する場合、過去と現在の連続を強調する場合、そして現在の事象の起源を説明する場合の、それぞれ形式の異なる3つの主なパターンがある。しかし、これらの3つに共通していることは、いずれもその時間は線的で単方向的である(すなわち循環的ではない)という点と、関心の焦点は現在にあるという点である。そして「語り」の内容がそれぞれにおいて一定の人間関係の在り方を指示するものであってみれば、どのような「語り」であってもそれは現在の社会関係の在り方に対して一定の価値判断を含んでいる。そしてこの価値判断に基づいて、発語を行う者は社会関係を構築しているのである。言い換えれば、過去への言及は現在の社会関係を構築するためのものである。このことはまた、日常の社会関係を規定する様々な価値(親切さ、礼儀正しさ、妬みなど)は、「語り」において提示される出来事(そこには現在の社会関係が表現される)の選択とその表現に関与しているということを示している。そしてこのような出来事への指示によって現在の社会関係が構築される。つまり、過去の出来事は現在の社会と個人の人格を構築しているのである。このとき、時間の単方向的性は出来事の表現を通じて各々人格を歴史において一回的なものとして指示する。そしてこのような時間の単方向的性は家族的領域における世代の階層性にも対応し(家族内の「世代」は時間の親族的表現である)、経験の形成の基本的枠組みとなる⁷⁾。

以上でみられた近い過去をめぐる「語り」の特徴は、現在とは一見連続してはいない遠い歴史についても言うことができる。たとえば、フランスという国の歴史と同様、実際のフランシュ＝コンテの歴史には様々な紆余曲折があり、簡単にまとめることはできない。

⁷⁾ 人格を歴史的に一回的なものとする表象は、キリスト教的な人格理解の一つの起源があると考えられる。たしかにカトリックには、一方で時間の循環というテーマが存在する(それは毎日、毎週、そして毎年のミサによって繰り返される「復活」であり、また、歴史の果てにおけるキリストの再臨である)。しかし他方で、キリストは一回的な歴史に内属しつつ歴史を超越するものとして示されるので(歴史への内属は、キリストの肉性の表現である)。その意味でそこには線的な時間認識も存在する。そしてこのようなキリストという存在の歴史的一回性は、キリストが人格の象徴的モデルとなることにより、知的営為(神学的議論)や日常の宗教活動を通じて、信者の時間の表象的認識に働きかける。ここでは考察しないが、この人格の象徴モデルが人々の自覚的社会行為に反映されるプロセスは、きわめて複雑なものであり、決してそのモデルが自動的に社会生活に直接反映されている訳ではない。

しかし多くの場合、フランシュ＝コンテの歴史として会話などで提示されるのは 17 世紀のフランス王国併合前後の歴史であり、それはその時代の出来事がこの地方の自律性を浮き彫りにするからである。本当にこの地方が自律的であったかどうかは問題のあるところだが、重要なことはこの価値は現在の人々の持つ社会的価値であり、その価値を表明するためにこの出来事が「語り」の主題として選ばれるのである。しかし、このような遠い歴史では身近な人物は現われないので、現在の人々の経験との間には距離が生まれる。そのため、フランシュ＝コンテの歴史という知識そのものは実際の自分の社会関係を規定するものにはならない²¹⁾。この点に歴史認識が地域主義につながらない理由の一つがある。

このように、人々の間の社会関係は会話の中でそのつど構築される出来事の共有化という言語行為によって保証される。この時、現在の人間関係は一回的な時間に従う特異なものとして認識され、かつ過去との対照において構築される。その際、出来事において参照されるのがしばしば家族であることからわかるように、その親密さの基礎になるのは家族的領域における親密さであり、したがって、家族の構造が出来事をも構造化している。そしてその出来事を共有していくことで、非家族的領域における親密さが形成され、さらに新たな出来事を生み出していく。こうして家族を中心とした出来事の積み重ねが経験となって個人のアイデンティティーの基礎となり、それがまた社会関係を生み出して行くのである。

3) 秘密

「語り」における出来事の提示は、発語の場における社会関係を構築し、それによって生活空間を構築するもので、その社会関係の構築は出来事を経験として共有することに依存する。しかし、そのような経験の共有は常に望ましいと考えられている訳ではない。人々の経験には「秘密」の領域があるからである。ジュラの人々の言語行為を観察し、あるいはインタビューという形の言語行為を行っていると、そこには決して言葉では提示されない出来事があることがわかる。それは個人の内面的感情に関わる出来事である。たとえば、ライフヒストリーを巡るインタビューをしても、その人の身の回りに起きた出来事は淡々と話してくれるが、その出来事を巡るその人の内面の細かな動きはなかなか話しては貰えない。もちろん、彼（彼女）がそのような内面的感情を持っていることは確かなので、そこには内面的感情を秘密にしたいという意思が働いていると考えられる。

秘密とされるのは何かの特別な知識などではなく、個人の感情的側面である。そしてこの秘密は人間関係における親密さと密接に関わっている。ある女性は「人に内面的な話をするためには 2 世代以上にわたるつきあいが無いといけない」と指摘している。また、日常生活においても激しい感情をあからさまにはしないことが期待される（もちろん、だからといって全く感情を示さない仏頂面は、対人関係の拒否につながるので決して良いわけではなく、「礼儀正しさ *politesse*」を保ちつつ「よく話しをすること *discuter bien*」が求められているのである）。また同様に、その人の身体（それには性が含まれる）にまつ

²¹⁾ ジュラでよく行われる観光客向けの演劇であるソン＝エ＝リュミエールでは、ジュラの歴史、特に 16 世紀から 17 世紀にかけての歴史がよく演じられる。しかし、そのような演劇も地域意識を高揚させたりすることはなく、人々は単に自分たちも楽しみながら観光客を相手にする活動としてそのような題材を選んでいるだけである（三浦、1995）。

わること、そして経済状態にまつわることも秘密にされる。これらの秘密は最も個人的な出来事であり、最も親しい人々である家族やごく近い友人のみに共有することが許される。またカトリック信者の場合、瞑想的祈り *prière mystique* において神に働きかけるのはこの領域においてである。前章で見たあだ名や他所者の排除もこのような秘密と関わっているが、あだ名が一定の数の秘密を共有する人間の存在を前提とするのに対し、感情や身体や経済状況を巡る秘密はより私的である。

このように経験には、共有することにより人間関係を構築しようとする時に使われるものと、秘密にされるものがある。これは明らかに人格指示詞の体系に見られた人間関係の階層化の原則と同一の原則によるものである。そして、非家族的領域における親密な領域の拡大という方向性も、この「秘密」の領域を侵さないような形で展開されなければ、かえって反発を買うことになるのである。

以上のような人間関係の階層性とそれを支える出来事や家族関係は、人々の日常の行為の在り方を規制し、社会的結合の形成をさまざまな形で方向付けている。こうして、社会的結合関係の特質は人々が行為を行う際に重要となる社会的価値の意味を明らかにする。

(4) 人格概念と行為

1) ジュラにおける「人格」の特徴

以上の第3章と第4章で行ってきた分析は、次のようにまとめることができる。生活空間において社会的に認知されている行為主体の在り方としての「人格」は、ジュラにおいては人格指示詞をともなった人格の指示の在り方を手がかりに明らかにすることができる。そして、人格指示詞の持つ社会的ダイクシスとしての性格ゆえに、ジュラの人々の行為を支える「人格」は、その「人格」を担う個人が周囲の個人と取り持つ Ego 中心的な関係の質に対応している。この時、この人間関係は「親しさ」の度合によって Ego 中心的に階層化されているが、その階層化の在り方によって親しい人間関係は、個々人がその階層の中に固定されている家族的領域と、固定されていない非家族的領域とに分けられる。

家族的領域内での人間関係の特徴は、異世代間関係の非対称性と同世代間関係の平等性である。使用される人格指示詞は、分類の参照枠を持つ親族呼称でありそして Ego に対する系譜上の位置に対応して、それぞれの個人には Ego に対する一定の役割（日常的な扶助関係や、家族内の儀礼への参加義務など）が期待されている。また、家族的領域は世帯を中心に同心円状に徐々に親しさの度合を薄め、同時に親族として期待される役割も少なくなっていく（すなわち、Ego との親族関係の度合が遠くなればなるほど、親しさの度合も減じていく）。そのため、系譜的に遠い親族と Ego との関係は、非家族的領域における人間関係に近いものとなっていく。最終的には同化してしまう。したがって、家族的領域の外部境界は曖昧であり、「家族」という言葉がどここの範囲までを指すのかはその語が使われる状況によって変化する。しかし、一般に家族として頻繁に接触するのは、尊属、卑属ともに二世代の範囲の居住集団を中心としたごく近い親族、すなわち、直系および第一度の傍系までであり、その意味で通常「家族」といった場合にはこの範囲の人間が対象となっていることが多い。

これに対し、非家族的領域においては3つの要因によって人間関係は構造化されてい

る。それは、親しさの度合、性、そして世代である。この時、性と世代の相違は固定されているものだが、親しさの度合に関しては、家族的領域の場合とは異なり常に変化していく。すなわち、非家族的領域に属する二人は、常に親しさの度合を高めていくことが期待され、初対面の者同士もやがては友人 *copain/copine* になっていく。そしてその親しさの度合の変化に応じて人格指示詞も変化していく。こうして Ego の周囲には最も親しい人達がいることになるが、親しさの度合そのものはさまざまなニュアンスを含むので、親しい人と疎遠な人達との間の境界は実際には曖昧であり、かつ拡大を志向していくものである。

このように、Ego を取り巻く人々は Ego との親密な関係によって特徴づけられる。この時この親密さを基礎づけるものは、家族的領域においては家族成員間の構造的関係であり、非家族的領域においては出来事の共有である。そして、非家族的領域において共有されるべき出来事は、家族的領域における構造によって規定され生み出された出来事＝経験を基本としているという点で、家族的領域の構造は出来事を生み出す要因となっており、そしてその出来事の共有によって生み出されていく非家族的領域における人間関係のなかから配偶者が選ばれ、家族的領域は再生産されていくのである。したがって家族的領域と非家族的領域は、出来事を媒介として互いに依存しあっている。

こうした人間関係の特徴はそのまま人格の特徴でもある。したがって、ジュラにおける「人格」とは、家族的領域における家族構造と、その家族構造を基礎に作り出されて非家族的領域における「親しさ」を作り出していく出来事によって構成されていると言えることができる。そして、この様な出来事は時間とともに次々と生み出されるという意味において、「人格」概念に基礎を置く個人の主体性は個人の特殊な経験に開かれたものであり、出来事における時間の一回性はその個性性を強調するのである。

2) 人格と行為の価値

以上で見てきたような「人格」とそれに基づく社会関係の在り方を、一定の名詞や形容詞で特徴付け表現するものが、前章の冒頭で見た行為の価値である。行為の価値は生活空間における個人の行為の在り方を規制することを通して、ジュラの「人格」の在り方を再生産する。それでは、ジュラにおける社会的価値はどのように以上で見たような人格概念から生まれてくるのだろうか。

親密な領域の拡大への志向は、「よく話をする *discuter bien*」という価値によってしばしば表現される。人は知り合うと「人とよく話をする」を求められるが、それは多くの出来事を共有することを通して親しくなることにつながるからである。しかしながら、どのような場合でも無条件に出来事の共有が求められる訳ではない。そこには「礼儀正しさ *politesse*」と呼ばれる価値による規制がある。この価値は、人格指示詞に示されたような人間関係の秩序を守ることを意味する。すなわち、経験の共有度の少ない人の中ではそれぞれの経験への度を超えた介入を、経験をある程度共有している人の中ではそのような共有を拒絶することを、それぞれ否定的に評価するとき「礼儀正しくない」とされるのである。このことは、出来事の共有には二つの側面があることを示している。すなわち、経験を共有することは親しみを強化するために価値が置かれる反面、経験はその人の人格の根底に関わるものである以上、その人格を傷つけないような形で経験の共有が求

められているのである。そしてこのような経験は人の行動の根底にあるものなので、人が秘密にしたいと思っている経験を人に知られることは、それによって自分が他の人に利用される危険があることをも意味している。「優しさ *gentillesse*」という価値は、このような経験の共有の持つ相対立する二つの側面を中和させ、人を傷つけることなく出来事を共有しようとする姿勢を評価するものであり、それは人間関係の階層性を守ることによって実現する。そして世代によって人格指示詞が非対称的になるのは、年下のものが年上の者の持つ経験を尊重することが望まれるからである。反対に、このような出来事の共有を理由もなく拒否することは「高慢 *orgueil*」（または *fiercé*）」と見なされる。このことは、出来事の共有を拒否して距離を保とうとする人は自分を優位に立つ人間であると不当に見なしている、と受け取られることを示している²⁹⁾。このような批判は、もともと世間的に地位が高く見られている知識人や公務員など、自分とは異なる他の社会的カテゴリーに属する人に対して向けられることが多いため、似たような社会的環境のなかにいる農民同士ではこの言葉が使われることはそれほど多くはない。

これに対し、より頻繁に耳にする否定的価値が「嫉妬 *jalousie*」である³⁰⁾。この言葉は、「あいつがそんなことをするのは嫉妬しているからだ」というように、人の様々な社会的行為の否定的側面を説明するのによく使われる一方、人から何らかの批判を受けたときは「俺は誰にも嫉妬なんかしていない、俺は十分満足している」という言い方をして反論する。そしてすべてのいざこざの根底には嫉妬があると説明される。「嫉妬」は人と自分を比べたときの劣等性の意識であり、したがって互いに同類と考えている者の間でのみ「嫉妬」という言葉を用いた駆け引きが行われる（もちろん、何をめぐる同類かはその会話の時に問題となっている状況による）。例えば、ある農家で 60 馬力のトラクターを買った直後に隣の農家で 70 馬力のトラクターを買ったという出来事があったが、このとき村の人は、後からトラクターを買った農家とその隣人に対して嫉妬したからだと説明した。ここでは同じ農家ということで嫉妬の対象となった、とみなされたのである。この出来事は、「嫉妬」という価値をうまく使えば農村の発展にも貢献しうる（すなわち、「嫉妬」によって引き起こされた競争によって技術革新が急速に進展する）ということを示しているが、しかしむしろ深刻な対立を引き起こすことのほうが多い。したがって、日常生活においては人から嫉妬をしていると見られないように行動することが重要となるし、ある人に対して「あいつは俺に嫉妬している」と言うことはその人に喧嘩を売るような「礼儀正しさ」に反する態度である。通常はこの「礼儀正しさ」の必要から、人々の話のなかにはいざこざの話が現われることは少なく、少し話を聞いただけでは村の中は争いのない平和に満ちているように錯覚する。しかし、実際には村の中には多くのいざこざがあり、「嫉妬」はその主要な原因と見なされている。

このように「嫉妬」は過度に防衛的な態度である。嫉妬するのは、自分が今まで積み上げてきたものが、他の人と比べて不十分であると自分に思われるからなのであり、したが

²⁹⁾ R. Layton は、彼がドーウ県の農民に関して指摘した 4 つの価値のうち「親切さ、やさしさ」と「高慢」に関して、前者が互酬的であるのに対して後者は互酬性の拒否であると指摘しているが（R. Layton, 1971: 105）、このことは前者が対等な関係のなかで出来事を共有しようとするのに対し、後者はそのような共有を拒否する姿勢であると捉え直すことができる。

³⁰⁾ 嫉妬の強さは戦間期にドーウ県で行われた農村調査においても強調され、嫉妬が村を支配している、と報告されている（L. Garapon, 1937: 339）。

ってそれぞれの個人が自分のアイデンティティーを経験という構築的な要素に置いているが故に「嫉妬」は社会的相互行為において意味を持っているのである。つまり、「嫉妬」するのは、自らの経験のなかでのアイデンティティーの構築が不十分であり、自分で自分の経験を十分に評価できないと思われるために、その劣等感が否定的な社会的相互行為として現われたものであると判断されるのである（したがって、このような劣等感が否定的な行為として現われないときは「嫉妬」とは見なされない³¹⁾）。

このような「嫉妬」という価値は、その裏返しとして「頭のよさ *intelligence*」や「自律性 *independence*（あるいは *autonomie*）」という価値との対比で捉えることができる。すなわち、一定の困難にも関わらず自分の経験の構築をより望ましい形（この場合望ましいというのはそれぞれの人の求めるものによって異なる）で展開できる人は「頭がよい *intelligent*（あるいは有能である *capable*）」と判断される。このように「有能」な人は当然、周囲の人に嫉妬することもありえない。したがって、自分が「有能」であることを示すことができれば自分の評価は高くなる。また、有能な人はそれだけで評判が高くなり、時には熱狂的な支持を受ける³²⁾。そして、そのような経験の構築において、名で呼び合うような親しい人の助け以外の助けに頼らずに経験を構築しうること、すなわち自分が自分の経験の構築の主体となることが「自律性 *independence*（あるいは *autonomie*）」であるといえることができる。このような自律性を侵す主なもの行政や大企業である。もちろん、今の時代にこれらの行政や大企業に頼らずに生きて行くことは不可能である（これが「かつて」と「今」の相違の一つであるとされる）。しかし、それでも自分の経験の領域の構築に当たって自分の意思を可能な限り貫くことに、より高い価値が置かれるのである。「嫉妬」はこのような自律性が他の人よりも不十分にしか達成できない場合、その他の人達に向けられる攻撃性である。

こうした価値は、なぜジュラに地域主義が存在しないのかということの理由の一端をしめす。つまり、ジュラの人々はそのジュラという地域に住む人々の誇りとして「自律性」を強調するが、この自律性とはすなわち、生活空間を超えたところから山來する権威の拒否なのである。したがって、生活空間を超えた「地域」の強調は、かえってその自律性を脅

³¹⁾ 「嫉妬」の概念をこの様に見てみると、それがちょうど地中海世界における「名誉」概念とちょうど正反對の様相を示していることがわかる。J. G. Peristiany & J. Pitt-Rivers は、「名誉」はちょうど神の恩寵のような意味を持っていると指摘しているが（J. G. Peristiany & J. Pitt-Rivers, 1992: 3）、「嫉妬」とはそのような恩寵が得られないということの意味しているからである。そしてこのような恩寵が個人の最も私的な部分での神と個人の交信によるものであってみれば、嫉妬は個人のアイデンティティーの最も基礎的な部分に関わっているのである。このような「嫉妬」と「名誉」の関係からみれば、ジュラにも当然「名誉」概念があってもよいと思われる。実際、「かつて」は「名誉」という概念が村の社会生活において重要だった、という語も聞かれた。しかし今ではもはや「名誉」は重要なものではなくなり、その代わり「自律性」が重視されるようになっていく。なお、「嫉妬」は聖書においてはカインとアベルやエサウとイサクの挿話などにおいて極めて重要な価値となって物語られている（ヘブライ語における複数の異なる言葉がフランス語聖書において「嫉妬 *jalousie*」と訳されているため、ジュラにおける嫉妬と聖書における嫉妬とを同列に議論することはできないが、少なくともジュラの通常の聖書の読者はヘブライ語における複数の嫉妬概念の区別は知らない）。

³²⁾ このように有能であると判断されてカリスマ的であった人物の一人が、かつてフランシュ・コンテを地盤として政治家として活動した E. Faure である。彼は C. de Gaulle 大統領のもとで何度か閣僚になったが、地元でも村長や地方議会議長などを兼任していた。

かすものと見なされるがゆえに、地域主義の強調は拒否されるのである。

このような価値はあくまでも社会的なものであり、心理的なものではない。例えば「嫉妬」が問題となるとき、本当にその当人が嫉妬という感情をもっているかは問題ではない。重要なことは、「嫉妬」のような言葉が社会的相互行為のなかで行動の評価のために使われ、これらの価値が人を一定の方向に動かすための権力手段となっているという点である。そしてこれらの言葉が権力作用をもつための基盤が、親密な人々のなかで自らの経験を構築していくことにより自らの人格を確立していく、というジュラにおける「人格」の概念なのである。このような人格概念がなければこれらの価値は権力作用を生み出しえない。

以上の点を踏まえて、最初に上げた個人主義と協同主義と共同体主義の関係について暫定的な結論を与えておこう。まず、個人主義という場合の「個人」というものは、実は「親密さ」の領域と重なるものであり、その意味で境界が曖昧であるという点が指摘できる。したがって、「個人」の利益なるものも、実は状況によって変わってくるのである。この時、居住集団を中心とした家族はその「個人」の人格の中心に位置しているが、しかし同時に非家族的領域における親密な領域の拡大（すなわち出来事の共有）の要請は、個人主義を協同主義に転換する意味を持っている。したがって、このように「個人」なるものが一人の生物学的な個体に還元できない以上、協同主義と個人主義を対立させることは無意味なのである。しかし、共同体主義との関わりはそれほど単純ではない。というのも、共同体主義はそこに実際の経済的活動における利害関係が絡んだ権利と義務の問題が入り込んでくるからである。そしてそれは、以上で見てきた人格の概念を基礎としつつも、実際の物質に媒介された社会過程を見てみないことには、よりはっきりしたことは言えないのである。そして、協同主義と個人主義の本当の意味も、このような利害関係の絡む、物質に媒介された社会過程のなかで再検討していく必要がある。ここまでの分析から言えることは、ジュラの人格概念においては個人主義と協同主義は決して対立するものではなく、むしろ連続したものであるということである。しかしその実際の現われ方は、利害の絡んだ社会過程を検討することを通して明らかにするべき問題なのである。

ともあれ、以上においてジュラ社会の生活空間の様々な特徴を基礎づける価値と人格概念を見てきた。これらはジュラの人々が本来的に持っている特性というよりは、彼等の日常の社会過程の中で再生産されていくものであり、おそらくは地中海世界における「名譽」概念と同様に、社会過程の連鎖としての長い歴史の中で形成されてきたものと考えられる。ジュラにおける諸個人の社会的結合関係はこのような人格概念に対応したものである。しかし、ジュラにおける実際の社会に見られる協同組合や個人主義と言われるものは、これらの人格概念から単純に演繹されるものではない。現実の社会関係は単に会話のみによって成り立っている訳ではなく、さまざまな物質的關係と外部環境の影響のなかで展開されているのである。そのなかで人格概念は、あくまでそれぞれの個人がさまざまな社会的行為の条件や情報を、一定の形で価値づけ整理するためのものでしかない。その意味で人格概念の検討は、ジュラにおける社会的結合関係という問題にアプローチするための分析の出発点に過ぎない。この社会的結合関係の問題を十分に明らかにするためには、この人格概念が実際にどのように生活空間における社会関係の動態と関係しているのかを検討する必要がある。そこで次に、実際に社会的事実や社会関係がどのように構築されているのかを、その生活空間における外部環境と人格概念との関わりをなかで検討する。



写真 5：第一プラトーの古い民家
（左端が居住部分、中央より右が牛舎と納屋）

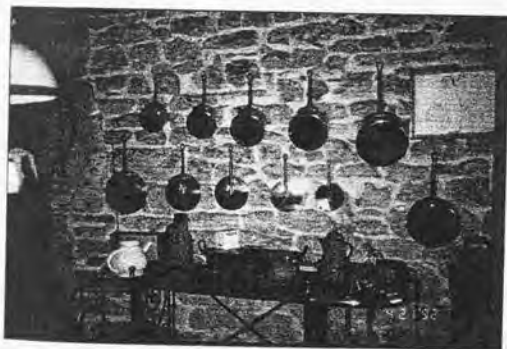


写真 6：古い民家の台所

III. 社会

現代資本主義経済における酪農経営の戦略と社会過程

この農耕という職業について、これまであらゆる言語で無数の書物が書かれてきたが、このことから、最も賢明で最も学識のある国民の間でさえ、農耕というものがわかりやすい仕事だとみなされたためがないということがわかる。そして、農耕の多様で複雑な作業についてありふれた農業者ですら普通に持っている知識を、われわれがこうしたすべての書物から収集しようとしても、それは無理であろう。しかも、これらの書物を著した高慢な著者たちは、こうしたありふれた農業者のことを軽蔑的に語りたがるのだ。

— アダム・スミス『諸国民の富』

ヴァルジャンさん、あなたのいらっしゃるボンタルリエの土地には、素材でしかちとでも面白い蔬菜があるんですよ、フリュイチエールと呼んでいるチーズ製造所なんですよ。

— ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』

農業生産システム

(1) ジュラの農業と社会

1) 農業と社会

ジュラ社会の特徴とされる個人主義と協同組織の発達という相矛盾するように見える志向は、一定の人格概念を基礎にしている。しかしそれは純粋に観念や会話のなかにのみ存在するものではない。それは、M. Dion-Salitor & M. Dion の議論に見られる様に、現実の生活空間における社会生活では、一人一人の行為主体が様々な物質的および非物質的環境を一定の場において様々な操作しつつ、社会関係を構築している。個人主義と協同組織の発達という特徴的な社会的結合関係は、このような実際の社会関係のなかに展開するものであり、決してイデオロギーの内部にとどまるものではない。そして、このような社会関係が構築される場として大きな位置を占めているのが、ジュラの場合は農業である。

すでに指摘してきたように、ジュラ高原は農業優位の地域である。もちろん、フランスの他の地域と同様、全人口に占める農民の数は減少の一途をたどり、それぞれの農地や森林のなかに作られた村々でも、町に働きに出る者が大半を占めるようになってきている。しかしながら、その土地利用の大半は農業であり、ジュラ高原の社会の物質的基盤は農業によって深く規定されているといえることができる。そして実際、家族、諸個人の社会的結合関係、環境と市場経済への適応など、そこにはジュラ社会を取り巻く主要なテーマの多くが見られるのである。すなわち、農業はジュラ高原の人々の生活空間の一つの重要な要素となっているのである。その意味で農業経営はジュラにおいて、M. Mauss の言う「全体的社会的事実」の一つである。農業というのは極めて複雑な生業であり、農民は様々な資源を動員して一定の目標を達成しようとするのである。

ジュラの農業はチーズ生産のための酪農が中心となっている。このような牛乳生産とチーズ生産のために、それぞれの農業経営者は資本、牛、土地、設備、労働力などのさまざまな資源を組織的に動員する。そのように組織化された資源の総体をここで農業生産システムと呼ぶことにするならば、農業経営とはこの農業生産システムを用いて一定の目的を達成しようとする行為である。このとき、この農業生産システムは生活空間の内部に属するが、その運営は農業生産システム自体の特性と、その農業生産システムを取り巻く外部環境の、両者によって左右される。

以下に続く2章においては、どのように農民たちが農業生産システムと外部環境の間の調整をはかりながら、それぞれの農業経営を実現しているのかの検討を通して、すでに論

じた人格概念がどのようにこうした農業経営戦略と密接に結び付いているか、そして、そこにおいて協同組織がどのように実現して生活空間を構築しているのかを論じる。まず第5章においては、農業経営の基礎となる農業生産システムがどのように組織化されているのかを検討する。そして第8章においてはその農業生産システムがどのように外部環境への対応において運営されるのか、そしてこの様な対応がどのように人々の社会生活が営まれている生活空間を基礎づけているのかを検討する。この様な検討は、社会的結合関係の動態的関係とともに、ジュラの社会形成の特性をも明らかにするだろう。しかし、詳細な検討にはいる前にまず、農業生産システムと外部環境のそれぞれについて簡単に概要を見ておこう。

2) 農業生産システム

農業地理上は、フランシュ＝コンテは均等相続、長形開放耕地、三圃制の地域の属している。すなわち、均等相続のために耕地の大半は比較的規則的に長方形に分割され、輪作と牧畜を効率よく行うために、個々の耕地の間には特別の柵がなく自由に往来できるようになっていることが多い。この耕作形態の地域は歴史的社会的には共同体規制が強い地域とされている。この時、共同体といわれるのは村落共同体ないしはコミュニティであり、土地利用に関してはこの村落共同体やコミュニティの決定がそれぞれの農家の意思決定を拘束してきた。

三圃制は中世ヨーロッパに生まれた耕作形態で、一定の土地にとどまりつつ、3年を一周期として放牧と春小麦、冬小麦とを組み合わせた輪作によって、地力を維持し生産性を維持していこうとするものである。しかし、このような農業地理上の図式は大ざっぱなものであり、常に厳密にこの三年のサイクルが適用されていたわけではない。ジュラ山脈の耕作はその低い気温のため常に長いサイクルを持ち、3年を1サイクルとする厳格な三圃制をとっていたプレス平野やヴィニョーブルと明確な対比をなしている。そして高地ジュラでは、その気候の寒冷さゆえに一時的耕作 *culture temporaire* と呼ばれる10年から20年を1サイクルとする長い周期の輪作が行われてきた (J. Brelot, 1953: 65-67; J. Boichard, 1977: 143)。現在ではその他にも実際には多く経営形態がみられるが、こうした経営形態の背後にはそれぞれの農民の経営戦略がある。そしてこれらの戦略の根底には、酪農という生業の持つ制約のほか、農家の行動を方向づけているさまざまな行為を巡る価値概念が存在している。こうした行為を巡る価値は、生産活動を通してそれぞれの財の価値を生み出して行くが、以下ではその戦略のなかでどのように生産が組織されるのかを検討していく。

ジュラ高原の農業は、チーズ生産のための酪農がほとんどを占める。この地方で作られているチーズは、グリュイエール・タイプと呼ばれるプロピオン酸発酵による大型の硬質チーズである¹⁾。フランス全国では300種類以上の、さまざまな特性のチーズが生産され

¹⁾ 製造方法の点ではこのチーズは圧搾加熱タイプ (*fromage à pâte pressée cuite*) と呼ばれるグループに属する。A. Eck (coord. par, 1987) によればこのタイプのチーズはエメンタル・タイプ・チーズ、グリュイエール・タイプ・チーズ、および劇りチーズ (バルメザン、シュブリントなど) に分けられる。このうち前二者がプロピオン酸発酵によるチーズであり、日本では併せてスイス・チーズと呼ばれることもある。

表 15: フランスの主要チーズ

資料: F. M. Luquet (1986: 111)

種類	代表的チーズ	細菌	蛋白質 (g)	脂肪 (g)	Ca (mg)	熱量 (kcal)
フレッシュ チーズ	ブティニスイス フロマージュ＝ブラン	乳酸菌	10	0-9	100-160	50-150
軟質チーズ	カマンベール エボワス	白かび 乳酸菌	21-28	20-28	150-380	260-350
半硬質チーズ	ロックフォール ブルー	青かび	20	27-32	722-870	414
半硬質チーズ	トム、カンタル サン＝ネク＝メール	乳酸菌	24-27	24-29	657-865	325-384
硬質チーズ	コンテ エメンタール	乳酸菌 プロピオン酸菌	27-29	28-30	900-1100	390-400
(参考) 鶏卵	-	-	12.7	11.2	65	156

ているが(表 15 参照)、グリュイエール・タイプのチーズの原産地は、フランス東部のジュラ山脈からスイスのアルプス西部にかけての山岳地帯とされる。今日このタイプのチーズで製造されているものは、コンテ、エメンタール、ポーフォールといった種類に分類されている。コンテの場合、その重さは約 45 kg であり、直径約 80 cm、高さ約 10 cm の円盤状をしており、エメンタールの場合は凸レンズのような形をしていて重さも 100 kg を超える。ジュラ県では生産されるチーズのほとんどはコンテだが、ドゥー県ではコンテとエメンタールがほぼ半々ずつ作られている。これらのチーズは日常ではそのままをパンとともに食べたり、サンドイッチに入れて食べるほか、サラダに入れたりチーズフォンデュにしたり、あるいはグラタンに使ったりと、さまざまな食べ方ができ、フランスで最もよく食べられているチーズの一つである¹⁾。

以下で具体的に取り上げるのは F 村の例であるが、プラトーの上の農業は非常に均質化しているので(P. Pernier-Cornet, 1986: 86)、その特徴はプラトーの上の多くの村にも共通して見られる特徴である。地方全体として見れば、第一プラトーの農村部では過疎化と離農の傾向ははっきりしており、若い人々は次々に農業を離れて都市の賃金労働者となっている。その上、フランス農業全体の低迷と生産制限や価格の低迷(表 16、表 17 および図 10 参照)が農業経営を圧迫している。

実際に牛乳を生産するために農家はさまざまな資源を動員し、そして生産物を販売して現金収入を得、生活空間とその中心の一つである家族を経済的に支えている。この様なジュラの農業生産システムでは次のような形で資源が動員されている(図 11 参照)。まず、牛乳を生産するためには乳牛が必要である。乳牛は出産をして始めて乳を出すので、牛乳

¹⁾ ジュラで生産されているチーズには他に、モルビエ(高地ジュラ)、セトモンセル(高地ジュラ)、ブルー・ド・ジュエックス(高地ジュラ)、ヴァンサン・モン＝ドールが生産量が多いが、いずれも高地ジュラで生産されている。第一プラトーと第二プラトーでは生産の中心はコンテかエメンタールであり、その他はモルビエやシェヴル(山羊乳によるチーズ)が若干作られているのみである。

表16: ジュラ県主要農業統計資料(1)

■フランシュ=コンテ地方の一世帯当たりの所得分配(1983年) 出典: INSEE (1984)

農業経営	2,200	フラン
非農業個人企業	7,700	
給与所得	28,600	
再分配所得	19,100	
その他	10,000	
計	67,600	

■農業人口の変化 出典: AREEAR (1980), INSEE (1992a)

	ジュラ県	フランシュ=コンテ地方
1970	10201	30992
1979	7735	24709
1988	5869	19725
1990	5360	17730

■経営面積別農業経営体数 出典: Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1990)

経営面積 (ha)	- 5	5 - 10	10 - 20	20 - 50	50 - 70	70 - 100	100 -	合計戸数
経営体数 (%)	24.9	7.1	11.4	30.4	13.0	9.1	4.1	5,859 戸

■分野別農業経営構造 出典: Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1990)

	経営体数 (%)	面積(ha)	MBS 別経営体数	
			<8.0	>16.0
穀物	7.1	21,529	94	257
花本類	1.0	171	26	20
ブドウ	10.1	2,382	380	307
乳牛	35.9	107,577	214	2,020
肉牛	6.9	10,071	309	207
乳肉牛	2.6	8,011	28	137
羊・馬	15.0	13,542	809	176
複合	21.4	32,297	706	608

MBS: 経営環境所得 (単位は経済規模単位 UDE)

■乳牛所有頭数別酪農経営体数 出典: Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1990)

所有頭数	1 - 9	10 - 19	20 - 49	50 - 100	100 -	計
総頭数	2,099	10,106	43,568	9,985	578	66,336
経営体数	381	705	1,436	165	5	2,692

表 16-b: ジュラ県主要農業統計資料 (2)

■農家人口の年齢構成							
出典: Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1990)							
年齢	-15	15-24	25-34	35-44	45-54	55-64	65- 総人口
農家人口 (%)	17	16	11	12	14	18	20,079
経営者 (%)	-	1	12	19	23	32	13 5,869

の生産は常に乳牛の再生産を伴う。また、乳牛を飼育するためには飼料が必要である。飼料としては穀物による濃厚飼料や牧草、根菜（テンサイ）による粗飼料、そして工業的に生産された配合飼料が用いられる。ジュラではこのうち濃厚飼料と粗飼料の半分は、牛を育てている農家が同時に畑で栽培している。また、夏の間は放牧も行われている。生産活動に必要なさまざまな生産設備の多くは購入によって手に入れられるが、それほど高度な技術を必要としない納屋の建設などは、自分たちで資材を購入して行ってしまうことが多い。いくつかの農業機械に関しては、個人の所有ではなく数軒の農家の間でつくる CUMA によって共同所有されることもある。このようにして生産された牛乳は次にチーズ組合に運ばれる。チーズ組合ではチーズ職人が牛乳をもとにしてコンテ・チーズを作り、2 か月ほど熟成庫で熟成される。チーズ組合での熟成が終わると次に倉庫業者に出荷され、さらに 4 か月以上熟成が続けられる。そして、倉庫業者での熟成が終わるといよいよチーズは小売店に出荷される。

このような牛乳生産の農業生産システムは、生産物を生み出す労働対象である生産資源と、それらの生産資源に資本と労働力を投下する生産組織からなっている。生産資源は、牛乳を生産するための牛、そしてその牛に与える飼料を生産するための土地という、2 つの要素からなっている。生産組織は、2 つの生産資源を組織化して牛乳を生産する農業経営体（ここでは農家と GAEC [後述] を指す）、それぞれの農業経営を効率化するために作られている生産者協同組織、そして牛乳を集めてチーズという二次生産物を生産するチーズ組合という 3 つの要素から構成されている。

表 17: 最近の乳製品価格の変動

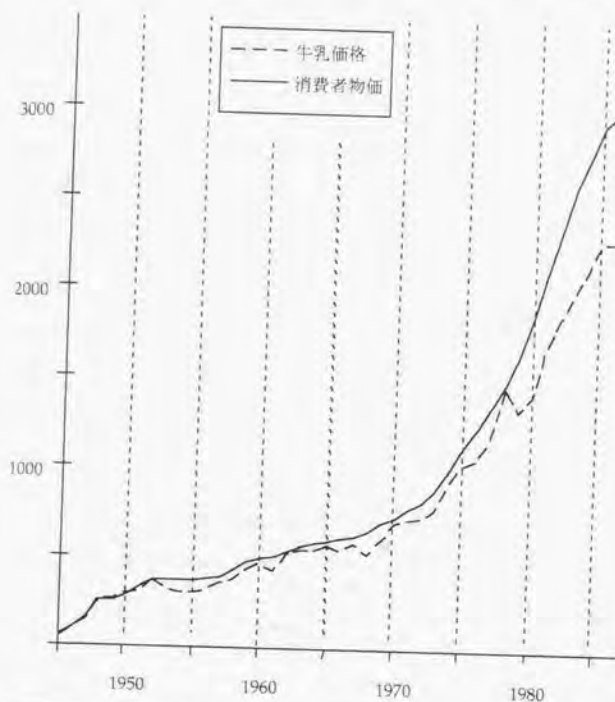
資料: OCDE (1992: 64), INSEE (1993: 416)

(1987 = 100)		1988	1989	1990	1991
消費者物価	フランス	103.1	106.8	110.4	113.9
	フランス	99.4	103.1	101.4	96.0
	ドイツ	104.0	107.6	94.5	89.1
	イギリス	98.6	101.8	100.8	95.9
	EC (12 カ国)	101.8	104.9	96.0	102.1
	スイス	103.1	99.9	93.5	91.6
名目乳製品価格	アメリカ	94.7	100.7	97.4	84.2

図 10：戦後の消費者物価とジュラ県の牛乳価格の変化

資料：DDAF (1988), INSEE (1990)

(1946年を100とする)



〔ジュラの農業生産システムの構成〕

農業生産システム

・生産資源

・生産組織

・土地

・乳牛

・農業経営体

・生産者協同組織

・チーズ組合

以下ではこの2つの生産資源と3つの生産組織を併せて、農業生産システムにおける生産要素と呼ぶことにする。このとき、ジュラの酪農生産はこの5つの要素が一定の形で

組織化される中で行われているのである。

3) 政治経済的外部環境

一般に農業がそうであるように、ジュラにおける農業生産システムは農業経営者自身が直接コントロールすることのできない外部環境から大きな影響を受ける。この様な外部環境は生態学的環境と政治経済的環境とに大きく分けることができる。その生態学的環境については既に述べたので〔「第2章(1) 自然誌」参照〕、ここではその政治経済的環境について見てみよう。

政治経済的環境は大まかに、政治的環境と経済的環境に分けることができる。政治的環境としては、さまざまな国の行政制度や農業政策があり、経済的環境としては農産物市場の動向がある。この政治的環境と経済的環境の両者はそれぞれ異なった原理を持つが、現代資本主義社会では互いに密接に結び付いている。

政治的環境として重要なのは、種々の農業制度と農業政策である。このような農業制度としては、さまざまな農業に関連する税制や補助金制度、農業生産のための共同組織に関するさまざまな法的規定などがあるが、特に重要なのは品質管理のための AOC¹⁾ という制度である。AOC は原産地管理名称 (appellation d'origine contrôlée) のことで、偽造を防いで農産物と食品を保護するために、1916 年に法律化された制度である。グリュイエール・タイプのチーズのうち、コンテとポーフールはまず原産地呼称として認定され (コンテは 1952 年、ポーフールは 1968 年)、ついで 1976 年と 1979 年の政令によって AOC としてその製造地域および製造方法が厳しく規制されるようになった。コンテの場合は、次のように規定されている。

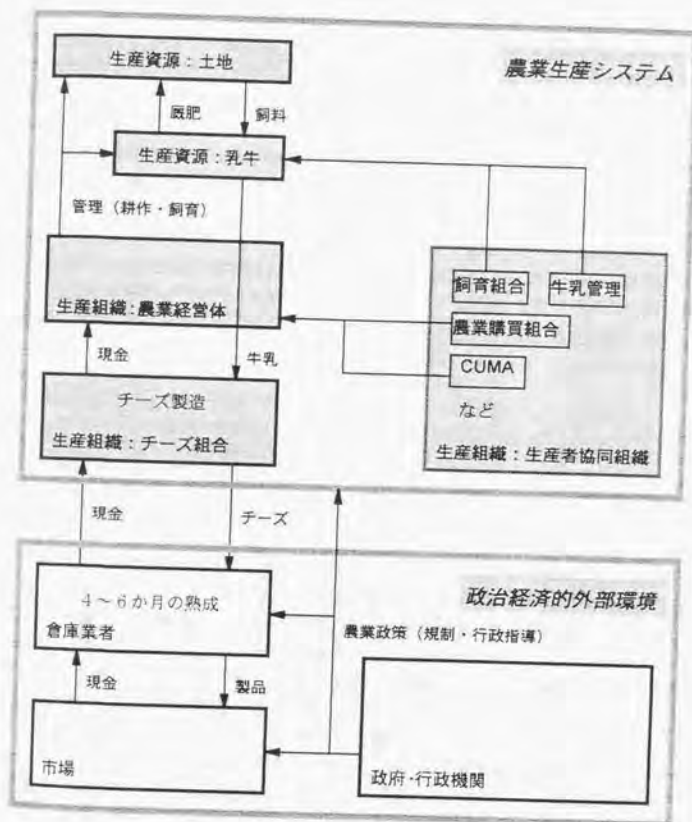
[AOC によるコンテの主要な規定]

- ・コンテの原料は生乳に限られる (加熱殺菌の禁止)
- ・モンベリアルド産ないしはイースタン赤産種の牛乳に限る (ただしサイレーン種は禁止)
- ・生産された牛乳は毎日一度または二度ずつチーズ製造所に持ち込まなくてはならない。
- ・チーズは製造後少なくとも 90 日以上、19℃ 以下で熟成させなくてはならない。
- ・一つの大きさは直径 40 cm ~ 70 cm で、高さは 9 cm ~ 13 cm、重さは 35 kg ~ 55 kg
- ・100 g 当たり 45 g の脂肪分と 62 g の乾燥成分。

この規制で特に重要なことの一つは、コンテの製造には、加熱殺菌処理をした牛乳の使用が禁じられているということである。このことはすなわち、牛の飼育に当たって、牧草

¹⁾ 現在 AOC に指定されているチーズは 32 種類 (うち 24 種類が牛乳によるチーズ) である。コンテは 19 世紀には、スイスの同種のチーズと同様に「グリュイエール Gruyère」と呼ばれていたが、このチーズの原産地がフランスのジュラ山脈なのか、グリュイエールという町 (フリブール州) を持つスイスなのかをめぐって論争が起き、最終的には 1951 年のストレーザ協定において「グリュイエール」という名はスイス製品に与えられることになったため、フランスではその生産地方の名をとって「コンテ Comté (またはグリュイエール・ド・コンテ Gruyère de Comté)」の名を採用した。なお、「グリュイエール」の語源としては、森の「林」を表わすドイツ語の言葉 (grün) が、フランス語で森林裁判官を示す言葉 (gruyer) が考えられているが、詳しいことはわかっていない (とはいえ、いずれの場合にしろ森に関係している)。ちなみに、スイスのグリュイエールという町の名は、その町の城主であったグリュイエール伯が森林裁判官であることに由来するが、チーズの名称がこの町の名前に由来するのかどうかははっきりしていない。

図 11：現代ジュラの酪農における農業生産システム



やトウモロコシなどをサイロで嫌気性発酵させてつくる、サイレージ飼料（牧草などを密封条件で嫌気性発酵させた貯蔵粗飼料）の使用が禁じられるということである。なぜならば、サイレージの過程では飼料の中に酪酸菌が発生するので、それを餌として牛に与えると酪酸菌が空气中を飛散して牛乳に混入してしまうからである。こうして酪酸菌に汚染

された牛乳は、発酵の過程でチーズを大きく膨張させて台なしにし、味を損なってしまう。エメンタールの場合は加熱殺菌処理をした牛乳の使用が認められているので、サイレーダ料料を使うことができる。

農業の政治的環境としてもう一つ重要な意味を持つ農業政策は経済的環境と密接な関連を持つ。そして、今日の資本主義化された農業が基本的に市場での生産物の販売を目的としている点で、ジュラの農業もフランス全体、そしてヨーロッパ全体の経済的システムの中に統合されており、それに対応してジュラに適用される農業政策も、EC=EU レベルで統合されたヨーロッパ共通農業政策 (CAP) によって支えられている。この農産物市場と農業政策の関連を、歴史的に振り返ってみよう。

フランスおよびヨーロッパの戦後の農業政策の目的は、この第二次大戦によって打撃を受け低下した農業生産力を回復し、自給率を高めていくということにあった。その際のフランス政府の方針は、農家の経営規模を拡大して現代化 modernisation (すなわち、機械化と経営の合理化) を押し進めることで生産力を上げていこうというものであり、この基本方針は1960年に制定された農業基本法と1962年から始まる EC 6 カ国によるヨーロッパ共通農業政策によって、本格的に実施に移された。今日のフランスの農業を深く規定している CAP の基本精神は、1957年に結ばれたローマ条約 (EEC 設立条約) の第39条に示されている。そこには次の5つの目標が挙げられている。

[CAPの目標]

- ・技術革新による農業の生産性の維持
- ・農民の収入の引き上げによる生活水準の向上
- ・農産物市場の安定化
- ・食糧供給の確保
- ・農産物消費価格の適正な水準での維持

これらの目標の達成のために用いられた政策の柱の一つが補助金政策で、これはあらかじめ設定された支持価格に基づいて、市場価格が低い時には市場価格と支持価格の差額を農民に保障し、市場価格が高い時はその差額分の関税を輸入農産物に課す、というものである。このような政策は、1970年代初頭まで大きな成果を上げることになる。

こうした政策の下、フランスの大半の地域では農業の現代化は効率性を重視した集約化という形をとった。酪農の場合は具体的には、ライグラスとサイレーダ用のトウモロコシの導入、飼肥料の外部からの購入の増加、泌乳量の多いホルスタイン種の導入と品種改良、そしてルースバーン式の現代的牛舎の建設である。一方、農業経済学者 P. Perrier-Cornet が指摘するように、ジュラの農業は独特の現代化を遂げた。フランス一般の現代化との主要な相違点は、過疎化を利用しての恒久草地の増加による経営面積の拡大という粗放化、モンベリアルド種というこの地方特有の乳肉兼用牛の維持とその品種改良、フリーストール式牛舎の建設、小規模家族経営への依存、そして伝統的なチーズ組合の重要性などである。つまり、土地利用は粗放化する一方で、農業経営と乳牛に関しては、伝統的なモンベリアルド種による小規模経営という形態を維持したまま、集約化を押し進めているのである (P. Perrier-Cornet, 1986: 76-83)。そしてこうしたジュラ型の現代化は、他の地域の一般的な現代化と同様、それなりに成功をもたらした。さらに他の経済部門の発達による国民経済全体の成長にも支えられて、農業生産高は順調に上昇し、農民の収入と生活水準も大幅に上昇し

た。また、ジュラは農業不利地域の一つとして、政府からの農業補助金による助成対称地域であり、標高の高い地域（したがって気温の低い地域）に行けば行くほど多くの補助金が支給されている。

しかし、他の産業部門と同様に、こうした順調なフランスの農業生産の拡大は、1973年のオイルショックを機に停滞へと転じることになる。農業の停滞の主な原因は、CAPの成功の結果生まれた農産物の慢性的な生産過剰、そしてそれによって引き起こされた農産物価格の低迷と国際競争力の低下などである。こうした状況の変化に対応して、1981年に選出されたミッテラン大統領による社会党政権は、それまでの農家の経営規模拡大の推進から、中規模・小規模農家の保護に政策を転換した。しかし、農業を取り巻く現状はそれほど改善されたわけではない。そして、補助金の天井知らずの上昇によるECの農業支出の肥大化、アメリカとの貿易摩擦、環境破壊などに頭を痛めたECは、1983年から徐々に農業政策を転換する。1984年（農業不利地域に指定されたフランシュ＝コンテ地方では1986年から）には牛乳生産制限を実施し始め、ジュラを始めとするヨーロッパの酪農家にとって大きな制約となった。そしてECはさらに1992年にCAPの見直し（マクシャリー改革）を行い、生産管理、農業収入の維持、農業人口の維持、環境保護などを新たな目標に設定した¹⁾。

このような状況のなかで、現在のジュラの酪農も厳しい状況にある。その主製品であるコンテに関して言えば、確かにこのチーズはすでにフランス人の食生活の中で重要な位置を占めているチーズなので、常に一定の需要は見込める上、AOCに指定されているためにその品質と地域特産品としての独自性が保証されており、その結果市場での競争はある程度制限され、その結果、ジュラの牛乳生産者価格は国内平均を若干上回っている。しかし市場はほぼ飽和に達し、もはやその需要の大きな増大も望めない状況にある。しかも、ブリュッセルによる牛乳生産制限は、適切に運用されれば市場における需要と供給のバランスを回復する可能性は持つが、実際には硬直化して農家の経営を圧迫している²⁾。1990

¹⁾ EC（ヨーロッパ共同体）は、1993年11月のマーストリヒト条約の発効によってEU（ヨーロッパ連合）へと移行したが、本論の基となった調査が行われたのはマーストリヒト条約発効以前であった。法的に見ればEUはECとは大きな違いを見せている。しかし、マクシャリー改革はこのようなEUへの移行とは別に、CAP自体の持つ問題への対応から生まれている（ただし、環境保護や財政支出削減などの点で、マーストリヒト条約と同じ方向性を持っている）。1992年までのCAPの問題としてEU委員会のエキスパート・グループは、価格支持政策の硬直性、生産者に対する補助金支給の偏り、農業収入の低迷、農業補助金では解決できない経済的社会的問題の発生、食品加工業の競争力低下、CAP行政の複雑化、供給制では管理不能となった過剰生産、環境への悪影響という、8つを指摘している（European Commission, 1994: 27）。このような問題が起きた背景として足永恵彦らは、食糧輸入国時代に作られたCAPが食糧輸出国時代となった今日ではもはや適合しなくなったこと、生産の拡大・集約化に伴って環境・資源保全問題が深刻化したこと、農業財政支出が増大する一方でその支出が少数の大経営の農民のみに利益をもたらしたにとどまったことの3点に整理している（足永他、1994: 71-72）。なお、ここで問題とする酪農に関して言えば、補助金政策からの転換をはかった1980年代以降の生産引き締めへの方向は、CAPにより補助金削減や環境保護として一層強化されたが、そこでの施策の方向性は本論で見るCAP改革以前のものと同じである。

²⁾ この生産制限は、牛乳の生産過剰と農業補助金の増大に対処するために導入されたものである。生産制限は次のように実施されている。まず最初に基準年（フランシュ＝コンテの場合は1986年）が設定され、その年の生産量を元（元）にそれぞれの地片に一定の生産量が割り当てられる。次いで、毎年、その基準年の生産量から一定の割合を差し引いた分がそれぞれの地片の生産量として割り

年代初頭の調査当時、このような政策に対する不平はいつでも耳にすることができた。

(2) 農業生産システムの諸要素

1) 農業経営体

ジュラの農業は、各農業経営体、生産者協同組織、そしてチーズ組合という生産組織が互いに結びつくことで成り立っている。それぞれの農業経営体は土地を用いて飼料を生産し、その飼料を牛に与えて牛乳を生産し、その牛乳をチーズ組合に出荷する。そして生産者協同組織は各農家の経営を側面から支える機能を持っている。ここで、土地から牛、牛から農業経営体を通してチーズ組合という生産物の流れを生産過程と呼ぶならば、生産過程は農業経営体における牛乳生産とチーズ組合によるチーズ生産という二段階からなっており、生産者協同組織は生産過程を外部から支援しているということができる。農業生産システムの理解にはまず、これらの諸要素の特性を理解する必要があるが、以下では、まず牛乳生産に直接関わる農業経営体と牛および土地について見た後、生産者協同組織とチーズ組合について見ていくことにする。

フランス農業では多くの場合家族経営が主体であるが、ジュラでも基本的には世帯が農業経営の中心となっている。しかし、世帯が異なっているとしても近くに住む親族同士の日常生活における協力関係は緊密であり、農業経営上も後述するような GAEC という一つの経営単位を親子や兄弟同士で構築する場合も多いため、世帯のみが農業経営の単位となっているとは限らない。このような世帯を中心とした経営体は、労働力の調達単位であると同時に、資本の所有の単位であり、また日々の消費生活の単位ともなっている。したがって、農業経営体は生産と消費を通じて経済的外部環境と関わっている。

1992年現在、ジュラ県全体では 5,360 の農業経営体があり、F 村には 8 つの農業経営体があつて、そのすべてがチーズ生産のための酪農を行っている。経営形態は、一つの世帯が一つの経営単位となる場合と、二つの世帯が共同して一つの GAEC (Groupement Agricole d'Exploitation en Commun、農業共同経営集団) と呼ばれる経営体を構成する場合とがあり、F 村には現在、4 つの GAEC がある。GAEC は、1960 年に制定された農業基本法に基づいて、ド・ゴール政権の時代に生まれた制度で、農業の現代化を進め振興することを目的としている。この組織の下では、一般の企業のように一定の資本金を元に複数の農家が共同して一つの経営体(法人)を構成し、個々の農民は GAEC から給料をもらう

当てられ、各農業経営体にはその経営体の経営する地片に割り当てられた生産量の総計が、その農業経営体の生産量として割り当てられる。そして、その割り当て生産量を上回る生産をその農家が行った場合、市場価格を上回る罰金が科せられることになる。こうして規模拡大が不可能となるばかりではなく、基準生産量は毎年引き下げられるので、牛乳価格の低迷に苦しめられている農民にとっては余計苦しいものとなっている。この生産制限は適切に運用されれば、理論上は市場での利潤を最大化するように牛乳生産をもっていくことができる。基準生産量が初年度に設定された値に固定され、その後の輸入・輸出、あるいは相続や売買などを通じて起こる分割や統合などに伴う経営の実態の変化に柔軟に対応していないので、県の農業を硬直化させている。割り当て量の基準が常に最初の基準年に依存していると、やがてはその割り当て量は農業経営の実態にそぐわないものになってしまうのである(こうした生産制限の問題点について A. Ait Abdelmalek は、生産制限量の決定は全国的に集中化されている一方で、その実際の運用の仕方は危うい形で地方に任されている、と指摘している (A. Ait Abdelmalek, 1996: 244)。

という形をとって収入を得ることになるのだが、その際、その給料は SMIC (Salaire Minimum Interprofessionnel de Croissance、法定最低賃金⁹⁾) を下回ってはならないとされている。実際のジュラの農民が GAEC から得ている収入は、実際ほぼその SMIC の水準である。ただし、たいていの場合は通常のサラリーマンのような重い税金はなく、また住んでいる家も持ち家なので、実質的には、同じようなレベルの現金収入を得ている賃金労働者よりは余裕があるといえる。

F 村の 8 つの農業経営体の場合、GAEC を形成している場合とそうでない場合とでは、その経営の在り方に明確な対照が見られる。まず、GAEC を作っている農家は、子供がまだ小学校に行っているような比較的若い世代であり、積極的な投資により経営の現代化を図ろうという姿勢を持っている。法的にはどのような関係にある農家が GAEC を作っても構わないようになっているのだが、実際には F 村の場合は兄弟同士がまとまって GAEC を作っている。その場合、たいていは引退したことになるその兄弟の父が農作業を手伝っている。兄弟同士で GAEC を作る理由として最も強く指摘されたのが、二つの農家の協力が、兄弟だとうまくいきやすいから、というものだった¹⁰⁾。それに対し、GAEC を作っていない農家は、比較的古い世代に属するか、兄弟がみな転出してしまつて共同経営者が見つからないという農家、さらには自分の子が農業を継がないか、あるいは継ぐかどうかかわからない、という農家である。

GAEC の場合は、単独経営に較べて生産資源の共有によりコストの削減と生産拡大が可能であるほか、成員が交代で休暇を採ることも可能となる（酪農では搾乳は一日に二回行われるが、それは年中休みなく行われなければならないので、単独経営の場合は休暇を採ることは難しい）というメリットがある。また、その法的地位ゆえに銀行からの借入れも比較的容易だという（とはいえ、農民たちは、借入れの容易さというメリット以外は大きくは評価していないようである）。ともあれ、GAEC によって農業経営が行われたとしても、酪農経営が基本的に家族的領域に基礎を置いているものであることは明らかである。すなわち、農業では生活の物質的再生産は家族的領域に基礎を置いているのである。

農業以外の収入としては、老人年金や副収入がある。副収入を求めて最近では、農業会議所 *Chambre d'Agriculture* の指導に従って最近フランスで流行しているグリーン・ツーリズムに乗り出し、民宿やキャンプ上の経営を始める農家が増えている。この場合、離農する必要はなくなり、提供する食事には現地の産物を使うなどの一定の基準を満たせば、農業会議所からの援助が受けられるようになっている。若い世代の場合、仕事を辞めて妻に安定した収入を期待することもできる。しかし、男性が農業のかたわら村の外に仕事をしたり、あるいは遠くの都市に出稼ぎに行くということはない。

経営のための資金は、農業信用金庫から借りる場合が多い。この農業信用金庫は、もともとは各地に作られた協同組合的組織であったが、現在ではその協同組合的な要素を残しつつも銀行のように全国組織として展開している。また、最近では市中銀行もいい条件で農

⁹⁾ SMIC は物価にスライドして最低賃金を決定する制度で、ポンピドゥー政権時代の 1970 年に、それまでの全職業最低賃金保証制度 (SMIG) に代わって生まれたものである。1990 年頃は月額 5,000 フランから 6,000 フラン（当時では 12 万円から 15 万円に相当）だった。

¹⁰⁾ 一般にジュラでは GAEC は兄弟間で作られることが多いが、M. Salitot はここに、兄弟姉妹間の連帯を強調するブルグンダ人の慣習の残存を指摘している (M. Salitot 1988: 159)。

民向けの貸し出しを行っており、そのため農業信用金庫よりも銀行を利用する農民もいる。もともとはジュラの村には農村信用組織は発達してはならず、第二次大戦ごろまでは町の金持ちに個人的に借金を申し込むことのほうが多かったようである。19世紀以来、戦争や産業の発展などで経済は常に大きく変動してきたので、借金がそのまま重い経済的な負担となったとは限らなかったようである。

農業経営体においてその経営を指揮するのが農業経営者である。農業経営者となるのは常に男であり、農業経営における女性の役割は常に二次的なものとみなされている。したがって、農家を継ぐのは息子、あるいは義理の息子であって、決して娘ではない。子供が何人いる場合、農業経営を行う父親から農業経営を継承するのは一人ないしは二人の子供であり、それ以外の子供は他の職業につくことになる。また、二人の子供が経営を継承する場合、その二人は通常 GAEC を構成する。農業経営の引き継ぎは必ずしも土地の相続と同時にされる訳ではないが、継承が行われても親子は共に畑で働くのが普通である。このような農家の継承者としてはかつては長男が最も望ましいとされていたが、今日では必ずしもそうではなくなっている。この農家の継承において重要なのは、D. Jacques-Jouvenot も指摘しているとおり、農家の生産財の継承のみではなく、農業を行うに当たっての職業的知識の OJT 的（実地手習い的）な習得による継承である（D. Jacques-Jouvenot, 1997）。すなわち、親子で共に畑で働くことを通して、農家の継承者は実際の農業技術や実践的知識、そしてその畑にまつわる様々な出来事や家族の記憶を学び、継承していくのである。このように農業経営の継承は、家族的領域における世代間の階層構造に基礎を置いてなされている。

労働力は基本的には、労働市場で調達されるのではなく、男性たちを中心とした家族労働力に頼っているため、人的資源の再生産は結婚や世代の交代によっている。そしてその場合、資本と労働の分離は明確ではない（GAEC の場合、法的には資本と労働は分離しているが、実際の経営ではその分離は明確ではない）。しかし、そこでの生産物の大半は市場に出荷されることを前提としており、それによって得た現金収入によって生産財と家族の生活必需品を購入し、また必要な生産要素（農業機械、化学肥料や配合資料、さらには牛舎など）も市場において貨幣によってその多くを調達しなければならないといった点において、ジュラの農業経営は市場経済の存在を前提としている小商品生産と見なすことができる¹⁾。つまり世帯は、家族的領域をその労働力組織化の源泉としつつ、市場に参加することでその経済的基盤を再生産しているのである。

この様に構成される経営単位の行動は、その経営体外からの干渉をたいへん嫌う。その意味で農業経営体の行動は個人主義的である。ただし、ジュラにおける「人格」が家族的領域と非家族的領域という二つの親密さの領域に基礎を置いていることと、農業経営が「世帯」単位としていることに対応し、ここで言う個人の利益をその個人の属する家族的領域

¹⁾ 資本主義経済のもとにおける小商品生産の可能性については、かつてフランスの農村社会学で盛んに議論され、1980年代からは人類学においても主要なテーマの一つとなっている。そのため小商品生産には類似した様々な概念規定が提出され、かつ「小商品生産」の概念においても細かな点についてはまだ一致を見ていない（ex. A. M. Scott, 1986: 6-7; A. D. Davidson, 1991: 24）。ここでは、市場経済を前提としながらも市場原理だけによって組織されている訳ではない経営形態を意味している。それが具体的にどのような資本主義的経営と異なるのかは、以下において徐々に明らかにされていくだろう。

の利益と区別することは難しい（しかも、その家族的領域も境界は明確ではない）。そのため、農家の行動は厳密な意味での個人主義とは言えず、むしろ居住集団という一定の核を中心に漠然と広がる家族の自立性を求める、「家族個人主義 individualisme familial」と言うべきであろう。この様な個人主義的志向は、ジュラ人々の持つ人格概念に対応しているものであり、家族の中に根を持つ個人の「自律性 independence」への志向の現われである。実際、現在のように農業が厳しい状況に置かれている時代に農業を職業として選択する動機としては、自分の仕事のポストとして誰にも命令されずに自律的になれるから、という理由をまずあげる農民は多く、少なくとも自律性を農業経営の最も重要な要素と考えているのである。この個人主義は、フランシュ＝コンテの長い歴史のなかに見られる誇り高い自主独立の志向につながる一方で、他所者には冷たいエゴイズムともなりうるため、さまざまな争いを生む種ともなっている。

消費の単位としての農業経営体は、こうして生産された生産物の一部、あるいは自家消費用の家庭菜園の生産物や家畜の一部を自らの消費に回す以外は、日常消費財を貨幣（現金、小切手、およびクレジット・カード）によって外部から調達している。これらの消費財の調達先は主として4つに分けることができる。まず第一が、小さな小売店である。村に小売店がある場合にはその店が日常的に利用されるが、ない場合はポリニーやロンス・ル・ソニエなどの町の小売店が利用される。第二が巡回商である。巡回商は小さなトラックで週に1〜2度、村を訪れる。パンや肉を売る巡回商が村の人にとってはなじみのものである。また、カタログ販売を利用する人もいる。第三が、週に1度程度の割合で町で開かれる市 *marché* である^{*)}。市で売られている商品は一般に小売店よりは安いので、いつも客でにぎわっている。そして第三が「大面積 *grande surface*」と呼ばれる大規模スーパーである。この大規模スーパーは近年、相次いで都市郊外に作られているもので、通常は専門小売店と併設され、巨大な商業センターとなっている。あらゆるものがそこで手にはいるようになっているので、周辺の住民はここに来て一週間分の生活物資をまとめて買っている。ジュラではいくつかの企業が互いに競争しているため淘汰が激しいが、いずれにしろ、こうした大規模スーパーは地元の小さな小売店や市で売り歩く商人にとって脅威となっている（これは地域政治の一つの焦点となっている問題である）。しかし、こうした小規模の商人たちも商品の質の高さなどの独自性を打ち出すことで、なんとか顧客を失わずに販売を維持している（パン屋の場合の様に、場合によってはこれらの小売店のほうが良いものを売っていることがある）。

^{*)} 市には2種類ある。一つは、主として食料品を売る商人が集まる「マルシェ *marché*」で、通常は毎週ないしは隔週開かれる。もう一つはより規模が大きくさまざまな生活用品、さらには家畜なども売られる「フォワール *foire*」で、開催間隔はマルシェよりも長く、月に一度から年に一度の割合となる。フォワールのときには移動遊園地がやってくることもある。ただし、ロンス・ル・ソニエのような大きな年のマルシェはフォワールのような規模や構成となるので、形態の上からマルシェとフォワールを厳密に区別することはできない。マルシェの場合もフォワールの場合もその自治体が主催し、場所代さえ払えば誰でも参加することができる。しかし参加しているのは通常はこうした市を渡り歩く専門の商人たちである。そして、そこで売られている商品は通常の小売店で売られているものよりも安いものが多い。人々が市を訪れるのはこうした安い製品を求めるためであるが、もう一つ、市の商人といろいろと世間話をするのも波等の楽しみの一つである（ある商人は、そこで聞かされる話といったら家族の話ばかりだ、とながいうんざりした表情で話してくれた）。

表18：フランスの主要乳牛種 — 1982年12月31日現在

出典：C.N.I.E.L (1984-19)

種類	総頭数 (頭)	泌乳量 (L/頭/年)	総生産量 (hL)
ホルスタイン	4,075,900	3,996	162,880,100
ノルマンディー	1,638,300	3,521	57,689,400
モンベリアルド	799,800	3,683	29,455,200
メーヌ・アンジュー	67,400	2,534	1,703,300
純粋種計	7,180,900	3,785	266,022,300

2) 牛の飼育と育種

酪農経営をする場合、最も重要な資本となるものは土地、資金、そして乳牛である。このうち、土地と資金の再生産はきわめて複雑な戦略を必要とするが、乳牛群の再生産はそれほど複雑ではない。しかし、酪農経営は乳牛の再生産過程から経済的利益を引き出すものなので、それは経営上中心的な重要性を持つ。

ジュラで飼育される牛は、そのほとんどが、白地に茶色の斑点を持つモンベリアルド種である(表18参照)。この種は、その名が示すとおり、フランシュ＝コンテ地方北部のモンベリアル地方¹¹⁾が原産の乳肉兼用牛で、18世紀末ごろ、スイスのベルン州から宗教的迫害を逃れてやってきた農民が連れてきたシメンタール種を、従来からこの地方にあったイースタン赤斑種に交配させて生まれた種である。このモンベリアルド種は19世紀末に当局から公式に認められ系譜関係が記録されるようになるが、その普及に大きな役割を果たしたのが、農民たちが作る飼育組合 syndicat d'élevage である。これは種牛を共同で飼って品種改良を体系的に行おうとするものであり、1901年にドゥー県にフランスで最初に作られ、すぐにこの地方のどの村でも設立された。D. Jacques によればこの飼育組合は、フランシュ＝コンテに既に普及していたチーズ組合を、機能的にもイデオロギー的にもモデルとして生まれたという(D. Jacques, 1989: 59)。

フランスで最も多く飼育されてい乳用牛のホルスタイン種と比べた場合、モンベリアルド種は泌乳量こそ劣るものの、おとなしく環境への適応力があり、泌乳年数も長く、また肉としても価値があるなどの特徴を持っている。また、体が大きく舎飼いに向いたホルスタイン種は流通飼料(市場において購入する飼料)が中心となるためにコストが高くつくが、体格のやや小さいモンベリアルド種はより放牧に向いており、粗飼料中心となるのでコストも低く抑えることができ、ジュラのように広い土地のあるところに適応的である。ジュラの農民たちはこのモンベリアルド種を「俺たちの牛 nos vaches」と呼んで、ホルスタイン種よりも高い評価を与えている。そのうえ、泌乳量という点でも、確かに今世紀初めごろはモンベリアルド種は、年間305日の泌乳期間全体でせいぜい2,000kgだったが、

¹¹⁾ この地方は、フランス革命までは、モンベリアル伯領としてドイツ南部ののヴェルテンベルク伯が治めていた。そのため、他のフランシュ＝コンテの地域とは別の歴史をたどってきたが、フランス革命時にフランスに併合され、ドゥー県の一部となった。

第二次大戦後に行われた品種改良によって飛躍的に伸び、今では年間 8,000 kg 以上を生産する個体もあり、平均して年間 7,000 から 8,000 kg 程度であるホルスタイン種に迫りつつある。また、ホルスタイン種とモンペリアル種との交配、あるいはモンペリアル種と肉牛種のシャロレー種との交配も行われているが、そうした交配種を使う農家はまだ一部にとどまり、モンペリアル種の純粋種に比べて大きな生産上の利点を持つというまでにはまだ至っていない。総じてジュラの農民たちは、ホルスタイン種のきわめて高い生産性ととも、生産上のリスクが分散されるモンペリアル種の、生産の安定性を高く評価している、ということが言える。

第二次大戦までは、一軒の農家の持っている牛の頭数は、貧しい家では 1 ~ 2 頭、大きな農家でも 10 頭前後だった。しかし、戦前から徐々に行われていた規模拡大が、戦後には急速に進み、現在では一軒当たり 30 頭以上、GAEC で経営しているところでは 50 ~ 70 頭となっている。P. Perrier-Cornet は、1980 年の段階ではこの地方では、15 頭以下の場合には採算性が低いと指摘している (P. Perrier-Cornet, 1986: 84-86)。放牧の形式は季節放牧で、4 月から 9 月までは一日中、夜も昼も乳牛を放牧地に放したままにしておき、4 月と 9 月の一時期は昼の間だけ放牧し、夜は牛舎につないでいる。一方、寒い冬の間は一日中牛舎につないでいる。生まれたばかりの初生獣は、初乳は母乳によるが、後はいつも牛舎につないだまま人工乳で育てられる。その他の子牛は、夏の間は昼も夜も一日中放牧地に放され、冬の間はハンガー（コンクリート・ブロック製の大きな納屋）の中に作られた運動場に放される。

古い家では牛舎は居住空間とともに同じ建物の中におかれていたが、経営規模の拡大とともにそれでは足りなくなり、増設したり、あるいは改めて牛舎やハンガーを建てている。建てる場所は、家のすぐ隣か、家の密集している村のすぐ外側である。村から遠く離れた場所に建てるのは、水道や電気の敷設のためのコストがかかるため、避けられている。かつては搾乳は女性の仕事とされ、手で搾っていたが、現在ではほとんど機械化されて、男性が行っている。搾乳の方式は牛舎式ないしはスタティック・バーラー式によるパイプライン・ミルクカー方式である。通常は夏も冬も搾乳は牛舎で行われ、放牧は気温の高い夏にのみ行われるため、牛舎の形態は閉鎖型である。また、フランスの他の地域ではよりコストの低いルースバーン式牛舎が多いが、ジュラでは、それよりも 3 ~ 4 割も建築費が高つくフリーストール式牛舎ないしはタイストール式牛舎がほとんどである⁽¹⁾。

⁽¹⁾ ただし、今日の酪農経営ではジュラ以外でも一般に、個体管理が可能となるなどの理由でフリーストール式牛舎が好まれるようになってきている。なお、酪農の一般的な設備方式は次のように分類される。

牛舎の構造

- 牛舎はその構造から、壁がほとんどない開放型（温暖な地方にむいている）と壁によって内部が閉じられた閉鎖型（寒冷な地方にむいている）があり、ジュラでは閉鎖型のみ見られる。また、牛の管理の仕方から放し飼いと繋ぎ飼いに大別できる（肉牛の場合は牛房式もある）。
- 放し飼いの牛舎 家畜が自由に行動できる休憩場、運動場、給餌場が一体となるように構成されている牛舎で、ルーズバーン式（休息舎の床に大量の敷料を入れて自由に休息させる方式）とフリーストール式（フリーストールという一頭単位に区切られた自由に出入りのできる休息場所を持つ方式）がある。フリーストール式はルーズバーン式に比べて建築コストはかかるが、衛生管理、個体管理、および敷料の節約に効果がある。
- 繋ぎ飼いの牛舎 牛を一定の場所に係留して飼育する方式の牛舎で、個体管理が容易となり一頭当たりの牛舎面積を少なくすることができる。スタンション式（スタンションという鉄製の首

個々の牛の管理は牛乳生産の基本条件である。そして、牛乳を毎年連続的に生産するためには、毎年乳牛は子牛を出産する必要がある。生まれた子牛のうち、雄はすぐに売られるが、雌はそのまま残しておく。平均すれば毎年すでにいる乳牛の数の半分の数の雌の子牛が生まれることになる。雌は生まれてから約2年で発情が始まる。そこで人工受精を行い、3年目に一回目の出産を行い、泌乳が始まる。他の品種の牛と同様、妊娠期間は約280日で、分娩後約60日で発情が再開する。泌乳量が最大になるのもそのころであり、その後は漸減していく。分娩前の2カ月は、胎児に栄養を与えるために搾乳をしない。年間を通じた泌乳量は、4から5産後が最大となり、その後は漸減していく。泌乳は通常は10年ないしそれ以上続き、年々泌乳量が少なくなった牛は売られて肉となる。また、牛乳生産において重要な乳蛋白率と乳脂肪率は毎月検査・記録され、牛乳の直段に反映される。検査は「牛乳管理 Contrôle Laitier」という組合によって毎月行われ、その時の泌乳量によって個々の牛に与える餌の量が調節される。餌は粗飼料と濃厚飼料が組み合わせられるが、濃厚飼料の半分は購入される。牛が草地に放し飼いにされる夏の間は搾乳時に濃厚飼料が与えられ、牛舎に閉じ込められる冬の間は粗飼料と濃厚飼料が同時に搾乳時に与えられる。

個々の牛は名前、写真、そして登録番号によって個体識別されるが、牛は斑点の特徴など身体的特徴が個体によって異なるので、通常は農民はそれによって個体識別をする。牛の名前は、個体管理のために、その頭文字によって出生年がわかるようになっている。たとえば、Aで始まる名前 (*Abondance*, *Audace* など) を持つ牛は1983年生まれ、Bで始まる名前 (*Beauté*, *Brevonne* など) を持つ牛は1984年生まれである。泌乳量は年齢によって変わるので、この名によって牛の泌乳量の管理が容易となる。なお、乳牛はみな雌なので、名前はみな女性形をとっている。品種改良の必要から、個々の牛はその両親の名前も登録されている。個々の牛の登録番号は木製のイヤタッグ (耳標) に記されている。

牛の繁殖は今ではもっぱら人工受精によって行われているが、品種改良の目的もあって、農民たちによる飼育組合 *syndicat d'élevage* によって管理されている。この組合はかつてはどの村にも一つはあったが、第二次大戦後、*Emile Richème* という優れた農業技術者を中心に飼育組合として人工受精センターが作られ、より進んだ技術によって品種改良に大きな成果を上げて、次々と周囲の飼育組合を吸収していった。モンベリアルド種の泌乳量がホルスタイン種に匹敵するまでに伸びたのは、この農業技術者に負うところが大きい⁽¹²⁾。人

種で牛をストール (各牛に割り当てられた休息場所) を固定する方式で、衛生管理に優れている) とタイストール式 (ロープや鎖などで牛の首をストールの壁の棒に結び付ける方式で、スタンション式に比べて牛に高度の自由がある) がある。

搾乳の方式

搾乳には牛乳をバケツに入れるバケツ・ミルカー式と、パイプラインを通じて牛乳処理室に送乳するパイプライン・ミルカー式があるが、現代の酪農では通常はパイプライン・ミルカー式による。パイプライン・ミルカー式には、牛舎式とミルキング・パーラー式がある。

- ・牛舎式 各個体が固定されたストールにおいて搾乳する方式
- ・ミルキング・パーラー式 特別の搾乳室が設けられている搾乳方式で、牛が無人室まで移動してくるので省力化が図れる。搾乳牛舎が動くロータリー・パーラーと搾乳牛舎が動かないスタティック・パーラーがあり、また、ミルキング・パーラー内での牛の並び方や牛の移動の仕方に応じてさまざまな形式がある。

⁽¹²⁾ この組織はやがてジュラ・ペタイユという名の組織に発展していくが、その品種改良はモンベリアルド種をより純粋化することで行われた。しかし最近では、逆に他の品種との交配によって品

工受精には決められた時期というものはないが、しばしばまとめて冬に行うのが好まれる。というも、その場合出産が、牛が常に牛舎の中にいる 11 月ごろに集中することになり、監視が楽であり、また、出産前の 2 ヶ月は搾乳をしないので仕事が楽になる上、夏に分娩するよりもその後の泌乳量が増えるからである。

このように、農業経営が世帯という家族的領域に基礎を置いたものであるのに対し、乳牛の飼育はさらに、世帯を超えた農業経営体間の結び付きである組合（飼育組合や牛乳管理）にも、その再生産を依存している。このような組合における結び付きは、非家族的領域において実現するものであり、基本的に対等な関係に基づいている。こうして、家族的領域は牛の飼育を通じて非家族的領域と重層的に結び付いている。同様の重層性は、後に見るチーズ組合によりはっきりした形で見ることができる。

3) 土地と飼料生産

酪農は飼料の調達方法という点からみた場合、全ての飼料を牧草に頼る放牧採草型酪農、飼料の一部に自らの畑で栽培する穀物などの濃厚飼料を利用する飼料作物型酪農、および全ての飼料を市場から貨幣によって調達する流通飼料型酪農の 3 つに分けることができる。ジュラでは、中世には三圃制と組み合わせられた放牧採草型酪農が行われていたが、18 世紀後半に起きた農業革命以降は飼料作物型酪農に移行し、現在は、飼料の一部を成型乾草（乾草を機械的に細断しベレット状などの形に圧密成型した飼料）の購入に頼りつつも、基本的には飼料作物型酪農が行われている。

植物に依存した農業が行われる場合、生態学的には、農業は一定の土地において遷移過程のある段階にある植物群落相を利用し、その植物群落から利益を得ることによって成立する。たとえば、移動放牧の場合は、植物相がその遷移によって放牧に適さない状態になると、新たに放牧に適した植物相の土地を探して移動する。一方、栄養塩類を定常的に外部に持ち出す定住農耕の場合は、退行遷移が起こらないように、畑の植物相を常に人為的に農業活動に適した段階で維持する必要がある。そのためには常に畑に手を入れて二次遷移をコントロールしていなくてはならない。第一ブローの場合、まず畑が適によって耕された後、まず飼料用の一年生の作物が植えられ、それを数年続けたあと、次に粗飼料となる牧草が植えられ、採草地となる。それを何年か続けた後は、手を加えない放牧地となる。草地をそのままにしておくと、やがてタンポポやキンポウゲといった雑草が侵入を始める。そうすると畑は更新時期ということで再び耕され、濃厚飼料用の作物が植えられ、雑草の侵入した草地を更新せずにそのままにしておくと、バラ科の木本類やクマシデなど、牛が食べることでできない小灌木が生え始める。こうした小灌木は畑の境界となる垣や地片の境界の目印として使われる。背の高い広葉樹や針葉樹が繁る森は、日常生活での燃料となる薪を集める場所として使われる。この地方は冬は非常に寒いところだが、電気やガスを使わずに豊富な森から切り出した薪を暖房に使えば、支出を節約することができるので、薪ストーヴを使っている家が多い。そのため、森林の需要は非常に高い。このように、草地、低木林、高木林はそれぞれに用途があり、人の手が入ることによってそれぞれの状態が維持され、コントロールされている。

種改良を行おうとする組織も現われている。

このように畑の二次遷移はまず、耕したあとの濃厚飼料用作物の栽培から始まる。濃厚飼料としてはイネ科の小麦、大麦、ライ麦、オート麦が植ええられる。また農家によっては、粗飼料として根菜類のテンサイも栽培されている。収穫に際しては、穀物類の場合は数軒の農家が共同して、民間の業者から刈取打穀機 *moissonneuse-batteuse*（フォレージ・ハーベスター）などを借りて行が、テンサイの場合は、テンサイ収穫機 *ramasseuse* を持っている業者が近くにはいないので、数人の農民が集まってCUMAを作って、テンサイ収穫機を共同所有して収穫を行っている。したがって、このCUMAに加わっていない農民はテンサイを栽培していない。また、農家によってはトウモロコシをまったらサイレージ用に栽培している。ただし、酪酸菌の混入の恐れのあるサイレージ飼料はAOCの規定により乳牛には使用できないため、トウモロコシ・サイレージはもっぱら子牛に与えられる⁽¹³⁾。また、泌乳量を増やすサイレージ飼料の使用を優先するために、加熱殺菌処理した牛乳の使用が認められているエメンタル用の牛乳を作る農家も、少数だがある⁽¹⁴⁾。なおサイロは、コンクリート・ブロックで作ったコストのかからないバンカー・サイロが一般的であり、刈取打穀機で茎ごと細断したトウモロコシを、加塩をした上でビニールシートをかぶせて古タイヤを重しにして密閉している。なお、タワー・サイロはジュラではまったく見られない。

濃厚飼料用の作物の次に植ええられるのは粗飼料となる牧草であるが、ジュラでは主として、マメ科のパークローバー（コメツブウマゴヤシ）、アカクローバー（ムラサキツメクサ）、イネ科のオーチャードグラス（カモガヤ）、チモシー（オオアワガエリ）が播種される。牧草として一般的なライグラス（ドクムギ）は、標高が高いジュラには向いていない。冬に蒔いて干草とする牧草は、通常は春から夏にかけて2回刈り入れられる。一番草は、出穂時期に当たる5月半ばごろに刈り入れられ、それから約40日後に二番草が刈り入れられる。とはいえ、3月から4月にかけての復活祭前後は「赤い月 *lune rousse*」と呼ばれる天候の不安定な時期のため、その影響で出穂が遅れることもしばしばあり、その場合は出穂が最大化する前に一番草が刈られてしまう。また、牧草乾燥機を持っている農家ではもう少し早めに一番草と二番草を刈り入れ、三番草まで刈る。

農民の計算によれば、放牧地および採草地として必要な面積は、標準として乳牛一頭につき約1ha⁽¹⁵⁾で、また、50頭の牛は一日で約2ha分の牧草を消費する。一度牛を放された牧草地は約20日で回復するので、一つの畑は約20日に一度の割合で放牧地となるように計画される。この日数以前では草量は十分にはならず、それ以降では草が伸びすぎて固くなりすぎてしまう。ただし、言うまでもなく、気候の変動によって草の発育が悪く

¹³⁾ 子牛にサイレージ飼料を与えると酪酸菌がその体内に残り、やがて乳を出すようになったときにその乳を汚染してしまうとして、子牛にもサイレージ飼料を与えない農家も少なくない。ただし、酪酸菌は経口感染はするが、体内には残らないのでこのようなことは実際には起こらない。むしろ注意すべきことは、酪酸菌に汚染されたサイレージ飼料を子牛に与えることによって、牛舎に酪酸菌がばらまかれてしまい、それが乳牛に与える飼料に混入したり乳牛に付着してしまう恐れがあるということである。

¹⁴⁾ しかしこの場合も、空気感染によって他の農家の牛の体内に酪酸菌が侵入する恐れがあるので、回りの農家と摩擦を起こしかねない。

¹⁵⁾ INSEE（国立統計経済研究所）の統計では、ジュラ県における1haの牧養頭数は1970年には0.9頭、1980年には1.1頭となっている。なお1980年にはフランス西部のブルターニュでは1.5頭、フランスの全国平均は1.15頭である（P. Perrier-Cornet, 1986: 79）。

なると、このサイクルは崩れてしまう。1990 年や 1991 年はフランスは全国的に乾燥がひどかった。ジュラでもこのサイクルを守ることはできなかった。放牧の仕方は、かつては毎日畑を変える輪換放牧が行われ、子供たちが牛を監視していたが、電気牧柵が導入された。1950 年代以降は、電気柵を使って半日ごとに放牧場所を変えるストリップ放牧が中心である。放牧は単に牛に粗飼料を提供するだけでなく、牛の排泄物によって再び土地を肥沃にしていく作用もある。また、よく知られているように、牧草となるマメ科植物のクローバーは、窒素を土中に固定し土を団粒化させて土地を肥沃化させる働きを持つ。したがって草地放牧は、単に牛に草を与えるためだけでなく、土地を改良する作用もある。植物生態系と土壌生態系を同時にコントロールする手段なのである。

このように、植物相の遷移に応じて濃厚飼料と牧草が順番に植えられていくが、こうした輪作形態はすべての地片に対して同じように行われるわけではない。また、どの畑に何を植えるかは毎年異なるので、土地の利用状況は長いタイムスパンで見なければ、土地利用システム全体は把握できない。毎年の土地利用の計画は、それぞれの地片の輪作の状況を考慮して、前年の 10 月ごろに決められる。土地利用計画にはそれぞれの畑の持つ自然条件も考慮されるが、プラトーの上は比較的平坦な地形をしているので、アルプスの山岳地帯に見られるような局地的な大きな気候上の偏差は生じない。そのため、土地による自然条件の変異はもっぱら土壌の質に依存している。土の質から見た場合、畑として利用する土地は大まかに「良い土地 *bonne terre*」と「悪い土地 *mauvaise terre*」に分けられる。良い土地とは、石や岩盤が少なく水はけの良い土地であり、悪い土地とはその反対に、石や岩盤が多く水はけも悪い土地である。相対的に見れば、良い土地は矩形型に規則的に分割するが悪いとされる土地は森や荒地のままに放置され、あるいはその中の良い部分だけを選んで地片が作られることも多いので、悪い土地では地片の形は不規則で虫食い状になっていることが多い。そのため、土地台帳図を見ればどのあたりに良い土地があるかがすぐにわかる。また、石垣によって囲まれた地片も多いが、それは石が多い土地であるという意味であり、それほど良いとは評価されてない。他方、良いと評価される地片には通常は石垣はなく、かわりに有葉鉄線か低灌木の柵によって囲まれている。また、急斜面など地形的に利用価値の低い土地も森のまま放置される。コミューンの所有地の大半は「悪い土地」であり、森林のままとなっていることが多い。また、一般的に言ってプラトーの上の土地に比べるとプレス平野やヴィニョーブルのほうが「良い土地」は多い。

土地を利用するに当たって考慮すべき要因には、土地の質の他に地片と牛舎の間の距離がある。第一プラトーの村落はほとんどが集村であり、牛舎も村の中から村に隣接する場所にあり、搾乳機もそこにあるため、夏のように常に放牧をしている時期には、搾乳のために毎朝夕、乳牛をそこまで連れて行かねばならない。放牧地から牛舎までの距離が長いと、それだけ放牧地との往復に時間がかかる上に泌乳量の低下を招くので、放牧地はなるべく牛舎に近いところに設定される。同様に、採草地や穀物などを作付けた畑も、トラクターでの畑への往復にかかる時間が節約されるので、ハンガーの近くにあることが好まれる。しかし、放牧地と違って畑や採草地の場合、牛舎の近くよりも遠いところに生産性の見込める「良い土地」がある時は、距離を犠牲にしても牛舎から遠いところにある地片を使うことになる。また同様に子牛の放牧地についても、村から遠く離れた土地であって一向に差し支えない。

表 19: F 村の二つの農業経営体の土地利用形態

経営体	A		B	
経営形態	個人経営		兄弟で GAEC を作っている	
経営面積	70 ヘクタール		120 ヘクタール	
乳牛保有頭数	40 頭		70 頭	
	内 15 頭はシャロレー種との雑種			
輪作サイクル	5 年		7 年から 15 年	
一年目	小麦		更新はできるだけ少なくする	
二年目	大麦		トウモロコシとオート麦	
三年目	トリティカル		トウモロコシとオート麦	
四年目	草地		大麦、小麦、テンサイ	
五年目	草地		大麦、小麦、テンサイ	
それ以降			大麦、小麦、テンサイ	
土地利用	放牧地	25 ha	テンサイ	3 ha
	採草地	35 ha	トウモロコシ	4 ha
	小麦	2 ha	小麦	3 ha
	大麦	3 ha	大麦	5 ha
	トリティカル ^{B)}	2 ha	オート麦	3 ha
	オート麦	30 a		

N.B. トリティカルは小麦とライ麦のハイブリッド

このように土地利用の仕方は、土地の質と地片の村からの距離に大きく依存しているが、「良い土地」は必ずしも村の近くにあるわけではないということが事情を複雑にしている。しかし、おおむね次のような図式にまとめられる。まず、乳牛の放牧地は牛舎から大体 1.5 km 以内の土地に限られる。3 km 以上離れると、遅い牛の足では牛舎からそこに向かうだけで 1 時間以上かかってしまうので、放牧地として使われることはない。畑や採草地に関しては、放牧を含めた輪作のサイクルのなかで利用される地片とそうではない地片とがあり、前者は当然ながら、放牧地としても利用できるように、牛舎から 1.5 km 以内のところとなるが、後者の場合はさらに広い範囲で、主として牛舎から 10 km 以内の土地が利用される。ただし、もちろん、村に近いところによい土地があればそちらが好まれるのは明らかである。また、村から遠くなるにしたがって濃厚飼料用の作物は植えられなくなり、世話を必要としない粗飼料の栽培が行われるようになっていく。村の近くの土地では、乳牛の放牧と飼料の生産に優先的に使われるので、子牛の放牧にはしばしば村から遠い方が良いとされる土地が選ばれる。その結果しばしば、プレス平野やヴィニョーブルの土地、あるいはブラトーの上でも村から 10 km 以上離れた土地が子牛の放牧地として選ばれる。

こうした土地利用は一定の輪作のサイクルのなかに位置付けられる。しかし、アンシャン・レージュム期の三圃制地域に見られたような、共同体による強制は今では存在しないので、実際に輪作をどのように計画するかは、個々の農家がどの土地を利用するかによって異なってくる。表 19 で示したのはそのうちの二つの例である。全体としては、まず濃厚飼料用の作物を数年の間、種類を変えながら植え、ついで粗飼料となる牧草を干草用に 2 年ほど植え、その後はただの放牧地として数年の間おかれた後、再び更新される、というサ

イクルをとる。ただしこのサイクルはその農家の経営方針や土地の質によっても変わる。たとえば、1 サイクルの長さは 5 年から 15 年と大きな幅があるが、その相違は土地の質の相違と相関し、ある農民の話では、良い土地ではサイクルが短くなり悪い土地では長くなるということである。

こうして、輪作は単に二次遷移の過程にある自然のさまざまな植物相を利用可能にするだけではなく、草や牛糞が常に堆肥化していくことを通して、地力の衰えを防ぎ土地を常に改良していく。つまり、農地は輪作を通して耕作に適した質へと作り変えられていくものであり、決して単なる条件なのではない。そしてまた、この土壌と植物の生態系の再生産過程の中で乳牛は食物を手にいれ排泄をするので、人工受精という点を除けば、乳牛の再生産過程もまた農地の生態システムの中に統合されているといえることができるのである。

以上のように、土地利用システムは生物地球化学的循環を効率的に活用しながら、生態系の二次遷移過程の諸段階を様々な組み合わせで用いることにより成立している。そして、そこにおける長年にわたる土地利用が土地という生産資源を改善していくプロセスともなっている。しかも生態系の変化はきわめてゆっくりとしたものである。これに応じて農業経営も、10 年以上の長いタイムスパンの中で計画されているのである。このことは、短期的に常に変動を繰り返している市場経済に対する、農業の適応のしにくさを示している。つまり、市場の短期的変化に即応した形で作物を変更したり生産方針を変更することは、農業という生産システムがもつ本来の性質とは必ずしも相入れるものではないのである。こうした農業の生態学的特徴に由来する非弾性は、農業生産が一つの生産物に専門化すればするほどより顕著になっていく。このことは現代資本主義社会での農業経営の難しさとなって現われている。こうした生態学的条件は、ある程度は化学肥料の使用などによって短期的に変えることは、確かに可能である。しかしその場合は単にコストが高くなるばかりではなく、化学肥料の使用によって土壌の生態系が攪乱され、それを補うためにさらに化学肥料が必要となり、コストがますます高くなっていく。その意味でも農業は市場の変化に敏速に対応することの難しい産業である。

4) 生産者協同組織

ジュラに限らず、農村では多くの場合、農民同士の間で様々な協同組織を作り生産活動の効率化を図っている。ジュラでも同様に、個々の世帯や GAEC を単位とした経営体を超えた協同組織が作られている⁽¹⁶⁾。それは、農業機械の共有組織であったり、先に見た乳牛の品種改良と育種のための飼育組合であったり、さらには政治的な目的をもつ農民組合や農業の改善のための農業会議所などさまざまな組織である。これらの様々な組織に加えて、農業と直接は関係はないが農村に発達している他のヴォランタリー・アソシーションを加える

⁽¹⁶⁾ さまざまな目的を持った協同組織の発展は農業一般によく見られる特徴で、近現代のフランスもまた例外ではない。フランス南部の中央高地の農村で調査をした L. Gröger は、行政には把握されていない様々な協同組織が農民の間で作られていることを報告し、農業が個人主義的になったという主張は表面的なものであると指摘している (L. Gröger, 1981: 173-174)。フランスにおいてこのような協同組織が発展したのは、1950 年代から 1960 年代にかけての青年カトリック農民同盟 (Jeunesse Agricole Catholique, JAC) の積極的なプロモートに負うところが大きい。ジュラではそれ以前から協同組織の形成は活発であった。

と、かなりの数の協同組織を数えることができる¹⁷⁾。こうした協同組織の発展は現代のジュラ農業の大きな特徴である。ここでは農業経営に直接間接に関わる協同組織を生産者協同組織と呼ぶことにする。

ジュラの生産者協同組織には、農業生産に直接関わるものと間接的に関わるものがある。農業生産に直接関わるものとしては、生産手段共有組織と共同購買組織がある。生産手段共有組織としては CUMA と飼育組合が挙げられ、共同購買組織としては農業購買組合 *Coopérative Agricole d'Approvisionnement* が挙げられる。CUMA は特定の耕作目的のために農業用作業機械を共同で購入して共同で使用するための協同組織である。これは各々の農業機械に応じて数人の農民が共同して作るもので（法的には構成員は 4 人以上いる必要がある）、第一プラトール場合はテンサイ収穫機に関して CUMA が作られており、したがってテンサイの栽培を行う農家のみがこの CUMA に参加している。飼育組合は様々な村をまたがる形で作られ、種牛を共同で所有し、併せて品種改良を進めている。これは、先にも記したように、戦前までは各々の村にあったものが、戦後になって作られた新たな飼育組合である人工受精センターに統合されて行ったもので、やがて家畜の売買なども行うジュラ・ペタイユと呼ばれる組織に発展していく。農業購買組合は、農業用機械や肥料などの生産用具、あるいは牧草の種子などを安く農民たちに供給するための組合で、ポリニーを中心に周辺の多くの村をまたがって作られている。

農業生産に直接関わるこれらの組織は、しかし、生産資源を直接管理するわけではない。したがって、農業の生産過程の組織化に直接関わっているわけではない。これらは、各農業経営体によるそれぞれの生産資源の管理を補佐し、農業経営をより効率的にする機能を持っている。

生産に間接的に関わっている生産者協同組織としては、農民の信用組織である農業信用金庫 *Credit Agricole*、労働組合に相当する FNSEA (*Fédération Nationale des Syndicats d'Exploitants Agricoles*、全国農業経営者組合連合)の県支部 (FDSEA)、そして農業会議所 *Chambre d'Agriculture* などがあるが¹⁸⁾、いずれも全国的な組織の末端に組み込まれており、その意味で多かれ少なかれ公的な性格を持ち、個々の農民の発言力には限界がある。

¹⁷⁾ 直接農業に関わらない組織としては、小学校の教師と児童の父母で作る小学校会 (*Les Amis de l'Ecole*、日本の PTA に相当)、年配の老人たちが作るレクリエーション組織である老人クラブ (*Club du Troisième Age*) などがある。また、村によっては夏の間に観光客相手に芝居を見せたり、あるいはレクリエーションを行うためのクラブの組織 (フォワイエ・リュール *foyer rural* と呼ばれる) を作っているところもある。これらはいずれもコーポレート・グループではなく、ヴォランタリー・アソシエーション (老人クラブやフォワイエ・リュール) かアソシエーションを基礎とした半公的機関 (小学校会) で、組織という点では生産者協同組織と同様には非家族的領域に基礎を置いた平等的な組織を持っている。

¹⁸⁾ フランスの有力な農民組合には他に、CNJA (*Centre National des Jeunes Agriculteurs*、全国青年農民センター) や FFA (*Fédération Française de l'Agriculture*、フランス農業連合) などがあるが、FNSEA はその中で最も有力な団体である。ジュラでもこれらの農民組合の活動は見られるが、やはり最大勢力は FNSEA の県支部である FDSEA であった。なお、これらの農民組合の活動の在り方の相違や国政との関係は、本論の範囲を大きく超えてしまうのでここでは議論しない。農民組合と国の農政の関係の概略については P. Coulomb (1990) を参照。また、農業会議所は国政と農民を媒介する役目を持っている公的団体 *corps public* であり、土地税をその収入とし、その委員は農民たちの選挙によって選ばれる。その意味ではヴォランタリー・アソシエーションと言うことはできないが、農業会議所は農民に対して強制力を持っている訳ではない (とはいえ、農民の間で信頼の厚い者が委員に選出されるので、農業会議所の農民たちへの影響力は大きい)。

これらの組織の機能は、陳情や政治的圧力、デモなどによって農業生産システムの外部環境である政治経済的環境に働きかけることで農業経営の諸条件の整備を求める一方で、農民たちに対しても現在の政治経済的環境への適応を促すさまざまな支援（たとえば、種々の品質改善への支援や簿記の普及、グリーン・ツーリズムのプロモーションなど）を行うことである。

これらはいずれも農民たちが参加し、それぞれの農民たちは互いに平等な発言権によって組織の運営に関わり、かつ組織それ自体としての利益の追及は行わない（つまり、各農業経営体の利益の支援のための組織である）という点で、互いに類似した組織原理を持っている。これらの協同組織に見られる社会的結合関係を整理するために、所有権と集団との関係をめぐる George Appell による集団の分類を参照してみよう。G Appell は集団を、その集団内部の社会関係と資源に対する権利の対応関係から次の 3 つに分類した (G Appell, 1976: 68)。

[G Appell による集団の分類]

- ・ 法的共同体 *jural isolate* 集団のみが全体として一定の資源に権利を持っており、集団の構成員は個人としては資源に権利をもたない様な集団
- ・ 法的集合体 *jural aggregate* 集団は単に構成員の範囲を決めるだけであり、資源に対して権利を保持しているのがその集団ではなく個々の構成員である様な集団
- ・ 法的結社 *jural collectivity* 集団はその資源に対して直接の権利は持たないが、構成員間の関係が構造化されていて、特定の構成員が他の構成員たちの利益を代表している様な集団

ここで重要なのは、この G Appell の分類自体ではなく、その根底にある所有権の捉え方である。すなわち、所有権を特徴づけるのは、その財に対して権利をもつ集団の構造である。この観点からすれば、ジュラの農業経営の単位である世帯は、その集団の境界がやや曖昧である点を除けば、世帯自体が一つの集団としてまとまっているという点で「法的共同体」ということができる。ジュラの生産者協同組織の場合は、各構成員それぞれが集団がもたらす利益に権利を持っている一方、それぞれの組織は構造化され、その代表者が組織の利益を代表しているという点で法的結社である。しかし、農業購買組合のように組織によってはその構造的な特性は名目化しているもので、実態は法的集合体に近いものとなる。

このような法的結社の原形としてジュラの人々の意識されているのが、後に見るチーズ組合である。しかし、チーズ組合に比べると生産者協同組織の場合は、構成員と組織の間関係は緩いものである。たとえば、それぞれの農民は肥料や飼料の購入を農業購買組合に頼ることもできれば、それ以外の一般の業者から購入することも可能であり、農民たちにとって生産活動の上で業者か農業購買組合かという問題はどちらの商品がより安く良質かという問題以上のものではない。同様に農業用機械の場合も、より安く機械を貸し出す業者があれば、その業者に頼るだろう。より生産活動との関係が間接的になる農民組合の場合は、その選択はより各農民の政治的姿勢に依存することになる。こうした組織と構成員との間の関係の柔軟性は、組織の利益が必ずしも構成員の利益に不可欠なものとはなっていないという点に由来する。そして、この組織の利益と構成員の利益の間の必然的とは言えない関係は、これらの生産者協同組織が生産過程に直接介入するわけではない、という点に由来する。すなわち、どの生産者協同組織も、生産資源の管理に介入したり、実際に

生産活動を行ったりするわけではないのである。この点は、実際に生産活動を行うチーズ組合と大きく異なっている点である。

このように、生産者協同組織は生産活動を支援する組織ではあるが、一連の生産過程に直接関わるわけではないので、これらの組織への加入や利用に際しては農民たちの裁量や好みが大きく反映する。そのため、実際には法的集合体と法的結社との間の中間的な形態をとり、農民は生産者協同組織の選択においてかなり大きな自由度を持っているのである。

5) チーズ生産

ジュラに見られるさまざまな社会組織ではいづれも、この地方に古くから存在しチーズ組合が、その組織形態の原形として意識されている。そしてこのチーズ組合は、今でもフランシュ＝コンテの酪農の礎としてこの地方の全体に分布し、経済的に重要な役割を果たしている(図 12 参照)。

個々の農家で生産された牛乳は、そのほとんどがチーズ生産の原料となる。そして、ジュラ農業の最大の特徴であるチーズ組合は、このチーズ生産のための組織である。フランス各地で19世紀末以降さまざまな農業組合が作られたが、13世紀にまで遡るジュラのチーズ組合は、その歴史的な古さの点でも今日でもジュラ農業の礎として機能している点でも、フランス国内でも独特の組織である。

チーズ組合 *coopérative fromagère* (または *coopérative fruitière*) は、かつてはジュラ山脈のどの村にも少なくとも一つはあり、その村で農業を営む者は必ずその村のチーズ組合に所属した、という意味で法的共同体(コーポレイト・グループ)としての性格を持っていた。しかし、離農者の増加により組合員数が減少し、それに伴って多くのチーズ組合が廃止されていくと、チーズ組合はもはや法的共同体ではなくなってしまい、農民たちは自分の経営方針に合わせてチーズ組合を選ぶようになった。しかし、この起源の古い社会組織は、今日でもその役割の重要性は失っていない。現在、ジュラ県で生産された牛乳のほとんどはコンテの製造に使われているが、表 20 から明らかに、ジュラの牛乳生産者の実に 90.4% がチーズ組合に加入しており、生産された牛乳の 92.4% がチーズ組合に集められている。これは、農民のチーズ組合への加入率が 62.4% というフランシュ＝コンテ地方全体の平均に比べると、格段に高くなっている。つまり、ジュラ県ではコンテ製造のほとんどすべては、伝統的なチーズ組合によるのである。また、牛乳価格という点でも、チーズ組合の買い取り価格は私企業の買い取り価格よりも高くなっており、現代市場社会にあっても、この伝統的な協同組合組織は私企業に比べると良く機能し良い成績を上げている。このようなパフォーマンスの良さは、チーズ組合という組織の効率性ととともに、この地域全体が酪農に専門化し AOC の利益を得ていることによって生まれる産地形成の結果でもある。

個々の農業経営体が個別的な生態系のコントロールに生産基盤を置いていたとしたら、協同組合によるチーズ生産は、生態系よりもむしろそれぞれの農業経営体同士の結び付きという、非家族的領域における社会関係に基礎を置いている。確かに、牛乳を加熱するためにジュラに豊富な薪に依存していたという意味では、かつてのチーズ組合も生態系とは無縁ではありえなかったが、生産の協同性が生態学的要因から帰結するものではない以上、その生産の基礎は協同組合という組織の在り方に、より強く規定されていると言うことが

図 12 1998 年におけるフランシュ＝コンテ地方のチーズ組合の分布

出典: Bouchard (1983)



表 20 : 1992 年の牛乳集荷高別チーズ製造組織と牛乳価格

(出典: Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1993))

牛乳集荷高 (1000L)	フランシュ=コンテ地方				ジュラ県			
	組織数	農家数	集荷総量 (1000L)	牛乳平均 価格(F/H/L)	組織数	農家数	集荷総量 (1000L)	牛乳平均 価格(F/H/L)
- 699	21	93	9,865	217.8	9	45	4,514	212.4
700-1,099	36	251	31,700	215.6	9	71	8,535	220.9
1,100-1,499	44	397	55,822	219.9	22	188	27,544	218.3
1,500-1,999	44	543	76,766	220.0	14	178	24,069	215.6
2,000-2,999	51	826	122,501	216.9	18	269	42,056	220.2
3,000-4,999	37	980	142,330	213.3	13	335	48,242	216.5
5,000-	29	3,868	544,814	205.2	3	268	35,854	215.4
組合組織	214	4,367	624,484	212.2	78	1,238	178,211	217.6
私企業	37	2,261	313,171	205.9	11	73	6,840	213.5
家内の組合	36	375	51,221	214.3	9	59	7,712	215.2
合計	287	7,003	988,876	210.2	98	1,370	192,763	217.4

できる。

チーズ組合は、牛乳を生産する農民たちが集まって資金を出しあい、彼等自身でチーズ製造所を持ち、チーズ職人を雇い、経営方針を決めてチーズを製造して販売し、そうして得られた利益をそれぞれの組合員にその牛乳の供出量に応じて分配する組織である。チーズの生産はまず、牛乳を集めることから始まる。朝と晩に搾乳された牛乳はチーズ組合に集められる。かつては農民自身が牛乳をチーズ製造所まで運んだが、今ではトラックで牛乳を集めて回るチーズ組合が増えている。集められた牛乳は成分調整が行われたあと、キューヴと呼ばれる大きな釜で加熱される。かつては加熱するためには薪が使われていたが、いまでは石油が使われ、機械によって厳密に温度管理がなされている。そしてスターターとレンネットを加えて加熱し、カゼインが凝固しカードとなるとそのカードを細断してさらに攪拌した後、そしてホエーの排除を行う。そしてカードを木でできた円形の型に入れ、プレスをかけてさらにホエーを排除する¹⁹⁾。ここまでの作業は今日ではほとんどのチーズ

¹⁹⁾ 以上のチーズ製造に関わる専門用語の意味は次のとおり。

スターター ferment 発酵を起こす細菌。グリュイエール・タイプのチーズの場合は乳酸菌とプロピオン酸菌が使われる。この時、乳酸菌が作り出した乳酸をプロピオン酸菌がプロピオン酸と酢酸に分解し、グリュイエール・タイプ独特のナッツのような風味を生み出す。

レンネット présure 牛乳を固める酵素(牛乳凝固酵素)で、通常は子牛の第四胃から抽出されたものが使われる。

カゼイン caséine 熱や凝乳剤によって凝固する蛋白質成分(正確には、脱脂乳に 20℃で酸を加えて pH 4.6 にしたときに沈殿する蛋白質)。カルシウムカゼネイトやリン酸カルシウムなどの塩類を含む複合体で、必須アミノ酸を全て含む。その存在形態はカゼインセルと呼ばれる 40nm~280nm のコロイド粒子である。一つの分子に親水性領域と疎水性領域を持つ両親媒性構造のため乳化性を持つ。

組合で自動化されている²⁹⁾。そして次の日にはチーズは型からはずされ、その後2カ月の間、製造所にある倉庫で二日に一度ずつ加塩しながら熟成される。ここまでの作業はチーズ組合のチーズ職人が行う。倉庫で2カ月経つとチーズは倉庫業者の手にわたり、そこでさらに数カ月のあいだ一定の温度の下に熟成される。

こうして作られてから6カ月以上して初めて、コンテは倉庫業者から小売店に出荷され、店頭で並ぶことになる。このように、チーズ組合と小売店の間にはもう一つ倉庫業者が介在し、チーズの価格はチーズ組合と倉庫業者の間で決定される。しかしおおむねこの価格決定に際しては全国的な販売ネットワークを持つ倉庫業者のほうに優位に立ち、チーズ組合や農家は事実上は価格決定には参加できない。こうした不利を乗り越えるために、一部のいくつかの小さなチーズ組合では互いに集まって倉庫業の組合を作っているが、この場合も、流通に関しては民間企業と共同出資の会社を作って対峙している。また、倉庫業も兼ねるチーズ組合も少しずつ出始めているが、まだ少数にとどまっている。実際、全国的な販売経路を確保するという事は、小さなチーズ組合にとっては荷の重い仕事である。

チーズ組合は組合員である農民たち自身が運営する。組合員となるのは、それぞれの自営農家の経営責任者である父だけではない。父の仕事を手伝う子供たちも組合に参加し、かつては数多くいた小作農家もかつては参加していた。入会に当たっては、F村のチーズ組合の場合、今世紀初めごろは子牛一頭の値段に相当する入会費を払ったというが、しかしたいいてい場合は親から子へと受け継がれていったので、入会費も特に払わないというのが普通だった。組合員たちの互選によって理事と組合長が選ばれ、理事会は経営方針を決定する。理事と組合長の選出には、19世紀の一部のチーズ組合では、保有する牛の数に応じて各組合員に票を割り当てたところもあったが、原則としては、各組合員には、その経営規模の大小にかかわらず平等に一票が割り当てられている。組合長や理事には任期があるが、再選の制限はないところが多い。しかし実際にはたいいていの場合、組合長にほぼどの人望があるか、他に人材のない場合を除いて、組合員が輪番で組合長となっている。また、組合員の数が多いところでは、一人の人が理事に選ばれると、その人の兄弟や父親といった身内はもちろん、義理の兄弟などの姻戚も理事にはなることはできなかった。このように、チーズ組合の運営では、個々の農民の経営規模にかかわらず、各農民の間の平等が強く主張され保証される。逆に言えば、このような平等性を保証しない限り組織としてのチーズ組合は意見の衝突によって機能しなくなってしまう恐れがある。

チーズ組合に見られるの平等主義は、他の全ての生産者協同組織に共通するものである。この平等主義は、構成員のそれぞれが経営方針の決定に関して自分の意見を表明すること

ホエー sérum 熱や凝乳剤などを加えたときに上澄みとなる水溶性部分に含まれる蛋白質で、乳清とも呼ばれる。 β -ラクトグロブリン、 α -ラクトアルブミン、血清アルブミン、免疫グロブリン、ラクトフェリンなどを含む。チーズの製造には不要な成分である。

カード caillé 熱や凝乳剤によってカゼインが凝固したもの。

²⁹⁾ 化学の進歩によってチーズの製造技術も常に新しくなっている。そこで、こうした技術進歩を受けて普及させる目的で、国立乳業学校がフランス国内にいくつか作られている。ジュラにも19世紀末にポリニーに作られ、今日でもフランス国内に限らず世界各国から学生を受け入れている。そこではまた、すでに現役で働いているチーズ職人たちに最新技術を教えるための研修も行われている。

が平等に保証されているという、政治的な平等主義である。しかし、その生産活動による利益は組合員の間で均等割にされるのではなく、それぞれの組合員が自分で生産し組合に供出した牛乳の生産量に見合う分だけ分配される。これは、経済的には平等主義ではないが、チーズ組合における生産によって得られた利益に対して最終的な権利を持っているのは、組織としてのチーズ組合ではなく、個々の組合員であるということを示している。つまり、チーズ組合は集団として付加価値を生産するが、その付加価値によって農民が手にする収入はその農民の投下した労働量に相関するので、チーズは組合が集団で生産するものではあっても、その生産物に対して権利を持っているのは個々の組合員であって組合という集団ではない。

このようなチーズ組合の社会的結合関係は、先の G. Appell による社会集団の 3 分類に即して言えば、「法的結社」という特徴を持っている。このチーズ組合が生産者協同組織と異なっている点は、それが実際に生産活動を行い、直接価値を生み出す組織である、という点である。すなわち、各農業経営体は自らの利益を得るためにはチーズ組合による生産が不可欠なのである。もちろん、チーズを製造する組織はチーズ組合以外にもチーズ加工業者が存在するため、農業経営体はチーズ組合に縛られるわけではない。しかし、自らの資本の蓄積を目指す加工業者の利益は必ずしも農民たちの利益と一致するとは限らず、その意味で農民たちにとっては自らの意見を経営に反映させやすいチーズ組合に牛乳を供出するほうが、加工業者に出荷するよりも望ましいものと意識されている。そのため、組織と構成員は、生産者協同組合よりも強く利益と発言権によって結ばれているということが出来る。ただし、このような結び付きが協同によって得られる利益に基づいている以上、チーズ組合が有利として意識されるためには、チーズ組合自体が実際に利益を上げていること、次章で見るような紛糾した対立が構成員間で起きていないことが前提となる。

以上の点はチーズ組合が、一般の企業組織や 20 世紀の社会主義諸国で作られた集団農場と異なっている点である。社会主義国の生産組織では、組織の構成員は生産組織からあらかじめ定められた報酬を得るので、生産物に権利を持っているのはまずその組織であるので、それらは「法的共同体」である。つまり、社会主義国では個人の努力はあくまでも生産組織という集団のためになされるが、ジュラのチーズ組合では生産組織の存在はあくまでも個々の農民の牛乳生産の個性を支えるためのものなのである。したがって、生産の個性はチーズ組合では損なわれることはない。確かに、ある農家が持ち込んだ牛乳が、酪酸菌に汚染されているなど、質の悪い牛乳である場合は、チーズ組合で作られるチーズすべてが台なしになってしまうので、品質管理などの形で組合による個々の農家への圧力は存在する。しかしそれぞれの農家の経営努力は、その努力の分だけ農家自身の収入に反映されるという意味で、牛乳の生産はあくまでも個々の農家の個性が前提となっているのである。このようなそれぞれの農家の牛乳生産の個性と自立性はさらに、個々の農民の経営に参加による外部からのチーズ組合の経営への干渉の排除によって一層強化される。このように、チーズ組合は農業生産の一部である牛乳の加工という付加価値生産を単に共同化しようという組織なのではなく、むしろ、牛乳生産に基礎を置くそれぞれの農家の個性と自立性を保証するための組織なのである。

こうした法的結社としてのチーズ組合は、他の生産者協同組織のモデルとなっている。しかし、生産者協同組織が農家の生産活動を側面から支援しているにとどまるのに対し、